

やはり俺がチート部隊の隊長をするのは間違っている

サラリーマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

近界民(ネイバー)から三門市を守る組織、境界防衛機関(ボーダー)そこに所属するある一人の目が腐った男の物語

注意

作者は文才がないので相当変な感じになると思います。あと登場キャラの口調などこれじゃないだろ!となる箇所がいくつもあると思います笑って許してください!

それでもいいならどうぞ

目次

番外編 ボーダーラグビー部	1
キャラ紹介とプロローグ	4
奉仕部入部	
奉仕部 1	9
奉仕部 2	14
奉仕部 3	18
職場見学編	
テニス部 1	25
テニス部 2	31
閑話 二宮匡貴	37
職場見学 1	40
職場見学 2	46
職場見学 3	54
職場見学 4	59
職場体験 5	64
職場見学 6	70
職場見学 7	78
職場見学 8	83
夏休み編	
千葉村 1	89
千葉村 2	95
千葉村 3	99
千葉村 4	107

原作突入 1	258
原作突入編	
災禍の鎧 6	252
災禍の鎧 5	245
災禍の鎧 4	238
災禍の鎧 3	232
災禍の鎧 2	225
災禍の鎧 1	218
災禍の鎧編	
BBF風プロフィール&次回予告	213
修学旅行 3	206
修学旅行 2	198
修学旅行 1	192
修学旅行編	
文化祭 5	180
文化祭 4	174
文化祭 3	167
文化祭 2	158
文化祭 1	154
文化祭編	
夏休み 3	145
夏休み 2	135
夏休み 1	128
千葉村 6	120
千葉村 5	114

大規模侵攻編 5	355
大規模侵攻 4	342
大規模侵攻 3	335
大規模侵攻 2	329
大規模侵攻編 1	322
原作突入 9	314
原作突入 8	308
原作突入 7	300
原作突入 6	293
原作突入 5	283
原作突入 4	275
原作突入 4	268
原作突入 2	262

番外編 ボーダーラグビー部

8月某日ボーダー本部多目的体育館。入隊式などで使われる部屋に俺たちは集められていた。ここにいるメンツは俺、レイジさん、風間さん、柿崎さん、ゾエさん、村上さん、歌川に東さん、楓子さん、熊谷、謡だ。全員が動きやすいジャージだ。それから俺たちをここに集めた張本人がやってくる

唐沢 「やあみんな。全員揃っているかな？」

俺たちをここに集めた張本人、唐沢さんの登場だ。

歌川 「あの、俺たちがここに集められた理由ってなんですか？」

唐沢 「よくぞ聞いてくれた！これから君たちにはラグビーをしてもらう！」

八幡 「え、えー！な、な、なんだってー」

唐沢 「なんだい比企谷君。その反応は」

八幡 「いや想像通りだったもので」

唐沢 「まあいい。大学で一緒にラグビーをしていた友人に頼まれてしまったね。ボーナスは出すしお願いできないかな？」

八幡 「あの俺ルールとか知らないんですけど」

唐沢 「最初にしっかりと説明するし練習中にもちよくちよく説明していくからそれで覚えられると思うよ」

柿崎 「ラグビーをするのはいいいですが全員が集まって練習する時間がとれないと思うんですけど」

唐沢 「とりあえず沢村さんをお願いしてできるだけ全員が集まれるようにしてもらったがそれでも全員が集まれるのは4回しかない。だから個人練習練習がメインになるかな」

風間 「なぜこのメンバーなのですか？」

唐沢 「普段から生身のトレーニンングしてる人を選ばせてもらった」

北添 「え、ゾエさん生身のトレーニンングなんてしてないんだけど」

唐沢 「ゾエ君は体格と影浦君と生身で戦えるから呼んだんだよ」

楓子 「私たちはなぜ呼ばれたんですか？」

唐沢 「君たち女の子達には練習のサポートとマネージャーを、東くんには戦術面を手伝ってもらおうと思ってる。質問はもうないかい？」

レイジ 「試合をする日は何時で相手は誰なんですか??」

唐沢 「次の日曜日で相手は大学のラグビー部だ」

八幡 「もう一週間もねえじゃねえか！」

俺のツツコミが体育館中に響き渡った

それから試合の日まで俺たちはラグビーの特訓をしまくった。みんな試合をするからには負けたくないよう暇な時間を見つけては体育館に赴き一人で練習したり、そこにいるメンツで連携の練習をしたりと、ラグビーの練習に精を出していた。

そして迎える試合当日。

試合会場となる大学のグラウンドに行くところにはたくさんの観客と非番だったボーダー隊員で結成されたボーダー応援団がいた。観客の方は大学の方で大々的に宣伝されていたらしく急造とはいえボーダーのラグビーチームが見たいということできっとたくさん集まったらしい。応援団の方は応援団長を名乗っている弾バカが声をかけ集まったらしい。そんなわけでたくさんの人が見ているなかで試合をすることになった。

唐沢 「試合時間は前後半7分。それを三試合やって最終的に先に二勝した方が勝ちだ。フォーメーションはフォワードに木崎、北添、比企谷。バックスは柿崎、風間、歌川、村上だ。しまつていくぞ！」

選手 「おう！」

それから一試合目が始まった

二試合終わり一勝一敗。一勝といってもボーダーチームに花をもたせるためか明らかに全力ではなかった。

東 「唐沢さんこのままでは」

唐沢 「わかってる。最終戦はあの作戦でいこう。比企谷君頼んだよ」

八幡 「はい」

そして最終戦が始まった

レイジ 「比企谷ー」

俺は某バスケット漫画の幻の六人目のように相手のパスを横からかつさらう。そのままフリーだったレイジさんにパスを出す。これが俺たちの作戦「横からかつさらおう」だ（ネーミングセンスのなさはご愛敬）。この作戦のおかげで格上相手に互角に戦っていた。しかし小手先だけの作戦ではすぐに対応されるのは目に見えていた。すでに対応され始め縮まってきていた点差がまた開き始め、そしてそのまま試合終了した。

試合が終了し、ベンチに座っている監督の唐沢さんの前に全員が並ぶ

唐沢 「悔しいか？悔しいだろう。この悔しさを次に戦う時に返そう！」

選手 「はい！」

こうしてボーダーラグビー部が誕生した

キャラ紹介とプロローグ

A級1位 比企谷隊

比企谷八幡 比企谷隊長

ポジション：オールラウンダー

メイントリガー：バイパー 弧月 旋空 バッグワーム

サブトリガー：バイパー メテオラ グラスホッパー シールド

サイドエフエクト：脳機能強化

脳機能強化：脳の機能を強化できる。具体的には思考のスピードが速くなり周りの光景がいつもの1000分の一のスピードで流れる。(相手の1秒が八幡は1000秒になる)。しかし、思考を加速させるだけで動きは早くならない。この能力を使うにはキーとなる言葉を使う必要がある、この能力を使いすぎると少しの間アホになる

師匠は陽乃さんと楓子さん。陽乃さんには剣とバイパーの弾道の引き方を、楓子さんには体術を教えてもらう。第一次侵攻で両親を失い小町と二人で暮らす。ボーダーには陽乃さんの紹介で入る。よくほかの隊のヘルプに入るためボーダー内で連絡先を知っている人は多い。その中でも出水、米屋とはよくランク戦をするため仲がいい。学校ではボッチ。学校でボーダーだと知っている人はボーダー隊員以外いない。陽乃さんに脅されA級に上がっても遠征には参加しないことと学校にばれたくないため日中には防衛任務を入れないことを条件に隊長になった。

雪ノ下 陽乃

ポジション：アタッカー

メイントリガー：弧月 旋空 バイパー s s (二刀流)

サブトリガー：弧月 旋空 シールド グラスホッパー

No.1アタッカー。八幡の師匠。ボーダーのスポンサー企業の娘。コネを利用してボーダーに入ったがトリオンもセンスもあったためコネを使わなくてもボーダーにスカウトされていたと思われる。一部の人には雪ノ下陽乃に斬れないものはないという意味を込めて「絶対切断(ワールドエンド)」と呼ばれていたりもする。

倉崎 楓子

ポジシヨン：パーフェクトオールラウンダー

メイントリガー：アイビス イーグレット バイパー シールド

サブトリガー：スコープピオン バッグワーム シールド グラス
ホッパー

玉狛のレイジさんに続き二人目のパーフェクトオールラウンダー。八幡の体術面での師匠。相手の攻撃を掌に厚く張った局所シールドですべて叩き落すという陽乃さんと同じに化け物。弟子は八幡しかないが、パーフェクトオールラウンダーを目指す荒船さんがよくトレーニング方法などを聞きに来る。

四埜宮 謡

ポジシヨン：アーチャー

メイントリガー：アステロイド（天弓） フレイム（天弓） 弧月

シールド

サブトリガー：アステロイド（天弓） メテオラ（天弓） バッグワーム グラスホッパー

ボーダー唯一の弓使いでボーダー最年少A級隊員。比企谷隊のメンバーを兄や姉のように慕っており、ハチ兄・フー姉などと呼んでいる。ロリコンである鬼怒田さんに頼み、新しい弓トリガーと分裂弾を作ってもらったりけっこうな策士。弧月は相手に接近されたとき用に入れている。

城廻 めぐり

ポジシヨン：オペレーター

比企谷隊のオペレーターと総武高校の生徒会長を兼任するすごい人。周りからはほんわかオーラのせいで仕事ができなそうに思われがちだがA級1位部隊のオペレーターだけあり、オペレート能力はすごく高い。

比企谷隊

A級1位部隊。はじめは八幡と陽乃とめぐりの三人だけの予定だったが部隊を組む時に楓子と謡も加わり今の部隊になった。部隊を組んでから一度も負けることなく最速でA級まで上がりそこから

1位にまで上り詰めた。

オペレーターめぐりが生徒会の関係で参加できないことがあるので基本比企谷隊の全員がオペレーターをすることができると。

―プロローグ―

八幡 「…知らない天井だ」

目を開けると知らない天井だった。体を動かそうとすると左足と左腕に痛みが走り俺は思わず顔をしかめる。首から上だけで周りを見てみると全体的に白い部屋でここは病室らしかった。しばらくするとドアが開いたような音が聞こえ恰幅の良い中年の医者らしき人と一緒に一人のきれいな女性が入ってくる。

医者 「お！やっと思きたか！名前は言えるか？」

八幡 「比企谷八幡です。」

医者 「名前は言えるな。どこか痛い場所はあるか？」

八幡 「左足と左腕が痛いですね」

医者 「そうか。ここにいる理由は分かるか？」

医者に言われ考え始める。一つ思い当たったことがあったので俺はそれを口にした。

八幡 「…車と衝突したからですか？」

医者 「おうそうじゃ。とりあえず頭は大丈夫そうだし、わしはほかに急ぎの仕事があるからもう行くぞ。詳しいことはまたあとで来るからその時にな。ではまた来るぞ。」

そう言って医者は出て行き、病室には俺と女性だけが残された。

八幡 「え〜と、あなひやは？」

噛んだ。はずっ！超はずい！幸い女性はスルーしてくれたので俺もなかったことにして話をする。

?? 「私は雪ノ下陽乃。君がぶつかった車の持ち主だよ。まあ私が運転してたわけじゃないんだけどね」

八幡 「で、その持ち主様が俺に何の用ですか？」

陽乃 「さっき名字言ったからもうわかると思うんだけど私の家って雪ノ下財閥でさ、その雪ノ下財閥が所有してる車が事故を起こしたと公になるとちよつとまずいわけ。だから

八幡 「口止めの交渉に来た。でしよ」

雪ノ下さんは一瞬驚いたような表情を浮かべたがすぐに直し俺の話を肯定した。

陽乃 「うんまあそうかな。それでどうしたら比企谷君は黙っててくれるのかな?」

八幡 「そうですね…ここに入院してるお金は払ってください。それと俺にバイトを紹介してください」

陽乃 「バイト?なんで?」

八幡 「うち両親が大規模侵攻の時に亡くなっているんです。今までは遺産とかで何とか生活できてましたけどそろそろきつくなってきましたので」

陽乃 「そうなんだ…ならボーダーに入らない?」

八幡 「ボーダーですか…」

陽乃 「うん。ボーダーに階級があるのは知ってるよね。C級は訓練生だからお金はもらえないけどB級に上がればネイバーを倒すだけでお金がもらえるようになるの。それにA級に上がれば固定給ももらえる。バイトとしてはいいと思うけど」

八幡 「俺が入ったらC級からのスタートになりますよね。B級に上がるのは大変なんですか?」

陽乃 「うん。普通だったら半年くらいあれば大体の人は上がれるんだけど師匠次第では2か月もかからずにB級に上がれると思うよ」

八幡 「雪ノ下さんはなんでそこまでボーダーに詳しいんですか?」

陽乃 「改めて自己紹介するよ。私はボーダーNo.1アタッカー雪ノ下陽乃。君がボーダーに入るなら私が君の師匠になってあげる。さあどうする。」

八幡 「俺は…」

~~~~~

4月某日 日曜日

今日は俺の隊の防衛任務があるのだが、俺たちは警戒区域内の家の屋根の上で座っている。

八幡 「暇ですね」

楓子 「そうですね。今日は全然ゲートが開きませんね」

謡 「なのです。今日はまだ一回しかゲートが開いてなくて動き足りないのです。」

陽乃 「そうだね。私も動き足りないかも。」

楓子 「だったらこれが終わったらみんなでランク戦ブースに行つて荒らしませんか？」

陽乃 「おっ！いいね。そうしょっか！」

謡 「うくん。私は遠慮するのです。まだ宿題が終わってないので」

楓子 「ハチさんはどうします？」

八幡 「俺も遠慮しますよ。確か俺も課題の作文があつたので。」

と、俺たちが話しているとオペレーターのめぐりさんから通信が入った

めぐり 『みんなくゲートが開くよ！誤差は3，14だよ！時間的にこれがラストだよ』

八幡 「了解です。じゃあ行きますか！」

陽乃・楓子・謡 「「うん（はい）！」」

そして俺たちはゲートから出てきたネイバーに向かっていた。

## 奉仕部入部 奉仕部1

『高校生活を振り返って』

比企谷

八幡

特に振り返ることがありません。』

俺は今、平塚先生に呼び出されて職員室に来ていた。

平塚 「比企谷。なんだこの作文は。」

そう言つて平塚先生は俺が提出した作文用紙を見せる。

八幡 「なにつて先生が出した作文の課題ですよ」

平塚 「そういうことではない。内容のことを言ってるのだ！」

八幡 「特に書くことがなかつたので正直に書いただけです」

先生が溜息を吐く。

平塚 「はあ。君は友達はあるか？」

八幡 「ええ。それなりにいますよ。」

ただし。学校ではなくボーダーで、だ。

平塚 「平然と嘘をつくな！君みたいな目の腐ったやつに友達がいるわけないだろ！」

八幡 「先生は俺の交友関係知ってるんですか？まさかストーリーカーですか？」

平塚 「そんなわけないだろ！学校での様子を見てればわかる。まあいい。なら彼女はいるか？」

八幡 「いませんよ」

俺がそう言っていると先生が明るくなる。

平塚 「そうかそうか！私もそう思っていたよ！うんうん！」

まるで自分と同じ仲間を見つけたような口調だ。

八幡 「いやいや仲間を見つけたみたいないな感じで言われても…。考えてみてくださいよ。高校生の俺とアラ——

先生の拳が飛んできた。楓子さんに生身の鍛錬の大切さを教わつてから楓子さんや、玉狛のレイジさんにトレーニングメニューを組ん

でもらってから生身の鍛錬もしているのでこのくらいのスピードなら余裕で受け止められる。

平塚 「なっ!」

先生が驚いている。そろそろ帰りたくなってきたので話のまとめようとする。

八幡 「とりあえず罰として作文は書き直します。それでいいですよね」

平塚 「いや君には作文の書き直しのほかに奉仕活動を命じる。ついてきたまえ」

そう言つて平塚先生は席を立ち職員室から出て行き、俺もそれについていく。歩いている方向からして特別棟の方に向かっているようだ。そこで俺のスマホが鳴る。

八幡 「電話きたんでちよつと待つてもらつていいですか」

俺は先生の返事を待たずに廊下の端へ行き電話に出る。

八幡 「もしもし諏訪さんどうしたんですか」

諏訪 『おう比企谷。今日の夜空いてるか?空いてたら俺の隊の防衛任務を手伝つてほしいんだが』

八幡 「夜は空いてるので大丈夫ですけど誰か休みなんすか?」

諏訪 『日佐人が風邪ひいたんだよ。じゃあ頼んだぜ!』

八幡 「了解です。それでは」

俺は電話を切り平塚先生の元へ戻る。

八幡 「待たせてしまつてすいません。あと用事ができたんで奉仕活動を早くしたいんですけど」

平塚 「もうすぐ着くからそう焦るな」

そうしてしばらく歩き空き教室の前で立ち止まるとノックもせずはその扉を開けた。

平塚 「邪魔するぞ雪ノ下」

扉を開けて先には一人の少女がいた。俺はこの少女を知っている。話したことがあるわけではないが知っている。彼女は雪ノ下雪乃。俺の師匠である陽乃さんの妹だ。俺は陽乃さんから彼女のことを聞いていた。曰く、なんでも自分の思い通りにならないと気が済まない

傲慢な女とか。陽乃さんが言っていたことを思い出していると

雪ノ下 「それで先生その又ボーっとした人は？」

平塚 「彼は比企谷、入部希望者だ。」

八幡 「は!? 入部ってなんすか。俺は放課後は忙しいので部活なんて入っている時間はありませんよ」

平塚 「君にはあの作文を書いた罰としてここ、奉仕部で部活動をしてもらう。異論反論抗議口答えは認めん。雪ノ下、私からの依頼こいつの曲がった性根の矯正だ。頼んだぞ。」

雪ノ下 「お断りします。その男の下卑た目を見てると身の危険を感じます。」

こいつ頭大丈夫なのか。初めて会ったのにすぐに罵倒するとか頭がおかしいとしか言いようがない。

八幡 「誰がお前なんかをそんな目で見るかよ。それより先生さつきから俺のことばかり言ってますが俺より雪ノ下の方が問題じゃないですか。」

雪ノ下 「なんですって! この私のどこに問題があるっていうのかしら」

八幡 「普通の人は初対面の人間にまず罵倒なんかしねーんだよ。常識がないのか？」

俺がそう言うとな雪ノ下は俺をにらんでくる。二宮さんのにらみに比べたら全然怖くない。

雪ノ下 「確かにこれはもう矯正が必要なレベルですね。平塚先生あなたの依頼承りました。私がこの男を更生させます。」

平塚 「受けてくれるか雪ノ下。では任せたぞ。」

八幡 「じゃあがんばれよ。俺は帰るんで。」

扉に向かって歩き始めるが平塚先生が俺の前に立ちふさがる。

平塚 「どこに行こうとしてるんだ比企谷。お前にはここでの部活動を命令したはずだが。」

八幡 「さつきも言った通り放課後は忙しいんです。それなのにこんな部活動に割く時間はありません。」

平塚 「そんなに言うなら放課後に何があると言うのだ。言ってみ



ろ」

そう来たか。ボーダーをことは知られたくないしどう答えるか…。  
やっぱり濁すしかないか

八幡 「バイトです。」

雪ノ下 「嘘をつくのはやめささない。あなたみたいな人を雇ってくれるところがあるわけじゃないじゃない」

このくそ女が！そろそろ俺も切れるぞ。俺は今までボーダーで培ってきたさつきを全開に出そうとしたら、タイミングよくまた俺のスマホが鳴った。今度は許可を取らずに教室の隅に行き電話に出る。

??? 『もしもし比企谷君』

八幡 「何か用か那須？」

那須 『今日これから予定がないようならまた指導つけてほしいんだけど』

那須は弟子ではないがたまにバイパーの指導や那須隊の連携の確認の手伝いをしているためよく那須から連絡が来る。

八幡 「悪いが今日は諏訪隊の防衛任務のヘルプが入っているか無理だ。明日のうちの隊の防衛任務の前なら時間空いてるがそれでもいいか？」

那須 『うん大丈夫だよ！じゃあ明日お願いね。じゃあまた明日』

八幡 「ちよつと待ってくれ。お前今学校にいるか？いるようなら特別棟の空き教室まで来てほしいんだが」

那須 『わかったけどなんで？』

八幡 「事情はあとで話す。ついたらその中に俺がいるから入ってきて俺に話を合わせてくれ。」

那須 『うん。今から向かうね』

八幡 「頼んだ。」

電話が切れた。これでやつとここから出る準備が整った。あとは那須が来るのを待つだけだ。

雪ノ下 「あらわざわざそんな演技までして友達がいるアピールしなくてもいいのよ。あなたに友達がいらないことなんてもうわかってることなのだから」

八幡 「そういうお前は友達いるのかよ。さつきから人のこと罵倒しまくって友達いるように見えないんだが」

雪ノ下 「…まずどこからどこまでが友達が定義してもらっていいかしら」

八幡 「もういいわ。そんな友達がいないやつテンプレ台詞はく奴なんて初めて見たわ。お前人に好かれそうなのに友達いないとかどういうことだよ」

雪ノ下 「貴方にはわからないわよ。私は昔から可愛かったわ。

八幡 「はいはいナルシスト乙」

平塚 「ちやかさないで聞け。雪ノ下続きを」

雪ノ下 「そのせいで私にたくさんの人が近づいてきたわ。けれどもその中に女子はいなかった。私は小学校のころ60回上履きを隠されたわ。そのうち50回は女子の手によるものだったわ。この世界は優秀な人間ほど生きづらくなっているの。だから私は変えるのよ。人ごとこの世界を。」

八幡 「プっ！」

雪ノ下 「なに笑っているのかしら」

俺は不覚にも笑ってしまった。だってそうだろう

八幡 「まさか高校生にもなって世界を変えるとかそんな現実も見えていないことを言うやつがいるとは思わなくて」

雪ノ下 「なんですって！」

八幡 「じゃあ聞けど。お前は今まで自分の周りで何かを変えられたのかよ。」

雪ノ下は何も言わずに俺をにらむ

八幡 「ほらな。自分の周りも変えられないやつに世界を変えることはできないんだよ。実績がなければ何を言ってもただの妄想だ。夢を見るより現実を見ろよ。」

俺は心の中で論破ポーズをとっているとちようど教室の扉がノックされるのだった。

## 奉仕部2

教室のドアがノックされ、雪ノ下が返事をしたことで教室のドアが開かれる。そしてそこから入ってきたのは二人の俺が知ってる女子生徒だった。

那須・熊谷 「失礼します」

熊谷が一緒にいたことは想定外だが計画に支障はない。

八幡 「悪い那須、熊谷。買い物行くことすっかり忘れてたわ」

那須も熊谷もさつき頼んだように俺に合わせて話をしてくれる

那須 「約束の時間になっても比企谷君が来ないから探しに来たよ」

熊谷 「ほら早くいくよ」

そういつて俺の腕をそれぞれがつかんで引っ張っていく。どうやら俺が呼び出した意図は分かったようで俺が何も言わなくても廊下の方へ歩き出していた。そんな中で那須たちが来てからずっとポカンとしていた平塚先生が声を上げた。

平塚 「ちよつと待て。確か…那須と熊谷だったか。君たちは比企谷とどんな関係だ？」

那須 「どんなって友達ですけど」

八幡 「おい聞いたか雪ノ下。俺はお前と違って友達はいるんだよ」

雪ノ下 「比企谷君、女の子脅して友達と言わせてうれいいのかしら」

プチ。とうとう俺の堪忍袋の緒が切れた。雪ノ下に殺気を出そうとするとまたしても那須に止められた。

那須 「雪ノ下さん、私たちは別に脅されてるわけじゃないよ。比企谷君のことよく知らないのにそんなこと言わないでほしいな」

那須がそう言うとうと教室に沈黙が流れる。そろそろここから出るか

八幡 「話も終わったんで帰ります。あと俺はこの部活に入りますから」

那須・熊谷 「失礼しました」

俺たちは教室から出た。教室の中からは平塚先生の声が聞こえたが無視をして俺のカバンが置いてある教室に向かう。それから下駄箱へ向かった。

八幡 「悪いな。助かったわ」

那須 「気にしないで。それより何があったの？」

八幡 「ああ実はな…」

くくく

それから俺は那須たちが来るまでの出来事をかいつまんで話した。話し終わると二人にそろってため息をつかれた。

八幡 「なんだよ二人そろってそのため息は。」

那須 「何でってねえ」

熊谷 「うん。あんたばかなの？作文でそんなこと書いたら呼び出されるに決まってるじゃない！」

那須 「比企谷君って成績よかったよね？だったら嘘でもいいからまともに書くことを考えなかったの？」

八幡 「防衛任務終わった後だったからななんか考えるのが面倒になった。」

熊谷 「比企谷らしいね。それで奉仕部？だっけ？入るの？」

八幡 「入んねーよ。防衛任務あるし、それに毒しかはかないやつと一緒に部活なんて死んでもごめんだけわ」

ほんとにあいつは初対面の相手にあんなだけ毒はけるのか不思議でしようがねーわ。

那須 「それって雪ノ下さんだよね」

八幡 「ああそうだが」

那須 「なんか意外だね。噂に聞く雪ノ下さんと全然違って」

熊谷 「それより比企谷あんた大丈夫なの？平塚先生はたぶんあきらめてないと思うけど。」

八幡 「大丈夫だ。何個かプランは考えてあるしな」

那須 「聞いてもいい？」

八幡 「ああ。今んとこ考えてるプランは三つ。プランA理詰め、

プランB脅迫、プランC屠る。」

熊谷 「後半二つが怖いんだけど。特に最後の」

八幡 「まあCは最終手段だ。たぶんBまでで何とかなるだろ。それに陽乃さんに言えばどうとでもなる。」

那須 「あゝ…やりすぎないようにね。」

八幡 「そうだな。っと、お前らこれから本部行くのか？」

話しながら歩いているといつの間にか下駄箱についていた。ここからボーダー本部に行くには左にいかなければならない。俺の家がある方向はまっすぐなので那須たちがボーダー本部に行くならここで別れることになる。

那須 「そのつもりだけど」

八幡 「俺一度家に帰ってから行くつもりだからここまでだな」

那須 「そうなんだ。じゃあね比企谷君」

熊谷 「じゃあね比企谷。明日よろしくね」

八幡 「ああ。じゃあな」

それから俺是那須たちと別れひとり家に向かって歩く。朝に雨が降ったおかげでチャリに乗って学校に来ることができなかった。俺はポケットからスマホを出し、ある人に電話を掛ける。

??? 『もしもし八幡君。どうしたの?』

八幡 「もしもしめぐりさん。ちよつと聞きたいことがありまして。今って電話しても大丈夫でしたか?」

そう俺は奉仕部のことについて詳しく知るために総武高の生徒会長であり、比企谷隊のオペレーターであるめぐり先輩に電話をかけていた。

めぐり 『大丈夫だよそれ聞きたいことって?』

八幡 「奉仕部って部活のことなんですけど」

めぐり 『うゝん奉仕部かゝ』

八幡 「どうしたんですか?」

めぐり 『それがね私たち生徒会もよくわかってないの。新学期入ってからすぐに平塚先生が来て無理やり話を進めて強引に成立させたらしいから』

八幡 「らしいってどういうことですか？」

めぐり 『私はその場にいらなくてね。その場にいた副会長にあとから聞いた話だから』

八幡 「そうなんですか。それでも部員数くらいはわかりますか？」

めぐり 『それくらいならわかると思うよ。ちよつと待ってね。えーと、一人だけ…だね』

八幡 「ありがとうございます。あと、無理やり先生が生徒を部活に入れることってできないですよ？」

めぐり 『もちろん。部活動に入れるには本人の同意が必要だよ。さつきからなんで奉仕部だったり部活動のことなんて聞くの？もしかして…』

八幡 「たぶんめぐりさんが想像してるのであってますよ。ちよつと今平塚先生に奉仕部に入れられそうになってましてそれを断るために情報がほしいんですよ」

めぐり 『そうなんだ…気を付けてね。三年生の中で平塚先生ってあまり信用ないから』

八幡 「わかりました。またなんかあったらお願いしますね」

めぐり 『うん！もし八幡君が断り切れなくても生徒会長の権力を利用して入れさせないから安心してね！それにはるさんに頼めば一発だよ！そんなわけだからあまり無理しないようにね。明日の防衛任務遅れないようにね。じゃあね！八幡君』

八幡 「めぐりさんや陽乃さんのお手を煩わせないように頑張ってみます。それじゃあ、明日の防衛任務の時に」

めぐりさんとの電話を終え、一つの作戦を思いついた俺はもう一件ある人物に電話を掛けながら家に帰るのだった。

### 奉仕部3

翌日の放課後になり、那須の指導と防衛任務のためにボーダー本部に行こうとすると予想していた通り平塚先生に呼び止められた。

平塚 「おい比企谷どこへ行く」

八幡 「どこって帰るんですよ。バイトありますし」

平塚 「昨日奉仕部に入れと言ったはずだが」

八幡 「それ断りましたよね」

平塚 「異論反論抗議口答えは認めんと言ったはずだぞ。三年で卒業できなくてもいいのか」

八幡 「いくら生徒指導の先生とはいえ、たかが一先生が出席日数も足りてて問題を起こしてもいない生徒を卒業させないとかできると思っっているんですか?」

平塚 「グっ…」

平塚先生が黙る。

八幡 「理解してもらえたようで何よりです。では俺はこれで。最後に一つ、俺にかまう暇があるなら男でも探した方がいいですよ」

最後に余計は一言を加え、俺は先生に背を向け歩き出す。こうすることでほぼ確実に先生は俺を殴つてだろう。きつとおそらく十中八九。俺を殴つたことを盾にすればこれ以上先生が俺に必要以上にかかわることもしなくなり、めぐりさんや陽乃さんの手を煩わせなくて済む。これが俺の考えた作戦だ。

平塚 「衝撃のオオオオファーストブリッドオオオオ!!」

その声が聞こえた瞬間振り返りつつ、腕を胸の前でクロスさせわざとあたり吹っ飛ぶ。もちろんパンチが当たる瞬間に少し後ろに飛んでダメージを軽減させることも忘れない。吹っ飛ばされた俺はすぐに立ち上がり先生に近づく。

八幡 「昨日に比べてずいぶんと速くて重いパンチになりましたね。これが一晩の修行の成果ってやつですか。それともまさか精神と時の部屋にでも? そんなことどうでもいいですね。材木座!!」

隠れている材木座を呼び出す。そう俺が昨日めぐりさんの後に電

話していた人物はこいつなのだ。そしてこいつはボーダーのエンジニアでエンジニアの次期エースと呼ばれている。

八幡 「見せてくれ」

俺は材木座が持っていたスマホを受け取り、画面に表示されている動画を見る。

八幡 「材木座ばつちりだ。それ俺に送ったら消していいぞ」

材木座 「おう。」

八幡 「さて平塚先生、今俺の手元には先生が俺を殴ったシーンの動画があります。これを俺が偉い人に見せたら先生はどうなるでしょうかねえ。そんなわけでこれを公開されたくなければ俺に必要以上にかかわらないでください。別に全くかかわるなど言ってるわけじゃないです。授業で俺だけかけられないとか目立つだけですからね。ただ授業以外で俺にかかわるなつてことです。それじゃあ、今度こそ失礼します」

これでまた俺にかかわってくるならもうただの馬鹿としか言いようがない。それから俺が歩き出すと俺についてくるやつがいた。

八幡 「何でついてくる材木座。つかお前まだいたのか」

材木座 「ひどいではないか八幡!!我とお主の——」

八幡 「本題を言え。」

俺は少し殺気を込めながら言った。

材木座 「わかったわかったから八幡!殺気を出すでない。陽乃殿に伝えてくれ『頼まれていたものができた。金土日のどれかに来てくれるとありがたい』とな。」

八幡 「それを陽乃さんに伝えればいいんだな。用がそれだけならもう行く。じゃあな材木座。今日は助かった」

材木座 「さらばだ。八幡」

そして俺は材木座と別れてボーダー本部に向かった。

平塚先生との一件から数日後の金曜日、俺がいつも通りベストプレイスでメシを食っていると背後から、足音が聞こえた。ボーダー隊員



でも学校ではよほどの用がない限り話しかけるなど言っている、俺に用事があるやつではないのだろう。そんなわけで俺は気にせず飯を食う。すると

??? 「ヒッキー…：おーいヒッキー…：ヒッキー？」

声を聞く限りさつきここにやってきたのは女子のようだ。さつきと反応してやれよ引きこもり君。うるさかったので少しにらんで静かにさせようと思ってそいつの顔を見ると、そいつもこちらを見ていて目が合った。

??? 「やつと反応してくれた。なんで無視したし！」

八幡 「いや俺じゃないと思っただ。それよりお前誰。」

??? 「信じらんない！同じクラスじゃん！由比ヶ浜結衣しつかり覚えてよ！」

八幡 「気が向いたらな。それでなんか用か」

由比ヶ浜 「あの…えーと…これ！お礼だから！」

そういつて由比ヶ浜は俺に袋を投げてすぐに走って行ってしまった。由比ヶ浜に渡された袋の中身を見ると

八幡 「なにこれ」

木炭が入っていた。

由比ヶ浜から木炭？をもらった日の放課後、俺は比企谷隊の隊室で勉強をしている。ここには楓子さんと謡もいて俺と同じように勉強に取り組んでいる。陽乃さんは材木座のところに新トリガーを取りに行っている。めぐりさんは生徒会の仕事があるらしく今日は来ていない。なぜ俺がここで勉強しているのかというところなら基本的に陽乃さんか楓子さんかめぐりさんがいるのでわからないところは教えてもらえるのだ。さらにこのメンバーでチームを組んでからはテスト前には誰かしらが要点を絞って教えてくれるので常に学年で五番以内に入ることができている。過去の最高順位は二位。ちなみに一位は奈良坂だ。あいつは高校に入ってから誰にも一位を譲ったことがない。あの時は雪ノ下に勝って二位になっても何も思わな

かったが今になってみると…何も思わねえな。もう関わらんし。まあいいや。

それからしばらくして俺の宿題が終わると同時にタイミングを見計らっていたように陽乃さんが隊室に入ってきた。

陽乃 「やつほー！みんなお疲れ！八幡今時間ある？」

八幡 「ちょうど宿題が終わったんで大丈夫です。新しいトリガーですか？」

陽乃 「うん！さすが材木座君だね。エンジニアの次期エースと呼ばれていることはあるよ！」

八幡 「そんなにすごいんですか。楽しみです」

陽乃 「期待してていいよ。楓子訓練室お願い！」

楓子 「了解です」

謡 「陽姉、私も見てていいですか？」

陽乃 「もちろん！よしじゃあやるよ八幡！」

八幡 「わかりました」

それから俺と陽乃さんは訓練室へ転送された

俺と陽乃さんは訓練室の中で向かい合っている。

陽乃 「とりあえず一本目は何もしないでただ受けてね。二本目以降は戦いながらって感じかな」

八幡 「二本目以降は俺も仕掛けていいんですよね」

陽乃 「もちろん！それじゃあ行くよ。スターバーストストリーム」  
♪

陽乃さんがそうつぶやいたら、気づいた時には俺の体は切り刻まれていた。

八幡 「は!？」

すぐに俺の戦闘体が再換装される。

八幡 「陽乃さん今のって」

陽乃 「この前八幡が読んでた本の技を再現してみました！なかなか再現度高いと思わない？」

二刀流ソードスキル、スターバーストスリーム。某デスゲームの中で黒の剣士の使っていたソードスキル。確か16連撃だったはずだが、一瞬すぎて何回剣を受けたかがわからない

八幡 「すごいですね…。それってどういう仕組みでそんな速く動けてるんですか？」

陽乃 「原理的にはあらかじめ動き方をプログラムその動きを再現してる感じかな。だから早く動けてもプログラムに沿ってしか動けないから技を途中で止めることはできないみたい」

八幡 「そうなんですか。二本目やりましょう。」

陽乃 「そうだね。行くよ」

それから何回か剣を打ち合わせていく。陽乃さんは俺の体勢が崩れた時にソードスキルを使ってきた。俺は今回もよけようとはしなかった。しかし俺は

八幡 「バーストリンク」

俺のサイドエフェクトの能力である加速を使ってソードスキルを発動してから16連撃終わるまでの時間を確認してみる。すると俺が加速してから約50秒で八太刀受け、そこで戦闘体が破壊された。つまり現実時間で八太刀で約0.05秒。なので16連撃が終わる時間は約0.1秒ということになる。0.1秒で16太刀。無理だ。防げる気がしねえ。となるとよけられるかだな。それができないとマジ詰む。

八幡 「三本目やりましょう。」

陽乃 「なんか攻略法でも見つかった？」

八幡 「そうですね。これがだめだったらもうなんも思いつかない程度の策ですけどね」

陽乃 「そうなんだ。じゃあやろうか」

今回も二本目と同じように何度か剣を打ち合わせ俺の体勢が崩れた時にソードスキルを使ってきた。俺は陽乃さんの声が聞こえた瞬間にグラスホッパーを使い強引にその場から離れる。なんとか左腕を犠牲にしただけでベイルアウトせずに済んだ。すぐさま反撃しようとして陽乃さんの方を見ると動かずにその場で固まっていた。あくこ

れはアレだな。スキル後硬直。原作と同じようにスキルを使った後は動けないらしい。念のためその場からバイパーを打ち込みベイラアウトさせる。すぐに陽乃さんの戦闘体が換装され、俺の戦闘体も換装される。

八幡 「やっぱり原作と同じようにスキル使った後は動けないようですね」

陽乃 「うん。無理やり体を動かすからどうしても使った後は動けなくなるみたい。一対一ならいいけどチーム戦だとフォローがないと使えないかな。それよりあんな回避方法があつたんだね！」

八幡 「テレポーターでもあれば無傷で回避できると思うんですけど、グラスホッパーだとあれが限界だと思います。あとソードスキルってそれしかないっすか？突進系のがあればもつと便利だと思うんですけど」

陽乃 「そうだね。これから材木座君とこ戻って頼んでみるよ。あと硬直時間ももつと短くできないかも。」

そして楓子さんに訓練室の解除をもらい陽乃さんはまた出て行った。なんとなく物足りなかつた俺は見ていてうずうずしていたのか楓子さんと謡の三人でランク戦ブースに足を向けるのだった。

それからいい時間になったので三人で隊室に戻り帰る準備をする。

謡 「八兄、ランク戦に行く前から気になっていたのですがそのかばんの中に入っている袋は何が入っているんですか？」

八幡 「木炭だ。」

謡 「木炭？なんでそんなものがカバンの中に？」

八幡 「今日な、女子にお礼だとか言ってもらったんだ。これ渡されてすぐに走ってどっか言ったから何のお礼かわかんねえけど」

楓子 「お礼に木炭ですか…もしかしてそれってクッキーなんじゃ」

八幡 「クッキーですか…」

楓子 「ええ。常識的に考えてお礼に渡すと言われたらクッキーが普通じゃありませんか」

八幡 「まあそうですね」

謡 「だとしたらハチ兄。食べないとなのです」

楓子 「そうですね。せっかくその人がハチさんに感謝を伝えたい  
と思つて作つたんですから、食べないと失礼ですよ」

八幡 「いやこれ食べたら俺は死ぬと思うんですけど」

楓子 「大丈夫です。死んだら骨は拾います。」

謡 「なのです！それに加古さんの外れチャーハンと同等のものが  
この世にあるとは思えないのです！」

確かに加古さんの外れチャーハンと同じものが何個もあるとか考  
えたくないな。それから覚悟を決めた。

八幡 「死んだらあとはお願ひします」

クツキー？を口に入れ、ゆつくりと咀嚼する。そして飲み込む。そ  
して俺の意識は暗転した。

## 職場見学編

### テニス部1

厚木 「お前ら二人組作れ」

俺のクラスの体育の担当教師である厚木が言う。学校ではプロぼっちをしている俺はもちろんクラスに二人組を作れるようなやつはいない。だがしかし長年のボッチ生活のおかげでこういう時の対処法はもちろん心得ている。

八幡 「先生、体調悪くてペアの人に迷惑かけてもアレなんで壁打ちしてもいいですか」

厚木 「わかった。ダメそうなら無理せずに保健室に行けよ」

八幡 「わかりました」

体調悪いとペアの人に迷惑かけるの相乗効果で簡単に許可がもらえる。そして俺は壁打ちを始める。壁打ちをし始めてから数分、俺は一度も休むことなく壁にボールを打ち付けている。時々、ラケットのフレームに当てイレギュラーなバウンドをさせそれを拾う。それをひたすら繰り返す。なぜ俺がずっと続けていられるかというと、昔俺がB級に上がってすぐのころ陽乃さんがスナイパーの狙撃に反応できると言うと言って訓練室を少しいじってスカッシュゲームを作ったのだ。そのゲームは一定回数以上続くと徐々にボールのスピードが上がってくる。さらに一定のスピードを越えるとボールの数が増えるといった仕様で一時期はランク戦よりこっちのスカッシュゲームムばかりをしていたので、ただの壁打ちぐらいなら永遠に続けていられる自信がある。

そんなこんなでいつのまにか授業が終わる時間になっていたようなので切り上げラケットとボールを片す。

昼休みになり、俺はベストプレイスで飯を食っている。すると

由比ヶ浜 「あれヒッキーじゃん！またここで食べてんの？」

八幡 「俺はいつもここで飯食ってんだよ」

由比ヶ浜 「何で教室でご飯食べないの？」

八幡 「教室だとお前らみたいなりア充がうるさいからな。それよりおまえは何してんの？」

由比ヶ浜 「ゆきのんとのゲームに負けて、罰ゲーム中で飲み物を買いに行ってるのー！」

八幡 「ふーん。ってかゆきのんって誰。」

由比ヶ浜 「J組の雪ノ下雪乃。この前のクッキー作るの手伝ってもらってそのままその人の部活に入部したの！そういえばクッキーおいしかった？」

八幡 「おまえ逮捕されなくなかったら二度と料理するな。死者が出るぞ。」

由比ヶ浜 「ちよつとそれどういう意味だし！」

???' 「由比ヶ浜さんと比企谷君？」

名前を呼ばれその方向を向くとそこにはジャージ姿のかわいい生徒がいた。

由比ヶ浜 「さいちゃんじゃん！よつす！」

???' 「由比ヶ浜さんよつす」

由比ヶ浜 「昼練？いつも大変だね」

???' 「そんなことないよ。うちのテニス部あんまり人数いないから僕が頑張らないと。そういえば比企谷君もテニス上手だよね。」

八幡 「そうなの？あんまり人とテニスしないからよくわかんねーわ。で、誰？」

由比ヶ浜 「信じらんない！あたしの時もそうだけどクラスの人の名前くらい覚えようよー」

???' 「同じクラスの戸塚彩加です。よろしくね」

八幡 「悪いな。クラスの女子とかかわらんから名前わかんなかったわ。」

戸塚 「あの…」

なぜか戸塚がもじもじしている。トイレか？それなら俺なんか気にせずにさっさと行けばいいのに

戸塚 「僕、男なただけど…」

八幡 「…よく聞き取れんかった。もう一回言ってもらっていい

か」

戸塚 「僕男なんだけど」

八幡 「は!？」

戸塚が男…だと…。そこらにいる女子より普通にかわいいぞ。そこで予鈴が鳴る。

戸塚 「片付けとかしないとだから先行くね。」

戸塚が走って先に行く。

八幡 「由比ヶ浜、雪ノ下に飲み物買っていくんじゃないのか」

由比ヶ浜 「そうだった!」

そうして俺はひとりで教室に戻った。

次の日。今日も体育があり内容も前回と同じでテニスだった。壁打ちの許可をもらうために先生のところへ行こうとすると、肩をたたかれた。振り返ると頬に指を押し付けられた。

戸塚 「あはは。引っかかった。今日いつもペア組んでる人が休みで僕一人だからも比企谷君さえよかったら一緒にしない?」

八幡 「いいぞ。俺も一人だし」

戸塚 「よろしくね!」

しばらくラリーをしていると

戸塚 「ちよつと休憩しない?」

俺たちはコート endpoint に行き腰を下ろす。

戸塚 「やっぱり比企谷君テニス上手だね。経験者?」

八幡 「いやテニスは授業でやってるくらいだな。けど、前に知り合いにスカッシュやらされてたから、少し感じは違うがその経験が生きてるんじゃないか?」

戸塚 「そうなんだ!あの相談があるんだけど、昨日も言った通りうちのテニス部弱いからさ、もしよかったらテニス部に入ってくれないかな。」

八幡 「すまない戸塚。バイトやってて放課後は無理なんだ。その代わりと言ってはアレだが昼休みの練習の手伝いならできるがそれでもいいか?」

戸塚 「もちろん!テニス部以外の方が授業以外でテニスコート使



うには生徒会に申請しないとんだけど僕やっておこうか？」

八幡 「生徒会に知り合いいるし俺がやるからいいぞ。けど、専門的なこととか全然わからないからラリーの相手とかしかできないと思うから頭に入れてくれ」

戸塚 「わかったよ！じゃあ明日からお願いします！」

八幡 「おう。」

それから休憩をやめ、またラリーを続けるのだった。

翌日の昼休みになり昼食を軽く食べ、テニスコートに向かう。昨日のうちに生徒会長であるめぐりさんに申請しておいたのですぐにテニスコートに向かう。テニスコートに着くとすでに戸塚がいて準備運動をしていた。

八幡 「悪い戸塚遅かったか？」

戸塚 「大丈夫だよ比企谷君。比企谷君のほかに練習手伝ってくれる人がいるんだけどいいよね」

八幡 「ああ。」

俺はコミュ障だが今回のメインは戸塚。俺がほかのお手伝いの人と話すことはないだろうと思ひ、俺は二つ返事で返事する。

戸塚 「今申請しに行ってるから先にラリーしてようか」

八幡 「そうだな」

ラリーをしているといきなり戸塚がボールと止め手を振る。他をお手伝いの人に来たのか。一応あいさつしといたほうがいいだろう。そう思つて振り向くと、

由比ヶ浜 「あー!!何でヒツキーがいるし！」

由比ヶ浜と雪ノ下がいた。

雪ノ下 「なぜあなたがここに居るのかしらひき…ひき…ゾンビ君」

八幡 「お前は人の名前も覚えられないのか学力2位さん。」

雪ノ下 「無駄なことを覚える趣味はないもの」

八幡 「お前は人一人の名前を追加で覚えられないほど脳のキャパ少ねーのかよ。こりや次のテストで2位もいらなくなるかもな」  
雪ノ下が俺をにらむ。

由比ヶ浜 「二人とも落ち着いて！ヒツキーもさいちやんの練習のお手伝いってことでいいんだよね」

八幡 「ああ。練習メニューは考えたのか」

雪ノ下 「もちろんよ。まずは体力づくりね。技術だけあってもそれを続けるだけの体力がなくなっちゃ意味ないもの」

八幡 「まあ現状じゃそれがベストか。」

それから体力づくりのトレーニングが始まった。

雪ノ下 「今日はこれくらいにしましょうか。明日は実践的な練習をしましょう」

八幡 「そうだな。戸塚わかってると思うが体力は今日一日だけでつくもんじゃなくて継続することで鍛えられるから日々の鍛錬は怠らないようにな」

戸塚 「うん！」

それから片づけをしその日は解散となった。

翌日。今日も俺たちは集まり、戸塚の特訓をする。今は戸塚に難しいコースの返球をさせている。雪ノ下がコースを指示し、由比ヶ浜がそこにボールを投げ、戸塚が返球する。そして俺は球拾い。口で言えば簡単そうに聞こえるが、実際は雪ノ下の指示する場所がエグイ。右に指示したと思えば次は左にそして前や足元にとひたすら戸塚を動かしている。そんな中、戸塚はよくくらくらいついている。たまに拾えない時もあるがほとんどラケットに当てるなりしている。他のテニス部員もこの戸塚のがんばっている姿を見ればもつとやる気になるだろう。そんなことを考えていると戸塚が転んだ。みんなが戸塚に駆け寄る

由比ヶ浜 「さいちやん大丈夫？」

戸塚 「大丈夫だから続けよう。」

戸塚の足を見ると膝をすりむいていて、それなりに血が出ていた。戸塚は続けると言っているが、これは消毒とかしたほうがいいだろうな。そう思っていると

雪ノ下 「まだ続けるの？」

戸塚 「うん。みんな付き合ってくれてるから」  
雪ノ下 「そう。由比ヶ浜さんあと頼んだわ。」

そう言うなり雪ノ下はテニスコートから出て行ってしまった。

戸塚 「ぼく呆れられたのかな」

由比ヶ浜 「違うと思うよ。ゆきのんあれで意外と優しいから」

八幡 「救急箱でも取りに行ったんだろ。ちようどいいし少し休憩するか」

戸塚 「うん。でもぼくもう少し練習したいんだ」

八幡 「それで悪化したら元も子もないぞ」

戸塚 「それでも練習したい。」

ここで無茶させるのはトレーナーとしてはだめだと思っただが戸塚の練習が始まってから初めて見せたここまで強い意志に折れた

八幡 「わかった。ただし無理しないようにしろよ」

戸塚 「うん！」

それから練習を再開させようとするとテニスコートの外から俺の嫌いなリア充の声がした。

??? 「あくテニスしてんじゃん！戸塚私たちも遊んでいい？」

急な侵略者の登場でめんどくさい展開になってきたことに俺は落胆を隠せなかった。

## テニス部2

テニスコート外から飛んできた言葉に戸塚はおどおどしながら答える

戸塚 「三浦さん、僕たちは遊んでるわけじゃないんだけど」

あの金髪縦ロールは三浦というらしい。

三浦 「え〜聞こえないんだけど」

そんなわけねーだろ。耳も腐ってんのか腐れリア充どもが！心の中でそう罵り、戸塚に助け舟を出した

八幡 「テニスコートを使うには生徒会の許可がいる。ここを使いたかったら生徒会に許可取ってこい」

三浦 「誰もあんたとしゃべってないんですけど。急に出しやばってくんなし。それで戸塚いいでしょ」

八幡 「お前耳腐ってんのか？生徒会の許可がないと使えないって言ってるんだろ。耳悪いならいい耳鼻科紹介するぞ」

三浦 「さつきからあんた何なの。それに生徒会の許可がないと使えないなら何であんたもここにいらんだし」

八幡 「戸塚の手伝いするために生徒会に許可取ったからにきまつてんだろ。考えればわかるだろ。：さつきの言葉撤回するわ。悪いのは耳じゃなくて頭だった。」

三浦 「はあ!?あんたあーしにけんか売ってんの?」

葉山 「まあまあ優美子落ち着いて」

今三浦を止めた男は葉山。クラスの奴の顔を覚えてない俺でもこいつは知ってる。こいつの名前は葉山。下の名前は知らん。教室でベ〜ベ〜うるさいやつがよく名前を言っていたので覚えてしまった。

葉山 「どうだろうヒキタニ君。ここは部外者の俺と君がテニスの試合をして勝った方がこれからテニスコートを使える。もちろん戸塚の練習は手伝う。戸塚も強い人と練習したほうが効率もいいと思うしさ」

八幡 「だからお前らにはその権利さえもないって言ってんだよ。許可取っ——」

突然顔の付近にテニスボールが飛んできた。それをぎりぎり受  
け止める。

三浦 「隼人くあーしそろそろテニスしたいんだけど」

八幡 「戦争だ」

葉山 「え？なんて言ったんだ？」

俺がつぶやいた言葉は葉山には聞き取れなかったみたいだ。

八幡 「さっきの提案受けてやるよ」

葉山 「本当にいいのかい？」

八幡 「ああ。ただしルールは簡単にしてくれ。初心者なんでル  
ルとかよくわからんのでな」

葉山 「わかった。15点マッチで1セットやってそのセットを  
取った方が勝ち。サーブは2回ごとに交代で。こんな感じでどうだ  
い？」

八幡 「ああ。そんなくらいシンプルがいいな。」

三浦 「それだとあーしテニスできないから、いっそ混合ダブルス  
にしない？うそあーしちよー頭いいわ！」

葉山 「それでいいか？」

八幡 「お前らは二人でいいぞ。俺は一人でやる。足手まといがい  
ても邪魔なだけだしな」

由比ヶ浜 「ヒッキー！私も試合でるよ」

三浦 「結衣ー。それあーしと試合するってことだけどいいの？」

由比ヶ浜 「うん。あたしは部活も大切だから」

三浦 「ふーん」

由比ヶ浜の言葉に三浦は興味なさそうにつぶやき、試合をする準備  
をする。奴らが試合の準備をしている間にめぐりさんに連絡して、今  
の状況を簡潔に説明し先生を連れてくるように頼んだ。

戸塚 「試合開始」

戸塚のコールで試合が始まる。サーブ権は向こうにある。三浦が  
サーブを放つ。それは俺の方へ飛んできた。落ち着いて相手コート  
隅に返球する。葉山は追いつけず1点取った。三浦の2回目のサー

ブ。またもおれのところに飛んできた。さっきのが偶然だったのか確かめるためだろう。今回も追いつけないところに返球し、2点目。それから俺たちにサーブ権が移り、由比ヶ浜がサーブを打つ。コースが甘いため葉山が由比ヶ浜に向けて返球する。それをうまく返せず相手に1点。それから由比ヶ浜が狙われた。

あつという間に得点はひっくり返され今や2対9。そろそろ逆転するか。そのために…そこボールを追いかけていた由比ヶ浜が転んだ

由比ヶ浜 「痛った」

八幡 「大丈夫か？」

由比ヶ浜 「ごめん。ちよつと捻ちやったかも。負けたらさいちやん困るよね」

八幡 「いいから休め。俺としてはそつちの方が都合だ。」

由比ヶ浜 「ちよつとそれどういう意味!？」

八幡 「そのまんまだ。俺一人でやった方が強い」

由比ヶ浜 「それはそうかもだけど…」

八幡 「わかってんなら早くコートから出ろ」

由比ヶ浜 「…わかった。」

由比ヶ浜がコートから出て行く。ふとそこでいつの間にか集まっていたたくさんのギャラリイの中に知ってる顔をたくさん見つけた。まずは那須と熊谷。少し離れたところに奈良坂がいた。さらにもう少し離れたところに菊地原・歌川・鳥丸の総武高の1年ボーダー隊員がそろっていた。

八幡 「これはこの点差では終われないな」

誰に言うでもなくつぶやく。

八幡 「これからは俺一人で相手するぞ」

葉山 「ならここで終わりにしないか。お互いによく頑張ったってことでさ」

三浦 「ちよ隼人。何言ってるの。ここまで来たら決着つけなきゃまずいでしょ」

葉山 「けど相手は一人になったわけだしさ。これ以上は――」

八幡 「俺のことなら気にしなくていいぞ。お前らごとき一人で余裕だ」

三浦 「ヒキオ、調子のんなし！ほら隼人あいつもこう言ってるし」  
八幡 「それじゃあ試合を再開させるぞ」

葉山が何か言う前に俺のサーブで試合を再開させる。さつきよりも球速をあげサーブを放つ。そのサーブに葉山たちは反応できなかった。それからは一方的だった。相手のサーブでは加速を使いたい体の動きなどから判断し、余裕をもってボールのコース上に入り、相手がギリギリ追いつけるところに返す。それで返ってきたボールもギリギリ追いつけるところに返す。それを繰り返して体力を削る。サーブは反応できない球速で放つ。そうして同点になるころには葉山たちは肩で息をしていた。そして俺のサーブで逆転する。だんだんギョラリが騒がしくなってきた。

モブ1 「おいあの葉山が負けんのか」

モブ2 「あんな目の腐ったやつに」

菊地原 「さつきと負ければいいのに」

歌川 「おい！菊地原！」

ギョラリーの声に交じって菊地原の生意気な言葉とそれを注意する歌川の声が聞こえる。やっぱ歌川っていいやつだな。また今度おごつてあげよう。それから俺のサーブ。それを走ればギリギリ追いつくコースに放つ。すでに体力が限界に達していた葉山は届かない。これで9対11。三浦のサーブ。疲れているため試合序盤ほどの威力はない。よって加速は使わずに返す。あれは使いすぎると一時的にアホになってしまうので使用するときは注意しなければならぬ。まあそんなことより相手は返せずに9対12。

八幡 「あと三点」

俺が葉山たちに聞こえるようにつぶやく。

葉山 「君はなぜ最初から本気を出さなかったんだ」

八幡 「なぜって、誰かさんたちが足手まといばかりにボールを集めてこつちにはボールが飛んでこなかった。それだけだ。」

三浦 「あんた結衣に何言ってるんだし！」

八幡 「なについて本当のことだろ。じゃあ聞くが何でお前たちは由比ヶ浜ばかりにボールを集めた？それは俺より点がりやすかったからだろ。そしてお前らに狙われた結果、最初あれだけ点差が開いた。どうだ？俺は間違ったことを言ってるか？」

葉山と三浦は反論することができない。そこで俺の目にめぐりさんと先生が見えた。

八幡 「葉山、ゲームオーバーだ。」

葉山 「それはどういう意——」

先生 「お前らここで何やっておるか!!」

葉山の問いはめぐりさんが連れてきた先生によって遮られた。

葉山 「…テニス部の練習を手伝っていました」

葉山は苦し紛れにそう言う。

めぐり 「肝心のテニス部の戸塚君は休んでいるようだけど？それに君たち、生徒会にテニスコートの使用申請してないよね」

葉山 「そ、それなら彼はどうなんですか」

葉山は俺の方を見ながら言う

めぐり 「彼からはテニス部のお手伝いとして使用申請を受けています。あとそこにいる由比ヶ浜さんと今いないけど雪ノ下さんもね」

先生 「お前ら…葉山と三浦だったな。ちよつと来い。周りで見る連中もはよ教室戻らんかい」

それから葉山と三浦は先生に連れていかれ、ギャラリーも撤収を始める。それと入れ違いになるようにして雪ノ下が戻ってきた。雪ノ下の手の中には救急箱があった。

雪ノ下 「これは何の騒ぎなのかしら？」

八幡 「部隊長が何も言わずに消えたら領地のテニスコートを奪おうと他国が攻めてきて、部隊長より上の本部長に泣きついて何とか他国を撃退したところだ。さて俺は先に戻るぞ。」

戸塚 「うん。今日はありがとう！」

戸塚に満面の笑みで言われた。え、なにこれ超かわいいんですけど(今さら)。そんな顔で私を見ないで！浄化されちゃう！なに俺はゾンビか何かなのか？



八幡 「おう。」

そしてテニスコートから攻守へ向かうところで待てつてくれためぐりさんのところへ行く

八幡 「めぐりさん、今日はありがとうございます。」

めぐり 「ご飯食べてたらいきなり携帯が鳴ったからびっくりしちゃったよ」

それから雑談をしながら俺たちは自分の教室に向かった。

後日談というか今回のオチ

テニスコート侵略事件(俺命名)のあと葉山と三浦は説教をくらい、葉山は1週間の部活動参加禁止と反省文、三浦には部活をしていなかったため反省文と奉仕活動をする羽目になり、葉山は次期サッカー部のキャプテン候補から外されたらしい。ざまあw

## 閑話 二宮匡貴

ある日の防衛任務上がり、報告書を書いていると俺のスマホが鳴った。画面を見ると珍しいことに二宮さんから電話が来た。

八幡 「もしもし珍しいですね二宮さん。どうかしたんですか？」

二宮 『比企谷これから時間あるか』

八幡 「防衛任務の報告書書き終わってからなら時間ありますけど」

二宮 『書き終わったらホテル最上階のエンジェルラダーという店に來い。倉崎もいるなら連れて來い』

八幡 「わかりました。」

二宮 『言い忘れていたがスーツで來いよ。ないようなら雪ノ下に用意してもらえ』

八幡 「そうなると陽乃さんはたぶんついてきたいと思うんですが一緒に大丈夫ですか？」

二宮 『構わん。待つてるから早く來い』

電話が切れた。とりあえず全員に電話の内容を伝えた。

楓子 「…鳩原さんのことですよね」

八幡 「たぶんそうだと思います」

鳩原さん：鳩原未来は楓子さんの姉弟子にあたる人で二宮隊に所属していた。そういた、なのだ。先日、ボーダーのトリガーを一般人に横流しし、その一般人とともにゲートの向こう側へ行った。しかし表向きはその事実を伏せ、鳩原さんが隊務規定違反をしてボーダーをクビに、二宮隊も連帯責任でB級へ降格処分になった。となつてゐる。俺がそこまで考えていると

謡 「だったら報告書は私とめぐ姉に任せて早く行った方がいいのです！」

めぐり 「そうだね！二宮さんを長時間待たせるのも悪いし。それにふうちゃんはずぐに行きたいでしょ？」

楓子 「けどいいの？」

謡・めぐり 「もちろん！」

それから俺たちは陽乃さんの用意したスーツに着替え、二宮さんが指定した店へと向かった。

二宮さんが指定した店に着くと、二宮さんはカウンターに座っていた。

八幡 「お待たせしました。二宮さん」

二宮 「来たか。」

二宮 匡貴。B級1位部隊隊長にしてボーダーNO.1シューターである。

陽乃 「今日呼び出されたのは鳩原ちゃんのことでもいいんだよね？」

二宮 「ああ。早速だが俺はあいつがこんなたいそうな計画を立てられるわけがないと思っっている。あいつを唆した黒幕が必ずいる。俺はそれが誰なのか知りたい。そいつの心当たりはないか？倉崎。」

楓子 「特にありません」

八幡 「黒幕の候補みたいな人はいないんですか？」

二宮 「同じ日に三人、行方不明者がいる。ゲートに消えたトリガーの反応は鳩原を除いて三つ。行方不明となった三人で間違いないだろう」

陽乃 「確かにタイミングを考えればその三人の可能性が高いだろうね。その三人の素性の調査は？」

二宮 「あらかた終わっている。これを見ろ」

二宮さんは三枚の紙を渡してくる。これは…

八幡 「これって二宮さんが一人でやったんですか？」

二宮 「ああそうだが」

八幡 「完成度高すぎじゃないですか」

そうこれは完成度がすごく高い。名前、身長、体重、家族構成から小学校の時のあだ名まで確実に要らないような情報まで書いてある。そんな調査書を三人で回して見る。それから二宮さんが調査書の顔写真を指さして

二宮 「この三人に見覚えあるやついるか？」

俺たちは三人そろって首を横に振る。ここで一つの疑問が生まれ

る

八幡 「なんで黒幕は鳩原さんを狙ったんでしょうか。二宮さんが言ったように本当に黒幕がいるのなら例えば、玉狛の小南の方が唆すことだけで見たら容易なはずです。なのになぜ鳩原さんが狙われたのか。こつちの方面から探ってみるのもありだと思っくんすけど。それに、これに乗っかることによる鳩原さんのメリットとか」

二宮 「…そうだな。俺はこれで失礼する。時間とらせて悪かったな。またなんかわかったことがあったら連絡をくれ」

そう言つて二宮さんは店から出て行つた。俺たちも二宮さんに続き店を出る。その時に一人の従業員とすれ違つた。俺は立ち止まつてすれ違つた従業員の後姿を見る。

楓子 「どうしましたか、ハチさん」

八幡 「いえ、何でもないです」

陽乃 「もしかしてさつきすれ違つた従業員の子に惚れちゃつた？ひ、ひどいわ八幡！私という許嫁がいるのにたつた一度すれ違つただけの子に一目ぼれするなんて！」

八幡 「違いますし、そんな変な設定足さないでくださいよ」

陽乃 「じゃあなんで？」

八幡 「ただ若いなつて。未成年と言われても納得できそうだったんで」

楓子 「確かに未成年と言われても納得しそうでしたね」

陽乃 「それならしつかりと顔見ておけばよかつたなくもう一回見に戻ろうかな」

八幡 「それでもいいですけど俺と楓子さんは帰りますよ。長居して未成年だとばれたくないんで」

陽乃 「そうだね。ほんとにここで働いているならまた来た時に確認すればいいや」

それからエレベーターに乗り、ホテルを後にした。そして今日が終わるころには若い従業員のことを忘れてしまつていた。

## 職場見学1

テニスコート侵略事件から数週間後、二宮さんの呼び出しから1週間後。朝起きて、時計を見ると9時半。これは完全に寝坊したな…まあいいや。もう寝坊という事実は変わらないしゆつくり行くか。そう思い、朝食を食べゆつくりと学校へ向かった。

学校へ行くと、平塚先生の授業中だった。先生は板書していたので音を立てずに席に着こうとしたのだが、偶然後ろを振り返った先生と目が合った。

平塚 「今は授業中だから遅刻の理由はあとで言ってもらおう。今は席について、授業終わったら私のところまで来い。じゃあ授業を進めるぞ」

席に座り授業を聞く。10分ぐらいで授業が終わった。まあそれもそうか。俺が来たのがもうほとんど終わりかけだったし。それから平塚先生のところへ向かう。

平塚 「じゃあ比企谷。遅刻の理由について話してもらおうか」

八幡 「純粋に寝坊しました」

平塚 「珍しいな君が言い訳をしないなんて…とりあえず反省文は書いてもらおうぞ」

八幡 「わかりました」

反省文は回避できるのだが今回は俺が全面的に悪いので甘んじて罰の受けることにした。そうしていると後ろで扉が開く音がする。そつちに視線を向けると青みがかった髪の毛の制服を着崩した女子が入ってきた。

平塚 「このクラスは問題児が多いな。川崎沙希、君も遅刻か？」

川崎と呼ばれた生徒は会釈だけして、自分の席に着いた。

平塚 「全く…川崎、君も放課後までに反省文を私に提出しろ」

平塚先生は教室から出た。俺は川崎の顔をどこかで見たことがある気がしていたが思い出せずにもやもやしたまま授業を受けた。

総武高もテスト期間に入り、作戦室でいつものように勉強している。ここには俺と謡の二人だけだ。陽乃さんは大学の方で楓子さん

とめぐりさんは総武高でそれぞれ用事が入っているらしくまだ来ていない。ここに来てから2時間ずっと勉強していて腹が減ってきた。そこに、

謡 「ハチ兄、そろそろおなかすきませんか？防衛任務の前にご飯食べに行きませんか？」

八幡 「そうだな。食堂にするか？」

謡 「それでもいいですけどたまにはほかの場所で食べたいです」

八幡 「ならサイゼは？」

謡 「いいですね！そこにしましょう」

八幡 「よしじゃあ行くか」

それから財布とスマホだけ持って謡と一緒に一番近いサイゼを指した。

サイゼに向かい歩いていると電話がかかってくる

八幡 「もしもどうした？小町」

小町 『あ、お兄ちゃん？ちよつと相談があるから今から会えないかな？』

八幡 「いいけど防衛任務があるからゆっくりできない。今日は話を聞くだけでもいいか？」

小町 『もちろん！お兄ちゃんは今どこいる？』

八幡 「謡と一緒にメシ食うためにサイゼに向かっている。その相談は謡がいても大丈夫なのか？」

小町 『ういちゃんもいるんだ！…ういちゃんがいても大丈夫だよ！今塾でたところだからお兄ちゃんたちの方が早く着くと思うから待っててね？』

なんか変な間があったが何だろうか

八幡 「りよーかい。先行って待てるぞ」

小町 『うん。よろしくねお兄ちゃん！』

それから謡に電話の内容を話し、引き続きサイゼに向かった。

サイゼに着き、案内された席に向かう。その途中で勉強している三

人組が目に入った。

雪ノ下、由比ヶ浜、戸塚の三人だ

雪ノ下 「では次はことわざの問題。無慈悲なものでも時には慈悲から涙を流すことがあるということわざは？」

由比ヶ浜 「無慈悲？慈悲？」

雪ノ下 「言い換えるわね。比企谷君のようなひどい人間でもたまには優しさを見せることがある。鬼の目にも…」

由比ヶ浜 「わかった！金棒！」

まさか高校生にもなって慈悲の意味が分からないやつがいるとは思わなかった。さらに答えも間違っているし。雪ノ下に関してはスルー。

八幡 「答えは鬼の目にも涙だ。おまえはあれか？鬼に恨みでもあんのか？鬼に対してひどすぎるだろう」

由比ヶ浜 「ヒッキー！何でここに？」

戸塚 「八幡も勉強会に呼ばれたの？」

戸塚にはあれから八幡と呼ばれるようになっていた。さらに侵略事件以降戸塚以外のほかのテニス部員も戸塚が昼休みに練習していることを知り一緒に練習するようになっていた。

雪ノ下 「あら貴方は呼んでないのだけど。なぜあなたがここにいるのかしら？」

八幡 「メシ食いに来ただけだよ。それに呼ばれたとしても参加しないけどな。由比ヶ浜に教えてるだけで時間なくなりそうだし。というわけで行くぞ謡」

雪ノ下 「ちよつと待ちなさい」

席に向かおうとすると雪ノ下に呼び止められる

八幡 「なんだよ」

雪ノ下 「今すぐ両手を括って待ちなさい。すぐに警察呼ぶから」  
雪ノ下はスマホを取り出す。後ろにいる謡の雰囲気徐徐に悪くなっているのを感じる。

八幡 「なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ。行くぞ謡」

謡 「いいんですか？ハチ兄」

たぶんこれは言い返さなくていいのか？みたいな意味だろう

八幡 「ああこいつらに付き合ってたらそれこそ時間の無駄だ」

戸塚 「八幡！さつきからその子、ハチ兄って呼んでるけどその子って八幡の妹なの？」

八幡 「いや違うぞ戸塚。こいつは四——」

小町 「いたいた、お兄ちゃん！ういちゃん！」

俺の言葉は入ってきた小町にさえぎられる。小町の方を見ると横には見知らぬ男が…

八幡 「おい小町今すぐその場から離れろ。お前の後ろに邪魔な虫がいるからお兄ちゃんがつぶしてやるから」

小町 「待てお兄ちゃん！大志君はそんなんじゃないから！さつきの電話で言った相談って大志君の総武高に通ってるお姉さんのことなの！」

大志 「お願いします！もうお兄さんしかいないんです！」

八幡 「お兄さんと呼ぶな。次呼んだら地獄を見せるぞ」

謡 「どこの頑固おやじですか…」

謡があきれていたが俺は気にしない。小町は誰にもやらん

小町 「とりあえず座ろうよ」

小町の提案で席に座る。それから俺と謡は注文をし、小町もここで食べることにしたのか一緒に注文した。今このテーブルには俺と謡、小町と大志それになぜか雪ノ下と由比ヶ浜

、戸塚もいた。

八幡 「雪ノ下、由比ヶ浜なんているんだよ」

由比ヶ浜 「何でさいちゃんはいいんだし！」

八幡 「当たり前だろ。戸塚だぞ。それよりほんとなんているんだよ」

由比ヶ浜 「総武高に通ってるなら私たちも何か協力できるかもしれないし」

小町 「とりあえず一回自己紹介しませんか？」

雪ノ下 「そうね。初めまして。私は雪ノ下雪乃よ。」



由比ヶ浜 「初めまして由比ヶ浜結衣です」

戸塚 「僕は戸塚彩加です。八幡とはクラスメートです」

小町は三人の顔を見て、

小町 「みんなかわいい人だね！お兄ちゃん！」

八幡 「まあ戸塚は男だけだな」

小町 「またまた。そんなわけないじゃん！」

謡 「そうですね。ハチ兄失礼ですよ」

戸塚 「僕男なんだけどな……」

戸塚が言うと、小町も謡も目を丸くする。

謡 「本当に男の人なんですか？」

戸塚 「うん」

謡 「失礼しました。私は四ノ宮謡と言います。ハチ兄と小町さんとは親が友達だったので昔よく遊んでもらってました。今日は両親が仕事で帰るのが遅くなると言っていたので、ハチ兄と一緒にご飯を食べることになりました。」

さすが謡。この中では俺と小町と謡しかわからない昔のことを入れることで誰もこれが嘘だとは思わなかったようだ。

小町 「次は小町だね！いつも愚兄がお世話になっております！比企谷小町です！」

大志 「最後は俺つすね。川崎大志つす。今日は姉ちゃんのことと相談があつてきました。話聞いてもらつていいですか？」

八幡 「小町から聞いていると思うが、今日はあまり時間がない。それでもいいなら話せ。」

雪ノ下 「貴方みたいな友達がいらない人に用事なんてあるわけないじゃない。それに相談を受けたなら解決法を提示するのが筋じゃないかしら」

謡 「雪ノ下さん貴方さつきから何なのですか！あなたがハチ兄のなにを知ってるっていうんですか！外見だけ見て中身見ないで話すのやめてもらえませんか？虫唾が走ります」

正直驚いている。俺が謡と会ってからおよそ一年。謡が怒るのなんて初めて見た。このままだと謡と雪ノ下の口論になる気がしたの

で止める

八幡 「やめろ謡。雪ノ下、お前は小学生を夜に連れまわしてなんかあったときに責任とれんのかよ。小町や大志だつて中学生だ。遅くなれば親は当然心配もする。それにこの相談を持ち掛けられたのは俺だ。俺の都合に合わせてもらう。急にしやしやり出てきたやつが文句言うな。本来ならこの件は、お前は聞く権利がないことを自覚しろ。∴大志話してくれ」

大志 「はいっす。」

それから大志は話し始めた。

## 職場見学2

大志が相談を始める

大志 「俺の姉ちゃんには川崎沙希って言って、2年生です。クラスは確かF組だったと思います。」

戸塚 「あ、うちのクラス」

八幡 「川崎…あいつか」

由比ヶ浜 「あのちよつと怖い感じの人だよね」

俺はこの前遅刻したときに同じ日に遅刻した奴を思い出していた

大志 「最近その姉ちゃんが帰ってくるのが遅いんです」

雪ノ下 「具体的に何時くらいなのかしら」

大志 「5時です」

八幡 「朝じゃねえか」

ボーダーならその時間になることもあるが少なくとも俺はボーダーで川崎を見たことがない

戸塚 「ご両親は何も言わないのかな？」

大志 「両親は共働きだし下がまだいるんで、あんま姉ちゃんにはうるさく言わないんです」

戸塚 「そうなんだ…」

大志 「それにこの前家にエンジェルなんとかって店から電話が来たんすよ！エンジェルつすよ！エンジェル！絶対やばい感じの店つすよ！」

謡 「それはエンジェルという店に偏見持ちすぎでは？」

由比ヶ浜 「へんけん？」

雪ノ下 「今までの話から推測するに川崎さんはバイトをしているんじゃないかしら」

エンジェル…川崎…朝帰り…！それまでばらばらだったものが一気に一つにつながった気がした

八幡 「大志何個か質問いいか？」

大志 「はい」

八幡 「まず一つ目、朝帰りはいつからだ？」

大志 「2年になってからだと思うっす」

八幡 「2つ目、その前と後で何か変わったことは？」

大志 「…たぶん俺が塾に通い始めたくらいです」

八幡 「ラストだ。お前は姉にどうしてほしい？」

大志 「家族はみんな心配してるので朝帰りはやめてほしいっす。それができなくても、せめて事情だけでも話してほしいです」

八幡 「そうか…小町、謡帰るぞ。大志もついて来い」

大志 「えっ、あ、はいっす！」

雪ノ下 「待ちなさい」

席を立とうとすると雪ノ下に呼び止められる

雪ノ下 「貴方にこの問題が解決できるのかしら」

八幡 「ああ。もう朝帰りの原因は分かっている。さつき言った通り相談を受けたのは俺だ。雪ノ下、お前は何もするなよ」

雪ノ下が何か言う前に席を立ち、金を払い店を出る

八幡 「大志、お前はもう帰れ。姉の事情がどうであれお前が勉強をしなくていい理由にはならないからな。姉の件はできる限りのことはしてやるよ」

大志 「よろしくお願いします！お兄さん！」

八幡 「お兄さんと呼ぶな！お前この件が片付いたら二度と小町に近づくなよ。視界に入れることも許さん。もし小町に手を出して見ろ。地の果てまで追いかけてお前に死ぬよりつらい地獄を見せてやるからな」

大志 「…姉のことはよろしくお願いします」

大志は去っていった。それから小町を家まで送り謡と一緒にボ―ダー本部に行き防衛任務をこなした。その時に陽乃さんに事情を説明し、またスーツを用意してもらえないかと頼んだ

翌日の夜となり、陽乃さんに用意してもらったスーツを着て、この前二宮さんに呼び出されたエンジェルラダー 天使の階に向かっている。横には陽乃さんがいる。昨日スーツを頼んだ時にやはり今回もついてくると言った。エンジェルラダーに着くと、まず店内を怪し

もついてくると言った。エンジェルラダーに着くと、まず店内を怪し

まれないように見まわし目的の人物がいるか確認する。いた。川崎はカウンターでグラスを磨いている。俺たちはカウンターに座り川崎に話しかける。

八幡 「川崎沙希で合ってるよな？」

川崎 「そうですねあなたは？」

川崎は俺を怪しみながらも敬語で返す

八幡 「お前と同じクラスの比企谷八幡だ。」

俺が言うと川崎は驚いた表情を作ってから悲しげな表情になった。

川崎 「そっか。とうとうばれちゃったか。先に言つとくけど俺たちが先生に言っても無駄だよ。このバイト辞めさせられても別のバイトするからね」

八幡 「お前がそこまでバイトをしたがる理由：学費で合ってるか？」

川崎 「っ!?なんであんたがそれを!？」

八幡 「お前の弟から俺の妹を通して相談があつてな。そこでいろいろ聞いた。まあ学費というのは推測だけだな。弟が言ってたぞ。家族なんだから相談してほしいって」

川崎 「相談できるわけじゃないじゃん!両親は共働きで忙しい!大志は受験生で塾に通い始めた!毎日働いて大志の塾のお金を出した両親にまだ二年なのに私の塾のお金まで出してほしいなんて言えるわけじゃないじゃん!それにまだ妹もいる。妹のことを考えると私が迷惑をかけるわけにはいかない。それともあんたは私の学費を払ってくれんの?それができないなら私の問題には関わってこないで!」

川崎の言葉を俺たちは黙って聞いていた

陽乃 「はいはい!私はあなたの学費を払ってもいいよ!私にメリットがあるなら…:だけどね」

八幡 「陽乃さん茶化さないてくださいよ。真剣な話してるのに」

川崎 「比企谷、この人は?」

陽乃 「私は雪ノ下陽乃。八幡の師匠だよ!」

川崎 「師匠?なんの?」

八幡 「それはあとで話す。俺はお前の学費を払ってやることはで

きない」

川崎 「だったら――」

川崎の言葉を遮る

八幡 「だけどお前に二つの提案をしてやろう。一つ目はスカラシップだ」

川崎 「スカラシップ？」

陽乃 「簡単に言えば成績優秀者を対象に入学金や学費の一部もしくは免除しようってことだよ」

八幡 「大体そんな感じだ。先生に聞けばより詳しくわかると思うぞ」

川崎 「…それで二つ目って何なの？」

八幡 「それはボーダーに入ることだ」

川崎 「は？ボーダー？」

陽乃 「うん。最近いろんな大学がボーダー推薦をしてるの。ボーダー隊員がいるってだけでそれなりのステータスになるからね。最低限授業についていけるだけの学力は必要だけどね」

八幡 「お前の普段の成績は分からないがこれだけでボーダーと提携している大学にはほぼ確実に入れる。塾に行かなくてもだ。それに妹がいるって言ったよな？ボーダーならその妹のために金を稼ぐことができる」

陽乃 「まあ良い事ばかりじゃないけどね」

川崎 「どういう事？」

八幡 「ボーダーに入ればネイバーと最前線で戦うことになるわけだ。防衛任務ならまだ安全だがまた大規模侵攻があれば当然危険が伴う」

川崎 「なんだそんなことか」

川崎が言った一言に驚く

八幡 「そんなことって。結構重要だぞ」

川崎 「だってそうでしょ。あんたたちボーダーを信頼してないわけじゃないけど、ネイバーが警戒区域から出てきたとき、自衛手段がないことの方がよっぽど危険じゃない？」

八幡 「確かに…」

川崎 「一つ聞きたいんだけど、ボーダーって才能とか必要じゃないの？」

八幡 「川崎の言う通り才能がないやつが上の連中を見て才能の差を感じてやめていくやつもいる。けど才能なんて本人の努力と工夫次第でどうとでもなる。嵐山隊の木虎は知ってるか？」

川崎 「うん」

八幡 「あいつはトリオン量が少なかった。トリオン量つてのはボーダーの武器と使うためのエネルギーだと思えばいい。けどあいつは努力と工夫で嵐山隊のエースになった。才能がないからってあきらめるのは努力したくないやつの言い訳だ」

陽乃 「八幡正論なんだけど木虎ちゃんの個人情報…」

八幡 「あつ…川崎、他言無用で頼む」

川崎 「…うん」

川崎は呆れながらもうなずいてくれた。

八幡 「まあボーダーに向いてるかどうかは職場見学の時にわかるだろ。他のところと同じ内容なら対ネイバー戦闘訓練があるはずだしな」

今年の総武高の職場見学は希望者が二年生の九割を占めたため全員でボーダー本部になった。

川崎 「初心者に戦闘訓練なんてさせるの？」

八幡 「ネイバーが相手って言うっても向こうは攻撃してこない。その分耐久力だったかなにかしらが上がってたはずだ。まあこの記録がすべてじゃないが一つの目安としてはいいはずだ。これで提案は終わりだ。スカラシップにしろボーダーにしろ決めるのはお前自身だ。ボーダーの方は家族と相談しないと決められないけどな。陽乃さん、帰りますよ」

陽乃 「は〜い。ボーダーに入るならよろしくね川崎ちゃん」

川崎 「比企谷ありがとう。雪ノ下さんもありがとうございました」

八幡 「気にすんな。もう一つ言っておく。ここ、やめるなら早い

方がいいぞ」

川崎 「は？どういうこと？」

八幡 「J組の雪ノ下雪乃って知ってるよな？そいつが近いうちにここに来る」

川崎 「どうして？」

八幡 「俺がお前の弟から相談を受けていた時に近くにいたからな。あいつはたぶんお前をやめさせようとするぞ」

川崎 「そうなんだ。わかった。」

八幡 「俺たちはこれで帰るから」

川崎 「うんじゃあね」

俺たちは店から出てエレベーターに乗る。

陽乃 「そういえば昔八幡がよくやってたスカッシュゲーム、あれ訓練として導入されるらしいよ」

八幡 「やってた、じゃなくてやらされてた、ですよ」

陽乃 「いやいや、最終的には自分からやってたじゃん！」

八幡 「これしか選択肢がなかったからですよ」

あん時は、これをやるか、陽乃さんと楓子さんのバイパーをよけ続けるという選択肢しかなかったからな

八幡 「それで導入はいつからなんです？」

陽乃 「今調整中らしいから職場見学のころには導入されるんじゃないかな？」

八幡 「ポイントつてもらえるんですかね？」

陽乃 「もらえないんじゃないかな？反射神経だけよくても強いわけじゃないしね」

八幡 「そうですね。：思ったんですけどこれってスナイパーがすぐくつらくなりませんか？」

反射神経をよくするということはつまり不意打ちなどに強くなるということ。スナイパーにとっては天敵なのだ

陽乃 「けど、しとめるだけが仕事じゃないし。連携次第ってことだよ」

八幡 「そうですね」



エレベーターが止まる。どうやら一番下の階に着いたようだ。陽乃さんが先に降り続いて俺が降りる。すると降りた先には雪ノ下と由比ヶ浜がいた。

陽乃 「あれ？雪乃ちゃんじゃーん！なにしてんのこんなところで？」

雪ノ下 「ね、姉さんには関係ないでしょ。それより姉さんは何でここに？」

陽乃 「私は大学の友達と飲みに来ただけだよ。ね、八幡（やはた）君？」

陽乃さんは俺に会話を振る。今の俺の恰好は陽乃さんが用意してくれたスーツに髪はワックスで迅さんふうに仕上げ、メガネをかけている。これで名前を変えることで俺は完璧に「比企谷八幡」には見えない。それから、嵐山さんのようなさわやかな笑顔になり

八幡 「ええ。それで陽乃さん。彼女たちは？」

陽乃 「黒髪の方は私の妹の雪乃ちゃんだよ！もう一人は雪乃ちゃんの友達の由比ヶ浜結衣ちゃん、通称ガハマちゃんだよ！」

八幡 「初めまして。私は陽乃さんの友達で桐ヶ谷八幡（やはた）と言います。よろしくお願いしますね。」

由比ヶ浜 「よ、よろしくお願いします」

雪ノ下 「姉さん。なんで由比ヶ浜さんのことを知っているのかしら」

陽乃 「私は雪乃ちゃんのことならなくんでも知ってるんだよ？例えばこれから最上階にあるバーでバイトしてる女の子のところに行くこうしてる、とかね！」

雪ノ下と由比ヶ浜の顔が驚愕に変わる

雪ノ下 「何で姉さんがそれを!？」

陽乃 「さっき言ったじゃん！雪乃ちゃんのことなら何でも知ってるって。…というのは冗談で、今雪乃ちゃんが教えてくれたんだよ。」

雪ノ下 「カマかけたっていうの!？」

陽乃 「そうだね！」

八幡 「少しいいですか？女性の店員なんて今日いましたっけ？」

雪ノ下 「どういうことですか!? 桐ヶ谷さん。」

八幡 「僕たちけっこう長い時間居たんですが女性の店員なんて今日は見ませんでしたよ」

雪ノ下 「本当ですか!?!」

八幡 「ええ。ですよね、陽乃さん?」

陽乃 「そうだね。それに私としては妹が非行に走ろうとしてるのを黙ってみてるわけにはいかないんだよね。もしこのまま行こうとするなら私はお母さんに相談するよ。」

雪ノ下 「…ごめんさい、由比ヶ浜さん。今日は帰りましょう。」

由比ヶ浜 「う、うん」

陽乃 「ごめんね、八幡君。私は雪乃ちゃんがすっかり家まで帰るか見届けないとだから雪乃ちゃんたちと行くね」

八幡 「わかりました。お気をつけて」

陽乃 「うん。またね八幡君」

陽乃さんが二人を連れてホテルから出て行く。三人の姿が見えなくなつた瞬間、俺は顔に張り付けていた笑顔を解いた。

八幡 「疲れた…」

それから、疲れた体を引きずって家に帰った。

### 職場見学3

職場見学の日の朝、自分の職場に職場見学をしなきゃならない俺はいつもよりテンションが高かった。なぜかって？そりゃあ、休むからだよ。ほんとに何が悲しくて自分の職場を見学しに行かなきゃならないんだよ。そんなわけで今日は休みます！なにがあるうと絶対休んでやる！…これってただのフラグじゃね？

小町 「あ、お兄ちゃんおはよ！」

リビングに入ろうとすると横の洗面所から出てきた小町と遭遇した。

八幡 「おう、おはよう小町。今日俺なんか熱っぽいから学校休むわ」

小町 「そうなの？けど――」

小町の言葉は遮られた。

楓子 「あらそうなのですか？ハチさん？」

八幡 「…」

小町の言葉は楓子さんによって遮られた。当然現れた楓子さんに俺は思考が停止した。再起動には数秒かかった。

八幡 「えーと、楓子さんは何でここに？」

楓子 「ハチさんが今日の職場見学をさぼらないように見張―いえ、たまたま早く起きたので散歩がてら来ただけですよ？」

八幡 「…そこまで言ったならもう言い直さなくていいです」

楓子 「で、さつきはなんて言ったのですか？聞こえなかったのですが」

八幡 「熱っぽ―」

楓子 「え？」

八幡 「熱―」

楓子 「え？」

八幡 「…今日の職場見学は楽しみだなー」

思いつきり棒読みになってしまった。

小町 「楓子さん、兄をよろしくお願いします。」

楓子 「任されました。いってらっしやい小町さん。」

小町 「行ってきます！楓子さん！あ、そうそうお兄ちゃん、お菓子の人と会えてよかったね」

八幡 「お菓子の人？」

お菓子の人：そんな人に心当たりはない。

小町 「結衣さんだよ。」

八幡 「由比ヶ浜？あいつからは食物兵器しかもらった覚えはないぞ？」

小町 「食物兵器？たぶんそれじゃなくてお兄ちゃんが入院してる時の話だよー！」

八幡 「俺、あいつと入院してる時に接点なんてあったか？」

小町 「あれお兄ちゃん知らないの？学校であつた時にお礼言うつて言つてただけだな…まあいいや。お兄ちゃんが助けた犬の飼い主さんが結衣さんなの」

八幡 「は？」

楓子 「お話し中ですが小町さん、時間は大丈夫なのですか？」

小町 「あ：行つてきます！」

それから小町は走つて学校に向かつていった。

楓子 「ハチさんもそろそろご飯食べないと遅刻しますよ」

八幡 「そうですね」

俺は考えるもそこそこにメシを食べ、制服に着替え、行きたくない学校に楓子さんと一緒に向かった。ちなみに俺がメシ食べてる間、楓子さんは俺の部屋から持ってきたラノベを読んできましたまる

ボーダー本部・大広間。

ここに職場見学のため総武高の二年生がそろつていた。さつきまでざわざわしていたが嵐山隊が登場しさつきまでのざわざわが歓声に変わる。それから静かになつた頃合いを見計らい、嵐山さんが話し始めた。

嵐山 「総武高生のみんな、こんにちは！今日は俺たち嵐山隊が君たちの職場見学の案内をさせてもらう！よろしく頼む！」

嵐山さんのさわやかスマイルで歓声がさっきの三倍の大きさになる。嵐山さんはよくあのさわやかスマイルをずっと続けていられるな。この前、川崎の件で行ったホテルで雪ノ下と由比ヶ浜相手に別人としてあのスマイルを真似してみたがたぶんあれ以上は続けていられなかっただろう。

戸塚 「やっぱ嵐山さんってかっこいいね！ね、八幡！」

八幡 「ああ、そうだな戸塚」

俺の隣にいる戸塚がそう言った。確かに嵐山さんはかっこいい。少なくとも葉山が目じゃないくらいには。やべえ、そう考えると葉山ってすげー劣化した嵐山さんって感じだな。そんなことを考えている間に嵐山さんは話を進める

嵐山 「初めにボーダーの忍田本部長から挨拶だ」

忍田さんが壇上に現れ挨拶する

忍田 「私がボーダー本部長の忍田だ。今日は来てくれてありがとう。今回の職場見学を通して君たちにボーダーについてより深く知ってもらおうと思っている。わからないことは嵐山隊や総武高のボーダー隊員に聞いてくれ。ではこれで私の挨拶を終わる。」

忍田さんの挨拶が終わり、嵐山さんが進める

嵐山 「次はボーダーという職種についてだ。——以上で説明を終わる。最後に今日の予定について説明しよう。これから君たちには訓練室でネイバーとの戦闘訓練をしよう。その次に食堂で昼食をとり、午後の時間になったらランク戦ブースというところに行く。それで今日の見学は終わりとなる。最後にはスペシャルイベントを用意するので期待してくれ！それじゃあ移動するぞ」

嵐山さんはそう締めくくり、移動を開始する。

俺は今、スナイパーの訓練場にいる。総武高生が訓練室に移動しているときに、嵐山隊のスナイパーの佐鳥と一人の男子生徒が別の道に曲がったのが見えた。気になった俺は戸塚にトイレに行くと言い、その二人を追いかけた。その二人が向かったのはスナイパーの訓練場。どうやら男子生徒はスナイパーの訓練をするみたいだ。男子生徒が

トリガーを起動させる。

佐鳥 「じゃあここから100m離れたところに的が出るから、それを撃ってね。5発撃つことに少しずつ距離が離れるから注意してね」

男子生徒はうなずき、狙撃を開始した

狙撃が終わり、的が近づいてくる。俺は後ろの壁に寄りかかっていたので、的が近づくのに合わせて的を見るために近づく。的を見て

八幡 「うまいな」

自然とそうつぶやいていた。弾のほとんどは中心部の近くにあった。俺のつぶやきに反応して二人が振り向く

佐鳥 「比企谷先輩じゃないですか!」

八幡 「うるさい。黙れ佐鳥」

佐鳥 「ひどいですよ、比企谷先輩!」

男子生徒 「えっと、二人は知り合いつてことでもいいのか?比企谷」

八幡 「ん?なんで俺の名前知ってんだ?」

男子生徒 「:お前クラスに興味なさそうだもんな。同じクラスの千種霞だ」

八幡 「そうか。よろしく千種。で、俺と佐鳥は別に知り合いじゃないぞ」

霞 「いやいや、学校でいつも寝ているお前に初対面の人とあんなやり取りできるほどのコミュ力あるとは思えないんだけど」

八幡 「:確かに否定はできないな。」

否定したいのに言ってることが正しすぎて否定できない

佐鳥 「というか、そろそろ学校でもばらしたらどうです?ボーダー隊員だつて」

霞 「ああ、やっぱりそうなのね」

八幡 「佐鳥、職場見学終わったらランク戦しようぜ!もちろん100本な」

佐鳥 「中島君のノリで言わないでくださいよ!というか俺、スナイパーなんすけど」

八幡 「なんか言ったか?」

佐鳥 「俺、スナイ

八幡 「ん？」

佐鳥 「お

八幡 「ん？」

佐鳥 「サーイエツサー！」

霞 「漫才してないでそろそろ戻らない？」

千種があきれながら提案する

佐鳥 「そうっすね。そろそろ戻りましょうか」

千種の提案に佐鳥が乗っかり、歩き出す。逃げさせはしない

佐鳥 「ほら比企谷先輩も戻りますよ！」

八幡 「ああ。佐鳥、希望の死に方とか考えておけよ。なるべく希

望に沿ってやるからさ」

佐鳥は顔面を蒼白にさせながら先頭を歩いた。

## 職場見学4

俺と佐鳥、千種が訓練室に着くと、すでに戦闘訓練開始されていた。各クラスから10人の生徒が選ばれ、A組から順番にやっております。今はE組だ。訓練の最短タイムは40秒で千種明日葉という生徒だった。2位以降は1分を下回っていた。

八幡 「佐鳥、嵐山さんに報告してこいよ。それから職場見学中はもう近づいてくるなよ」

佐鳥 「失礼します、比企谷先輩、千種先輩」

佐鳥が嵐山さんに報告に行く。ちょうどE組の最後の生徒が終わった最後の人のタイムは3分28秒。次はF組の番だ

八幡 「千種、うちのクラスからは誰が出るんだ？」

千種 「確か…うちの一番うるさいグループの葉山、三浦、由比ヶ浜に、川…川何とかさん、あとはモブだ。」

八幡 「読者にいらぬ情報は与えない雑で簡潔な説明だったな」

千種 「比企谷、読者とかメタい」

八幡 「ほっとけ」

F組の訓練が始まる。最初はモブ三人と由比ヶ浜、三浦だ。由比ヶ浜は…バイパーか？弾道設定がなかなかできないのか変な方向に飛んで行っていた。三浦はスコープオンを使っていた。千種と並んで見ているとひとりの女子生徒が近づいてきた。

女子生徒 「お兄、スナイパーの方どうだった？」

霞 「普通だった」

女子生徒 「そうなんだ。こっちは結構面白かったよ。それで隣の人は？」

霞 「比企谷。クラスメートだ。」

女子生徒 「千種明日葉。よろしく。」

千種のことをお兄と呼び仲よさそうにしゃべっていた女子生徒は千種明日葉と名乗った。同じ苗字ってことは

八幡 「比企谷八幡だ。お前らって双子なのか？」

千種 「いやただの兄妹だ。俺が4月で明日葉が3月だからな。」



八幡 「そうか。それで千種妹。あのランキングの一位はお前で合ってるか？」

明日葉 「合ってるけど…千種妹って…普通に明日葉でいいじゃん」

八幡 「俺は誇り高きプロボッチだぞ。女子を名前呼びなんてできるわけないだろ。それよりトリガーなに使ったんだ？」

明日葉 「それよりって…使ったトリガーは拳銃型のア…アス…」

霞 「アステロイド？」

明日葉 「そうそれ！比企谷なんでそんなこと聞くの？」

八幡 「気になっただけだ。」

千種妹が俺をじろじろ見てくる。なに俺のこと好きなの？そんなことを考えていると千種が俺をにらんでくる

八幡 「千種妹。俺をじろじろ見てるけどなんかついてるのか？」

明日葉 「いやなんか、お兄と同じにおいがする気がするんだよね」

八幡 「ちなみにどんなにおい？」

明日葉 「シスコンのにおい」

八幡 「…」

そうこうしているとF組の一組目が終わり、二組目が訓練室に入っていた。一組目で一番早いのは三浦でギリギリ一分をきり、56秒。それからモブ三人と続いて最後に由比ヶ浜で3分47秒。最初の様子から察するにたまたま当たっただけだろうな。というか、初心者にバイパー使わせんなよ。

明日葉 「あ、負けた…」

千種妹のつぶやきでモニターを見ると葉山が終わって36秒だった。続いて川…川…川島？が40秒で終わった。川野？はこのタイムならボーダーでも問題ないだろう。川崎？…川崎は訓練室から出ると、まっすぐごこちらに向かってきた。

川崎 「比企谷ちよつといい？」

八幡 「ああ。」

俺が返事をする川崎は訓練室の人がいないところに歩いて行く

川崎 「あたしのタイムってどうなの？」

八幡 「ボーダーでは初めてで1分きればいいほうだな」

川崎 「そっか：比企谷あたしボーダーに入るよ」

八幡 「家族と相談したのか？」

川崎 「多少しぶったけど、オーケーしてくれたよ」

八幡 「なら俺が言うことは何も無い」

川崎 「それでさ、ボーダーに入ったらあたしの師匠になってくれない？」

八幡 「断る。俺はまだ人に教えられるほど強くない」

川崎 「わかった。これからはボーダーでもよろしくね」

八幡 「おう。とりあえず戻るぞ。二人でいるとこ見られると面倒だからな」

今はまだ葉山が最高タイムを出したことでそつちに視線が集まっているが、そろそろ次の組が始まるからな。千種兄妹がいたとこまで戻ろうとして振り向くと、後ろには千種兄妹がいた

明日葉 「比企谷ってボーダーだったんだね」

八幡 「お前ら何でここいんだよ」

明日葉 「別についてくるなどは言われなかったし」

八幡 「いやいや普通わかるでしょ」

明日葉 「それより、その川崎さんと同じタイムの私も優秀ってことでいいんだよね」

八幡 「優秀とまでは言ってないが、いい方ではあるな」

明日葉 「じゃああたしもボーダー入ろつと」

八・霞・川 「「は!?!」」

千種妹の発言に俺たちの声がそろった。

明日葉 「なんでみんな声そろってんの？ウケる」

八幡・霞 「いやウケないから」

またも千種と被った。

川崎 「ちよつとあんたこんな大事なことを家族に相談もしないで決めていいの?」

明日葉 「お兄いいよね?」

霞 「明日葉ちゃん、言い出したら聞かないでしょ」

明日葉 「ほら」

川崎 「親とー」

明日葉 「親はもういないし」

川崎 「ごめん。」

明日葉 「いいよ。別に気にしてないし。お兄はどうする?」

霞 「明日葉ちゃん一人で危険なことさせるわけにはいかないでしよ」

明日葉 「というわけで、比企谷。ボーダーに入るにはどうしたらいいの?」

八幡 「ボーダーのホームページを見ろ。やり方は全部書いてある」

明日葉 「お兄。じゃああたしは友達のとこ戻るから。じゃね〜」  
千種妹が去っていく。

八幡 「…千種おまえも大変だな」

霞 「わかってくれるか比企谷…」

俺と千種は手を固く握った。そんな俺たちを川崎は温かい目で見ている。

霞 「まあ明日葉ちゃんが世界一かわいいからいいんだけどね」  
その一言をきっかけに握った手を離す。

八幡 「二つ訂正があるぞ千種。世界一かわいいのは俺の妹だ。」

霞 「…」

八幡 「…」

霞 「明日葉が」

八幡 「小町が」

霞・八幡 「二番かわいいー!」

それから俺たちはにらみ合う。そこに川崎が割って入ってきた。

川崎 「ちよつと待ちなあんたら。一番かわいいのはうちの京華だよ。」

ここで第三勢力、裸エプロン同盟…違った。川崎が入り三つ巴の攻防戦が繰り広げられた。実際にはそれからしばらく三人でにらみ合っていたただけだ。

のちにこの光景を見ていた者はこう語った

「あそこだけなんか気温が違ったんですね。少し遠くで見えていたんですけどこっちまで寒くなってきました。ちようどその時葉山君がすごい早いタイムを出していて片方では歓声や何やらですごい気温が上がっていたのに三人の方に意識を向けると気温が下がっているんですよね。三人がただにらみ合っていただけなのに周りにすごいプレッシャーを与えていて。まるで熟練の剣士が三人でにらみ合っていてほかの二人の様子を伺いつつ、いつ誰に仕掛けるのか探っている。そんなふうにも見えませんでしたね。ええ。私のほかにも何人か見ている人がいたんですが誰も間に入って止めようとはせずに、ひたすらに身を小さくして目の前にある大きな脅威が過ぎ去るのを待つ。そんな感じでしたね。三人から伝わってくるプレッシャーがすごくて見ていた人は内心で早く終わってほしい。そう思っていたと思いますね。ええ。三人がにらみ合いをやめたときは生きてるってことに心から安堵しましたよ。私はもう二度とあんな現場には遭遇したくないですね。そういえば、三人がにらみ合っていた時に嵐山さんが何か言いたそうな顔で三人を見ていたんですね。なぜだったんでしょうか…」

## 職場体験5

あれから三人で特に会話もなくモニターを見ていた。今はJ組の二組がやっている。そしてそのJ組の二組目には雪ノ下が出ていた。訓練が始まり、雪ノ下が動く。手には弧月を持っていて、前までやっていた人たちで目が弱点と分かったのか目を目指して進んでいく。そして目をつぶし擬似ネイバーを倒す。記録は26秒。総武高のメイツでは一位だった。雪ノ下が1号室から出てくると葉山の時以上の歓声上がる。それから嵐山さんが近づき声をかける。

嵐山 「君すごいじゃないか！ボードーでもなかなかないタイムだぞ！」

雪ノ下 「ありがとうございます。でもボードーにはもっと早い人もいますよね？その人は何秒ですか？」

嵐山 「ボードーで一番早いのは四秒だ。その次がうちの隊の木虎で九秒だな」

雪ノ下 「私の六分の一：そうですか。ありがとうございます。失礼します。」

雪ノ下がJ組の生徒が多数いる場所に歩いて行く。その途中で目ざとく俺を見つけてどや顔をしてきたが俺は華麗にスルーした。

嵐山 「では最後に総武高二年ボードー隊員の代表者に同じ戦闘訓練と今後ボードーで実装予定の新しい訓練をしてみらおうと思う。」

あれ？嫌な予感がする。俺のサイドエフェクトがそう言ってる。俺のサイドエフェクトそういう系統じゃないけど…

嵐山 「それじゃあ比企谷！前に出てきてくれ！」

嵐山さんが俺の名前を口にした瞬間、逃走を開始。もうすぐ訓練室から出れそうだった時間きなれた二つの声が聞こえてきた。

謡 「嵐山さんそれじゃあだめなのです」

楓子 「そうですね。ハチさんと呼ぶにはこうしないと…ハチさんあと十秒で出てこなければ次の修行はハードモードになりますよー。はい、10、9、

カウントダウンが聞こえた瞬間に俺の体は宙を舞い、楓子さんの前

でスライディング土下座をする。

八幡 「申し訳ツございませんでしたアアアアアア!!」

楓子 「お早いお着きですねハチさん。そんなに私との修業がお嫌ですか?」

八幡 「いえそんな滅相もございませぬ。ただハードモードというのは少しばかり私が死にかけますゆえぜひとも遠慮していただきたいのですが…」

楓子 「そうですね。考えておきます。嵐山さんあとはお願ひします」

嵐山 「あ、ああ。とりあえず頭をあげてくれ比企谷。」

俺は土下座をやめ頭をあげる。まず目に入ってきたのは身長的な問題で謡の呆れた顔。その次に楓子さんの生き生きとした笑顔。最後に嵐山さんの少し引き攣った笑いだった。

嵐山 「比企谷お前にはプライドというものが無いのか」

八幡 「命の危…んん!謝るときに捨てられないプライドなんて持ってないです。もしよかったら嵐山さんも楓子さんのハードモードの修行受けてみます?修業が終わったら生きてることに心から安堵しますよ」

嵐山 「…いや遠慮しておくぞ…」

嵐山さんに拒否された。そのとき訓練室の中がざわざわしていることに気付き耳を澄ましてみると

「あんな奴がボーダー!」

「目が腐ってるのに!」

「あいつ倉崎先輩と仲がよさそうだぞ!これは親衛隊に報告しなければ!」

「隣の小学生は?」

「あら×はちキター!」

明日葉 「土下座とかマジウケる」

などなどいろいろ聞こえてきた。楓子さんって学校に親衛隊なんているのかよ…そして千種妹笑ってんじゃねーよ

嵐山 「気を取り直して、比企谷お前にはさつき言ったように戦闘

訓練と新しい訓練を受けてもらう。」

八幡 「新しい訓練ってスカッシュですよね」

嵐山 「なんだ知っていたのか比企谷。もともとお前達がやってきたものだしルールの説明はいらないよな」

八幡 「はい。トリガーは自分のものでいいですよね」

嵐山 「ああ。戦闘訓練が終わったらすぐにステージが移行するから中で待っていてくれ。それじゃあ頼んだぞ」

八幡 「了解です。トリガー起動（オン）」

それから俺は一号室に入った

アナウンス 『一号室訓練開始』

俺はアナウンスと同時に弧月を抜きつつ

八幡 「旋空弧月」

旋空を使い目を切り裂いた。

アナウンス 『訓練終了。記録0.5秒。続いてスカッシュモードに移行します。』

俺の持っていた弧月がラケットに変わり壁には凹凸が現れる。それから俺から見て右上からボールが飛んできた。最初の速度はアイビスと同じ速度。余裕を持って打ち返すとそのボールは壁の凹凸で反射する。正面の壁から天井へ。天井から左の壁へ。それから俺に襲い掛かってくる。ステップで少し立ち位置をずらし返す。またいろんなところで反射し、今度は右斜め上から。それも同じように返し10球ぐらい返すとよくゲームのレベルアップであるようなファンファーレが鳴り響く。これはボールの速度が上がる合図だ。次の速度はイーグレット。それもさっきまでと同じように返していく。10球ぐらい返したところで再びファンファーレ。次はライトニングの速さになった。それでもひたすら返していく。さらにファンファーレが鳴り、次はライトニングの速さのボールとアイビスの速さのボールの二つになる。それからボールの速度が速くなるにつれ俺の思考は徐々に消えていき、ただボールを打ち返す。それだけの機械になっていた。

アナウンス 「訓練終了 レベル142」

あれからしばらくして失敗した。これを最後にした時と比べて10もレベルが下がっていた。一号室から出ると、楓子さんと謡以外の驚いた顔が目に入った。

楓子 「ハチさんレベル下がりますすぎです。一番してた時期と比べて10もレベルが下がってますよ」

八幡 「久しぶりだったんでこれが限界っす」

謡 「嵐山さん次の進行を」

俺と楓子さんがしゃべっている間に謡が嵐山さんに進めるように促してくれていた。

嵐山 「そうだな。A級1位部隊の隊長ともなればこれくらいのことまでできるようになる」

嵐山さんの発言でまたざわついた。曰く

「あんなのがA級一位だと…」

「目が腐ってんのに」

などなど。さつきから目が腐ってんのは関係ないだろ

嵐山 「これで午前の見学は終わりだ。午後の見学は一時から。それまではこれから案内する食堂にいてくれ。わかっているとは思いますが立ち入り禁止の場所には入らないように！それじゃあ移動するぞ！」

最後尾で移動していると、戸塚が前からやってきた。

戸塚 「八幡！八幡ってボーダーだったんだね！」

八幡 「黙ってて悪かったな」

戸塚 「ううん。全然大丈夫だよ！八幡の知らなかったことを知れて僕うれしいよ！」

そう笑顔で言う戸塚。やばい。守りたいこの笑顔

謡 「戸塚さん、こんにちははなのです！」

戸塚 「謡ちゃん！こんにちはは！何で謡ちゃんが？」

謡 「私もボーダー隊員なのです！」

戸塚 「え！謡ちゃんもなの!?!じゃあこの前言ったのは？」



八幡 「悪い。あれは嘘なんだ。あの時はまだボーダーだつてばれたくなかつたからな。」

戸塚 「そうなんだ。もしかして謡ちゃんは八幡のチームに？あと倉崎先輩もそうなんですか？」

楓子 「あら私を知っているのですか。えーと…」

戸塚 「あ、戸塚彩加です」

楓子 「よろしくお願いしますね、戸塚さん。戸塚さんが言った通り私も謡も比企谷隊のメンバーですよ。ハチさんどこでこんなかわいい女の子と知り合つたのですか？」

八幡 「…楓子さん、戸塚は男ですよ」

楓子 「え…」

戸塚 「僕、男の子です…」

楓子さんが戸塚の顔をじっくり見る

楓子 「すみませんでした。女の子に見えてしまって。それで戸塚さんとハチさんはどこで？」

八幡 「戸塚はテニス部なんですけど前に練習を手伝ってくれつて頼まれたんです」

戸塚 「体育の授業で八幡の壁打ちがすごく上手だったので頼んだんです。八幡がテニス上手なのつてさっきのスカッシュのおかげなの？」

八幡 「たぶんな。楓子さんは俺の師匠なんだけどその時にあれをやらされてな。たぶんそのおかげだ。」

戸塚 「そうなんだ。さっきは本当にすごかつたよ！すごい速さのボールが二つで、しかもどこに反射するかわからないのに、それでも返していて…」

楓子 「全盛期はもつとできてたはずなんですけどね。」

謡 「そうですね。戸塚さんあれつてもう少し続けるとボールが三つになるんですよ」

戸塚 「ほんとなの!?八幡は三個でも続けられるの?」

八幡 「いや全盛期するときでも三個になつたらすぐに終わつたな。」

戸塚 「そういえば八幡の隊つて八幡と楓子さんと謡ちゃんの三人

だけなの？」

八幡 「いや違うぞ。あと戦闘員が一人とオペレーターが一人いるぞ」

戸塚 「えー！そうなの？僕はてっきり謡ちゃんかオペレーターなのかかと思っていたけど…じゃあ謡ちゃんはなに使っているの？」

謡 「私のトリガーは天弓って言って私の一点ものトリガーなのです！」

そんなことを話していると食堂に着いた。

食堂では総武高生でほとんどの席が埋まっていた。空いている場所がないかと探していると、嵐山さんが近づいてきた

嵐山 「比企谷、食堂の席が足りなさそうだからお前達は比企谷隊の作戦室で食べてくれないか？」

と言ったので、俺たちはそれを了承し、戸塚と別れ、俺、楓子さん、謡となぜかついてきた材木座の四人で比企谷隊の作戦室で昼食を食べ、また食堂に戻った。

## 職場見学6

俺と楓子さんと謡と材木座の四人で比企谷隊の作戦室で昼食を食べて食堂に戻ると、テニスコート侵略事件の主犯三…さん…縦ロールと那須と熊谷がにらみ合っていた。

…なにこれ。

近くにいた奈良坂に事情を聴いてみると

奈良坂 「あのバカがお前がずるしたあの言い出して那須と熊谷がキレた」

八幡 「そうか」

奈良坂から事情を聴いた俺は那須と熊谷に声をかける

八幡 「那須、熊谷お前らが怒る必要ないぞ。俺がボーダーから抗議すればいいだけだからな」

三浦 「あんたボーダーに頼って恥ずかしくないわけ？」

縦ロールはアレで煽っているつもりなのだろうか？

八幡 「別に何とも思わないな。せつかく使える手札があるんだ。使わなきゃ損だろ」

三浦 「あんたせこい手を使ってA級一位になったんでしょ。あんたもあんたのチームメイトもくずだね」

今の言葉を聞いた瞬間俺の中で何かがはじけた。俺は素早くトリガーを起動し弧月を出し縦ロールの首に当てる。俺から見て縦ロールの右には頭めがけて弓を引き絞っている謡と左にはイーグレットを縦ロールの頭に押し当てている楓子さんがいる。二人とも殺気が全開だ。

八幡 「口を閉じろよ雑魚が。」

縦ロールの首に弧月を当てながら続ける

八幡 「別に俺はな俺自身を馬鹿にされることはいいんだ、慣れるからな。けどな…俺のチームメイトやボーダーの仲間を馬鹿にするのは許さねえ。もしまたするようなら…殺すぜ」

殺すのところで俺も殺気を出す。言い終わると俺は弧月を縦ロールの首から離れた。楓子さんと謡はまだ縦ロールに武器を当てたま

まだ。

楓子 「さつきハチさんは自分のことは馬鹿にされてもいいと言いましたけど私たちの隊長を馬鹿にするならそれ相応の覚悟をもってくださいね」

楓子さんと謡が武器を下ろす。それと同時に縦ロールは崩れるようにしりもちをついた。周りを見ると近くにいたやつらのほとんどが地面に座り込んでいた。：霸王色の覇気使うとこんな感じなのかな：

ちょうどそのとき、自隊の作戦室で昼食を食べていた嵐山さんたちが戻ってきた

嵐山 「：：なんだこの状況は…」

この状況を見て嵐山さんはこうつぶやいた。それから嵐山さんに事情を説明する。

嵐山 「そうか：：相手に非があるとはいえさすがにやりすぎだ。たぶん罰が与えられると思うがお前達が怒った理由も理解できるから俺から上の人には軽くしてもらえるように頼んでおく。」

八幡 「迷惑かけてすいません」

嵐山 「気にするな。この話はもう終わりだ。さあ職場見学に戻るぞ」

周りを見てみると座っていたやつらも立ち上がっていた。

嵐山 「いろいろあったみたいだが職場見学の続きをするぞ！午後のは案内はランク戦のブースからだ！それじゃあついてきてくれ！」

嵐山さんはみんなを先導して歩いて行った。

ランク戦ブースに着くと嵐山さんが使い方を説明する。擬似ネイバーとの戦闘訓練の時は部屋数と時間の関係で一部の生徒しか体験できなかったが、今回は部屋数が多いので交代しながらなら全員が体験することができる

嵐山 「最後にここではチーム戦もすることができると操作が難しいためチーム戦がしたいときには近くにいるボーダー隊員に声をかけてくれ！以上だ。始めてくれ！」

まず各クラスのトップカーソルの連中がランク戦ブースに我先に入っていった。それからとどころ空いているところにカーソルの低いやつが入って行って、すぐにブースが埋まった。ボーダー勢は嵐山さんの説明で分からなかったやつに教えていて忙しそうにしていた。…俺？俺は見てる。誰も話しかけてこないし…別に寂しくねーし！

それからしばらくしてブースに空きが出始めた時に俺は声をかけられた。

明日葉 「比企谷チーム戦のやり方教えて」

八幡 「面倒だから他を当たれ」

明日葉 「倉崎先輩、めっちゃ見てるけどいいの？」

楓子さんの方を見ると、めっさ笑顔でこちらを見ていた。目が合うと楓子さんの口が動く。「は・た・ら・け」と…

八幡 「よし千種妹！チーム戦だったな！お前のチームは何人だ！」

明日葉 「あたし、お兄、川崎さんの三人」

八幡 「相手のチームは！」

明日葉 「一人」

八幡 「…は？お前らの相手って誰だ？」

明日葉 「比企谷」

八幡 「…俺はアレがアレでアレだから無理だ。」

川崎 「あれって具体的に何？」

八幡 「えくとほら使い方わかんないやつに教えたりとか」

霞 「お前さつきまでボーっとしてたら。それに嵐山さんと倉崎先輩の許可はもう取った」

楓子さんを見る。今度は笑顔でうなずかれた。

八幡 「はあ…何本勝負だ？」

明日葉 「三本でいいよね？」

霞 「いんじゃないの」

川崎 「そうだね」

明日葉 「じゃあ三本で」

八幡 「わかった。まずはチーム戦の仕方だけ説明するぞ」  
それからチーム戦の仕方を説明し、俺もブースに入った。ブースに入るとすぐに転送された。

\*\*\*

川崎と剣を打ち合わせながら千種の狙撃を警戒する。千種妹は転送位置が悪く転送直後に俺が殺した。

今は千種の居場所を特定するために隙を見せつつ川崎の相手をする。しばらく川崎と剣を打ち合わせていると右斜め後ろから狙撃が飛んでくる。それを頭をずらして躲し、川崎にとどめを刺す

打ち合っていた剣を剣の腹でそらし、少し体勢が崩れたところで横腹に蹴りを入れ、完璧に体勢を崩してから首を飛ばす。それから、狙撃が来た方向を頼りに千種を探した。

\*\*\*

アナウンス 『模擬戦終了 3対0 勝者 比企谷八幡』

ブースから出ると対戦した三人が寄ってきた。

霞 「比企谷、お前弧月以外使ってないだろ」

八幡 「あつ、バレた？」

川崎 「え、ほんとなの？」

八幡 「三人とはいえ素人相手にトリガー何個も使うなんてさすがにアレだからな」

明日葉 「くーっーじょーく!!…よし決めた！お兄、川崎さんボーダー入ったらチーム組もっー」

川崎 「そうだね。このまま負けたままっても気に食わないし」

霞 「まあまずはボーダーに入れるかってことだけだな」

明日葉 「お兄盛り上がっているときにそういうこと言わないですよ。だからごみいなんだよ」

霞 「いやいや現実見ることちよー大事でしょ。なんなら現実見えずぎて現実に絶望するまであるぞ」

八幡 「まあ落ち着けよ。千種妹と川崎は戦闘訓練のタイムもあるしたぶん落ちることはないだろう。千種はまあ…がんばれ」

霞 「わくお。世間が俺に冷たいです。」

明日葉 「あはは！お兄マジウケる。これからよろしくね川崎さん」

川崎 「沙希でいいよ。」

明日葉 「ならあたしのことも明日葉でいいよ。じゃあ改めてよろしくね沙希」

川崎 「よろしく明日葉」

女子二人がなんかいい感じになった。これを見て俺は

八幡 「…若いっていいな」

霞 「お前も同じ年でしょ」

俺のつぶやきは千種にツッコまれた。

雪ノ下 「ちよつといいかしら」

後ろから雪ノ下に声をかけられ、俺と千種が振り向く

八幡 「なんだよ」

雪ノ下 「私とも模擬戦しなさい」

八幡 「だつてさ千種」

霞 「いや比企谷でしょ」

八幡 「ここには俺と千種がいる。雪ノ下は誰と模擬戦したいとしっかり言っていないからな」

雪ノ下 「屁理屈言わないで頂戴。私はあなたに模擬戦をしなさいと言ったのよ。屁理屈谷君。」

八幡 「千種。ここに屁理屈谷なんて変わった名前なの奴いるか？」

霞 「いや、いないな」

雪ノ下 「貴方たちは私を怒らせたのかしら」

霞 「怒らせる？そりや無理だな。お前が勝手に一人で怒るだけだろ」

八幡 「千種お前のどこのアロハシャツのおっさんだよ…」

雪ノ下 「千種君貴方はさつきから何なのかしら。あなたの隣にいる腐った人と同様にあなたも腐っているのかしら」

霞 「さすが戦闘訓練一位さん。一般人とは違った狭い心をお持ちなように」

雪ノ下 「いいわ。比企谷君と戦う前にあなたから相手をするわ。」

霞 「…ぼく、弱い者いじめはよくないと思います。というわけで比企谷あとよろしく」

八幡 「千種…雪ノ下、お前は嵐山さんの許可は取ったのかよ」

雪ノ下 「さっき千種君たちと戦っていたのだから問題ないでしょう？」

八幡 「問題しかねえよ。さっき嵐山さんが出したのは千種たちと戦う許可だ。お前と戦う許可じゃねえ。俺と戦いたいなら許可取ってからにしろよ」

雪ノ下 「貴方そう言ってもうすぐ時間なのをいい事に逃げる気なのでしょう」

八幡 「そういうことじゃねえよ。正式な手順を踏めって言うてんだよ。」

と、そこで陽乃さんの声がした

陽乃 「受けてあげなよ八幡。嵐山君の許可は私が取るからさ」

雪ノ下 「姉さん…」

八幡 「陽乃さん。…もしかしてめぐりさんもこつちに来てたりします？」

陽乃 「もうすぐ来ると思うよ！」

八幡 「なにがあるんすかこれから…」

陽乃 「まだ内緒だよ！それより早く雪乃ちゃんと戦って、格の違いを見せてあげて」

八幡 「はあ…了解です。ほら早くやるぞ。時間もないし、1本勝負だ」

そう言い、ブースに入った。

ステージに転送される。しばらくその場にとどまっていると雪ノ下が馬鹿正直に正面から斬りかかってきた。

八幡 「おせえ」

ボーダーの猛者と戦ってきた俺からしたら雪ノ下の剣速はそれこそ蚊が止まって見えるほど遅かった。俺はその攻撃を片手で弧月を握って止めた(…………)。そのまま雪ノ下の首を斬



る。

アナウンス 『雪ノ下 緊急脱出(ベイルアウト) 勝者 比企谷八幡』

ブースから出ると陽乃さんと雪ノ下が向かい合っていた。

陽乃 「これが格の違いだよ、雪乃ちゃん」

雪ノ下は何も言わずに陽乃さんの前からいなくなった。

川崎 「比企谷、雪ノ下の剣をつかんでたけどどうやったの?」

八幡 「あれは柔法って言って俺が楓子さんから教わった技だ。」

??? 「あの時は八幡君大変だったよね。いつもよりふうちゃんが痛覚の設定あげて腕が切れることに悲鳴あげてさ」

川崎 「比企谷大変だったんだね……って生徒会長!」

途中から話に交じってきたのは総武高の生徒会長でもあり、比企谷隊のオペレーター城廻めぐりさんだ。

八幡 「めぐりさんお疲れ様です」

めぐり 「八幡君もお疲れ!」

そこで嵐山さんの声が響く

嵐山 「全員ブースから出たな?これでランク戦の体験は終わりだ。最後にスペシャルイベントの紹介をする!まずは比企谷隊!前に出てきてくれ!」

嵐山さんの言葉を聞き後ろに行こうとしていた俺は両脇を陽乃さんと楓子さん、後ろを謡とめぐりさんに囲まれ陽乃さんと楓子さんに両腕を組まされ連行された。

嵐山 「最後のイベントは比企谷隊VSボーダー連合のチーム戦だ。連合チームのみんなは前に出てきてくれ!」

総武高生のところから那須・熊谷・奈良坂。さらに出入り口方向から加古隊の加古さん・黒江。柿崎隊の柿崎さん・照屋・巴。それに仁礼と各隊のオペレーターが出てきた

嵐山 「今出てきたもらった戦闘員八人に加え、俺たち嵐山隊から俺と木虎と佐鳥が加わる!」

今までで一番総武高生がざわついた

\*\*\*

八幡 「作戦は敵の数が多いんで合流優先で楓子さんが狙撃で支援する形で行きます」

陽楓謡 「了解！」

八幡 「めぐりさんはまず合流地点の選出をお願いします。」

めぐり 「了解！」

八幡 「それじゃあ今回も勝ちましょう」

陽楓謡 「うん（はい）！」

それから謡が近くにあった椅子を近づけその椅子の上上がり、手を前に出す。その上に楓子さん、めぐりさん、陽乃さんの順に手を重ね、最後に俺が重ね、全員が重ね終わると手を引き拳を合わせる。これは俺たちのランク戦前の儀式みたいなものだ。それからマップへの転送が開始された。

## 職場見学7

ステージに転送された。ステージはランダムに選ばれた市街地A。マップとレーダーを開き、現在地と人数を確認する。表示された人数は12人。全員合わせて15人なので消えているのは三人。楓子さんと奈良坂、佐鳥だろう。俺の転送位置はステージの端の方だった

八幡 『めぐりさん全員の位置は?』

めぐり 『はるさんとういちやんは北側!わりと近くてもうすぐ合流できるよ!ふうちゃんを中心あたりだね!』

八幡 『了解です。俺は南側の敵を狩りながら北に向かいます。』

めぐり 『了解!』

それから楓子さんに通信をつなぐ

八幡 『これから北で合流しようと思ってるんですけど敵の数が多そうなんで俺のフォローをお願いします』

楓子 『了解!』

それからすばやくバイパーとメテオラを合成しトマホークを作り、レーダーで見えた一番近い人に向けて上空からの奇襲になるように弾道を設定しトマホークを飛ばした。

トマホークを着弾地点が見える位置に移動するとそこには片足を失いところどころトリオン漏れを起こしている木虎がいた。木虎の首を飛ばすために

八幡 「旋空弧月」

旋空を使い木虎の首を飛ばした。

はずだった。木虎に飛ばした旋空は那須と柿崎さんのフルガードによって防がれた。そして那須はバイパーを、柿崎さんはアステロイドを俺に打ち込んできた。

八幡 「チッ！」

俺は舌打ちをしながら飛びのき那須たちの正面に立った。その時北側でふた筋の光が上がった。

八幡 『めぐりさん、今落ちたのは？』

めぐり 『連合のくまちゃんと双葉ちゃんだよ』

八幡 『ありがとうございます』

俺は柿崎さんに話しかける

八幡 「向こうでは二人落ちたみたいですね」

柿崎 「そうみたいだな。けどここでお前を落とせればトントンドロ？」

八幡 「落とせたら…ですけどね」

それから攻撃が来る前にメテオラをばらまき視界を奪ってからバイパーを5×5×5計125発を展開し木虎に向かって放つ。機動力が死んでる上に視界がない木虎は防ぎきれずにベイルアウトした。視界が開けてくると、両攻撃（フルアタック）しようとしてる那須と突撃銃を構えている柿崎さんがいた。そのまま射撃戦に入る。那須と柿崎さんの攻撃を防ぎながら楓子さんに通信をつなぎ指示を出す。

八幡 『狙撃ポイントに着いたら連絡してください。二人で那須と柿崎さんを殺します』

楓子 『了解です。レーダーから二人消えていますので注意してください』

八幡 『了解です』

楓子さんから連絡が来るまで攻撃を防ぎ続ける。那須のバイパー

は同じバイパーで相殺し、柿崎さんの攻撃はシールドをはるかよけるかして防ぎ続ける。

楓子 『ハチさん狙撃ポイント着きました。』

八幡 『柿崎さんをお願いします。仕留めきれなくても俺が仕留めますんで』

楓子 『大丈夫ですよ。必ず仕留めますから』

八幡 『タイミングは楓子さんにお任せします』

楓子 『わかりました。3カウントでいきます。3, 2, 1!』

楓子さんの壁抜き(…)狙撃が柿崎さんに直撃する

柿崎 「なにっ!?!」

柿崎さんは驚いた声とともにバイルアウトした。すぐにバイパーを展開し那須を狙う。那須は分が悪いと思ったのかバイパーをシールドで防ぎながら移動をし始めた。追撃をしようとバイパーとメテオラを合成させ、トマホークを放とうとする。

楓子 『ハチさん!後ろです!』

楓子さんの声で後ろを振り返ると、弧月を持った照屋がすぐ近くまで来ていて、その後ろには巴が拳銃を構えていた。普段だったらグラスホッパーを使うが、今はトマホークがあるのでグラスホッパーを使うことができない。じゃあどうするか…

八幡 「バーストリンク」

こうした。加速状態に入り、実際は少しずつ動いているが周りが止まっているように見える。トマホークを半分は照屋にもう半分を巴を狙うようにして弾道を設定し、照屋に向かう方には射程をほぼなくし弾速と威力にトリオンを振り分け、左右から狙うように設定し、巴の方は巴の周りに当たるように設定する。

八幡 「バーストアウト」

ここまで設定したら加速状態を解除する。トマホークは俺が設定したように飛んでいき、照屋はトマホークに当たりバイルアウトした。巴の方も俺が考えていた通りにトマホークが周辺の建物を破壊し視界が悪くなっていた。すぐに弧月を出し

八幡 「旋空弧月」

旋空を使いベイルアウトさせる。巴がベイルアウトしてから巴のいた場所から最後のあがきとばかりにハウンドが飛んできたがバイパーで相殺する。那須が逃げて言った方向からベイルアウトの光が見える。

楓子 『那須さんは落としました』

八幡 『あとは北側の加古さん、嵐山さんとスナイパー二人ですね』  
ちようど北側から一筋の光が上がりすぐにもう一つ光が上がる。

めぐり 『今加古さんと嵐山さんが落ちてあとはスナイパー二人だよ！二人ともさつきまでの位置は分かっているから八幡君とふうちゃんは近い方に向かってね！遠い方は陽さんというちゃんがもう向かったから！』

八幡 『わかりました』

めぐりさんから位置情報が送られてくる。楓子さんと合流し位置情報で示されている場所に向かう。そこには予想通り誰もいなくなっていたのでスナイパーを探すためメテオラで周りの建物を破壊していく。離れて場所でも同じように建物が破壊されていく音が聞こえる。どうやら陽乃さんたちの方もいなくなったようで同じ作戦をとっていた。破壊を始めてからすぐに離れた場所でベイルアウトの光が二つ上がった。

めぐり 『自発的にベイルアウトしたみたいだね』

八幡 『ということは』

めぐり 『うん！私たちの勝利だね！』

\*\*\*

ボーダーへの職場見学が終わりバスで学校に戻った。これから防衛任務があったのでそのまま本部に残りたかったがカバンを学校に置きっぱなしだったことを思い出し、一度学校に戻った。カバンを回収し下駄箱に向かう。下駄箱のところには由比ヶ浜がいた。

由比ヶ浜 「あつ、ヒツキー！」

八幡 「ずっと前から言いたかったんだがそのヒツキーってのやめろ。不愉快だ」

由比ヶ浜 「え、なんで？ヒツキーはヒツキーじゃん！」

八幡 「はあ…何のようだ」

由比ヶ浜 「みんな優美子励ますためにカラオケ行こうってことになってヒツキーもどうかなくて…それよりなんでボーダーってこと黙ってたし！」

八幡 「うるさい。お前馬鹿なの？どうしてへこませた本人を連れて行こうと思たんだよ。それにボーダーの件はどうしてお前にボーダーだって言わなきゃいけないんだよ」

由比ヶ浜 「友達に隠し事すんなし！」

八幡 「は？友達？じゃあお前は葉山にスリーサイズ聞かれたら正直に答えるのかよ。それに誰と誰が友達なんだよ？」

由比ヶ浜 「あたしとヒツキーに決まってるじゃん！」

八幡 「俺とお前が友達？お前さっき友達に隠し事はしないうって言ったよな？もし仮に俺とお前が友達なら何でお前は一年前の事故の原因となった犬の飼い主だって言わないんだよ。友達に隠し事はしないんだろ？言ってることとやってることが矛盾してるぞ」

由比ヶ浜 「っ!?!ヒツキー知ってたんだ…」

八幡 「小町が教えてくれた。お前が俺に変なあだ名までつけて近づいてきたのは自分が原因で友達がいなくてか思って同情で近づいてきたんだろ？そんな気持ちで近づかれても不愉快なだけだ。それにお前のおかげで陽乃さんに出会えてボーダーに入って楓子さんやめぐりさん、謡やほかの奴らとも出会えた。学校ではボツチだがボーダーではたくさんの仲間がいる。だからもう無理して近づいてこなくていいぞ」

そう言っただけ俺は靴を履き替えボーダー本部に向かった。

## 職場見学 8

ボーダー本部への職場見学の次の週の月曜日、俺は少し寝坊して遅刻ギリギリで教室に滑り込んだ。俺が入った教室は空気が重くチャイムが鳴ったとはいえ先生も来ていないのに全員が席についていた。一瞬入る教室を間違えたのかと思ったが千種や川崎、我らが大天使戸塚がいるのでここは2-Fで間違いなかった。気にはなつたがこのまま突っ立っていてもそのうち先生が来てしまうのでこそそと自分の席に移動して座る。すると後ろから足音が聞こえ、俺の横で止まる。横を向くと怒ったような表情の葉山がいた。

葉山 「比企谷―」

葉山を遮るようにして先生が入ってきた。

先生 「葉山―。みんな座ってんだからお前も早く座れ―」

葉山 「…はい」

先生の言葉に従い葉山が自分の席に戻った。

先生 「SHRを始めるぞー。はい号令―」

担任が号令をかけるように声をかける。すると何思ったのか

「起立・踊りくるちゃえー！ス○ライクシ○ット！―」

「プっ！―」

クラスでこのネタを知っている奴（主に男子）が大爆笑していて、それを知らないやつ（主に女子）が冷めた目で見ている。ちなみに俺は必死に笑わないようにこらえていた。

先生 「誰がク○ナダのスト○イクシ○トを使えと言った！しかもあれは大号令だ」

「全軍、敵艦隊を駆逐せよ！―」

先生 「モ○ストネタはもういいわ！はあ。もういいわ、全員座れ。連絡していくぞー」

先生が連絡していくなか、前の席の千種が話しかけてきた。

霞 「比企谷お前、あいつになんかしたの？すげーさっきのアレが緩和したとはいえ空気重いんだけど」

八幡 「特にした覚えはないんだけどな」



霞 「そしたらあんな怒らんでしようよ」

八幡 「そうなんだが…」

霞 「ま、早く何とかしろよ。俺は静かなのは好きだが気まずいのは嫌いだからな。」

八幡 「俺に原因があるなら善処するよ」

それからSHRが終わり1限が始まった。

\*\*\*

4限が終わり昼休みに入る。いつも通り購買によってからベストプレイスに行こうと思つて席を立つと朝みたいに葉山に呼び止められる。

葉山 「比企谷、ちょっと来い」

八幡 「5分だ。手短に済ませろ」

葉山は何も言わずに教室を出た。俺は葉山についていく。葉山は階段を上り屋上に出る。

俺も屋上に出た。あと2分。

葉山 「比企谷、お前金曜日職場見学があつた日の放課後、結衣に何した！」

八幡 「は？なに言つてんのお前」

葉山 「とぼけるな！あの日結衣はお前を誘うつて言つて学校に残つた。俺たちは先に行つて待つていた。しばらくしてから結衣は一人で来た。目の周りを赤くして！お前が結衣に何かしたんだろ！」

八幡 「どこにその証拠がある？」

葉山 「犯人は大体そういうんだ！『証拠はどこにある』『大した想像力だ。君は小説家になつた方がいい』『犯人と同じ部屋になんていられるか！』」

…今つてシリアスな場面じゃないの？

八幡 「最後の被害者のセリフだろ。しかも死亡フラグ立ててる系の。証拠と言つただけで犯人扱いされるとか弁護士大変だな。なあ、

葉山あ」

葉山 「ッ！話を逸らすな！」

八幡 「逸らし始めたのどっちだよ。まあいい。確かにその日由

比ヶ浜に会ったし、カラオケにも誘われた。断ったけどな」

何か言おうとした葉山を手で制す。あと1分

八幡 「というか一つ聞いていいか？なんで由比ヶ浜を止めなかった？カラオケは縦ロールを励ますために行こうとしてたんだろ？そこに凹ました本人を連れて行ってどうするつもりだったんだ？」

葉山 「そ、それは…」

葉山はなかなか答えられない。時間だ。

八幡 「答えられないならいいわ。時間だしもう行く。」

葉山 「待てよ。君は結衣が誘いを断っただけで泣いたと持っているのか？」

八幡 「知らねーよ。カラオケに誘われて断った。それが事実だ」

葉山 「それくらいで泣くわけないだろ！」

八幡 「いい加減にしろよ。そんな長々話に付き合っていられるほど俺は暇じゃない。どうしても知りたければ本人に聞けよ」

校舎に入りドアを強く締め速足で購買に向かった

\*\*\*

その日の放課後。俺はすぐくイライラしていた。昼休みが終わって、午後の授業が始まってからずっと葉山からの視線を感じていた。それが気になり授業に集中することもできず、かといって寝ることもできなかった。ふとその視線が一つだけだったことに気付いた。他の葉山グループの連中は俺より前の席だが縦ロールは違ったはずだ。気になったのでさりげなく見てみると、何かを考えているような表情で黒板を見ていた。まあ理由はどうあれうざい視線を送ってこないならそれでよかったが視線が一つでもうざいことには変わりない。授業が終わるころには俺のイライラはピークに達していた。

八幡 「三バカいるよな？」

俺はこのイライラを三バカで発散することに決めた。

\*\*\*

八幡 「いたいた。ランク戦しようぜ。弾バカ、迅バカ」

ランク戦ブースにつくとそこにいたのは 弾バカことA級2位太刀川隊のシューター出水とA級5位草壁隊のアタッカー緑川がいた。

この二人にA級9位三輪隊の米屋の加えた三人がA級三バカと呼ばれている。

出水 「珍しいなハッチ。お前がランク戦に誘ってくるなんて」

八幡 「ああちよつとな。米屋はどうした？」

緑川 「よねやん先輩なら防衛任務だよハッチ先輩！そういうば学校にボーダーってことがばれたのほんとなの？」

八幡 「職場見学の時には」

出水 「俺も聞いたぜ！その時にお前ら比企谷隊と嵐山隊とかが連合組んで戦ったらしいな。連合には誰がいたんだ？」

八幡 「嵐山隊に加古隊、柿崎隊と奈良坂、那須、熊谷だ。時枝は解説役として参加はしてなかったな」

出水 「それで勝ったんだろ？やっぱお前らチートすぎだろ」

八幡 「それより早くランク戦やろうぜ」

緑川 「そうだね！今日はよねやん先輩いないし4割でいい？」

八幡 「ああ。」

いつも俺たちがランク戦するときには俺対三人でやっており、三人でやる時には5割以上取った方が取れなかった方に飲み物をおごることになっている。今は米屋がいないため俺は二人相手に6割以上勝利しないといけない。まあ今の俺に関係ないが

出水 「ハッチ何本やる？」

八幡 「200だ」

出水・緑川 「「え？」」

出水と緑川の首をつかみブースに投げる。それから俺もブースに入り、ランク戦を始めた。

八幡 「さあ、狩りの時間だ」

\*\*\*

200本勝負が終わり俺が173勝25敗2分けという結果を収めた。イライラを解消できポイントももらえ、マッ缶も2本もらえる。一石二鳥いや一石三鳥の素晴らしいランク戦だった。

出水 「ハッチ強すぎだろ」

八幡 「今日はいらいらしたことがあったからな。そのイライラを

込めたし」

緑川 「あ！」

突然緑川が声を上げた。

出水 「どうした？」

緑川 「俺これから防衛任務だった！ごめんハッチ先輩！マツ缶は今度渡すね！」

緑川が走っていないなくなった。俺も時計を見るといい時間だったので帰ることにした。

八幡 「出水、俺は帰るけどお前は？」

出水 「そうだな：俺も帰るよ」

二人で並んで歩いていると後ろから声をかけられる

謡 「ハチ兄！出水さん！」

八幡 「おう謡」

出水 「久しぶりだな謡ちゃん！」

謡 「久しぶりなのです出水さん。お二人はランク戦ですか？」

八幡 「もう帰るところだけだな」

謡 「私も帰ろうと思っていたので一緒にしてもいいですか？」

出水 「もちろん！そうだ！職場見学の時のランク戦について聞かせてくれよ！」

それからランク戦について話しつつ比企谷隊の作戦室で俺と謡のカバンを回収、次に太刀川隊の作戦室に向かった。その時に事件は起きた。

加古 「出水くん！比企谷君！謡ちゃん！」

八幡 「加古さんどうしたんですか？」

加古 「今からチャーハン作ろうとしていたから食べてくれる人を探していたの！」

加古さんの口からチャーハンという言葉が聞こえた瞬間、俺と出水の顔が引き攣る。出水とアイコンタクトで会話を始める。

出水 （ハッチやばいぞ。どうする？！）

八幡 （任せろ。俺に考えがある。）

出水 （頼んだ）

わずか一秒でアイコンタクトの会話を成功させる

八幡 「すいません加古さん。俺家で小町が待っていますし、小学生の謡をあんまり遅い時間に帰すのもアレなんで、俺と謡は遠慮させてください」

俺と謡のところを強調して言う

加古 「そうね。なら仕方ないわ。出水くん、いきましよう」

出水 「ひくきくがくやく！」

出水は血涙を流しながら加古さんに連れられて行った。俺は心の中で合掌して出水を見送った。

謡 「そんなに加古さんのチャーハンはあれなのですか？」

八幡 「ああ。ただ100回に一回奇跡の味が出るらしい。何でも天に昇る味だとか」

謡 「…それはすごいですね」

八幡 「もうちょい確率高ければ挑戦する人は増えそうだけどな」

それから謡を送りつつ家に帰った。

余談だがこの日、ボーダー本部の医務室からは3人のうめき声が聞こえ、1週間太刀川さん、出水、堤さんの姿を見たものはいなかった。

## 夏休み編

### 千葉村1

八幡 「沢村さん書類整理終わりました」

謡 「こつちも終わったのです」

夏休みに入り俺と謡は今、本部で今度ある入隊試験の書類整理の手伝いをしている。俺の隊は遠征を免除してもらって代わりに入隊試験などの忙しい時期に書類整理などの手伝いをする事になっている。

沢村 「お疲れ様。そういえば小町ちゃんも入隊するんだね。」

八幡 「ええ。俺としては入隊させたくないんですけどね」

沢村 「でたな、シスコン」

謡 「けどハチ兄が許可するとは思いませんでしたけど」

八幡 「小町が『これまでお兄ちゃんにばかり苦労させてきたけどこれからは小町も少しでも家計の助けになりたい』って。それにボーダー推薦で総武高に行きたいっていう本音も少しもれてましたけどね」

沢村 「あはは…けど総武高って進学校でしょ？ボーダー推薦で入ったとしても授業についていけないこともあるんじゃない？」

八幡 「そうならないように学校で毎週小テストがあるそうなのでそのテストの結果次第で例えば月曜はボーダーには来させないで家で勉強させるとかそんな感じにするつもりです。それにたまに楓子さんやめぐりさんに家庭教師をお願いしようかなって思ってます」

沢村 「それならあまり心配はないね。やりたいポジションとかはもうあるの？」

八幡 「いえ。いろいろ体験してみたら決めたいって言ってました。あ、もし小町が迅さんにセクハラさせたら容赦なく訴えるつもりなんでその時はお願いします」

沢村 「任せて！今日の仕事はもうないしもう上がっていいよ」

八幡 「わかりました。お先失礼します」

謡 「失礼します」

沢村 「あ！忘れてた。比企谷君これ。」

沢村さんに一枚の紙を渡される。

八幡 「なんですか？これ」

沢村 「小学生のキャンプのバイトなんだけど、ボランティアで募集かけたんだけど集まらなくて唐沢さんに相談したら少しくらいならバイト代を出せるっていうから、やってみない？あんまり関係ないけど謡ちゃんの学校だよ」

謡 「そうなのですか？」

沢村 「うん。対象が六年生みたいだから謡ちゃんは知らなかったみたいだね。それでどうする？」

八幡 「俺はいいですけど、謡はどうする？」

謡 「私は参加したいです」

沢村 「わかったわ。あと8人くらい人集めたいから誰かに声をかけてくれる？」

八幡 「わかりました。小町って連れて行っちゃだめですかね？」

沢村 「いいんじゃない？さすがにまだボーダー隊員じゃないからバイト代は出せないけど」

謡 「防衛任務と重なっていたらどうするんですか？」

沢村 「そこらへんはこっちで調整するわ。それと送り迎えもこっちで用意するわ。」

八幡 「何人か声をかけておきます。締め切りっていつまでですか？」

沢村 「なるべく早い方がいいから次に手伝いに来てくれる時までが決まってるって嬉しいかな」

八幡 「わかりました。失礼します」

俺と謡は部屋を出て、比企谷隊の作戦室を向かう

八幡 「謡、誰に声をかける？」

謡 「陽ねえは家の方がこの時期は忙しいって言ってたので難しいと思いますけど、楓ねえやめぐねえなら来てくれると思うのです」

八幡 「そうだな。残りのメンツは高2組にとりあえず声をかけて埋まらなかったらほかにも広げていく感じでいいか」

謡 「はいー！いいと思うのです」

それから比企谷隊のグループラインと高2組のグループラインに写真と説明、それと防衛任務は変わってもらえることを打ち込み謡を家まで送り俺も家に帰った。

\*\*\*

家に帰って小町に千葉村でのボランティアのことを話すと参加すると言ってくれた。それからラインの方を確認するとうちの隊からは全員返信は来ていた。楓子さんは参加、陽乃さんは謡が言っていた通り家の方が忙しいらしく不参加、めぐりさんも生徒会の方が忙しくなるらしく不参加となった。高2組からは何人か返信があった。

—高2組—

八幡：写真

八幡：小学生のキャンプの手伝いのバイトに参加したいやつはいるか？

八幡：防衛任務のシフトは調整してもらえるらしい

小南：玉狛の方で旅行があるからあたしと栞は無理ね

宇佐美：ごめんね

出水：シフト変更してもらえるなら俺は参加するぜ

米屋：俺も参加するぜ

綾辻：私は広報の仕事が忙しいから無理かな

出水：三輪や奈良坂はどうすんだ？

奈良坂：俺はパスだ

奈良坂：塾がある

米屋：おい弾バカ。秀次は来ないだろ

三輪：陽介どういう意味だ

米屋：目つき鋭いせいで小学生怖がるだろ

出水：大丈夫だろ。目が腐ってるハッチいるし

—八幡が出水を退席させました—

—三輪が米屋を退席させました—

小南：プっ！弾バカと槍バカww

熊谷：あんたたちなにしてんのよ



—奈良坂が米屋を招待しました—  
—奈良坂が出水を招待しました—

米屋：秀次てめー！

出水：ハッチもだコラ！

三輪：自業自得だ

八幡：俺たちは悪くない。お前らが悪い

八幡：ところで熊谷はどうすんだ？

熊谷：私は参加しようかな

那須：私も最近調子いいから参加するわ。

仁礼：あたしはめんどいからパスで

八幡：一回まとめるぞ

八幡：今参加するやつは

出水・米屋・熊谷・那須・三輪で合ってるよな？

出水：合ってると思うぞ

那須：比企谷君、私たちのほかに参加する人っているの？

八幡：いるぞ。謡と楓子さんとあと小町が参加する

八幡：で、まだ返信が来てないのは

三上と小佐野ぐらいか？

熊谷：そうね

小佐野：めんどいからパス

三上：私も家族旅行が入ってるから無理かな

八幡：わかった。

これで沢村さんに報告しておく

八幡：詳しいことはまた連絡する

それからラインを閉じ、夏休みの課題を終わらせるために勉強をし

始めた。

\*\*\*

八幡 「小町ー準備できたかー」

小町 「オツケーだよーお兄ちゃんー！」

八幡 「じゃあ行くぞー」

今日は八月の初め。小学生のキャンプの手伝いに行く日だ。これ

から謡と楓子さんと合流して集合場所に行くことになっている。

\*\*\*

謡と楓子さんと合流して集合場所のコンビニに着くとすでに那須と熊谷、出水が来ていた。

八幡 「早いなお前ら」

出水 「おうハッチ！あとは三輪と槍バカだけだな。」

八幡 「まあ三輪は米屋のせいで遅いだけだと思っただけだな」  
しばらくすると諏訪さんと沢村さんが車でやってきた。

諏訪 「おーい！比企谷！」

八幡 「どうも諏訪さん。今日は諏訪さんと沢村さんが送ってくれるんですか？」

沢村 「ええそうよ。全員そろってるかしら？」

八幡 「いえまだ三輪と米屋が」

諏訪 「米屋のせいだな」

八幡 「たぶんそうでしょうね」

沢村 「三輪君たちが来る前に先に荷物とか載せておきましょうか。車は普通に男子と女子で別れましょうか」

全員が荷物を載せ終わるとちやうどよく三輪と米屋が来た

八幡 「よう。遅れた原因は米屋か？」

三輪 「ああ。俺が迎えに言ったら案の定寝ていた。」

八幡 「三輪お疲れ」

諏訪 「三輪！米屋！早く荷物載せろ！お前らが載せたら出るぞ！」

それから二人が荷物を載せ千葉村を目指して二台の車が出発した。

\*\*\*

沢村 「それじゃあ比企谷君、楓子ちゃん。ボランティア側の人と協力して頑張っつてね。あと頼んだわよ」

八幡 「はい」

楓子 「帰るときもお気をつけて」

諏訪 「じゃあなお前ら！お前らも楽しめよ！」

沢村さんと諏訪さんは帰っていき、俺たちは雑談をしてボランティア

アの人たちが来るのを待った。しばらく待っていると一台の車が止まった。

八幡 「楓子さん」

楓子 「ええ。来たようですね」

ボランテイアの人たちだと思われる車が来たのだ。その車から人が降りてくる。その人たちを見て驚いた。

雪ノ下 「比企谷君……」

由比ヶ浜 「ヒツキー……」

平塚 「比企谷……」

戸塚 「八幡！」

車から降りてきたのは奉仕部の連中と戸塚だったのだから。

## 千葉村2

ボランティアの車だと思われる車から降りてきたのは雪ノ下、由比ヶ浜、平塚先生の奉仕部のメンツと戸塚だった。

楓子 「皆さんは小学生のキャンプのボランティアで？」

平塚 「あ、ああ」

楓子 「ほら、ハチさん」

八幡 「ボーダー側の代表者の比企谷です。これからよろしくお願  
いします」

いつの間にか沢村さんに俺はこのバイトの責任者にされていたのだ。

平塚 「比企谷が責任者だと」

楓子 「何か問題でも？」

平塚 「いや、よろしく頼む」

八幡 「ボランティアはそれで全員ですか？」

平塚 「いやまだいる。それより比企谷は何でそんなにかしまつ  
ているんだ？」

八幡 「最初だけです。まあ形式上でも一応はボーダーの代表  
者つてことになってますので」

平塚 「そうか」

先生に挨拶をするとさつきまで由比ヶ浜としゃべっていた雪ノ下  
がこちらにやって来た

雪ノ下 「あら誰かと思ったら偉そう谷君じゃない。後ろの人たち  
を脅してまで代表者になってそんなに嬉しいのかしら」

八幡 「やりたくてやってる訳じゃないが、まあ少なくとも奉仕部  
という一人しか部員がない部活のお山の大将よりは嬉しいぞ」

俺がそう言うのと雪ノ下がキツとにらんでくる。ほんと言い返せな  
くなるとにらむとか子供のすることだろ。それに比べて戸塚は

戸塚 「八幡！代表者つて大変そうだね！なんか僕に手伝えること  
があつたら言つてね！」

これだぞ！どっかの毒しか吐かない女とは大違いだな。いやあい

つと戸塚と比べる事さえも烏澁がましいな

八幡 「なんかあつたら頼んだぞ」

戸塚 「うん！」

癒される…やっぱり世界中に戸塚が行って笑えば世界から戦争がなくなつて世界が平和になるまでである。いやほんとまじで。けどなあ…戸塚を危険などに行かせる訳にもいかないしな…結論！戸塚はかわいい！」

戸塚 「もう八幡！かわいいとか言わないで！」

戸塚が俺の胸をぽかぽかなぐつてくる。なにこれちよーかわええ。

出水 「おいハッチ！そのかわいい娘たちは誰だよ！俺に紹介しろ！」

八幡 「黒髪が雪ノ下。ピンクが由比ヶ浜。かわいいのが戸塚彩加だ。ちなみに戸塚は男な」

出水 「ハッチ、小南じゃねえんだからさすがに騙されねーよ」

謡 「戸塚さんは男ですよ」

楓子 「ういういまで。戸塚さんに失礼ですよ」

戸塚 「あの、僕男です」

「「……」」

俺と謡と楓子さんを除くボーダー組全員が静かになった。そこにまた車がやってきて少し離れたところに止まった。さつき平塚先生が言つてたもう一つのボランティアグループなのだろう。その車から降りてきたのは…

葉山 「比企谷…！」

なんと葉山君とゆかいな仲間たち（縦ロール、つべーさん、メガネ女子）と養護教諭の鶴見先生でした！ちゃんちゃん！おわり！

謡・楓子 「まだ終わらせません!!」

……

八幡 「あの心読まないでください」

楓子 「顔に出てましたので」

謡 「ハチ兄は分かりやすいのです！」

平塚 「比企谷彼らもボランティアの参加者だ。向こうの代表にも

ボーダーの代表としてあいさつしておきたまえ。」

八幡 「え、いやなんですけど」

楓子 「ハチさんこれも仕事ですよ」

八幡 「…はい」

俺はあからさまな作り笑いを浮かべて葉山たちに近づく

八幡 「ドーマドーマ。お久しぶりデス、みなサン

楓子 「ハチさんその口調やめなさい」

少しふざけたら楓子さんに怒られてしまった。

八幡 「…このボランテニアでのボーダー側の代表の比企谷です。

こっちの代表は鶴見先生ってことでいいですか？」

鶴見 「？こっちの代表も何も総武高からのボランテニアってこと

で代表は平塚先生のはずだけど」

八幡 「平塚先生エ…とりあえず俺がボーダーの代表ってことなん

でなんかあったら俺か楓子さんまでお願いします」

鶴見 「わかったわ。これからお願いね、比企谷君、倉崎さん。向こ

うではもう自己紹介をしているみたいだし、私たちも行きましょう」

鶴見先生に言われて平塚先生たちの方を見ると確かに自己紹介を

しているぽかった。そっちに合流するとちようど自己紹介が終わっ

たところだった。

平塚 「すまないが小学校の先生との打ち合わせの時間までもうあ

まりないから、今来た人たちの自己紹介は歩きながらにしてくれ」

\*\*\*

八幡 「えー、今日から三日間皆さんのキャンプのお手伝いをする

ボーダー隊員の比企谷です。そして今皆さんから見て右にいるのが

ボーダーからのお手伝いで

左にるのが総武高校からのお手伝いです。三日間という短い間

ですがよろしくお願いします」

俺は、小学生の前でメガネをかけて挨拶をさせられていた。なぜこ

うなったかというところ…

くくく打ち合わせ中くくく

小学校教師 「あの、ボーダーの代表者さんに開会式の時に挨拶を

していただきたいのですが」

八幡 「楓子さんお願いします。俺の目じや小学生を怖がらせるだけなんで」

楓子 「その点は大丈夫ですよ。ういういアレを」

謡 「はい！」

謡が持つてきたカバンから取り出したのは前に川崎のバイトしていたバーに行つたときにかけていたメガネだった。

謡 「念のため持つてきていてよかつたのです！」

謡がメガネを差し出してくる。俺はそれを受け取らずに

八幡 「アレがアレでアレなんで無理です」

楓子 「ハチさん、やりなさい」

八幡 「::はい」

楓子スマイルには勝てなかつたぜ…

くくく

こんなことがあつて俺は挨拶をする羽目になつた。やはりボーダーは小学生たちのあこがれの的のようで俺がボーダーだというところ「すげー」など歓声が上がつた。

小学校教師 「ありがとうございました！それでは、オリエンテeringスタート！」

小学生たちがあらかじめ決められていたであろう班に分かれて次々といなくなつていった。俺たちは平塚先生と呼ばれて集まる。

平塚 「君たちは歩いてゴール地点に向かつてくれ。ゴール地点で昼食の用意をもらうから、くれぐれも小学生よりも遅い到着にはならないでくれよ」

鶴見 「私と平塚先生は車で先に行つて材料運んだり準備しておくから」

八幡 「それじゃあ俺たちは行きます」

## 千葉村3

ボランティアに参加しているボーダー女性陣と小町と戸塚の会話に耳を傾けながらみんなの後ろをついていく。しばらく歩いているとふいに服の後ろを引っ張られた。振り向くとそこには縦ロールがいた。

三浦 「比企谷、ちょっといい？」

なぜ俺に来说いと言っているのかわからないが縦ロールの真剣な表情が気になった俺は縦ロールの誘いに乗った。

八幡 「…ああ」

縦ロールは安心したように一回息を吐くと再び気を引き締めたような表情になり、近くにあつたわき道に入ってしまった。俺も縦ロールについてそのわき道に入る。縦ロールは少し進んだところで立ち止まりこちらに向き直る

三浦 「ごめんなさい！」

振り向いた縦ロールは俺に向かって謝ってきた。正直俺は驚いていた。プライドの高そうなこいつが俺に謝るなんて思ってもみなかった。

八幡 「それは何に対してだ？テニスの時か？それとも職場見学の時のか？」

三浦 「両方。テニスの時はあーしのわがままで迷惑かけたし、職場見学の時はあんたのことよく知りもしないのにバカにした。そのことについて謝りたかった。」

八幡 「テニスの時のことを俺に謝るのはお門違いだ。あれで迷惑をかけられたのは戸塚だ。」

三浦 「うん。あとで戸塚にも謝る。…あーしさ、姫菜と一緒にボーダーに入ろうと思うんだ」

八幡 「姫菜っていうとメガネ女子で合ってるか？」

三浦 「うん」

八幡 「なんでボーダーに入ろうと思ったんだ？」

三浦 「職場見学の時からずっと考えていたんだ。あんたあの時



あーしがあんたの仲間をまた侮辱するようなこと言ったら本気であーしの首を斬るつもりだったでしょ」

縦ロールが言ってるのは俺が首に弧月を当てていた時のことだろう

八幡 「ああ」

三浦 「やっぱり。あれからずっと考えてたんだ。あーしにもそんな信頼関係があんのかなって？」

八幡 「葉山グループがそうなんじゃねーのかよ」

三浦 「なんかさ薄っぺらいんだ。みんな隼人とは友達だけど他とはただの友達の友達でしかない。みたいな。それに隼人もあーしたちを心の底から信頼してるのかわからないんだ」

八幡 「人間そんなもんだろ。心の中身は自分しかわからない」

三浦 「けど、あんたたちは心の底から信頼している気がした。そんなあんたたちを見てそんな関係があーしもほしくなった。だからボーダーに入ろうと思ったの」

八幡 「ボーダーに入ってもそんな信頼できるやつが見つかるかわからないぞ」

三浦 「それでもずっとこのままにいるよりましだから」

八幡 「そうか…ひとつ言っておくが、職場見学の時にいた連中にはしっかりと謝っておけよ。」

「その必要はありませんよ」

突然聞こえてくる楓子さんの声。さっき俺の前を歩いていた人たち元道の道から顔をのぞかせていた。

楓子 「お話は聞かせてもらいました。三浦さん、私たちがあなたに言うのは一つだけです。」

「「ボーダーへようこそ！」「」

三浦 「えっ」

楓子 「私たちボーダーはあなたを歓迎しますよ。」

それから三浦は静かに泣き出した。まるで今までためていたものを流しだすかのように静かに涙をながしていた。泣いている女子を見続けるわけにもいかなないので俺は周りを見ていると、森の中に一人

の少女がいた。遠くからなのであいまいだが、その少女は白い服を着ていて、見た感じだとまだ十歳にもなっていないような見た目だった。その少女はしばらくその場でボーっとしたかと思うといきなり倒れた。

八幡 「ツー！」

俺は急いでその少女の下へ駆け寄る。

八幡 「おい！大丈夫か！」

俺は少女に呼びかけるが反応がない。何度か呼び掛けていると後ろから楓子さんの声が聞こえた。

楓子 「ハチさん。どうしたんですか？」

八幡 「この子が急に倒れて、呼びかけているんですけど返事がないです。」

楓子さんも駆け寄ってくる。

楓子 「気を失っているだけです。参加している小学生の妹さんでしょうか」

八幡 「たぶん。ここで寝かせておくわけにもいけませんし、とりあえず俺はこの子連れて先に行きます。後、任せていいですか？」

楓子 「わかりました。ういうい、ハチさんと一緒に先に行きなさい」

謡 「了解なのです！ハチ兄行きましょう」

そして俺は少女をおんぶし謡と集合地点を目指した。

\*\*\*

集合地点に着く。ここに来るまでに出水たちとしか会わなくてよかった。雪ノ下たちと遭遇してたらもつと時間がかかっていただろう。

平塚 「おい比企谷。背中にいる女の子は誘拐したのか？」

集合場所に着くなり平塚先生にこう言われた。

八幡 「平塚先生、そういうのいいんでこいつを寝かせられるところに案内してください」

平塚 「すまん

鶴見 「比企谷君こっち！」

鶴見先生が場所を探してくれていた。案内された場所に少女を寝かせる

鶴見 「改めて比企谷君、その女の子は？」

八幡 「俺たちが山を登ってる途中で見つけて急に倒れたんで連れてきました。たぶん参加している小学生の妹だと思っくんすけど」

平塚 「まあそうだろうな。事情は了解した。後で小学校の先生に聞いてもらうとしよう。さあ、せっかく早く来たんだ。比企谷には昼食の準備を手伝ってもらうぞ。四埜宮はこの子を見ていてくれ」

それから平塚先生たちの手伝いをしつつ楓子さんたちの到着を待った。

\*\*\*

手伝いをしていると一番先に出ていた出水たちが戻ってきた。

出水 「おいハッチ！さっきおんぶしてたあの子誰だ!！」

米屋 「まさか誘拐したのか？」

三輪 「比企谷、自首したほうが罪は軽くなるぞ」

八幡 「おいてめえら殺すぞ。ってか三輪まで馬鹿どもに乗るなよ」

三輪 「すまん。で、本当に誰なんだ？」

八幡 「わからん。森の中で倒れたから連れてきた。誰かあの子見たか？」

出水 「見てないな。」

米屋 「俺も見えてねーな」

八幡 「なんかわかったら頼む」

三輪 「わかった」

出水たちとしゃべっていると楓子さんたちが到着した。

楓子 「ハチさん！あの子は!！」

八幡 「今奥で謡が見ています。さっき見に行ったときはまだ起きてはいませんでした」

楓子 「そうですか。心配ですね」

俺と楓子さんが話していると平塚先生が来て次の指示をしてきた。

平塚 「全員そろったようだな。次の指示を出す。まずは全員で弁当の配膳をしてくれ。それが終わったら食後のデザートとして梨を用意している。それを切って用意した紙皿に盛り付けてくれ。それで終わりだ。終わり次第君たちも昼食にしてくれ。では作業に移ってくれ」

平塚先生の指示通り全員で分担して弁当の配膳を終わらせる。それから包丁が5本しかなかったので、梨を切る担当とようじを刺す担当分かれた。切る担当には俺と小町、楓子さん、雪ノ下、由比ヶ浜。ようじ担当にはそれ以外となった。しかし、由比ヶ浜は大丈夫なのか？クッキーを兵器にできるほどの腕を持っているが。加古さんと同じようにある一つの料理では無駄な才能を發揮するタイプなのか？自分から志願してきたところを見るとたぶんそうなのだろう。

そしてその予想はすぐにはかなく消え去った。

由比ヶ浜 「えー!?なんでこんなになっちゃうのー!?ママがやっているの見たのにー!!」

由比ヶ浜の手元にはグラマラスな、俗にボンツキュッボンと呼ばれるような形になった梨の姿があった。いやなんで見てるだけなんだよ。やれよ。見ただけで覚えられたら人生苦勞することなんてなんもねえよ

雪ノ下 「由比ヶ浜さん違うわ。包丁じゃなくて梨を動かすの」

由比ヶ浜 「こーう?」

雪ノ下 「そうじゃなくて…」

雪ノ下が由比ヶ浜に教えているがこのままだと由比ヶ浜の上達より梨の全滅の方が早い。

八幡 「雪ノ下、ストップだ。料理教室は今度にしろ。このままだと梨の全滅の方が早い。」

雪ノ下 「そうね」

それから俺はようじ担当に呼びかけた。

八幡 「誰か切る担当を由比ヶ浜と変わってくれ」

戸部 「あーじゃあおれやるべー」

名乗りあげたのは戸部(さつき三浦に教えてもらった。)だった。そ

してしぶしぶといった感じで包丁を渡す由比ヶ浜から包丁を受け取ると上手に皮をむき始めた。

八幡 「上手いな」

戸部 「だべー。たまに料理とかするから慣れてんだ。そういう比企谷君も上手だべ。」

戸部が俺の手元を見て言う。おれはずっとしやべりながら梨を切り続けていた。

八幡 「まあ俺も結構料理するからな。」

戸部 「おっ！じゃあ勝負しようべー！お互い残り一個だしこれを早く切った方が勝ちってことで！」

各自に梨のノルマが振り当てられており、俺も戸部（由比ヶ浜時からの引き継ぎ。もともと数は少ない）も残すところあと一個となっていた。

八幡 「いいぜ。じゃあスリーカウントで始める。3，2，1 イテっ！」

後ろを向くと楓子さんがいた。どうやら俺は楓子さんに殴られたようだ。

八幡 「楓子さん何するんすか。こっち包丁持ってるんですよ」

楓子 「なにするのはこっちのセリフです。勝負なんて速さ競って両方とも残念な結果になるのがお決まりじゃないですか。梨の余りはないんですから普通に切りなさい」

八幡 「だつてさ戸部」

戸部 「倉崎先輩の言うとおりでべき。機会があつたらそんなときしようぜ！料理勝負！」

八幡 「機会があつたらな」

まあそんな機会は来ないだろうな。さて、

八幡 「これで昼食準備は終わった感じですかね」

あたりをしてみると一足早く終わっていた米屋と出水が騒いでいてそれを呆れた目で見ている三輪と熊谷がいた

楓子 「そうですね。みなさん！お弁当ここに置いておきますので終わった人からここからとっていつてください！」

楓子さんの指示で終わった人から弁当を取っていく。最後に俺と楓子さん、謡の分の弁当と梨が残った。

八幡 「俺は謡のところに行つてあの少女の様子を見ながらメシにしようと思いますが楓子さんはどうします?」

楓子 「もちろんご一緒しますよ」

八幡 「じゃあ行きましょう」

俺は謡の分の弁当と梨を持って、少女が寝ている部屋へと向かった。

\*\*\*

楓子さんと謡といまだに眠っている少女の下で昼食を食べる。やはり俺たちが昼食を準備している間も目覚めなかったらしい。しばらく三人で少女を見守りながら昼食を食べ続けていたが一足早く食べ終わると襲つてきた眠気に逆らえなくなり身をゆだねた。

\*\*\*

「チに――チ兄!・ハチ兄!」

謡の声で目が覚めた俺の目に映ったのは、目を開け上体を起こした少女だった。

謡 「ハチ兄、今楓姉が先生を呼びに行きました。私たちはこの子から聞けることを聞いてみましょう。」

八幡 「ああそうだな」

それから俺は少女の目の前でしゃがみ、目線を合わせてから優しい声で少女に話しかけた。

八幡 「名前はなんて言うんでしゅか?」

囁んだ。おい謡。後ろで笑ってるんじゃない。ひとしきり笑うと、俺の隣に座った。

少女 「?」

そして少女。なぜ名前を聞かれて?マークを浮かべる。何?不思議ちゃんなの?

八幡 「俺は八幡っていうんだ。で、こいつが」

謡 「謡です。」

少女 「な…まえ…ユ…イ。ユイ!はいまん!うい!」

八幡 「はちまんとうたいな」

ユイ 「はいまん？うあい？」

間違いを正そうとしてみるが治らなそうなので好きに呼ばせることにした。

八幡 「好きなように呼んでいいぞ」

するとユイは今度は通じたようで少し考えてから

ユイ 「はいまんは…か…える？」

グサツと！俺の心にナイフを突き刺してくるユイ。なんでこの子は俺の心をえぐったの？とユイが首を横に振っている。

ユイ 「パパ。はいまんはパパ！ういはねえ！」

素早く謡とアイコンタクトを交わす。

八幡 「えーとパパだぞ？」

謡 「ねえですよ」

あの謡さん？ノリノリすぎじゃありません？あれかいつもみんなを姉って呼んでるからたまには自分も姉って呼ばれたいみたいな？

ユイ 「パパ！ねえ！」

ユイが俺と謡に飛びつき、何度も「パパ！ねえ！」と連呼する。そしてそこに入ってくる楓子さんと鶴見先生。気まづくなりました。

ちゃんちゃん

## 千葉村 4

楓子さんと鶴見先生にユイに抱き着かれている理由を説明し、やつと気まずい雰囲気はなくなった。それからユイについてわかったことを説明し鶴見先生がユイに質問をする。

鶴見 「ユイちゃん少し聞きたいんだけどユイちゃんはどうかやってここまで来たの？」

ユイ 「わかんない」

ユイが首を横に振る。

鶴見 「じゃあおうちの場所は？」

ユイ 「わかんない」

「またもユイは首を横に振る」

鶴見 「じゃあ本当のパパとママは？」

鶴見先生がそう聞くとユイは立っていた俺の足にしがみつき泣いてしまった。鶴見先生と目を合わせ「やめよう」という意味を込めて首を横に振ってから、ユイの頭をなでながらユイをなぐさめる

八幡 「ユイ大丈夫だ。パパはここにいなからな」

しばらくなでていると泣き止んで泣き疲れたのかまた眠り始めた。ユイをさつきまで寝かせていたところに寝かせると四人で相談を始める

鶴見 「比企谷君ごめんなさい。最後任せてしまつて」

八幡 「気にしないでください。それより…」

誰もなにも言わなくなり沈黙が流れる。そして楓子さんが口を開いた。

楓子 「…記憶喪失…ですよね」

鶴見 「たぶんそうなんでしょうね」

謡 「私たちになつてきたのも…」

八幡 「たぶんな。いつから記憶喪失なのかはわからないがひな鳥が初めて見たものを親だと思おうように目覚めて初めて見た俺たちを親や家族のように思ったんだらうな」

楓子 「これからどうすればいいのでしょうか」



鶴見 「ユイちゃんが起き次第、小学生を当たってみて本当の家族を探しましょう」

楓子 「それで見つからなかった場合は？」

鶴見 「近くの警察署に行ってみましょう。服の汚れからして森に入っただけに発見したみたいだから近くの警察署に行けば捜索願が出てると思うわ」

八幡 「そうですね」

鶴見 「これからの方針も決まったことだし私は小学生のオリエンテーションの手伝いに戻るわ。比企谷君にはユイちゃんが起きたら連れてきてもらいたいから残るとして倉崎さんと四埜宮さんはどうする？」

謡 「私は残ります」

楓子 「私は戻ります」

鶴見 「わかったわ。四埜宮さん、比企谷君と一緒にユイちゃんをお願いね」

鶴見先生と楓子さんが手伝いに戻り、謡とユイが起きるのを待った。

\*\*\*

ユイは30分ほどで起き、ユイを連れて謡とともに小学生にユイの身元について聞き込みをしているが成果はなかった。

そして今はカレーを作るための準備をしている。キャンプといえどカレーらしい。今平塚先生が火のつけ方を実演して見せてくれている。炭を積み上げその下に丸めた新聞紙と着火剤に火をつける。しばらくうちわで火をあおり、火が少し大きくなったらサラダ油をぶっかけた。一気に燃え上がる火。上がる悲鳴。火に照らされ妖しく笑う平塚先生。まあそれは嘘で、満足げに笑ってました。

平塚 「ざっとこんなもんだ」

八幡 「先生慣れているのは分かったんでもうちよつと小さい子に気を使ってください。ほら」

俺の足にしがみついているユイを見せる。一気に大きくなる火を見てユイが泣きそうになって俺の足にしがみついたつきり離れなく

なつてしまった。

平塚 「あつ…ひ、比企谷どうすれば…」

平塚先生がおろおろします。結婚していない先生にはどうすればいいのかわからないようだ

平塚 「おい比企谷、何か変なこと考えなかったか？」

平塚先生がぎろりと俺をにらむ。それを見てユイが完全に泣き出した。

八幡 「平塚先生、なにやってんっすか。俺が端の方で泣き止ませますんで平塚先生は指示だしの方をお願いしますよ」

ユイを炊事場の端に連れて行き泣き止ませつつ炊事場の方を見ると男子が火をつけつつ女子が食材を取りに行っていた。これはあれかな？先生のトラウマでも混じってんのかな？先生が火をつけていた時に他の男女がイチャイチャしてたとか：男子の方を見ると葉山と出水と米屋が火をうちわで煽っていた。一番大変な作業お疲れ様です。女子の方は…と

八幡 「どうしたさぼりか？雪ノ下」

雪ノ下 「貴方に言われたくはないわね。それに…」

雪ノ下がユイを一瞥して

雪ノ下 「とうとう少女に手を出して。両手を括って待っていないさ。今すぐに警察を呼んであげるから。ああ、明日警察に行くのだったわね。せいぜい最後の牢屋の外の夜、楽しみなさい」

八幡 「子供になつかれただけで終身刑とかww自分が人に好かれなから嫉妬ですか？ww」

雪ノ下 「そんなわけないじゃない。目だけでなく心も腐っているのかしら」

八幡 「ああ！すいません。嫉妬にしか聞こえなかったもので」

雪ノ下と言いつつ合っているとユイが俺と雪ノ下の間立つ。

ユイ 「パパ！けんかしちやめー！なの！お姉ちゃんもめーなの！」

八幡 「ああそうだよな。けんかはだめだよな。雪ノ下」

雪ノ下 「そうね。…それにしてもあなたが小さい子の扱いが上手

なことに驚いたわ。」

八幡 「これくらい普通だろ。むしろ、表裏がない分だけ大人よりもマシだろ」

雪ノ下 「そういうものかしらね」

八幡 「そんなもんだろ」

それからユイの相手をしつつぼんやりと炊事場の方を見てみると、ふいに雪ノ下が溜息を吐いた。

八幡 「どうした？」

雪ノ下に問いかけつつ雪ノ下の目線の先を見ると葉山が一人の少女に近づいていた。雪ノ下が溜息を吐いている理由が分かった。そりゃ、悪手じゃろ葉山（ありんこ）。あの少女はポツチだったのだろう。ポツチに話しかけるなら秘密裏に動かなければならない。そんなこともわからないのか最近の若者は…

雪ノ下 「彼女…鶴見留美さんというのだけど、彼はさつきも鶴見さんに話しかけていたわ」

雪ノ下に適当に相槌を返しながら葉山と少女——鶴見留美の会話を聞く。

葉山 「カレー好き？」

好意的に答えれば、周りから調子乗ってると思われ、すげなく答えれば何様？調子乗ってると思われる。この場合だと戦略的撤退が最善策だ。

鶴見 「…別にカレーに興味ないし」

鶴見もそれが分かっているようで興味ないと言い葉山から離れたこつちに向かって歩いてくる。葉山はさらに声をかけようとしたが他の小学生に囲まれて声をかけることができなかつた。葉山は切り替えたように小学生たちに隠し味で入れたいものなどを聞いていく。チョコレートやコーヒ―、砂糖など小学生らしいアイデアを披露していく中で、その小学生に混じって由比ヶ浜が「桃！」と言っていた。ただのバカだろ」

留美 「ほんとバカばっか…」

八幡 「世の中大概がそんな奴ばっかだ。よかつたな早く気づけ

て。ちよ、ユイ、くすぐつたい」

ユイが俺の腹を叩いたりなでたりしてくる。鍛えてるので痛くはないがスゲーくすぐつたい。

雪ノ下 「貴方もその大概でしょ」

八幡 「安心しろ。俺はその中でも一人になれる。：ジャンケンポン。あっち向いてホイ！ジャンケンポン。あっち向いてホイ！」

俺の体に飽きたユイに誘われてあっち向いてホイをし始める。俺の体に飽きるって表現なんか卑猥だな…

雪ノ下 「そんなに誇つて言うほどのことではないでしょうに。さつきからあなたたちは何をしてるのかしら」

八幡 「あっち向いてホイ！みりゃわかんذار。あっち向いてホイだ」

雪ノ下 「？あっち向いてホイ？何かしらそれは」

八幡 「まじか。さすがいいところのお嬢様：ジャンケンして勝った方が上下左右のどれかに指をさし、負けた方はいずれかの方向に顔を向ける。それで指の向きと顔の向きが同じなら指をさした方の勝ちっていうシンプルなお遊びだ。ユイ、雪ノ下と遊んで来い」

ユイがとてとと雪ノ下の方に走っていき、あっち向いてホイをする。雪ノ下は戸惑いながらもユイとあっち向いてホイをする。すると鶴見が俺の方へと近づいてきた。

留美 「名前」

八幡 「名前がどうした？」

留美 「今ので普通伝わるでしょ。名前を教えて」

八幡 「人に名前を尋ねるときはまず自分から名乗れって教わんなかったか？」

留美 「鶴見留美」

八幡 「比企谷八幡だ。で、黒髪の：両方とも黒だったな。高校生的の方が雪ノ下。小さい方がユイだ。」

ユイが俺に呼ばれたと思ったのかこっちに走ってきて俺の足に抱き着く。抱き着いてきたユイの頭をなでているときさつきまで葉山たちのところにいる由比ヶ浜がこっちに来た。由比ヶ浜は俺を見て気

まずそのような表情を作り鶴見に名前を言った。

由比ヶ浜 「えつと留美ちゃんでもいいんだよね？あたしは由比ヶ浜結衣。よろしくね」

鶴見は足元に目線をやったまま由比ヶ浜を見ようともしない。そしてそのまま途切れ途切れに口を開く。

留美 「そのロリコン」

八幡 「おい誰がロリコンだ。」

あのやろう、ロリコンって言うときに俺の方を見やがった。俺はユイがかわいいから愛でているだけだ！ロリコンじゃ…ないよね？

雪ノ下 「貴方しかないじゃない。鶴見さんこんな男なんかにかまわずに続けて。」

留美 「そのロリコンと雪ノ下さんは違う気がする。あの辺の人たちと」

鶴見の目線の先には葉山たちがいた。まあそうだな。リア充のあいつとボツチの俺たち。そりゃあ違うわ。

留美 「私も違うの。あの辺と」

ボツチという意味だったら確かに違うな

留美 「みんなガキなんだもん。だったら一人でもいいかなって」  
由比ヶ浜 「でも一人って寂しくない？」

八幡 「ユイ、謡の、ねえのところに行つてこい」

俺は小声でユイに言った。

ユイ 「やだ！ユイも聞く！」

八幡 「だめだ！ねえのところに行け！」

俺が怒ると、とぼとぼと謡たちがいる方へ歩いて行つた。

雪ノ下 「いいの？ユイさんに怒鳴ったりして」

八幡 「まだユイが知るにはきつい話になるかもしれないからな。悪い。続けてくれ」

話のじやまにならないように小声で話していたが、いつの間にか話を中断させていたようだった。

留美 「中学上がればよそから来た人と仲良くなればいいだけだし。」

鶴見は夢を見ている。このままではほぼ確実に叶わない絵空事に期待している。

雪ノ下 「残念ながらそんなことはあり得ないわ。あなたの進む中学にはあなたの学校からも進学してくるのでしょうか？ だったら中学に進んでも同じことが起こるわ。今度はよそから来た人も一緒になってね」

留美 「やっぱりそうなんだ…ほんとバカなことした…」

鶴見はそのつぶやきと悲しげな表情とともに自分の班の方へ戻っていった。

## 千葉村5

ユイが俺特製のカレーを食べて笑顔になる。なぜ俺特製カレーなのかというとはーはい海藻入りまーす。…なんでや！何でカレーに海藻入れるんや！かいそうの字がちやうやろ！（もやつとボール風）。じゃあほんとに回想入りまーす

八幡 「ユイさつきはごめんな」

ユイ 「…ねえ！」

ユイがこつちを向いてくれない。そして何も言わずに謡のところに行ってしまった。俺は膝から崩れ落ちた。

戸塚 「八幡!？」

戸部 「比企谷君!？」

八幡 「戸塚あ戸部えユイに嫌われた…死にたい」

戸塚 「ちよ八幡！」

戸部 「ヒキタニ君！しつかりするべ！」

八幡 「戸塚…俺が死んだらユイを…ユイを頼んだ。」

天使とパトラッシュの姿が見える。パトラッシュなんだかもう眠たいよ

戸塚 「戸部君！娘 けんか 仲直りでググって！はやく！」

戸部 「お、おう！えーとなになにに『娘とけんかし仲直りしたいあなたに！その方法を教えましょう！その方法とは…ずばり！娘が許してくれるまで待つ！です！無理に仲直りしようとしてうざがられたりしていませんか？待っていれば娘さんもきつとあなたの考えを分かってくれます！それまで待ちましょう！』だって」

戸塚 「八幡？はちまーん！」

戸部 「ヒキタニ君！君の勇姿は忘れないよ！」

ユイ 「パパ！パパ！」

八幡 「ユイこん…なパパ…で…ごめん…な」

ユイ 「パパ！ごめんなさい！ごめんなさい！」

八幡 「いい…か…らもっ…と顔を…見せておくれ」

ユイ 「パパ！パパー！」

こうしてユイ用のカレーを作ることユイと仲直りを果たしました。

熊谷 「なにこの茶番」

\*\*\*

ユイが俺のカレーを食べて笑顔になる。それを見て俺も笑顔になる。

熊谷 「比企谷キモイ」

那須 「くまちゃん！そんな本人に言わなくても」

楓子 「玲さん止め刺してますよ」

ユイ 「？パパ？」

ユイが俺を心配して声をかけてくれた。

八幡 「カレーがおいしすぎて目から汗が出ただけだ」

この日のカレーはすごいしょっぱかったです

謡 「ほらユイお口閉じて」

ユイ 「んー」

謡がユイの口の周りについているカレーを拭う。

小町 「ういちゃんもすっかりお姉ちゃんだね」

八幡 「謡も妹ができてうれしいんだろ」

俺たちがそんな会話をしていると

由比ヶ浜 「…どうすればいいんだろ」

由比ヶ浜のそんなつぶやきが聞こえた。

平塚 「どうしたのかね」

由比ヶ浜 「ちよつと孤立してる子がいるんです」

おい、孤立してることを悪いみたいに言うな。問題は何によって孤立しているかだ。

平塚 「ふむ君たちはどうしたい？」

現状俺たちにできるなんて何もないだろ。下手に手を出せばハブリから明確ないじめに変わる可能性だってあるんだ。それが分かっているからか全員何も言わない。ただ一人マイペースなやつを除いては。



三輪 「そいつがどうなろうと俺には関係ないので先に失礼します。」

八幡 「ん、了解。風呂もう入って大丈夫なはずだから先に入っているいいぞ」

米屋 「あ、時間あったら布団敷いといて」

出水 「よろしく」

三輪 「自分で敷け。じゃあな」

ボーダー組は三輪がこういうやつだとわかっているので平然としている。しかし総武高の奴らは啞然とし、いち早く再起動できた葉山が突つかかった。

葉山 「ちよお、まってんか！んんっ！ちよつと待っててくれないか。」

ん？今なんか変なの混じんなかったか

葉山 「君は本当にそう思っているのか」

八幡 「おいちよつと待て。さつき変なの混じんなかったか？もやつとボールみたいなやつが混じんなかったか？」

葉山 「…（作者が）魔が差したんだ。忘れてくれ」

八幡 「お、おう…：そうか…」

葉山 「で、三輪君。君はほんとにそう思っているのか」

三輪 「ああ」

三輪は軽く答えると歩いて行ってしまった。葉山は三輪の背中をしばらくにらむと口を開いた。

葉山 「やつぱりこのままにはしておけない。俺は可能な限り何とかしたいです」

なんとかしたいと言いつつも可能な限りとつけることで何もできなかった時の逃げ道を作る。いい考え方じゃあないか

雪ノ下 「貴方には無理よ。そうだったでしょ」

雪ノ下はそう言い冷たい目で葉山を見る。葉山は苦しい表情な浮かべる

葉山 「そうだったかもな。けど今は違う。」

雪ノ下 「どうかしらね」

二人の過去に何があったかは知らないし、知ろうとも思わない。ただ、それを引っ張ってきてまで気まずい雰囲気は作るなよ

平塚 「やれやれ：雪ノ下君はどうしたい？」

雪ノ下 「一つ確認したいのですが、これは奉仕部の合宿も兼ねていると仰っていました。彼女を助けることは合宿の内容と考えるとよろしいでしょうか」

平塚 「もちろんだ」

雪ノ下 「なら私は全力をもって彼女を助けたいと思います」

平塚 「そうか。では私はもう寝る。あとは任せたぞ」

は？この教師は何を言ってるんだ？この人は責任者だろうが。責任者が真っ先にいなくなってしまう

八幡 「平塚先生どこに行こうとしてるんですか。この会議で可決された案を実行し不具合が生じた場合の責任を取るのはあなたなんですよ。その場にいなかったから責任はないなんてことはないですからね。」

もしこれでも寝るといっているのであればあの時の動画のネットにばらまくことも考えておこう。しかしこの考えは杞憂だったよう

平塚 「悪かった。ここには留まる。しかしよっぽどのことでなければ私は口は出ささんぞ」

八幡 「それで大丈夫です」

そして会議が始まった。

\*\*\*

会議が始まり一番最初に手をあげ発言したのは海老名さんだ。

海老名 「趣味に生きればいいんだよ。同じ趣味の友達見つけられ、居場所なんてすぐに見つかると思うし。学校だけがすべてじゃないしね」

三浦から聞いた情報に腐女子とあっただけにどんな意見なのか警戒していたが想定外にいい案だった。特に学校がすべてじゃないと言ったところに共感が持てるな一年の時の俺なんて特にそうだし

海老名 「私はBLで友達ができました！ホモが嫌いな女子はいません！だから雪ノ下さんも倉崎先輩も那須さんも熊谷さんも」

三浦 「姫菜！飲み物取ってくるよ！」

海老名 「ああ！まだ布教の途中なのに！」

三浦が海老名さんを引きずって行った。ナイス三浦

それから意見は出るものの解決できるかと言われれば微妙なものばかり：

葉山 「やっぱりみんなが仲良くできる方法を考えないと根本的な解決にはならないか…」

葉山のつぶやきが聞こえ、思わず鼻で笑ってしまった。葉山が俺をにらんでくる。

雪ノ下 「そんなことは無理よ。絶対に不可能だわ。」

三浦 「あんさー雪ノ下さんさつきから何なの？」

雪ノ下 「なにがかしら？」

三浦 「隼人の考えはさつき雪ノ下さんが言った通り無理だとは思うけど、さつきから他人の意見否定してばっかで雪ノ下さんも考えはどうなの？否定するときは代わりに自分の意見を言えって知らないの？」

八幡 「おー！正論正論ちよー正論」

俺は感心しながら手を叩く。確かに雪ノ下は否定してばっかでこの会議では自分の意見を口にしていない

雪ノ下 「私だったら鶴見さんも含めてあの集団を説教するわ」

楓子 「その心は？」

雪ノ下 「簡単です。私が説教すればこんな愚かなことはもうやめるからです」

なんだその根拠もない超理論は

八幡 「論外だろそんなの。葉山の案以上に論外だ」

雪ノ下 「論外とはどういう意味かしら」

八幡 「そのまんまの意味だ。平塚先生もし葉山や雪ノ下の案を実行するとどうなりますか？」

平塚 「そ、それは…」

楓子 「答えづらいなら私が言います。葉山さんの案を実行すれば鶴見さんは高校生の陰に隠れた卑怯者というレッテルを張られてい

じめに発展するかもしれません。雪ノ下さんの案は論ずるかちさえも感じられません」

葉山 「なっ!?!」

雪ノ下 「そんなことはあり得ません。私が一度説教すればこんな愚かなことはやめます。ソースは私。あの時は私が説教したら全員がやめました。」

熊谷 「あなたの時はそうだったかもしれないけど今回もそうなるとは限らないでしょ!そんなこともわかんない!?!」

雪ノ下 「そんなの言い訳だわ。――」

それから雪ノ下と熊谷・那須の口論が始まった。しかし、それもすぐに収まった。今まで何も言っていなかった謡が声を荒らげたからだ

謡 「いい加減にしてください!雪ノ下さんそんなので本当に解決できると思うのなら帰ってください!不愉快なのです!」

謡はそう言って半分眠りかけのユイの連れて席を立った。きつと謡が年齢が一番近いこともあって鶴見の気持ちがるのだろうな。

それから楓子さんが手を叩き注目を集める

楓子 「平塚先生今日はここまでにしましょう。いいですよね?」

平塚 「ああ。今日はこれが解散とする。明日は朝食後キャンプファイヤーの準備をしましょうので遅れないように。では解散!」

それから男子と女子に分かれそれぞれのロッヂに戻った

## 千葉村 6

会議が終わってから風呂に入りUNOやトランプで一通り遊んでから俺たちは布団に入った。女子はボーダー組と総武高組で別れているらしいが男子はボーダー組も総武高組もまとめて一部屋だ。そして俺の隣には戸塚が……寝れるわけねえだろうが！寝顔やばいし、時々寝言で俺の名前呼んでくるんだぞ！まあそんなわけで夜の散歩にしゃれ込んでいます。適当にふらつと歩きたどり着いた開けたところにあつた丸太に座って満天の星空を見上げる。千葉では見ることのできない星空に俺が感動しているとパキツという枝の折れたような音が響いた。…熊？トリガーって持ってきてたっけ？そもそもトリガーって熊に有効なのか？ああ、ユイを残して死にたくないなあ

楓子 「ハチさん？」

どうやら枝を折つたのは熊ではなく楓子さんだったようだ

八幡 「こんばんは、楓子さん」

楓子 「ええ、こんばんはハチさん。眠れなくてここに？」

八幡 「そうです。楓子さんもですか？」

楓子 「はい。隣、座っても？」

八幡 「もちろん」

俺は少し横に移動し楓子さんが座れるスペースを作り、そこに楓子さんが座る。しばらく二人で星空を眺めていたが楓子さんが口を開いた。

楓子 「ユイちゃん、ういいうにくつついて寝ていましたよ。写真ありますけど見ます？」

八幡 「見たいです」

楓子さんがスマホで撮った写真を見せてくれた。謡とユイがくつついて寝ている。まるで

八幡 「まるで姉妹みたいですね」

楓子 「みたいじゃなくて姉妹ですよ。ユイちゃんの家族が見つかるまでですけどね。パパさん？」

八幡 「やめてください。楓子さんに言われるとすごい恥ずかしいです。」

楓子 「ハチさんは明日大丈夫ですか？ユイちゃんと別れることになりそうです」

八幡 「ユイにとってそれが一番良い事だと分かってますから覚悟はしています」

覚悟というのは少し大げさかもしれないが俺にとってはそんな感じなのだ。

楓子 「そうですか…そろそろ戻りましょうか明日もいろいろありますね」

八幡 「そうですね」

俺と楓子さんはまずは女子のロッジを目指す。もうすぐにロッジというところで

楓子 「明日の朝走るのなら一緒に走りませんか？」

八幡 「了解です。時間はどうします？」

楓子 「汗の始末とかの時間も考えて30分前にやめるとして…5時半でどうでしょう」

八幡 「わかりました。場所は…俺がそっち行きましょうか？」

楓子 「お願いします。じゃあまた明日の5時半に。おやすみなさい」

八幡 「おやすみなさい楓子さん」

それから自分のロッジに戻り布団に入った。散歩をしたおかげか割とすぐに眠ることができた

\*\*\*

まだ少し薄暗い5時半少し前。ジャージに着替えた俺は女子のロッジの前まで来ていた。別に女子の寝顔とか見に来たわけじゃないよ。まあもしそんなことしようものなら楓子さんに殺されるけどな。ランニングの約束をしていた楓子さんをストレッチをしながら待つ。ちようど5時半になると楓子さんが出てきた。

八幡 「おはようございます。楓子さん」

楓子 「おはようございます、ハチさん。それではいきましようか」

それから二人で走り始めた。しばらく走っていると前に人影が見えた。

楓子 「ハチさんあの人が」

八幡 「たぶん戸塚ですね。おーい戸塚ー！」

俺が前を走っていた戸塚に声をかける。

戸塚 「あ、おはよ八幡！おはようございます倉崎先輩！」

楓子 「おはようございます戸塚さん」

八幡 「おはよう戸塚。戸塚もランニングか？」

戸塚 「うん。僕もあれから朝はランニングするようになってるんだ。

八幡は倉崎先輩と二人で走ってるの？」

八幡 「ああそうだぞ」

戸塚 「もしよかったら僕も一緒に走っていい？」

八幡 「もちろんいいぞ。いいですよね楓子さん」

楓子 「ええ。それではいきましょう」

それから三人でまた走り始めた。それからおよそ30分。

楓子 「そろそろ終わりにしましょうか」

八幡 「戸塚大丈夫か？」

戸塚 「ハアハア…うん大丈夫ハア」

途中から参加した戸塚の息はすごいきれっていた。

戸塚 「二人ともすごいね。全然息がきれなくて」

しばらく歩いて乱れていた呼吸を整えた戸塚。

八幡 「もう長いこと走っているからな」

楓子 「私はここで失礼します」

いつの間にか女子のロッジの前に着いていた。

楓子 「二人とも汗の始末はしっかりしてくださいね。お疲れ様」

戸塚 「お疲れさまでした！」

八幡 「お疲れさまでした。戸塚行こうぜ」

楓子さんに見送られ俺たちは女子のロッジを後にした。

\*\*\*

朝食を食べ終え、キャンプファイヤーの準備も終わりとうとうユイを警察署に連れて行く時間になった。

鶴見 「四埜宮さんは助手席に、比企谷君とユイちゃんは後部座席に。比企谷君、チャイルドシートはないからユイちゃんを頼んだわよ」

八幡 「もちろんです。いざとなったらトリガー使ってもユイにけがはさせません」

鶴見 「頼もしいわね。それじゃあ行きましようか」

俺たちは一番近い警察署に向かった

\*\*\*

いきなりだが結論を言おう！ユイをうちで預かることになりました！拍手！流れ図で説明すると

警察署に着く

↓事情を説明し搜索願の確認をする

↓搜索願で出ていない

↓ひとまず施設に預けることに

↓ユイが泣く

↓対応してくれた刑事さんが提案

↓ユイを預かることに！

こんな感じだ。刑事さんに電話番号を教え、もし俺に直接つながらなかった時のために俺が最も長時間いるであろうボーダーとその次に長い時間居るであろう総武高の番号も教え、俺たちは警察署を後にした。

今はその車の中。ユイと謡は寝ているようでこの車で起きているのは運転手である鶴見先生と俺だけだ。

鶴見 「よかったわね。比企谷君。ユイちゃんと離れ離れにならないよ」

八幡 「よかったですかね？やっぱり施設に預けた方がユイにとつて良かったんじゃない」

鶴見 「そんなことないと思うわ。本当の親が見つからなかった今無理やり引き離して不安にさせるよりも安心できる比企谷君たちの近くにいる方が私はいいと思うけどな」

八幡 「そうですかね？」



鶴見 「そうよ。さあこの話はもう終わり！次はそうだな…比企谷君はどうすれば留美ちゃんを助けられると思う？」

八幡 「やっぱり自分の娘は心配ですか？」

鶴見 「そうそう！あの子自分のことはなんにも…え！気づいてたの!?!」

いやー半信半疑だったからカマかけといてよかった。

八幡 「ことあるごとに心配そうな目で見てたのに気づいてたんで。名字も同じですし」

鶴見 「そう…さつきも言ったけどあの子なんにも自分のことは話してくれなくてね。それでこの林間学校のこと聞いたらすごい嫌そうな顔をしたから平塚先生に無理言っ一緒連れてきてもらったの。それで…」

八幡 「この状況を知った、と」

鶴見 「比企谷君なんとかできないかな？」

八幡 「…一つ案はあります。けど俺の案はあくまできつかけを作るだけ。あとは努力次第です。それでもいいなら聞きますか？」

鶴見 「うん。聞かせて」

八幡 「それは——」

\*\*\*

昨日ユイを寝かせていた部屋で鶴見親子を待つ。さつき鶴見先生に話した案を鶴見に伝えるために。

鶴見 「比企谷君連れてきたわ」

八幡 「ありがとうございます」

留美 「八幡何の用？お母さんにこんなところまで連れてこさせて先生はもう俺に親子だとばれてることを伝えていたみたいだ」

八幡 「鶴見」

留美 「留美。お母さんと同じだから留美でいいよ八幡」

八幡 「んじゃアルミルミ」

留美 「八幡キモイ」

八幡 「…留美、みじめなのは嫌か？」

留美 「…うん」

八幡 「俺には現状を変えられるかもしれない案がある。この案は鶴見先生にも話してあつてお前が望むならそれでいいと言ってる。聞きたいか？」

留美 「もったいぶらずに教えて八幡」

八幡 「留美、ボーダーに入らないか？」

そう俺が考えたのは留美をボーダーに入れることだ。海老名さんが言っていた別のコミュニティを作るという案を参考にさせてもらった

留美 「私がボーダー…」

鶴見 「比企谷君が言ったように私は留美が入りたいというなら私は止めないよ。」

留美 「八幡変えられるかもしれないってどういうこと？」

八幡 「俺にできるのはきっかけを作るだけ。ボーダーに入って新しい人間関係を築けるかは留美の努力次第ってことだ」

留美 「…お母さん、私ボーダーに入りたい！」

鶴見 「わかったわ。比企谷君次の試験っていつ？」

八幡 「ちようど今月に入隊試験があります。申込期限がもうすぐだと思っうんで林間学校（これ）が終わったらすぐに申し込みをお願いします」

『プルル プルル』

八幡 「少し失礼します」

鶴見親子に確認を取り電話に出る。電話をかけてきたのは那須だ

八幡 「どうした那須」

那須 『比企谷君！葉山君と雪ノ下さんが昨日言ってたことやろうとしてるの！すぐに戻ってきて！』

八幡 「楓子さんたちは?!」

那須 『楓子さんは謡ちゃん和ユイちゃんどこかに行ってるの！』

楓子さんがいたら何かかしてくれと思ったが…

八幡 「わかったすぐに行く！俺が行くまで葉山たちを止めといってくれ！」

那須 『うん!』

鶴見 「比企谷君どうしたの?」

電話が切れると同時に鶴見先生が聞いてきた

八幡 「葉山と雪ノ下が昨日の案を実行しようとしています。」

鶴見 「何で!倉崎さんはそこにいないの!?!」

八幡 「いないみたいです。急いで向かいましょう」

現場に向かいに向かいながら留美に説明する。説明が進むにつれて留美の顔は真つ青になっていた。最後に俺はこう締めくくった。

八幡 「自分を変える一歩目だ。勇気をもって踏み出せよ」

\*\*\*

留美 「もう私にかかわらないでください私のために何かしようとしなくてください。迷惑です」

留美を連れて那須たちの下へ行き留美が葉山と雪ノ下に言い放った

八幡 「ということだ。本人が嫌がってるのにそれをするのはいじめと同じだぞ」

葉山 「留美ちゃんは本当に解決しなくていいと思ってるのかい?」

八幡 「それでいいって言うてんだろ。ちゃんと耳ついてんのか?」

雪ノ下 「そんなんじゃ強くなれないわ!」

八幡 「そもそも強くなるうとしてないし、どんな強さを求めてんのかわからないやつに自分の一方的な考えを押し付けんなよ。あんまおいたがすぎるようなら陽乃さんに言いつけんぞ」

雪ノ下 「なっ!?!姉さんは関係ないでしょ!」

八幡 「陽乃さんに頼まれてんだよ。お前が何かしでかしそうになつたら報告しろって」

まあ嘘だけだな。けどほんとに何かしでかすようなら報告したほうがいいかもな。雪ノ下家の名を傷つけるわけにもいかないし雪斗さん(雪ノ下父)も陽子さんも(雪ノ下母)いい人だし…

閑話休題。悔しそうな表情のままその場を去る雪ノ下と雪ノ下についていく由比ヶ浜。念のために葉山と雪ノ下には見張りをつけておきたいが…三浦と海老名さんがうなずいてくれ、三浦は葉山に、海老名さんは雪ノ下たちの方に向かってくれた。

那須 「ねえ比企谷君。比企谷君のことだからもう解決してるんじゃないの?」

八幡 「そうだった。こいつボーダーに入るから」

「「えええー!」」

その場にいた人たちの声が森中に響き渡った

\*\*\*

夜に開催されたキャンプファイヤーも肝試しも特に大過なく過ぎ去りいろいろあったこのバイトもあとは帰るのみとなった。

平塚 「全員お疲れさん。終わったからと言って家に帰るまで気を抜かないように。ボーダー組の迎えはもうすぐ着くと連絡があったので少し待っていてくれ。総武組は車に乗り込んでくれ!」

総武高からのボランティア組がそれぞれ車に乗り込み出発した。それと入れ替わるように行きと同じ諏訪さんと沢村さんが到着し、俺たちも車に乗り込んだ。ユイは俺の膝の上に座りそのことで俺は散々いじられ、2泊3日のバイトが終了した

## 夏休みⅠ

キャンプのバイトの翌日、惰眠をむさぼろうとしていた俺は愛娘によつて起こされた。…ダンスで

ユイ 「パパー!」

八幡 「グフツ!」

どっかの空中艦の義妹司令官のような起こし方（腹にダイブ付き）をするユイとその兄と同じような反応をする俺。

八幡 「ねえユイちゃん?なんでこんな起こし方?」

ユイ 「こまちがやれって」

八幡 「こおおおまあああちいいいいいいいい!」

部屋から飛び出て小町がいるであろうリビングに飛び込む。

小町 「あ、お兄ちゃんおはよう。小町もユイちゃんももう食べたからお兄ちゃんも早く食べちゃって」

八幡 「ああ。じゃなくて!何でユイにあんな起こし方させたの?お兄ちゃん口から内臓が飛び出るかと思ったよ」

小町 「およ?お兄ちゃんあーゆーの好きじゃないの?それより早くご飯食べちゃって!もうすぐうちちゃんも来ちゃうし!」

悲報 俺氏妹に変な性癖を持っていると思われている模様。それに

八幡 「謡が来るって今日なんかあったか?」

小町 「あ、そっか。お兄ちゃん昨日いなかったね。昨日の帰りの車の中でね、うちちゃんと今日ユイちゃんの服を買いに行こうってなってるね」

ユイの服は発見した時の1着しかなく今はサイズの合っていない小町の服を無理やり着せている状態だ。確かに買いに行く必要があるな。駄菓子菓子…違った。だがしかし

八幡 「俺が行く必要くない?」

小町 「お兄ちゃんは荷物も…財布だよ!」

八幡 「そこまで言ったら同じだし、言い直した後の方がひどくなってるぞ」

小町 「まあまあ気にしない！ほらご飯食べちゃって！」  
俺は溜息を吐きつつユイの頭をなでてから小町の用意した朝食を  
食べ始めた。

\*\*\*

八幡 「そんなわけでやってきました。ららぽーと！」

小町 「小町、謡、ユイ、八幡の四人は果たして目的のユイの服（ブ  
ツ）を手に入れて帰ることができるのか!？」

謡 「全米が泣いた超大作！」

小町・謡 「ユイの名を！絶賛公開中！イエー!!」

小町と謡がハイタッチをしつられてユイもハイタッチをする

八幡 「ツツコミたいところはたくさんあるが移動するぞ。入口に  
ずっと立っているのは迷惑だからな」

それに周りの視線がづらいし。痛いものを見る目というよりはか  
わいいものを慈しむような愛に満ちた目とこの集団を連れてる俺へ  
の嫉妬の視線がほとんどだけだな。たくさんの人の視線に慣れてい  
ない俺は今すぐにも帰りたい。まあそんなことはできるわけもな  
く俺たちはそそくさと服屋を目指した

\*\*\*

服屋では………すごかった。はじめは小町と謡と店員さんがひた  
すらユイに似合う服を持ってきては着せ替えをしていたのだが1着  
着せ替えるたびにユイを見る人が増え最終的には即席のフアツショ  
ンショーとなっていた。もともとユイの服には金の糸目はつけない  
つもりだったが20着を越え30着に近づいた時にはさすがにス  
トップをかけた。それから厳選に厳選を重ねた結果、何とか6着まで  
絞った。そこに至るまでかかった時間は2時間。ユイの服を買った  
ころにはちょうど昼飯のピークを過ぎた時間でフードコートには空  
席も目立つようになってきていた。俺たちは席の確保と買い出しに  
分かれた。買い出しは俺とユイ、席の確保は小町と謡だ。俺たちは某  
ハンバーガーショップの数人の列に並ぶ。人数分の注文とお金を払  
いハンバーガーを受け取る。それから小町を探していると後ろから  
声をかけられた。

「比企谷」

後ろを見るとそこには千種兄妹と見知らぬ女子がいた。

八幡 「久しぶりだな。千種、千種妹。そっちの人は初めまして」

??? 「八重垣青生です。あすちゃんと霞さんとは中学が同じでそれから仲良くさせてもらってます」

八幡 「これはど丁寧にどうも。比企谷八幡です。千種とはクラスメートです」

明日葉 「比企谷、その子は？」

千種妹がユイを見ながら言った

八幡 「ああえーと」

馬鹿正直に事情も知らないやつに娘だというと変な目で見られるからな…と、どう濁すか考えていると

ユイ 「パパこの人たち誰？」

明日葉 「そのパパっていうのは比企谷で合ってる？」

明日葉がユイに視線を合わせながら尋ねる。

ユイ 「うん！」

無邪気に答え俺の足に抱き着くユイ。ちよやめてそんな目で見ないで

霞 「比企谷、警察へ行こう」

八重垣 「そうです！自首なら罪が軽くなりますから！」

千種だけでなく初めて会ったばかりの八重垣にまで言われた。そんなに目の腐った男が小さい子にパパと呼ばれるのは犯罪チックに見えるのか…あ、俺もそんな光景見たら警察呼ぶわ

八幡 「いろいろ事情があんだよ！察しろ！」

そこで後ろから小町の声があった

小町 「お兄ちゃん遅いよ！ういちゃんも小町もお腹ペコペコだよ！あれ、その人たちは？」

八幡 「おう小町。知り合いだ」

明日葉 「比企谷の妹？あたしは千種明日葉。よろしくね」

霞 「千種霞だ。」

八重垣 「八重垣青生です。」

小町 「お兄ちゃんも妹の比企谷小町です！よろしくお願いしますね！」

八幡 「小町、千種兄妹の方はお前と同じで今期の入隊試験受けるぞ」

小町 「そうなんですか！」

明日葉 「ってことは小町ちゃんも受けんの？」

小町 「はい！お互いに合格するといいですね！」

霞 「お前ら誰か待たせてるんじゃないのか？」

：やべ、謠忘れてた

八幡 「悪い千種助かった。小町、ユイすぐ戻るぞ。謠が待ってる」

小町 「あ、先行ってて。明日葉さんたちと連絡先交換してから行くから。ういちゃんは奥の柱の近くにいると思うよ」

八幡 「わかった。じゃあな千種兄妹、八重垣」

千種 「じゃあな」

ユイを連れて謠のところへ急ぐ。そして謠を見つけたのはいいが謠は頬を膨らませて怒っていた

謠 「ハチ兄遅すぎなのです！ハチ兄とユイちゃんを探しに行つたはずの小町さんもなかなか戻ってこないし心配したのです！」

八幡 「悪い。ちょっと知り合いと会ってな。何でもするから許してくれ」

謠 「じゃあ私にも服買ってほしいのです」

八幡 「わかった。昼めし食ったら買いに行くか」

謠 「はい！」

それから小町も合流し、少し遅めの昼めしを食いながら午後の予定を話し合った

\*\*\*

ユイ 「パーこれ」

八幡 「んーそれはまだユイには難しいからな、こつちとかはどうだ？」

ユイ 「これにする！」

俺とユイは本屋に来ていた。謠の服を買い、小町が買いたいものが



あるとかで謡とともに他のお店に行つたので別行動となっている。

ユイは本に興味があつたみたいで何冊か手にとつて中を見て、買いたい本を決めたようだ。それから俺もほしかった本を探す。お、あつた。その本に手を伸ばすと横から伸びてきた手がその本をかつきらつていった。

「八幡君これ私持つてるから読みたいなら貸すよ？」

八幡 「ありがとうございます。めぐりさん」

俺のほしかった本をかつきらつていたのはめぐりさんだ。そしてめぐりさんの後ろには楓子さんもいる。

楓子 「ハチさんはユイちゃんの服を買いに？」

八幡 「ええ。小町と謡も一緒なんです。今は別行動してます」

めぐり 「ねえねえユイちゃんってさつきふうちゃんが八幡君の娘つて言つてた子？」

八幡 「はい。おーいユイー」

近くでまた本を見ていたユイを呼ぶ。

ユイ 「パパなーに？」

八幡 「めぐりさん、この子がユイです。」

めぐり 「こんにちはユイちゃん。私はめぐりだよ！よろしくね！」

ユイ 「ユイです！」

めぐり 「八幡君。この子頂戴！大事にするから！」

そう言つてめぐりさんがユイを抱きしめる。

八幡 「だめです。ユイは俺の娘ですから誰にも渡しません。」

めぐり 「八幡君のけち！ぼけなす！はちまん！」

八幡 「八幡は悪口じゃないでしょうよ。そんなこと言つてるところしますよ」

俺は無理やりめぐりさんとユイを離した。

めぐり 「もつとお！もつと私にユイちゃんをく！」

八幡 「落ち着いてくださいめぐりさん！」

なんかどんだんめぐりさんがやばくなつてゐる気がする。目がもうやばい。何とか抑え込もうとするが俺一人では抑え込むことができ

ない

楓子 「落ち着きなさいめぐり。そんなにユイちゃんと一緒にいた  
いなら今日はハチさんの家に泊まればいいでしょう?」

八幡 「え?」

めぐり 「それだー! そうしよう!」

八幡 「家主の俺の意見は!」

めぐり 「ダメ…かな…?」

頬を染め上目遣い…グツとききました

八幡 「ま、まあしようがな

めぐり 「ユイちゃんなにしてお遊ぼう? 絵本だ! 絵本を読もう!」

八幡 「切り替えはえーな! つかキヤラ変わりすぎだろ」

めぐり 「ほらほら八幡君早く早く!」

八幡 「わかりましたって。…楓子さんは何を?」

楓子 「陽乃さんに連絡とってただけですよ? 陽乃さんも参加する  
そうです」

八幡 「も、って楓子さんも?」

楓子 「もちろん参加しますよ」

めぐり 「八幡君! 早く小町ちゃんたちと連絡とって!」

八幡 「ハア…わかりましたよ」

小町と連絡を取り、合流してから家に向かった。それからユイが寝  
るまで飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎ…まあたまにはこんな休日も  
悪くない…のか?

\*\*\*

ユイが寝てからは静かにできるゲームということでマジジャンを  
していた。時折メンバーを入れ替えつつ、遊んでいると時計の針は1  
2時を回った。そしたら急に電気が消えあたりは真っ暗になった。

「停電ですかね?」

「ブレーカーが落ちただけとか?」

「俺見てきますよ」

「小町がブレーカー見てくるからお兄ちゃんは座ってて!」

小町がブレーカーを確認しに行った。いつもだったらこういう時

は俺に任せていたと思うが珍しいな。それになぜか人が移動する音がするがみんなこの暗闇の中で行動してるのか？

「ブレーカーが落ちたみたいですよ！つけますよ！せーの！」

ブレーカーの方から小町の声がする。せーの？

「二二八幡（君）（ハチ兄）（ハチさん）誕生日おめでとう！」

「へ？」

俺がスマホの画面を確認すると8月8日。つまりは俺の誕生日だった。このあと俺はみんなからマツ缶を箱でなどたくさんのプレゼントをもらった。

さらにこの日、防衛任務でボーダー本部に行くなどたくさんの人からまたマツ缶やぼんち揚げを箱でなどたくさんのものをもらった。

## 夏休み2

8月の中頃。今日はボーダーの入隊試験の日だ。俺は小町とユイを連れて試験会場に向かっている

「小町もうすぐ会場だ」

「うーなんか緊張してきた」

「心配すんな。基本的にはトリオン量で決まるんだ。俺の妹なら落ちるなんてことはないだろ」

俺はボーダーの中でも上位クラスのトリオン量があるからな。同じ血が流れてるはずの小町が落ちるなんてことはないだろ

「それに落ちてもオペレーターになるっていう選択肢もあるんだ。そこまで肩ひじ張らずに楽に行けよ」

「うんそうだね！ってあれって明日葉さんたちじゃない？」

「あーそうだな」

会場の入り口付近に千種兄妹と…川…川…川…口？川何とかさんがいる。

「明日葉さーん！」

「あ、小町ちゃん」

小町が三人のところへ走っていく

「おはようございます！」

「おはよ」

「おう」

「おはよう」

上から小町、千種妹、千種、川島だ。小町と川谷は面識があったのか

「ようお前ら」

「あ、比企谷おはよう。ってその子は？」

ユイとまだ会ったことなかった川崎が聞いてきた。

「比企谷の娘だよ。ユイちゃんおはよ」

俺が答えようとしたが先に千種妹が答えやがった。千種妹の言葉で、川崎は驚いている

「いろいろ事情があんだよ」

「つてかその事情俺たちまだ聞いてないんだけど」

「小町説明しといてくれ。それにもうそろそろ会場入っつけ」

「あ、そうだね。お兄ちゃん行ってくるね」

「おう。行ってこい」

小町たち四人が会場に入っていく。

「じゃあユイ俺たちは玉狛支部に行くか」

「うん！」

小町が入隊試験を受けている間俺たちは玉狛支部に行くことにしていた。宇佐美がプログラムした「やしやまるシリーズ」というモーターモッドの相手をしてほしいらしい。そんなわけで玉狛支部に向かうとする俺たちが来た方から鶴見親子がきた

「比企谷君おはよう」

「八幡おはよ」

「おはようございます。ルミルミボーダーの先輩からのありがたいお言葉だ。」

「な、なに？それに留美」

「目上の人には敬語を使え。年上に敬語使わずに舐めた態度ばっか取って先輩にぼこぼこにされて心折られて辞めてったやつを俺は知ってるからな」

ま、ぼこぼこにしたの俺なんだけどね。あの永井とかいうやつ最後まで俺に舐めた態度取ってたからな。俺がまだB級だった時に向こうが稽古つけてくれて頼んできて（きつと俺が弱いと思っただけ）笑おうとしてたんだろうな（舐めた態度ばっかだったからひたすら手足斬り落としてたら対戦が終わると泣いてどっかに行っただけから姿見なくなっただけ）。緑川も最初は舐めた態度だったが一度対戦すると人が変わったように素直になったからな。

「うん。わかった。じゃなくてわかりました」

「よしそれでいい。頑張ってこい」

「ありがとうございます。八幡先輩」

「おう」

「がんばってね！」

「ありがとユイちゃん」

「じゃあ留美行きましょう」

鶴見親子が試験会場に向かっていった。そしてまた歩き出すと今度は三浦と海老名さんが走ってきた

「ヒキオおはよう」

「あ、比企谷君ハロハロくユイちゃんもハロハロく」

「はろはろく」

なにそれかわいい。ユイもつとやって。それより

「時間大丈夫なのか？」

「やっぱり！優美子が寝坊するから！」

「今そんなこと言っても仕方ないじゃん！ほらまた走るよ姫菜！じゃあねヒキオ！」

「じゃあね！比企谷君！」

慌ただしく二人は去っていった。そして俺たちは玉狛支部に向かった

\*\*\*

「来たぞ宇佐美」

「お、待ってたよ比企谷君」

「何で比企谷がここに？」

「ほらこの前俺たちも戦った「やしやまるシリーズ」の相手をするんじゃないですか？宇佐美先輩もつと相手がほしいと言ってたし。ですよね比企谷先輩」

「ああ合ってるぞ」

俺の言葉に反応したのは上から順にボーダーメガネ人間名誉会長の宇佐美、だまされガール小南、もさもさしたイケメン烏丸だ。

「比企谷その後ろにいる女の子は誰よ」

「小南先輩知らなかったんですか？この子は比企谷先輩の娘さんですよ」

「えっそうなの？」

「すいません。嘘です」

「騙したわね！比企谷あ！」

小南の言葉にいつもの調子で烏丸は嘘をついているが今回は烏丸が言ってることは正しい。そしてなぜか俺が噛みつかれる

「噛むな！俺を噛むな！それに烏丸が言ったようにこの子は俺の娘だ！」

「え」

小南も烏丸も驚く。普段クールな烏丸の驚いた表情なんて珍しいな

「ほうほう。その子が本部で噂になってる比企谷君の娘だね」

「ちなみにどんな噂？」

最近ユイのために防衛任務以外ではボーダー本部に行かなくなっているので本部で流れているという噂が気になった

「んーとね、竹を切ったら出てきたとか、川から流れてきた桃を切ったらその子が出てきたとか、空から降ってきたとか、比企谷隊の誰かの子なんじゃないかとかいろいろあるよ。比企谷隊の中でも本命が楓子さん、対抗が陽乃さんだね」

「後半で急に現実的になったな」

かぐや姫、桃太郎、ラピユタと来て最後に現実を見せるというね

「それで結局真相はどうなんですか？」

「あん中にはねえよ。正解は山の中で拾った、だ」

「は？」

三人の声が重なった。

「八月入る前くらいに高2組のラインでキャンプのバイトの連絡したろ。その時に森の中で倒れてて助けたら懐かれて今に至るってわけだ。」

「でもパパって」

「それはこいつ俺が助ける前の記憶がなくなてな。それで起きて初めて見た俺をパパだと思ったんじゃないかと俺は思ってる」

「ほーそういうこと…」

そこで俺の服が引っ張られる。

「おーごめんな。じゃあユイ自己紹介だ」

「ユイだよ！よろしくね！」

「宇佐美葉だよ。それにこっちは小南桐絵でこっちは烏丸京介。よろしくねユイちゃん」

「よろしくねユイちゃん」

「よろしく」

それぞれの自己紹介が終わるときさっそく本題に入る

「それじゃあさっそく本題に入ろうか。改めて説明するけど比企谷君に挑戦してほしいのはあたしがプログラムした「やしやまるシリーズ」だよ。」

「シリーズってことは何体か種類があんのか？」

「うん。圧倒的なパワーと装甲！やしやまるゴールド！神速の斬撃ととんがったボディ！やしやまるブラック！スリムな体に銀翼の翼！やしやまるシルバー！女子ウケがいい！やしやまるハニーブラウン！やしやまるブラックのことが気になっているが生き別れの兄妹だってことは知らない！やしやまるピンク！さあどれと戦う？」

「…順番に一体ずつ出してくれ」

「おっけーそれじゃあよろしく！」

俺は玉狛支部の地下空間でトリガーを起動しやしやまるシリーズの出現を待った。

\*\*\*

異変はやしやまるシリーズと戦い始めてからすぐに起きた。

『比企谷君！ユイちゃんが！』

その言葉を聞いた瞬間おれは地下を飛び出した。さっきいた部屋に入るとユイが気絶したようにソファーに横になっていた。

「宇佐美なにかあった！」

「あたしの膝の上ののって一緒に比企谷君の勇姿を見ようとしてたんだけどモニターにやしやまるゴールドが出たら気を失っちゃって」

そこで俺が開け放ったままのドアから二人の男が入ってきた

「どうした？なんかあったのか？って比企谷君」

「八幡ではないか！どうしたのだ？」

玉狛のエンジニアのクローニンさんと材木座だ。



「材木座、どうしてここに」

「クローニン殿とトリガーの話をしていたのだ。面白い話がたくさん聞けたぞ八幡！」

その時、ユイが急に起き上がった。俺はユイに駆け寄る

「ユイ！大丈夫か！」

「パパ、全部思い出したよ」

「八幡誰だその子は！お主のことをパパと呼んだではないか！」

「ちよつと黙ってる材木座。ユイ何を思い出したんだ？」

俺は材木座を黙らせ、ユイに続きを促す

「皆さんはネイバーフッドにあるトロポイという国を知っていますか？」

ユイが俺たちに尋ねる。俺は分からないがネイバーであるクローニンさんなら何か知ってるんじゃないかと思いきろーニンさんの方を見る。

「確か自立トリオン兵を作ってる国だったか？」

「はい。私はトロポイで開発されていた次世代型自立トリオン兵試作1号コードネームユイ。それが私です」

「ユイが…トリオン兵だと…」

「次世代型というと何が違うんだい？」

クローニンさんの問いにユイは答える。

「次世代型は自動で情報を採取することともう一つ。人工的にサイドエフェクトを持った自立型のトリオン兵のことです。」

「人工的なサイドエフェクト…ユイもサイドエフェクトを持つてるのか？」

「はい。私のサイドエフェクトは姿を見るとその人の感情が分かるというものです。このサイドエフェクトのせいで向こうではたたくさんの人の心を見せられました。歓喜や感動などといった正の感情。怒りや嫉妬、絶望といった負の感情。そんな中で負の感情は私の心の中にバグを残していったのです。」

「そのバグのせいで記憶喪失になったのか？」

「結果的にはそうなります。」

ユイは俺の言葉を肯定する

「そのバグは私のサイドエフェクトに多大は影響をもたらしました。そのバグのせいで私は正の感情が見えなくなり、負の感情しか見ることができなくなりました。」

「そしてまたバグがたまる。…負のスパイラルか…」

「バグがたまりすぎた私の心は次第に崩壊していききました。そして記憶がなくなった私はマスターに捨てられました。それからどういう経緯で玄界にたどり着いたかは私自身覚えていません。」

「それならばもう問題ないのではないか？事情はよく分からぬがユイ殿の記憶が戻ったから八幡と一緒にいられないということはないのであろう？」

「いいえ。これはそう簡単でもありません。マスターたちは私の記憶が戻ったときに他国に情報が洩れぬように記憶が戻ったら私が崩壊するように改造しました。」

「何でトロポイはそんなことを…そんな手間を加えるくらいならその場で殺した方が

「クローニンさん！」

「ごめん比企谷君」

俺の怒鳴り声でクローニンさんは自分の失言に気付いたようでした。謝った。

「いいんですパパ。私に最後の改造を施したマスターが言ってくれました。『自分たちが感情を持たせたせいで君にこんな目に遭わせて悪かった。上の命令で改造をやめることはできないが何とか記憶がなくなりは崩壊をしないように改造する許可はもらった。力が及ばずに申し訳ない』と。それでクローニンさんと材木座さんをお願いがあります。今私の中にはトロポイで与えられた情報と玄界に来るまでに通ったはずの国の情報があります。これを私の中から抜きとってください。」

「けどそれをして君は…」

「はい。私はもう助かりません。けど私が生きてきた証をパパたちのために残したいんです。」

「ユイ…」

「ずっと一緒に居たかったです、パパ」

俺は涙を流してユイと抱き合う。

「ユイ俺もずっと一緒に居たいよ」

「パパあ……」

「八幡、もしかしたらユイ殿を助けられるかもしれないぞ」

「本当か材木座！」

材木座の言葉に俺は顔をあげる。

「理論上では可能だよ。ユイちゃん君が言う崩壊まであとどれくらい時間がある？」

「もうそんなに時間がないです！」

「わかった。急ごう義輝君」

「お願いします！材木座！クローニンさん！ユイを助けてください！」

「全力を尽くす！」

「それで八幡お主のスマホを貸してくれ。」

「俺のスマホがユイを助けるために必要なのか？」

「ああ。ユイちゃんを助けるためには絶対必要になる」

俺は材木座にスマホを渡す。

「しばし待たれい！」

材木座とクローニンさんはユイを連れて俺のスマホをもって玉狛支部の研究室に入っていく。この時ただ信じて待つしかできなかった俺はただただもどかしかった

\*\*\*

材木座とクローニンさんが研究室に入ってからすでに一時間が経過した。

「ハチ兄！ユイちゃんの記憶が戻ったって本当ですか!？」

「ハチさん！どうなんですか!？」

「八幡君！」

入口につながるドアから謡、楓子さん、めぐりさんが飛び込んできた。

「ええ。本当です」

「ならユイちゃんはどこに？」

「今は材木座とクローニンさんと研究室の中にいます」

「何でユイちゃんが研究室に？」

めぐりさんの疑問はもつともだろう。

「それは…ユイがトリオン兵だったからです」

それから三人にユイから聞いたことをすべて話した。三人は驚きながらもしっかりと話を聞いてくれた。

「あとは信じるしかないのです」

「そうね」

三人も俺と同じようにただ信じて材木座とクローニンさんが出てくるのを待った。

\*\*\*

それから30分後。とうとうその時が来た。材木座とクローニンさんがユイを連れ立って出てくる。………はずだった。なのに出てくるのは材木座とクローニンさんだけだ。

「材木座、ユイは…」

材木座は無言で俺のスマホを返してきた。その顔には悔しそうな表情。

「そんな…ユイ…」

「なんですかパパ？」

ユイの声が俺の手元から聞こえてきた。俺が手元を見るとスマホの画面にユイが映っていた。

「ユイがなんで俺のスマホに!？」

「ユイちゃん!？」

「パパ驚くのはまだ早いです! ちょっとトリオンを込めてみてください」

「俺生身なんだけど」

「イメージだ八幡! スマホにトリオンを込めるイメージをするのだ!」

材木座に言われた通りイメージをする。俺のトリオンをスマホに込めるイメージ…イメージ…

「ごうか？」

その瞬間俺のスマホから光が飛び出した。その光は俺のスマホの上で人の形に集まりだし、最後にひとときわ強く発行したかと思うとユイとなって俺の目の前に降り立った。

「また会えましたねパパ、ねえ」

「ユイ!」

「ユイちゃん!」

俺たちはユイに抱き着く。

「パパ、ねえ」

「なんだユイ？」

「なあにユイちゃん？」

「大好き!」

こうしてユイは俺たちの下に戻ってきてくれた

### 夏休み3

「しかし、材木座これはどういう原理なんだ？」

俺のスマホから実体化したユイの頭をなでながら材木座に聞く。しかし答えてくれたのはクローニンさんだった

「簡単に言うとコピペだよ」

コピペ？あのコピーアンドペーストの略？俺が疑問に思っている  
と楓子さんが聞いた

「コピーアンドペーストのことですか？」

「うん。すべて物には核がある。トリオン兵にも核があってその核の中には情報が詰まってる。その核の中からユイ嬢を構成する核の情報をコピーし、代わりの核となる物にペーストする。そういう意味でコピペ。」

「じゃあこの実体化については」

「それは我が説明しよう！」

次の質問に答えたのは材木座だった

「基本はトリオン体の換装と同じ原理なのだ。トリオンで器を作りそこに核を入れる。ただユイ殿には自分でトリオンを生成することはできない。一応擬似的なトリオン生成器官は組み込んであるがそれで生成されるのはごく少量。なので他者のトリオンをもらうことで実体化を可能にしている！」

「それは誰のトリオンでも可能なのですか？」

「無論だ！」

謡の質問に答える材木座。

「だったら私のスマホにもハチ兄と同じ装置もつけていただけませんか？」

「私にも！」

「私のもお願いします」

めぐりさん、楓子さんも謡の提案に乗っかる。

「そのことなのだが、核となる部分は林道支部長がネイバーフッドから持ち帰ったものを使わせてもらったので八幡のスマホに使ったも

のしかないのだ。」

「だから残念だけど実体化は八幡君のスマホからしかできないんだ。けど、専用の回線をつなげば実体化はできないけどユイ嬢がそれぞれのスマホを歩き来できるようにならできるよ。それでもいいかい？」  
「もちろんです！」

「わかった。さっそく取り掛かるから貸してくれるかい？」

「よろしくお願いしますなので！」

「我も手伝った方がよいか？」

「いや大丈夫だよ。それより材木座君は比企谷君たちにアレを見せておいてくれるかい？」

「承知した！」

クローニンさんが謡、楓子さん、めぐりさんのスマホを受け取り材木座と一緒に研究室に行った。材木座はすぐに戻ってきたがその手の中にはメガネがあった

「ユイ殿またスマホの方に戻ってくれるか？」

「わかりました材木座さん」

「ユイは自分の意志で戻ることは可能なのか？」

「はい。自分の意志で戻ることもできますし、トリオンがきければ自動的に戻ることになります。この辺は某家庭教師が殺し屋のマンガの匣兵器とおなじですね」

へえーあの漫画と同じかあ…ってちよつと待て！

「何でユイが漫画のこと知ってるの？おれ家でそれ見せた覚えはないだけ」

「材木座さんがつぶやいたのを聞いて検索してみたんです」

「えっ？検索ってインターネットで？」

「はい！スマートフォンに核があるおかげか、インターネットを潜ることができるようになったんです！気分はもう某自律固定砲台さんです！」

なんかユイがどんどん変な方向に進化していつてる気がする。

「じゃあ一回戻りますね」

そう言い残しユイは俺のスマホへと戻っていった。

「基本的にユイ殿がスマホにいる場合はスマホのカメラのレンズを通してユイ殿は外を見ることが出来る。八幡このメガネにトリオンを込めてかけてみてくれ」

材木座に言われた通り、トリオンを込めてメガネをかける。かけてみた感じ普通のメガネとあまり変わらない。度が入っている感じもしないし…

「これがパパの見ている景色ですか!」

「…材木座、説明を」

「もう分かったと思うがトリオンを込めてこのメガネをかければこのメガネはユイ殿の目の代わりとなる!さらにこのメガネには拡大、集音機能も備わっておる!」

「二〇お前(材木座さん/くん)は何を目指してこのメガネを作ったんだよ(の!?)!」二二

思わずこうツッコんだ俺たちは悪くないだろう。だってこれ見た目は子供、頭脳は大人の名探偵がかけてるメガネとそっくりじゃん。なにこの無駄な技術力の高さ。ノーベル賞でも貰って来いよ

「あ、パパ!小町さんからLINEが来ました!読み上げますね!」お兄ちゃん、入隊試験終わったよ!小町は無事合格しました!他の人は明日葉さん、霞さん、沙希さん、留美ちゃん、優美子さんは合格したよ!姫菜さんは落ちちゃったけどオペレーターとして入隊するってさ!今会場近くのサイゼでみんな集まっているからお兄ちゃんも用が済んだらこっち来てね!」だそうです!なんて返信しましょうか?」

「返信までできんのかよ!もうほんとに自律固定砲台だな…」了解、もう少し待ってろ』って返信しといてくれ」

「わかりました!」

「これから小町を迎えに行こうと思いましたが楓子さんたちはどうします?」

「私たちは残ります。まだスマホが帰ってきてませんし、それにユイちゃんがない理由も説明しやすいでしょうし」

「あ…」

そうだった。忘れてた。千葉村からほとんどの時間一緒に居たユ



イはもういない。いやいなわけじゃないがユイを長時間実体化させることはトリオンの難しい。小町たちの前で堂々とユイにトリオンを供給することはできない。今日明日くらいなら楓子さんや謡のところにいると言えばごまかせるだろう。しかしそれ以降となると厳しいものがある。ましてや千葉村でユイに嫌われたかもしれないというだけであんな醜態を見せたんだ。ユイと2, 3日会わなかったとなると禁断症状がでてもおかしくないと思われるかもしれない……

「楓子さんどうしましょう？これからどうやって小町をごまかせばいいですか」

「それなんです。小町さんにはばらしてもいいんじゃないでしょうか。ボーダーに入隊したならネイバーに国があることもいづれ分かることですし。ちよつと早めに事情を知ったと思えばなんてことないと思いますよ」

「私もそれがいいと思うのです！」

「私もそれでいいと思うよ」

謡もめぐりさんも楓子さんの考えに賛同した

「わかりました。とりあえず今日は謡のところに行ってるって言ってごまかして今度本当のことを話そうと思います」

「はいそれがいいと思います」

「それじゃあまた。宇佐美、『やしまるシリーズ』の相手できなくて悪かった。また今度来た時に相手するよ」

「うん。よろしくね比企谷君」

「おう」

それから玉狛支部を後にし、試験会場近くのサイゼに向かった。

\*\*\*

「あれ？お兄ちゃん、ユイちゃんは？」

サイゼに着くなり小町に聞かれた。

「さつき楓子さんたちと会ってな。楓子さんと遊んでくるってさ。でこっちは千種は？」

「霞さんは何かまだ検査しなきゃいけないことがあるみたいでまだ

残ってるよ」

入隊試験が終わった後に測定するもの?…サイドエフェクトか?

「で、お兄ちゃん!小町たちに何か言うことは?」

「ボーダー入隊おめでとう?」

「何で疑問形なのさ。まあいいや。じゃあ小町たちのボーダー入隊を祝ってお兄ちゃん!ゴチになりませう!」

「」「ゴチになりませう!」「」

「いやいやちよつと待て!俺今手持ちがアレだから無理だ!」

「お兄ちゃん…」

小町が神妙な顔で俺の名を呼ぶ

「ATMならそこだよ」

「おろしにいけど!?!…はあおごつてやるから一人一品までにしろよ」

「やったね!」

みんなが好きなものを注文していく。つてかこいつら俺が来るまでドリンクバーで粘ってたのか?うわーなにそれ。スゲー迷惑な客だな

しばらくしゃべっていると注文したものが届き始めみんなが食い始める

「そういえばお兄ちゃん。もらった書類の中で適正トリガーとポジションって紙があつたんだけどこれってどうやって決まったの?」

「詳しいことは俺も知らん。俺は一般公募じゃないからその紙もらつてないし」

「へえー比企谷つて一般公募じゃなかったんだ?じゃあスカウト?」

「たぶんな。俺もあれよあれよという間にボーダーに入ってたからよくわからん」

退院したらすぐにボーダーに連れて行かれてそのまま陽乃さんに剣の使い方教えてもらつてたからな

「比企谷つていつからボーダーに入ってたの?」

「高1の春からだ」

「あんまし長いってわけじゃないんだ…」

「まあそうだな」

今考えてみると。確かに短いな。けど俺としてはこの一年、事故に遭ったと思ったらボーダーに入れられたり、そこで隊を組まされ隊長をやらされたり、いろいろあってすごい長く感じているけどな…隊と言ええば

「千種妹。ほんとに千種と川崎と隊を組むのか？」

「あーそういうええばそれなんだけど三浦さんと海老名さんも入れて5人で隊を組むことになったよ」

「ほう。お前ら適正トリガーとポジションはなんて書いてあるんだ？」

「あたしは拳銃型のアステロイド」

「あたしは弧月だよ」

「あーしも弧月だし」

上から順に千種妹、川崎、三浦だ。現状で前衛2枚に中衛1枚か。割とバランスがいいな

「けっこうバランスがいいな。小町と留美は何だった？」

「小町は射手でハウンドだよ」

「私はスコープピオンだよ、じゃないです」

小町も留美もなんとなく想像通りだな。ってか小町は弾バカになりそうな気がするな…

「比企谷仮入隊ってした方がいいの？」

「別にしなくてもいいがした方がはやくB級に上がりやすくなるな」

「そつか。あ、お兄も来たみたい」

千種妹の言葉で入口を見ると千種がいた。千種は俺たちを見つけるとこっちに来る。そしてそのまま空いているこっちのテーブルに座った。(人数が多いので二つのテーブルに分かれて座っている)そして座るなり

「比企谷、サイドエフェクトってなに？」

やはり千種が受けていたのはサイドエフェクトの検査だったようだ。

「千種サイドエフェクトは一応機密事項だから一般人がいるところで

は口にするな」

「わかってる。けど今はいいだろ？俺たちの周りには客がないし」「まあそうだな。サイドエフェクトはトリオンが脳や感覚器官に影響を及ぼして出た超感覚だ。検査して検査結果は教えてもらったか？」「詳しい検査は後日やるって言ってたがなんか強化聴覚？ってのが俺にはあるらしい」

菊地原と同じサイドエフェクトか。

「簡単に言えば耳がiiiってやつだな。」

「なにそれ。しよぼくない？」

「いやそうでもないぞ。そもそもサイドエフェクト自体が貴重だからな。サイドエフェクト持つてる人ボーダーでもそこまでいないし」

「そうか。ならいいや」

しかし強化聴覚か：使い方によっては驚異的になりそうだな。風間隊なんかはカメレオンが流行りだした頃に菊地原の耳のおかげで無双してたとか聞くし。やっぱいいなサイドエフェクトは。俺も持つてるけど…

「さあお兄も来たことだし帰りますか！」

「え、ちよつと俺まだ何にも食ってないんだけど」

「そうだな帰るか」

千種妹の提案に俺も乗っかる。おごる人数は少ない方がいいからな。そしてみんなも帰る準備をし始めた。

「え、ほんとに帰るの？」

俺はみんなより一足早く伝票をもって席を立ち、会計を済ませて外で待つ。

「ちよつと待って。何で比企谷のおごり？」

「ほらさつさと帰るよお兄！じゃあねみんな」

「じゃあね」

千種を無視して同じ方向なのか千種兄妹と川崎が千種を引きづつていった。

「留美の家はどっちだ？」

「向こうの方」

留美が指さしたのは左方向だ。

「それならあーしたちと一緒だから留美はあーしたちが送ろうか？」

「留美はそれでいいか？」

「うん」

「じゃ頼んだ三浦」

「はいよ。じゃあねヒキオ、小町」

「じゃあね〜」

「サヨナラ八幡先輩、小町さん」

「じゃあね！」

「じゃあな」

三浦たちも帰っていき今この場には俺と小町しかない。

「俺たちも帰るか」

「そうだねお兄ちゃん！」

俺はこのタイミングでユイのことを言うことにした

「あのな――」

\*\*\*

「あれが花火ですか！きれいですね！」

「そうだねユイちゃん！」

夏休みが終わるまでもう三日を切ったころ、俺たち（比企谷隊＋ユイ）は地元の花火大会に来ていた。ユイの「花火を見てみたい」の一言により花火大会を見に行く計画を練っていたところに陽乃さんから貴賓席で見ないかとお声がかかり、比企谷隊とユイでおじやませてもらっていた

「しかしほんとに俺たちで使っているんですか？」

「うん！どーせ私やお父さんお母さんはあいさつ回りでここにゆつくり座ってみていられるほどの余裕はないからね。だったらユイちゃんの初めての花火を見るための場所として提供したほうが有意義だし」

「ありがとうございます。雪斗さんと陽子さんにも伝えてください。」

「うん！それにしてもユイちゃんがトリオン兵だったなんてね」

陽乃さんには小町に説明した後で電話で説明した。小町と同じで

最初は半信半疑という感じだったが俺のスマホにいるユイや実体化を見せるとすぐに信じてくれた。

「あ、そろそろ行くね！じゃみんな楽しんでね！」

陽乃さんが雪斗さんと陽子さんがいる方に向かっていった。

「ユイ、楽しいか？」

「すごい楽しいですパパ！」

俺はこの笑顔だけですぐに始まる二学期を乗り切れそうだ。

## 文化祭編 文化祭1

新学期【しんがつき】 新しく始まる学期。また、学期の初め。 我らが先生、グーグル大先生より。

新学期の意味を調べた理由？『舟を編む』に影響されたんじゃない。影響されたんじゃない！大事な事なので二回言いました！つと俺は新学期初日の朝に総武高の職員室に来ていた。

「失礼します。2―Fの比企谷です。水沼先生に用があり参りました。」

どうぞという声を聞いてから職員室に入り、職員室の奥の方にいる担当の水沼先生にシフト表を渡し、来た道を戻り職員室を出る。

「あ、比企谷」

振り返ってみるとそこに那須と熊谷がいた。

「よう那須、熊谷。お前らもシフト表の提出か？」

「そうだけど、お前らもつて比企谷もシフト表の提出に？」

「ああそうだぞ」

「珍しいね。いつも放課後に防衛任務を入れてる比企谷隊が日中にシフトを入れるなんて。なんかあるの？」

「めぐりさんが文化祭実行委員の仕事があるからシフトは日中に入れてくれたって」

「ああ〜」

これから文化祭の準備が始まるがめぐりさんはすでに生徒会の方で忙しいらしい

「じゃあ比企谷は文実になったりするの？」

「さあどうだろうな。まあできるだけめぐりさんを手伝うつもりだけだな」

めぐりさんは俺たちのオペレーターだからな、と続けると、那須と熊谷は軽く笑う。

「なんかあつたら声かけてね」

「ああ、その時はよろしく頼む」

「またね比企谷」

「おうじゃあな」

職員室に入っていく二人を背に俺は自分の教室を目指した

\*\*\*

始業式から数日後のLHRに文化祭の実行委員を決めることとなった。

「えーと文化祭の実行委員やりたい人はいますか？」

ルーム長の声が教室に響く。しかしその声に反応して手をあげる者はいない。：俺以外。

「じゃあ男子は比企谷君にお願いします。女子でやりたい人はいますか？」

結局俺は実行委員になることにした。理由はめぐりさんの手伝いをするため。それに俺がある情報を聞いたからだ。その情報を提供してくれたのはセクハラエリートという妖しい人ではなく、某MぐりさんやA辻といった信頼できる筋からの情報なのだ。なんでもうちのクラスのある人が文化祭のクラスの出し物で演劇をしたいらしく、そのためにクラスの過半数に根回しし、多数決となっても勝てるようにしたらしい。まあそこまではいい。ここからが問題なのだ。演劇をしたいと言ってるのは海老名さん。そしてその海老名さんが台本を考えるとこの道。ここでさらに情報提供者を紹介しよう。T川隊のK近さんだ。彼女もまたMぐりさんやA辻と同じように俺が海老名さんにオペレーター先輩として紹介した中の一人だ。彼女は6割ほど完成した台本を見せてもらったというのだ。その内容は口にするのもおぞましい(そこまでは言っていない)ものだったという。そんな最悪の演劇を回避するために俺は文実を選んだのだ。

「比企谷、お前どうした？文実に立候補するなんて。」

「めぐりさんの手伝いをするなら文実の方が都合がいいからな」

「ふーん」

千種は何も疑問に思わなかったようだ。菊地原の耳は心音で隠し事を見抜けるといいうが千種の耳は菊地原より精度が悪いのか、はたまた



た今は意識していなかったからか分からないが俺が何か隠してるところとは気づかれなかったようだ。じゃあ何も知らずに死地に赴くクラス男子たちに敬礼っ!!

\*\*\*

放課後になり会議室に向かう。ちなみにうちのクラスの女子の文実は葉山のカリスマ（

笑）によつて相模という生徒に決まった。会議室に入るともうすでに半数くらいの人が集まっていた。その中には楓子さん、荒船さん、犬飼さん、奈良坂、歌川とボーダーのメンツもいた。楓子さん以外は一か所に集まっていたので、そこに向かおうとしたがその途中で楓子さんに呼び止められた。

「あらハチさんも文実になったのですね」

「ええ。こつちの方がめぐりさんの手伝いがしやすいですからね」

「ねえ楓子。この子は？」

楓子さんと話していた女性が聞いてきた

「比企谷八幡。私たちの部隊の隊長ですよ」

「楓子たちの隊長さんってあの噂の子連れ隊長だよね。へえ、この子がそうなんだ。私は竹宮琴音。B級の桐ヶ谷隊のオペレーターやっています」

桐ヶ谷隊：確か聞いたことあるぞ

「今B級ランク戦で破竹の勢いで勝ち上がっているっていう桐ヶ谷隊ですか？」

「うんそうだよ」

確か、男一人と女二人でチームで男の方は陽乃さんと同じように弾丸を切るって噂になってたと思う。

「比企谷八幡です。よろしくお願いします」

「うんよろしくね」

そこで会議室の扉が開き雪ノ下が入ってくる。雪ノ下は俺を見つけるとにらんでから空いている席に座った。

「ねえ比企谷君。君あの子に何かしたの？すごいにらんでたけど」

「向こうが勝手につかかかってきてるだけなんで気にしないでください」

い」

そこでまた会議室の扉が開き、今度は先生と生徒会の人たちが入ってきた。その先頭を歩いているめぐりさんは俺たちに気付くと小さく手を振ってきた。俺はそれに返すと楓子さんと竹宮さんに一言言ってから2年生の場所の空いている席に座った

全員が座った頃合いを見計らいめぐりさんが話し始めた

「生徒会長の城廻めぐりです。それじゃあさつそくなんだけど実行委員長を選びたいと思います！誰かやつてくれる人はいませんか？」

やはり手をあげる者はいない。俺もめぐりさんの手伝いをするために文実になったがさすがに実行委員長はめんどくさすぎてやる気にならない。すると一人の女子生徒が小さく手を挙げた。

「あのくうちみんながやらないっていうならやつてもいいですけど」「本当？えっと」

「2年F組の相模です。あんまり前でのとか得意じゃないですけど。うちもこの文化祭を通して成長したいっていうか」

「なあ比企谷あいつが実行委員長で大丈夫なのか？」

「今なら俺も未来視のサイドエフェクトが使える気がする」

「奇遇だな。俺もそう思う」

奈良坂がこんなこと言うなんて珍しいな。けどまああんな上っ面だけの言葉聞けばみんななそう思うか。あのめぐりさんもほかの立候補がいらないから相模に決めようとしてるがその声にはいつものほんわかさが全然ないからな…はあどうなっていくのかねこの文実は…

## 文化祭2

さっそくめぐりさんが実行委員長となった相模に司会をやらせているが予想していた通りやばかった。実行委員の部署を決めようとしていたのだが、噛むのはいいがそれを恥ずかしがり、どんどん声が小さくなりほとんど聞こえなくなり、最終的にめぐりさんがさばいてしまっていた。

俺は仕事の楽そうな記録雑務にした。俺と同じ記録雑務にはさつき知り合った竹宮先輩と雪ノ下がいて、竹宮先輩は記録雑務の担当部長となっていた。そのほかの俺の知っている人では有志統制には犬飼さんと歌川、広報宣伝には荒船さん、保健衛生には楓子さんが担当部長となっていた。そしてそのまま各部署ごとに顔合わせをし、その日は解散となった。

\*\*\*

文化祭まで一か月をきると教室での残留が解禁となった。そしてうちのクラスの黒板には

『監督 海老名姫菜』

演出 海老名姫菜

脚本 海老名姫菜』

と、ドリームチームの名前が書かれていた。その隣には役名が書かれている台本はすでに配られている。劇の内容は「星の王子さま」だ。中を見てみたが「ワシの行った星は百八式まであるぞ!」とある飛行士と変態王子」というところで読むのをやめた。一人配役が発表されるたびに教室は指名された人の悲鳴が響く。

「それじゃあ最後!王子さま、葉山隼人!ぼく、千種霞!」

うわーこいつら面白い顔すんな。片方は顔を青白くし、もう片方は目を腐らせた。

「ねえ比企谷。何やってんの?」

「うおっ!って千種妹か」

急に声をかけられて、振り向くとそこには千種妹がいた

「演劇の配役を決めてんだよ。台本あるから見るか?」

「見る」

千種妹に台本と渡すと、黙々と読み始めた。千種妹が台本を読んでいる間、俺が暇を持って余していると俺のスマホが震えた。スマホを見てみるとL I O Eが起動されていて画面の端にはユイがいた。それから文字が出てきた。

『パパ！私も読みたいです！』

『ユイが読んでいいもんじゃないからだめだ』

俺は素早く文字を打ち込むとスマホの電源を切った。さすがに切つてある電源を入れるなんてことしないよね？…できないよね？！

幸いそれから勝手に電源がつかなくなってことはなかった。ユイと激しい(?) 攻防を繰り返してたら、いつの間にか千種妹が台本を全部読み終わっていたようだ

「ひなちゃんがあたしを呼んだのはこーゆーことか」

千種妹はそうつぶやくと俺たちのいる教室の後ろから前で騒いでる海老名さんたちに近づいた。

「お兄これに出んの？」

「あ、明日ちゃん！そうそう霞君はこれに出るんだよ！」

「いや何言ってるの？出ないからね」

「え、出ないの？お兄？きつと出たらおもしろいとおもうんだけどなあ〜」

「いくら明日葉の頼みでも——」

瞬間、海老名さんがニヤツとしたのを俺は見逃さなかった。たぶん千種妹も同じような表情をしているだろう。なぜわかるかって？このあとやりそうなことを知ってるからだよ

「おねがい！おにーちゃん♡」

ほらこれだ。俺たちシスコンに対しての一撃必殺。じわれやぜつたいれいどみたいに確率ではなく絶対に決まる技。妹によるお願い攻撃だ。これをされて落ちないシスコンはいない：はずだ！ほら千種も

「まあ妹の頼みだからね」

見ての通り落ちた。抵抗する人が減れば勢いが減るのは分かり

きつていて、その後すぐに葉山もあきらめたようで抵抗をやめた。それを見てから俺は実行委員会に向かった。

\*\*\*

数日後、いつの間にか雪ノ下が記録雑務から副実行委員長になっていた。雪ノ下一人抜けたところでもともと文化祭当日まで記録雑務の仕事は少ないし、情報処理にたけているオペレーターの竹宮先輩もいるので仕事量はそこまで変わっていない。

そんなわけで定例ミーティング。各部署ごとの報告から始まった。「まずは宣伝広報からお願いします」

担当部長が現在の進捗状況を報告すべく起立する。

「掲示予定の七割を消化し、ポスター制作についても、だいたい半分終わっています。」

「そうですか、いい感じですね」

相模は満足げにうなずくが横から声が上がった

「いいえ少し遅い。文化祭は三週間後。掲示箇所の交渉、ホームページへのアップは既に済んでいますか？」

「…まだです」

「急いでください。社会人はともかく、受験志望の中学生やその保護者はホームページを結構こまめにチェックしていますから」

宣伝担当が気圧されてへたり込むように座った。雪ノ下の隣にいる相模は何が起きたか分かっていないようでポカンとした表情で雪ノ下を見ていた

「相模さん続けて」

促されてようやく会議が再開する

「あ、うん。じゃあ有志統制お願いします」

「…はい。有志参加団体は現在10団体」

遠慮がちに発言する担当とぎこちない返事をする相模

「増えたね。地域賞のおかげかな。次は…」

「それは校内のみですか？地域の方々への打診は？去年までの実績の洗い出して連絡を取ってみてください。例年、地域とのつながり、という姿勢を掲げている以上、参加団体減少は避けないと。それから、

ステージの割り振りは済んでいますか？集客の見込みと開演時のスタッフの内訳は？タイムテーブルを一覧にして提出をお願いします。」

先に進めようとする相模を遮る形で厳しい追及をする雪ノ下。

そんな調子で会計監査、保健衛生と会議が進んでいく。そのたびに雪ノ下の確認と指示が飛ぶ。なお、保健衛生の担当部長の楓子さんは他と比べて追及されることは少なかった。

「次、記録雑務」

いつの間にか進行も雪ノ下がやってしまっていた。

「特にはないです。」

竹宮先輩はこう報告した。実際、俺たち記録雑務は文化祭当日の記録がメインであり、この段階での仕事は少ない。

相模もそれは分かっているのかうなずくと会議を終わらせようとする。

「じゃあ今日はこんなところで…」

「記録は当日のタイムスケジュールと機材申請、出しておくように。」各部署の報告の問題点の洗い出し、その対応策を協議した後、今後のスケジュールの共有。話すべきことをすべて話し終え、終了の空気の感じ取り会議室の雰囲気は弛緩した。

「では委員長」

「うん。えっと、明日からもお願いします。お疲れさまでした。」

定例会議が終わるとみんなが雪ノ下の辣腕をほめた。どちらが委員長なのかわからない、と言う人もいた。そんな中で委員長である相模は取り巻きを連れて逃げるように会議室から出て行った。その姿をほとんどの人が気づかなかった。

\*\*\*

次の日の放課後、俺が会議室へ向かうと会議室の前には人ばかりができていた。人なみをかき分けて進み、中を覗いてみるとピリピリとした雰囲気になっていて、その発生源にはめぐりさん、雪ノ下、そして陽乃さんがいた。

「姉さん、何でいるのかしら」

「有志の書類の提出に來ただけだよ」

「何かやるんですか？陽乃さん」

「あ、八幡！めぐりから有志団体が足りないって聞いてね。だったらOB OG集めて管弦楽でもやろうかなって。ね！いいでしょ雪乃ちゃん」

「好きにすればいいじゃない。どうせ決定権は私にはないもの」

「へえ、雪乃ちゃんが委員長じゃないんだ。じゃあ誰が委員長なの？」

「相模というやつなんですけど今は…」

一応会議室を見回してみる。俺が乱入してからほとんどの人が席に着いて、確認はしやすかったがやはり相模はいなかったが

「まだ来てな——」

「すみませーん！クラスの方に出て遅れました！」

俺の言葉を遮るようにして入ってきやがった

「はるさん、この子が委員長です」

「あ、実行委員長の相模南です」

「ふくん。実行委員長がクラスの方に参加して遅刻ね」

そう言いながら陽乃さんはじつくりの相模を観察する。その視線に相模はびくつとしていた

「あの…その…」

相模が必死に言い訳を考えているとふつと陽乃さんは微笑んだ。

「さっすが委員長！文化祭を最大限楽しめる人こそ委員長にふさわしいよねー」

「あ、ありがとうございます」

さつきまでとは違う急に表情の変化に戸惑いながらも、おそらくここに來て初めてであろう肯定に相模は表情を明るくさせた

「で、えーと何がみちゃんだっけ？三上？それは三上ちゃんに失礼か。甘噛み？まあいいや。委員長ちゃんにお願いがあるんだけど。有志として参加したいんだけど、雪乃ちゃんにしばらくられちゃってね…」

嘘くさいしおらしい演技をする陽乃さん。

「…いいですよ。有志団体足りてないですし、OGの方が参加してく

て下されば地域とのつながりをアピールすることもできますし」

「きやーありがとっ！卒業しても帰れる母校って最高だなく。友達にも教えてあげよっ」と

「あ、じゃあその友達の方にも出てもらえばいいんじゃないですか？」

「おっ！グッドアイディーア！さっそく連絡してきていいかな？」

「どうぞどうぞ」

見事に陽乃さんに操られているな。いったい何のつもりで…ってまあだいたいわかるけど。たぶんそのことでアイコンタクトで呼ばれてるし

同じ様に呼ばれていためぐりさんと楓子さんと一緒に出て行くと怪しまれるので、まず俺が隠密を使って誰にも気づかれないようにして会議室を出る。それから順に楓子さん、めぐりさんと集まる。

「みんなさ、あんまりお母さんが雪乃ちゃんの一人暮らしをよく思っていないのは知ってるよね？」

俺だけがうなずいた。花火大会の時に少し愚痴みたいな方で聞いていたのだ。

「それで千葉村の話聞いて、これから自分で成長できそうにないなら実家に連れ戻そうと決めたい。その判断は私に任されていって今回やろうかなって」

「つまり？」

「委員長ちゃんを使って試そうかと」

「具体的には？」

「全然考えてないけど…どうかな？」

さつき相模にしたのとは違う本当にしおらしい態度をとる陽乃さん。

俺たちは目を合わせると、うなずき合う。

「はるさんの頼みならもちろん！」

「私もいいですよ」

めぐりさん、楓子さんと順に答え、そして俺も答える。

「いいですけど、それで仕事が遅れたら手伝ってくださいよ」

「もちろん！」



「それじゃあ決まったことだし戻りましょうか」

それから集まった時と同じようにバラバラに戻っていった。あ、こそこそ集まらないで普通にボーダー関連だつて言えばよかったじゃねーか

\*\*\*

俺たちが自分の持ち場に戻りしばらく仕事をしていると相模が急に立ち上がり声を出した。

「皆さんちよつといいですか？」

全員が手を止め相模を見る。この時嫌な予感のした俺は気づかれないようにスマホを起動しユイに音がしないように録音を頼んだ。電源を消したことで最初はいじけていたユイだったがあとでできる範囲で言うことを聞くことを条件に何とか聞いてくれた

「少し考えたんですけど文実はちゃんと文化祭を楽しんでこそかなつて。やっぱり自分が楽しまなきゃ人を楽しませられないっていうか」どっかで聞いたセリフだな

「文化祭を楽しむためにはクラスの方も大事だと思えます。予定も順調にクリアしてますし少し仕事のペースを落とすっていうのはどうですか？」

こいつ、仕事もできないのにやる気までないのかよ

「相模さんそれは違うわ。バッファをもたせるための前倒し進行で」

雪ノ下が異を唱えるが横から明るい声が邪魔した

「いやーいいこと言うね！私の時もクラスの方もみんな頑張ってたな」

陽乃さんの方を向くとウインクされた。このタイミングでさっきのアレをするみたいだ。タイミングとしてはいいと思うがこのままだと少しまずいかもな…

「あーちよつといいか」

全員の目がこちらを向く。ふええええ〜怖いよ〜やめよ。きもいな

「委員長さんに聞きたいんだが自分の発言に責任とれるよな？」

「はあ？なに言つて

「いいから答えろよ。イエスカノーか。どっちだ？」

少し威圧を込めながら言う

「い、イエス」

「そうか。ならいい」

俺は席に座るとまた気づかれないようにスマホを操作する

『ユイ録音できたか？』

『ばっちりです！パパ！』

それだけ確認すると、俺は目をあげた。その時には拍手多数で相模の案は可決された。陽乃さんが手伝ってくれるとはいえ確実に増えるであろう仕事に俺は溜息しか出なかった。

——おまけ——

下校時間を迎えると全員が帰る準備をし始め仲がいい人と塊になつて帰る人がいる中、俺は陽乃さんにどこから取り出したのかわからないギターと楽譜を渡されていた。

「え〜と陽乃さんこれは？」

「ギターと楽譜だけど？」

「それは知ってます。なんでこれを俺に渡すのかってことです。」

俺の問いに答えたのは陽乃さんではなく楓子さんだった。

「この文化祭に私たち比企谷隊でバンド組んで参戦することにしましたんですよ。ハチさん」

「それで八幡君にはギターしてもらおうと思つて！」

「いや、俺楽器なんて授業でしかしたことないから無理ですよ」

「大丈夫ですよ。まだ約一か月ありますし」

「いや文実の仕事も！」

「私たちもありますよ」

「防衛任務も」

「だから私たちもあるつて」

そこでスマホが震える。画面を見るとユイが出たいと言っていた。周りに誰もいないことを確認するとユイを実体化させる。

「どうしたんだ？ユイ」

「私もパパたちのバンドみたいです！」

「ほらユイちゃんもこう言っていることだし。だから八幡」「ハチさん」「八幡君」

「「やって／やりなさい」」

「…はい」

ユイのお願いと三人の圧力に屈するしかなかった俺はその日から文実に防衛任務に加えてギターの練習という超過密スケジュールとなった。

## 文化祭3

数日後の会議室にはゾンビのなりそくないが大量にいた。現在の会議室にいるのは20人弱。確か全体で60人くらいいたはずだから三分の二がさぼっていることになる。そのせいで真面目に参加してる人の仕事が増えた。さらに陽乃さんの有志参加を聞きつけてか有志の申し込みが急増。急増した申し込みは雪ノ下、めぐりさん、楓子さん、竹宮先輩の尽力と管弦楽の練習の合間をぬって来てくれる陽乃さんとバンドの練習のために来ていた謡の手伝いでやつと回っていた。そんな中で俺は自分の仕事を進めつつマツ缶を配って回っていた。マツ缶教の布教をしようなんて少ししか思っていない。少しは思っちゃってるのかよそんなことは置いといて糖分を補給してもらおうという粹な計らいだ。で、マツ缶をテーブルに置くだろ？そうするとお礼を言っているつもりなのであろうが「あゝ」という「あ」の濁った声しか返ってこないわけだ。もうほんとになりそくないじゃなくてゾンビなんじゃねーの？と思っている俺ガイル。

なんやかんやでようやく下校時間を迎え明日は週末。ゆっくり休んでください。いやマジで。さすがに俺たちもこれからバンドの練習をする元気は残ってないので、今日はこのまま解散となった。その際に大変そうであらうと今すぐに取り組んだ方がいいものから半分くらいを持って帰ることも忘れない。…社畜ってつらいなあ…

\*\*\*

翌日、みんなで作戦室で俺の持ち帰った仕事をしている

「陽乃さん、雪ノ下の処遇ってどうするんですか？そろそろ処遇決めて文実の方に手を打たないと誰かしらが倒れてもおかしくないと思うんですけど」

「処遇って…それなんだけどこれで決めるつもりだよ」

陽乃さんの手には各クラスの企画申請書類がまとめてあるファイルがあり、2―Fつまり俺のクラスのものだけなかった。確か相模がやるって言ってたはずだが…こんくらいやっておけよ

「わかってると思いますけど俺は書けませんよ。ろくにクラスの方に

出てないんだから」

「わかってるよ。それじゃあ問題です。八幡はこれを書くにはどうしたらよいでしょうか」

「適当に書く、ですか」

「それをするのはハチ兄だけなのです！」

「いやいや俺だけじゃないでしょ。ほら米屋とか出水とかもしそうだけだな」

「普通は分かる人に聞きますよハチさん」

「うん楓子のが正解だよ。続いて問題です。八幡は誰に聞くのが正解でしょうか」

「演劇の監督ですか？」

「普通だったらそれで正解なんだけど今回の正解は隼人だよ」

「隼人？…ああ葉山か。けどなんで葉山なんです？」

「普通だったら監督である海老名さんに聞いた方がしつかりかけると思うのだが」

「それはね、隼人だったら今の雪乃ちゃんを見ればきつと手伝うって言うと思うからだよ」

なるほど。ここで雪ノ下が素直にそれを受ければ成長したってみならずってことだな

「わかりました。葉山を呼び出すのはお願いしますさて次の問題は…」

「どうやって文実を正常にするか…だよねー」

「あ、それについては一案がありますよ」

「ほんと?!?八幡君！」

「ええ。それはですね…」

\*\*\*

休みが明けての月曜日。文実のメンバーは金曜から誰一人欠けずにそろっていた。土日にしっかりと休んだおかげかゾンビ化していた人は全員元に戻っていた。チッ！

仕事を始めるとすぐに企画申請書類のことで雪ノ下に呼ばれた。

「2—Fの担当者。企画申請書類がまだ出てないのだけれど」

「わり、俺書くわ。つっても俺はクラスのことはよくわからんしな。どーすつか…」

「そんなことだろうと思って強力な助っ人を呼んどいたよ」

順調に計画通りに進み、会議室のドアがノックされ葉山が入ってくる。

「えっと、陽乃さんに呼ばれて来たんですけど」

「お、隼人早かったね〜八幡強力な助っ人の葉山隼人君です！拍手〜」  
「何でこいつなんすか」

葉山がなんか言ってるが無視して話を進める

「だって2―Fで連絡取れるの隼人しかいなかったし」

「それで俺は何のために呼ばれたんです？助っ人とか聞こえましたけど」

「八幡がクラスの方に参加してないから企画申請書類が書けないの。だから八幡にいろいろ教えてあげて」

「わかりました。ヒキタ二君どんなことを書くんだい？」

「ああこれだ。立ちっぱじや書きづらいから座るぞ」

葉山に紙を渡すと席に座る。

それから葉山に教えてもらいながら書類を書き始める。

「なあヒキタ二君。人手足りてるのかい？」

「さあな。俺は担当部署だけで手いっぱいだから他のことは分からん」

「担当部署って？」

「記録雑務」

「似合うな」

殺すぞ

「けどぱつと見、一部の人の仕事に集中してるように見えるけど」

はたから見ればそう見えるかもしれないが実際はみんながそれなりにやった上でできる人は追加でやるみたいな感じだから一部の人の仕事に集中してるなんてないけどな。

「そう見えるんならそうなんだろうな」

「このままじゃどこかが破綻する。そうなる前にちゃんと人を頼った

方がいいよ」

俺たちは雪ノ下の反応を待つ。雪ノ下は少し考えると自分の考えを口にした。

「いえ、結構です。」

陽乃さんが小さくため息をついたのが分かった。

「でもこのままじゃ誰か倒れるかもしれないよ。そうなる前に手を打っておくべきじゃないかな?」

陽乃さんがめぐりさんに視線を送る。めぐりさんはそれに気づきうなずく。

「そのことでみんなに相談があるんだけどいい?」

\*\*\*

翌日、放課後を迎えると、久しぶりに会議室に文実の全員がそろっていた。ここで今日の作戦を紹介しよう。今日は文化祭のスローガンのことで全員を集めた。その会議の途中でここまで真面目に文実に参加してきた者たち（以下真面目組）に舟をこいでもらう。そのうえで俺が会議の頃合いを見計らい完全に寝たふりをする。そうすると平塚先生なり誰かが俺を起こすだろう。もしそれがなかった場合はめぐりさんに起こしてもらうことになっている。起こされた俺はこの会議自体にいちやもんをつける。なんやかんやで来てもらっている謠を引き合いに出し罪悪感を抱かせる。というのが今回の作戦だ。：見通しが甘すぎるというツツコミはしてはいけない。きつと作者がめんどくさがっただけなのだから。ん?作者?まあいいや。

会議が始まると真面目組はあくびをしたり舟をこいだりし始めた。前の案がだめになりほかの案考えなければならなかったためにみんなを呼んだ。という意図がめぐりさんから伝えられ、意見を求められる。なかなか出てこないのなぜか参加している葉山の提案で紙に書くことになった。その紙が配られている中で俺はめぐりさんに合図をし、寝たふりを始めた。…………

まだかなー?早く起こしてくれないかなー?今はそれぞれが考えた案を発表しているのだが、自前のカメレオンが働いているのか平塚先生に気付いてもらえない。ねえ!早く起こして!

「おい比企谷何寝ている」

俺の思いは通じたようで平塚先生に起こされた。俺はいかにも今起きましたよという感じでそのりと寝ていた上体を起こす。

「すいません。最近仕事が溜まっていたもので」

「そんなに寝たいなら帰ればあ？あんたなんかいなくても誰も困らないっつーの」

嘲笑の混じった声で相模が入ってくる。ボーダー組が一気に殺氣だつと同時に俺も切れた

「デメエ——」

「じゃあお言葉に甘えて帰らせてもらいます。」

は？楓子さん？あーそういうことか。真面目組の全員が楓子さんの意図を察し立ち上がる。

「え、ちよつと」

相模の制止も無視し、俺たちは会議室を出る。

「今日中に仕上げなければならぬ書類がいくつもあるんでお願いしますね。そこまで難しいものじゃないんで今まで真面目に参加すればすぐに終わると思いますんでよろしくお願い致します。：あーやっとな寝れる」

最後に会議室を出た俺はこう言い残した。まあ実際は今日仕上げなければならぬ書類は昨日までに終わらせてあるから無いんだけどな。さあてバンドの練習かあ…

\*\*\*

結論から言うと次の日にはさぼっていた人も全員がそろっていた。謝罪もなく何事もなかったように来ていることにイラつきを覚えるがここで俺が切れてまた来なくなつては元も子もないのでここは我慢する。

「やあやあしつかりと働いているかね？」

「御覧の通りですよ。陽乃さん」

「ここ計算間違ってるよ」

陽乃さんが指摘したのは俺がやっていた書類だ。

「ほんとだ。ありがとうございます陽乃さん」



「暇だし私も手伝おうかな。雪乃ちゃん！私も手伝うよー！」  
「姉さんは邪魔だから帰って」

雪ノ下は冷たく返すが陽乃さんは全く意に返さない

「ひどい！雪乃ちゃんひどい！……まあ暇だし勝手にやっちゃうんだけどね。八幡、半分もらうよ」

陽乃さんが俺の机に置いてある紙束に手を伸ばそうとすると、雪ノ下は深々とため息をついた。

「…はあ。予算の見直しをするから勝手にやるならそっちにして」

「はい♪」

陽乃さんは雪ノ下の背中を押しして移動する。きっと打ち合わせでもするのだろう。

しかし陽乃さんは時間大丈夫なのか？うちの部隊のバンドのほかには管弦楽の方の練習もあるだろうに…まあ大丈夫か陽乃さんだし…

\*\*\*

一日一日文化祭が近づくとたびに総武港全体の熱量は上がっていく。

「副委員長。ホムペ、テストアップ完了です」

「了解。…相模さん確認を」

「うん。OK」

「本番環境に移行してください」

雪ノ下は的確な指示を飛ばして。ひっきりなしにきている人をさばっている。そこに後ろから忍び寄った陽乃さんが抱き着いた。

「さっすが私の雪乃ちゃん」

「離れて近づかないで帰って」

「雪乃ちゃんがいじめるよ〜八幡」

雪ノ下に邪険に扱われた陽乃さんがこっちに来る

「おーよしよし。って何ですかこの茶番は」

「気にしない気にしない♪」

俺が陽乃さんをあやしているとめぐりさんと楓子さんが雪ノ下に近づくのが見えた

「雪ノ下さんあと任せていいかな？下校時間が近くなったらまた戻ってくるから」

「はい。大丈夫です」

「ありがとね！ほら八幡君もはるさんも遊んでないで行きますよ。う  
いちちゃんも待つてますし。」

「そうだね！」

陽乃さんは会議室の中を見回す

「やっぱ文実はこうでなくちゃ！あー今すっごい充実してるなー！」

陽乃さんの声にみんながうなづく。文化祭実行委員としての責務  
を果たしているからだ。ただその行動はこないだまでの文実を否定  
するものだ。机の下で相模が紙をくしゃツとしたのが分かった。

さあ、ついに明日は文化祭だ：バンド間に合うかな：

## 文化祭4

総武高文化祭一日目。

時刻は9時57分。

俺はインカムのスイッチを押し、ラグがあるため二秒ほど待つてから話し始める。

「開演三分前。開演三分前」

数秒を待たずに耳に着けているイヤホンからノイズが走る

『雪ノ下です。各員に通達。オンタイムで進行します。問題があれば即時発報を』

いくつかの部署から連絡が入る。雪ノ下がその受け答えをしている間に開始までもう間もなくとなった

「開演十秒前。九 八 七 六 五」

『四 三』

あり？いつの間にかカウント奪われてやんの。そして0になるのに合わせて今まで真っ暗だったステージに光が爆ぜる

「お前ら文化してるかー!？」

「うおおおおおー!」

ステージの上にいるめぐりさんのあおりにオーデイエンスが怒号を返す

「千葉の名物、踊りと——!？」

「祭りいいいいいい!」

「同じ阿呆なら踊らにゃ——!？」

「シンガッソ——!」

めぐりさんのコール&レスポンスで生徒たちは一気に熱狂する。

そして始まるオープニングアクト。ダンス同好会やチアリーディング部の協力とめぐりさんのマイクパフォーマンスで熱狂そのままに盛り上がってる。

それより今さらなんだけど文化してるかって何？

『こちらPA。まもなく曲あけます』

『了解。相模委員長。スタンバイします』

雪ノ下からの連絡でダンスチームは下手袖にはけ、上手袖にいるめぐりさんが相模を呼び込む。

「では、続いて実行委員長挨拶です」

ステージ中央に向かう相模の表情は硬い。千人を超す人の視線が相模に一斉に注がれる。

がちがちに緊張している相模が一声を放つ。

その瞬間。キー——ンと耳をつんざくようなハウリング。あまりのタイミングの良さに観衆はどつと笑う。

ほんとはよくもまあこんなタイミングよくハウリングが起こるもんだ。まさか仕込み!?もしそうだとしたら俺の中での相模の評価は少し上がるんだけどな。けど元がマイナススタートだから少し上がったところでマイナスであることには変わりないんだけどな。

まあ話を戻すとももちろん仕込みのわけはなく観衆の笑いの前に相模は委縮してハウリングが収まっても相模は何も言えずにいた。

すかさずめぐりさんがフォローに入る

「…では気を取り直して、実行委員長どうぞ!」

相模はめぐりさんのおかげで再起動したが焦ったおかげで手に持っていたカンペを落とす。それがまた観衆の笑いを誘う。相模は真っ赤になりながらもそれを拾う。

相模の挨拶はカンペがありながらもとちるかむは当たり前、つかえつつかえしながら進む。

それよりなんで最初からカンペを持ってんだよ。カンペは困ったときの最終手段だろ。

相模が何回も止まるせいですでに予定の時間を大分過ぎている。タイムキーパーである俺はさつきから必死に腕を回し『巻け』のサインを出しているが相模は全く気づかない。しまいには俺が前の方にいる人に応援される始末。

『以降のスケジュールを繰り上げます。各自そのつもりで』

雪ノ下からそう通信が入る。

それからやっと実行委員長の挨拶が終わり、次の進行に移る。前途多難な幕開けだ。

\*\*\*

やることなく教室内をうろうろしていると海老名さんに受付を  
するよう頼まれた。

「公演時間とか知らねーんだけど」

「入口に貼ってあるから大丈夫。入口に誰もいないってなんかかつこ  
悪いしね。座ってるだけでいいからよろしく」

マジか。座ってるだけでいいとかどんな夢ジョブだよ。最高じゃ  
ん。将来はこういう仕事に就きたいな。

「比企谷君もういいよ。ありがとね〜」

海老名さんからの夢ジョブからのリストラ宣告が下された。あー  
あもつと続けた…くわかないな。座っているだけとはいえ仕事だし。

さあこれからどうすつかな。特に回りたいところもないし。

「ハチさん。何をしているのですか？」

名前を呼ばれ振り返ると、楓子さん、めぐりさん、竹宮先輩がいた。

「クラスの方の仕事してたんですけどお役御免になったんですよ」

「八幡君のところはミュージカルだったよね？どう？お客さん入って  
る？」

めぐりさんは一度台本を見ているだけにお客さんが入っているか  
心配なのだろう

「ええ。超満員でしたよ」

「へえ〜」

実際ほんとに教室はすし詰めの状態だった。なにしろ葉山が出て  
るのだ。人が集まらないわけがない。まあそれに付き合わされた千  
種はドンマイとしか言いようがないが。その千種も本番前に千種妹  
の応援（笑）ですごいやる気を見せてたし

「超満員だったんだ…比企谷君次の公演はいつから？」

「あんまり見るのはお勧めしませんよ？」

「え、比企谷君のところなんだよね？」

「まあいろいろとあるんですよ」

もしこれのせいで竹宮先輩がはまってしまったらまだ見ぬ竹宮先輩のチームメイトに申し訳ない。

「そういえば三人そろってどうしたんですか？」

「ふうちゃんのことちゃんと三人で回ろうとしてたんだけど八幡君がいたから一緒にどうかなって」

うまく話を逸らすことに成功したようだけど…美少女三人の中に俺が入れと？なにそれ死ぬる

「えーとアレがアレでアレなので遠慮します。」

「そうなんだ」

よし。うまく断れたようだ

「よーしじゃあどこから行く!？」

え、めぐりさん？今断りましたよね？

「え、今比企谷君断らなかつた!?!用事があるって」

「大丈夫ですよ琴音。ハチさんがアレと使ったときはほとんどがめんどくさかったりただ断りたいときですから」

お、おう。バレテラ。

「そうなんだ」

竹宮先輩はそうつぶやくとジト目で俺を見てくる。それから急に下を向いたかと思うと今度は上目遣いで俺を見てきた

「そんなに私たちと回るのが嫌…なの？」

「嫌、ではないです」

自然と俺の口から漏れ出していた

「じゃあ行こう！もちろん比企谷君のおごりで！」

「え、ちよつと」

「いいねーことちゃん、ふうちゃん、どこから行く？」

「あ、私クレープ食べたい！」

「いいですね。めぐりもいい？」

「もちろん！それじゃいこー！」

え、ちよつと俺の意志は？はい無視ですか。はい

「チョコクレープ4つ！」

「はいよ！1200円だ！」

「ほら比企谷君」

「いや、ちよつと」

「みんなどうする？私はチョコケーキと紅茶にするけど」

「私はミルクフィードとコーヒーで」

「私はチーズケーキと紅茶！八幡君は？」

「あ、じゃあチーズケーキとコーヒーで…じゃなくて！」

「あ、熊谷さん！注文お願い！」

「はい！え、なんで比企谷泣いてんの？」

「あ、射的だって！」

「ハチさん、琴音。マツカンひと箱交換券がありますよ」

「なにー！」

「…比企谷君手、組まない？」

「奇遇ですね竹宮先輩。俺も今同じこと考えてましたよ。」

パンパンパンパン

「ああ、惜しい！」

「もう一回」

パンパンパン

「もう少しで倒れそうですね」

「もう一回」

パンパン バタッ

「あ、倒れた」

「…っしやあああああああああー！」

「文実だ！トロッコに乗せちまえばこっちのもんだ！」

ドタドタ

「八幡君！ふうちゃん！」

「たすけっ」

「きゃあああー!」

「おいあつちにもいるぞ!早く乗せちまえ!」

ドタドタ バタツ

「楓子さんこれって正当防衛ですよね?」

「そうですね。襲い掛かってきたわけですし。めぐり琴音おかえり。どうだった?」

「申請内容と違うようだけど、荒船君。説明して」

「フレキシブルな状況判断で…悪ノリした」

「もう荒船君!まあ楽しんでる人多いみたいだし、追加で申請書類を出すのと、利用者に説明を徹底してね」

「ああ、わかった」

「じゃあ事故には十分に気を付けてね」

「あ、そろそろ私戻らなきゃ!」

いろんなところに連れ回され、めぐりさんの言葉で時計を見ると一日目が終わる約一時間前になっていた。

「あ、私も打ち合わせがあるんだった!私も行くね!」

そして残った俺と楓子さん。

「ハチさんはこれから予定あります?」

「俺に予定があると思います?」

「…練習しましょうか」

「…はい」



## 文化祭5

俺たち記録雑務は文化祭二日目の一般公開の時の写真撮影がメインの仕事になる。

…が

「ユイこっち向いて」

さつきからユイの写真を撮っている

「もうパパ！私だけじゃなくて他の人も取ってください！」

「そうです！ハチ兄の仕事はユイちゃんの写真を撮ることじゃなくて一般のお客さんを撮ることなのです！」

「わかってないな謡は」

「なにがなのですか？」

本当に謡は分かっているようだった。なので俺は少しためを作って言う

「ユイだって一般の客だぞ？それに他の人だって撮ってる。ほら」

パシャ 油断していた謡を撮る

「ほら撮ってるだろ？」

「あーもう！ユイちゃん！お願いなのです！」

「パパがしつかりとお仕事しないと家出しますよ？」

ユイが家出…だと

「嫌だああ！」

「ならわかっていますね？」

「わかった！わかったから家出だけはやめてくれ！」

「ならいいのです」

ユイと謡がうんうんとうなずく。とそこで聞きなれた声が耳に届いた

「なにやってんのお兄ちゃんたち。こんな廊下の真ん中で」

「「あ」」

「お兄ちゃん！なにういちちゃんやユイちゃんに迷惑かけてるの！」  
「すいませんでした」

さつきまでいた廊下の真ん中ではなく人通りの少ない奥まった廊下で俺は10分以上小町に怒られていた。

「もうお説教はやめるけどもう迷惑かけちゃだめだよ」

「ああわかってるよ小町。」

正座していた足を崩す。あーやばい。くそ足しびれた。動けねえ。そんな俺に小町と一緒に居た人が近づいてきた

「久しぶり八幡…先輩」

「おう久しぶりだな。ルミルミ」

「ルミルミ言うな」

なんとなくこの会話が留美と会った時のテンプレになってるな。

「調子はどうだ？留美」

「まあまあかな。最近は勝ったり負けたりを繰り返してる感じ、です」  
おー言葉が足りない気がしてたが伝わってよかった。

それより前は敬語使えって言ったが最初がため口だっただけに留美に敬語使われるとなんかむずむずするな。

「あーなんだ、もしあれだったら俺にはため口でもいいぞ。留美に敬語使われるとむずむずするしな」

「なにそれ」

留美があきれた感じでつぶやく。

「そういえば何で小町と来たんだ？約束でもしてたのか？」

「昨日ランク戦してたら小町さんに誘われた。」

「そうか」

「お兄ちゃん小町たちはいつユイちゃんをあずかればいいんだっけ？」

謡とユイとしゃべっていたはずの小町がいつの間にかこっちに來ていた

「あーつと最後の音合わせが2時15分からだから2時くらいに頼むわ」

現在が1時半ぐらいだからあと2時間半ぐらいだな

「おっけー！手をつないでいるだけでいいんだよね？」

「ああ」

材木座が手をつなぐだけでトリオンが補給できるように改良してくれたのだ。お礼にマツカンひと箱送ってやろうとしたがその後の言動を見てやめた。あの言動さえなければ素直に感謝できるんだけどな。それ以前にマツカンじゃお礼にならない？ 知らんなそんなこと

「八幡たち何かやるの？」

「ああ。うちの隊でバンドやるんだわ」

「いつから？」

「時間は忘れたがトリとか言ってた気がする」

何でもトリは一番集客が見込める人がやるらしい。美女&美少女が4人もいるんだ。まあ人は集まるわな

「絶対見に行くね」

「おう。まあなんだ、楽しみにしてる」

「それじゃあいこつか留美ちゃん！」

「ん？一緒に回らんのか？」

てつきり一緒に回るもんかと思ってたが違うのか？すると小町は呆れたような表情になる

「チツチツチ！呆れたようなじゃなくて呆れてるんだよ」

「さらつと心読むなよ」

「お兄ちゃん今さらだよ」

ああそっか。今さらかーっておい！

「おっ！ナイスノリツツコミ！」

「なにこれ、もうやだ」

「そんなことは置いといて！せつかくユイちゃんと回れるんだから三人で！ね！」

最近は大実のせいであまり実体化させてやれなかったからな。小町が気を使ってくれたのだろう

「…ありがとな、小町」

「うんうん。お兄ちゃんに気を遣う妹。小町的にポイントたっかい♪」

「最後のがなければ素直に感謝できるのにな」

「じゃあまた後でね！」

小町と留美が人並みの中に歩いて行った。

「さて俺たちはどこに行く？」

「もうそろそろお昼ですし混む前に食べちゃった方がいいと思うので  
す」

「そうだな。ユイどこか行きたいところはあるか？」

パンフレットを見ているユイに尋ねる。ユイはトリオン兵ではあるが味覚があるらしい。

「パパこのきのこ喫茶 v s たけのこ喫茶というのは何なのでしょう  
か」

「確かきのこ派の多い二年A組とたけのこ派の多い二年B組が売り上げ  
勝負をするらしい」

各クラスの企画申請書ではそうなっていたはずだ

「パパたちはどっち派ですか？」

「俺は基本的に中立だが絶対にとっちかを選ぶとなったらたけのこか  
な」

「私もたけのこ派なのです」

「やっぱりそうなんですネ！この前いろいろ調べてたらきのこたけの  
こ戦争はたけのこ軍の勝利で幕を閉じたって情報がありました！」

「そういえばテレビでお菓子の日本一を決めるのがあってそこでた  
けのこが勝ったんだっけか」

「じゃあたけのこ喫茶に行くか？」

「はいー！」

「よう奈良坂」

たけのこ喫茶に入ると偽りのキノコ眷属である奈良坂がウェイ  
ターをしていた

「比企谷か。空いてるところにかけてくれ」

「あれハッチじゃん！」

俺たちが空いてる席に座ろうとすると奥の方から声をかけられた。

「お前らも来てたのか。米屋、出水、三輪」

「うーすハッチ！謡ちゃんもユイちゃんも久しぶりだな」

「お久しぶりです」

「久しぶりです！出水さん米屋さん、三輪さんも！」

「…悪いが先に出る。」

ユイに声をかけられた三輪はすぐに出て行ってしまった。するとすぐさま出水がフォローに入る

「ごめんなユイちゃん。あいつも悪いやつじゃないんだけど」

「いえ、三輪さんが私に良い感情は持っていないのは分かってるのに声をかけたのは私ですから」

俺はこの前上層部と千葉村来ていたボーダー組にユイのことを伝えた。

城戸さんにはあまりいい顔をされなかったが今持っている情報を渡すことを条件に認めてもらった。

「秀次追いかけるわ。行くぞ弾バカ！じゃあなハッチ！またランク戦しようぜ」

「あ、おい待て弾バカ！くそ！あいつ金払わねえで出て行きやがった！じゃあなハッチ！謡ちゃん！ユイちゃん！」

米屋を追いかけるように出水も慌ただしく出て行った

「俺たちも何か頼むか。ユイ何が食べたい？」

「私は——」

「次はどうする？」

きのご喫茶で昼食を食べた俺たちは次の目的地を決めようとした。  
いた。

「これから歌も歌いますし腹ごなしに少し動きたいのです」

「だったらウォークラリーはどうでしょう」

学校の各所にヒントがあり、それをたどりながらゴールを目指す。  
そんな感じだったな。

「いいんじゃないか？どうだ謡」

「はい。大丈夫なのです！」

「じゃあ行くか。スタートは三年C組だったな」

「比企谷君？」

昼食を食べ、腹ごなしとしてウォークラリーをしていると後ろから声をかけられた。後ろを振り向くと竹宮先輩と中性的な顔の男子に栗毛色のロングヘアの女子、メガネをかけたおとなしい感じの女子に小町と同じ中学の制服のかい（どこがとは言わないが）女子がいた。もしかしてこいつらが竹宮先輩の所属している部隊のメンバーか？

「どうも竹宮先輩」

「すみません！人違いでした！」

え？

少し戸惑っているユイと繋いでいた手が引つ張られた。ユイを見ると繋いでない方の手で目を指さしていた。あ、俺今メガネしてたんだったわ

「いや合ってますよ。ほら」

そう言いながらメガネを取る。瞬間、竹宮先輩とたぶん竹宮先輩のチームメイトの顔が驚いた表情になった

「え!?比企谷君なの!?メガネかけると全然変わるんだね。」

「まあ俺は目が腐ってささいなければイケメンですからね」

「自分で言っちゃうんだ」

「まあ冗談ですよ」

こんなこと自分で言う人がいるなら俺は精神を疑うね。いい医者紹介しますよ？

「それで後ろの人たちは？」

「私のチームメイトだよ。男の子が隊長の桐ヶ谷和人君。栗毛色の女の子が結城明日奈ちゃん。メガネの女の子が朝田詩乃ちゃん。制服の女の子が和人君の妹で直葉ちゃんだよ。直葉ちゃんはソロ隊員だけどね」

「桐ヶ谷隊の隊長の桐ヶ谷和人、高2です。よろしくお願いします」

「比企谷隊隊長の比企谷八幡だ。同じ学年だからため口でいいぞ。よろしく頼む」

中性的な顔の男子——桐ヶ谷と同じように俺も名乗る

「私は比企谷隊所属の四埜宮謡です。」

「ユイです。」

謡とユイも名乗る

「それで少しお聞きしたいことがあるんですが桐ヶ谷和人さん、結城明日奈さん、どこかでお会いしたことがありますか?」

ユイが桐ヶ谷兄と結城にこんな質問をした。どういうことだ? 少なくとも俺はこいつらとは初対面のはずだ。だとしたらまだユイがこつちに来る前、つまりネイバーフッドにいたころに? ということはこいつらはネイバーか? けどそれでも記憶がある今わからないのはおかしいか

「いや初対面のはずだけど…なぜかは分からないが俺も同じ気がするんだ。どっかでユイちゃんと会った気がする。アスナはどうだ?」

「うん。私もユイちゃんとはどこかで会ったことがある気がする」

どういう事だ? 三人が三人とも初対面のはずなのに昔に会ったような気がする。すると三人がそろって言っている。すると今まで黙っていた謡がつぶやくように言った

「…並行世界(パラレルワールド)」

「え? なんて言ったの?」

「いえ、何でもないので」

謡のつぶやきは近くにいた俺にしか聞こえなかったようで桐ヶ谷妹が聞き返していた。

並行世界(パラレルワールド)…俺たちの世界とは別の世界…そこでユイと桐ヶ谷、結城さん?(学年が分からん)が会っていたということか

「まあ思い出せないということはそこまで大切なことじゃないんじゃないか?」

「そうだな。大切なことなら忘れるわけではないし」

この話はこれでひと段落着いたようだ。ほんとに必要なことならいずれ思い出すだろうし今はそこまで気にする必要もないだろう

「あの、比企谷さんって比企谷小町ちゃんって知ってますか?」

話が終わったと思ったら今度は桐ヶ谷妹に話しかけられた

「知ってるも何も妹だ」

「わあ！珍しい名字だからもしかしたらと思っただんですがやっぱりそうなんですわ！あたし小町ちゃんとは1, 2年と同じクラスだったんです。それであの…もしよければ今度手合わせしてもらえませんか？」

「あ、おいスグ！ずるいぞ！比企谷俺も手合わせしてもらえないか？」  
「もちろんいいですよ」

ねえ謡さん。なんで俺の代わりに答えてるんですか

「どうせハチ兄は理由もなく断りますから」

…なんかもうこのまま俺は一言も発さずに会話することができそうなのがしてきた

「もうキリト君！直葉ちゃんも！」

「けどアスナA級の実力を生で見てもみたくないか？」

「それは思うけども…」

「だったらチーム戦にしますか？直葉さんは和人さんのチームに入つて4対4で」

まあそれならいいのか？俺一人にかかる負担は少ないし。…俺が戦うのは確定なんですね…はあ

「みんなもそれでいいか？」

向こうの全員がうなづく。

「わかりました。私たちはこれから予定がありますので細かい話はまた今度でいいです」

時計を見るともうすぐ2時というところまで来ていた

「ああ、わかった。」

「では失礼するのです」

竹宮先輩たちと別れて俺たちは小町たちとの集合場所を目指した

音合わせを終え、舞台裏に向かうとエンディングセレモニーの担当のスタッフ深刻な表情で集まっていた。

「琴ちゃんなんかあったの？」

めぐりさんが集まっていた竹宮先輩に尋ねる



「あ、めぐり！みんなも！あのね、相模さんがいなくなったの」

竹宮先輩とそこ場にいた雪ノ下から詳しく話を聞くとエンディングセレモニーの最終打ち合わせの時間になっても相模は来なくて、連絡もつながらないらしい。

「相模が来ないなら代役立てんのは？」

「それは難しいわ。挨拶や総評はともかく地域賞の投票結果を知っているのは相模さんだけなもの」

「じゃあでっち上げんのは？」

「却下」

雪ノ下だけでなくめぐりさんや楓子さんにまで却下された。一番現実的は案だと思っただけどやっぱりだめか

「集計し直すのは？」

「さすがに時間がなさすぎるわ」

他の案を考えていると袖を引っ張られる

「たぶんユイちゃんならできると思うのです」

あーそれは思いつかなかったわ。確かにユイならできそうだな。

「誰か集計前のデータ俺のスマホに送ってくれ。たぶん俺の知り合いなら集計できると思う」

「本当の集計し直せるのかしら？」

「このまま何も手を打たずにいるよりいいだろ」

「…竹宮先輩お願いします」

「わかった。比企谷君アドレス教えて」

竹宮先輩にアドレスを教えている間に謡に小町に連絡してもらってユイに帰ってきてもらう。

そして電話しているふりをする

「ユイどれくらいで終わる？」

「10分もあれば終わりますパパ！」

「お願いしていいか？」

「もちろんです！任せてくださいパパー！」

ユイが言ったことをみんなに伝える

「10分もあれば終わるそうだ」

「最後あなたたちしか残ってないのに無理よ」

「いや大丈夫だろ。」

いつの間にかいなくなっていた陽乃さんが何枚かの紙を持ってきた

「雪乃ちゃん追加で一曲やらせてね〜はい八幡。これ楽譜ね。どれくらいでできるようになる?」

渡された楽譜を見てみる。楽曲はあまり音楽番組を見ない俺でも知ってる曲。これなら…

「…10秒ください。楓子さんたちは練習しなくて大丈夫なんですか?」

「一度さらえば何とかなりますよ」

「それよりハチ兄は2時間強で大丈夫なのですか?」

「死ぬ気で覚える。そういえば相模の搜索は誰かにやらせておいてください」

「分かってる。みんないる?」

めぐりさんが誰もいない空間に呼びかけるとどこからか生徒会役員の方々が現れる。久しぶりに見たけどすごいな

「相模さんの搜索お願いできる?」

「御意」

それだけ言うと生徒会の役員の方たちはすぐに探しに出かけた。

「偶然いた隼人にも頼んでおいたからね〜」

陽乃さんがみんなに向かって言う。

「それじゃ俺もやりますか」

せわしなく動いてる人の間を縫い、端っこに行く。そして久方ぶりにサイドエフェクトを発動させる。前回使った時に気付いたのだがサイドエフェクトを使った状態で極限まで集中すると、なんかこう、どう表現したらいいのか分からないが、なんか何も無い空間に行くのだ。そこでは思い浮かべたものが実体化するのだ。今回はこれを使う。まず初めの5秒、俺の中では1時間20分くらいで楽譜を覚える。それから残った時間をハイレベルでのシミュレーションに使う。(わかりづらいため最初の状態をロウレベル、ロウレベルから集中し

た状態をハイレベルと名付けた) 思い浮かべて実体化すると言っても、あくまで俺の創造なので周りがどう動くかわからないやつはできないが、今回ならば自分の運指のタイミングさえできれば何とかなる。…はず

「バーストリンク」

「…ふう」

うえ。少し酔った。俺のサイドエフェクトは便利なんだけど使いすぎると酔うことが玉に瑕だな

「八幡お帰り。できるようになった？」

「たぶん。それより氷ってあります？」

「あるよ。はい」

「ありがとうございます」

陽乃さんから氷を受け取り口に含む。車とかに酔った時は氷をなめると治るぞ。これ豆な。

酔いを直してから軽く運指の確認をする

『最後はプルバリーです！どうぞ！』

俺たちのバンド名がコールされる。バンド名の由来？比企谷隊だから比企↓引く↓プルと谷↓バリー、繋げてプルバリー。…安直だな  
「八幡の準備もできたことだしこーか！」

そして俺たちの演奏が始まるのです！…違うな

\*\*\*

結局、相模は葉山に連れられてエンディングセレモニーが終わった後、つまりすべてが終わった後に帰ってきた。葉山に説得されたときに泣いたのか化粧の崩れた相模の顔に刺さる逃げたという文実からの視線。その視線を受け相模は

逃げ出した。

葉山は追いかけたがしばらくすると見失ったようであなだれて帰ってきた。

そしてそのまま総武高校文化祭は幕を閉じた。後日相模は行方不明と発表された。

\*\*\*

少女は走る。ただひたすらに。そして気づく

「ここは？…あれはボーダー本部かな？というところは警戒区域!？」

そして少女は運が悪かった

『ゲート発生ゲート発生。座標誘導誤差8・15。近隣の皆様はご注意ください』

「ウチ、ネイバーに食べられて死ぬんだ」

そこで少女の意識はなくなった

ここはある国の遠征艇の中。二人の男女が一人の少女を見ていた  
「隊長この少女はどうしますか」

「連れて帰るぞ。トリガー使いではないが玄界の貴重な情報源だ。それに我が国ではだれも使えないあのトリガーが使えるかもしれない」

「はい。ハイレイン隊長（…………）」

その日玄界から一人の少女が消えた

## 修学旅行編 修学旅行1

総武高校2年生は文化祭が終わり、体育祭も終わると一気に修学旅行の雰囲気染まる。

文化祭での相模の行方不明のことで、体育祭が始まるまでは2年生全体が暗い雰囲気となっていたが、げんきんなもので体育祭が終わるころにはすっかり文化祭以前の雰囲気に戻っていた。以前の雰囲気に戻ったとなると、わいわいがやがやうるさいのなんの。もう騒いでないと生きていられないのか？思うほど。これだったらまだ暗い雰囲気の方がよかったかもしれない。ちなみになんだが相模は一般的にはただの行方不明となっているが実際はネイバーに攫われている。俺たちの前から走り去った後、警戒区域に設置していた監視カメラが警戒区域内にいる相模を捉えていて、攫われたところの映像はなかったが監視カメラに映った相模の予想進路とちょうど運の悪いことに発生したゲートの座標が一致した。

それで相模がいなくなれば攫われたと考えるのが妥当だろう。ま、どうでもいいんだけどね。相模がいようがいまいがリア充どもがうるさいことには変わらない。

「はあ」

思わずため息が出てしまう。

「どしたんヒキオ。ため息ついて」

「どうしてこんなことになってんのかなーと思っただけ」

俺の机の周りでそれぞれの昼食を広げる川崎、三浦、千種、海老名さん。ほんとに何でこんなことになってんだろ。今日はあいにくの雨でベストプレイスが使えず、しかたなく教室で食つてるとなぜか急に集まりだしていつの間にか机が合わせられていた。ごめんね隣の関君。いつも授業中にやってる暇つぶし、最近すごい凝ったものになってきたね。俺は君の暇つぶしが先生に見つからないことを祈ってるよ。…あれ何の話してたんだっけ？

「何でお前らここのいの?」

「ヒキオが珍しく教室でご飯食べてたから来ただけだし。そういえばあんたつぎのLHRどうすんの?」

「なんかあるのか?」

LHRなんかいつも寝てるから内容なんて気にしたことねーわ

「うん。修学旅行の班決め」

「別に普段と変わんねーよ。余ったところと組むだけだ。」

「うわ!比企谷らしい」

「お前に言われたかねえよサキサキ。おまえは今までどうしてたんだよ」

「サキサキ言うな。…ごめんなさい」

ほらやつぱり川崎も同じだったんじゃないか

「比企谷組む相手いないなら組まないか?知ってるやつの方が気が楽でいいだろ」

「まあそうだな。組むか」

「かす×はちキターー!」

「ちよ海老名!鼻血ふけし!」

海老名さんの鼻血から必死に購買で買ったパンを守る。

「あと二人どうする?」

「戸塚とあとは余ったやつでいいだろ」

「お前戸塚好きすぎだろ」

「だって戸塚だぞ。」

戦争している国に戸塚を連れて行けば世界から戦争は消えるまである。いや戸塚を戦争になんて危険な場所に連れて行けるわけないだろ。

「えつとぼくが何かな?」

「戸塚はかわいいなって話をしてただけだ」

いつの間にか戸塚が近くに来ていたようだ

「もう八幡!ぼくだって怒るんだからね!」

頬を膨らませ怒ったような表情をする戸塚。やべえ…ちようかわええ。

「戸塚もしよかったら修学旅行同じ班にならないか？」

よしナイス提案だ千種。

「うん。もちろんいいよ！」

次の時間に行われたLHRの班決めでは人数の関係上で俺たちは三人の班になることができた。

ああ、いい修学旅行になりそうだな

「隼人君計画通り優美子たちと同じ班になることができたよ！」

「それはよかった。これで戸部が告白を成功させればきつと…」

「優美子と姫菜は戻ってきてくれるしヒツキーと仲直りできるんだよね？」

「ああ。だから絶対戸部の告白を成功させるぞ」

「うん！ゆきのんも手伝ってくれてくれるって言ってたし、あたしも頑張つてフォローする！」

\*\*\*

一度東京駅に集まってから点呼をし、新幹線に乗り込む。

「あーし窓側がいい。」

開口一番に自分の希望を言う三浦

「サキサキはどこでもいい？」

「サキサキ言うな。別にどこでもいい」

「じゃあ優美子が窓側で沙希が真ん中、私が通路側だね。で、反対側の窓側が戸塚君、その隣が比企谷君、通路側が霞君ね」

いつの間にか俺たちの席が決まっているだと…？こういう場合孤立高系ボッチである俺は黙って端っこに行くというのに

「いや俺たちは適当にどっか空いてる場所座るから」

「もう新幹線も出ちやうし早く座らないと」

ほんとにもう新幹線が出発しそうだったので仕方なく海老名さんが言った通りに座る。

「結衣は通路挟んだそっち側でいい？」

「全然大丈夫だよ」

どこに座ろうか迷っていたような由比ヶ浜に海老名さんが声をか

け座らせる

由比ヶ浜が座るとちようど新幹線が出発した。

「ヒキオ食べる？」

三浦の手にはきのこの山とたけのこの里の箱があった。きのこはたくさん余っているのに対したけのこの里は空っぽ。

「なあ、たけのこがないんだけど」

「ほんとだ。最後のたけのこは…」

三浦が俺の左隣、つまり千種の方を見る。千種は手の中にあつたたけのこを口に入れる

「あ、悪い。もう食べたわ」

「おい今慌てて食べたよなあ」

そのときお手洗いに行っていた川崎が戻ってくる。

「沙希これ食べる？」

三浦は川崎にも俺の時と同じように、しかしきのこの箱だけを差し出す

「あたしたけのこ派なんだけど」

………

「やめたげて！きのこが…きのこがかわいそうだから！」

東京駅から約2時間。俺たちは京都の地に降り立った。

京都駅からバスに乗り清水寺などの観光地を巡り今日の予定は終了。俺たちは宿へと入った。

飯を食い、俺はロビーの一角でユイからの情報で京都にMAXコーヒーがないことを知った俺は持参したMAXコーヒーを飲みながら電話をしているふりをする

「ユイ、京都はどうだ？」

今日一日俺の胸ポケットに入れていたスマホのレンズから一緒に京都を回っていたユイに尋ねる

「とつても面白いですパー！この国の文化を見ることができてとても興味深いです！」



「そうかユイが楽しそうで俺はよかったよ」

そこで俺たちに近づいてくる足音が一つ。

「比企谷くんなどところで何してるんだ？」

「よう奈良坂。」

周囲に誰もいないことを確認してからスマホの画面を奈良坂の方へ向ける

「お久しぶりです！奈良坂さん」

「そういうことか。久しぶりだなユイちゃん。文化祭以来か？」

「そうですね。文化祭以来会ってないと思います。奈良坂さんは何しにここに？」

「飲み物でも買おうと思ってな。そういえば比企谷上層部へのお土産はどうする？」

俺たち総武高のボーダー隊員は日ごろお世話になっている上層部へのお土産をみんなで、まとめてという形ではあるが買っていくことにしている。

「誰かが買つとくか、三日目くらいに一回集まって買うか、だなあ」

「まあ全員と相談してだな」

「お二人とも誰か来ます」

奈良坂と会話をしている気づかなかったが確かに足音がしていた。奈良坂と二人で足音のする方を見ているとそこから現れたのはスーツの上にコートを羽織りサングラスをかけた平塚先生だった

「あれは平塚先生か？」

奈良坂の言葉に反応したのか平塚先生がこちらの方を見る。そして驚いた表情になる。

ほうほう。これはあれだな

「平塚先生まさかラーメンを食いに行こうとしてませんかよ？」

「な、なんのことかね？」

嘘下手か！そんなに動揺したら嘘だとすぐにわかるわ！

「あーあこのままだとほかの先生の前で某h塚先生がラーメン食いに行こうとしてたとか口が滑ってしまいそうだな〜誰かがラーメンおごってくれたら口が堅くなる気がするな〜」

奈良坂が隣で呆れた表情になっるのが分かった

「一緒に来るかね？」

「お供します。奈良坂はどうする？」

「いや俺は遠慮する。失礼します」

奈良坂は部屋がある方へと戻っていった。

「私たちも行くぞ」

平塚先生は俺を伴い颯爽と夜の京都へ繰り出した

## 修学旅行2

修学旅行2日目。

今日はグループ行動となり太秦から洛西エリアを巡っていく。

今日の最初の目的地は映画村だ。最初の映画村までは三浦たちも同じらしく一緒に行動している。

俺たちと同じ修学旅行生や観光客で超満員のバスから吐き出されるように降り、映画村の中に入る。

ひとまずは中を見て回ることにになり、江戸の街並みになっているあたりをしゃべりながら抜けていく。

「最近小町ってどうしてるし。合同演習の時以外本部で全然見かけないんだけど」

「ああ、小町なら今は猛勉強中だ。一回テストでいい点とったからって調子に乗って勉強さぼってたら次のテストでやらかしてな。それを楓子さんが知って勉強させてる。しばらくは合同演習以外ではボーダーの方には行かせないって楓子さんは言ってたな。」

小町は楓子さんに勉強教わり始めてから初めてのテストでどや顔でテストの結果を見せてきたのに、次のテストではかたくなにテストの結果を見せようとしなかった。業を煮やした俺と楓子さんと協力して強引に奪った結果、全教科80点を越えてたのに次の方ではほとんどが平均かそれより少し上くらいに収まっていた。それを見た楓子さんが怒って、怒った楓子さんを見た俺もビビった。

「小町は総武受けるんだっけ？今の小町の成績はわかんないけど頑張らないとだね」

「ああ。一応本人にも危機感があったみたいだし、このままじゃ年内にB級に上がれないってぼやいやいたが、まあまじめに勉強してるよ。そういえばお前たちはどうなんだ？すぐにB級に上がれそうか？」

「たぶんもうすぐ上がれるかな。あーしと明日葉はもう3800は越えてるし。沙希は少し低くて3600くらいだったと思う。あと、留美は3500くらいって言ってた」

「そうか」

それくらいならたぶん修学旅行が終わったらすぐにみんなB級に上げれるな。千種がどうなってるのかわからないがこいつらが部隊組む日も近いな。

三浦と最後尾でしゃべっていると前の方にいた由比ヶ浜が突然大きな声を出した。

「あ、あれ、隼人君たちじゃない？おーい隼人くーん！」

由比ヶ浜が離れたところにいた葉山と戸部達を呼ぶ。

「やあみんな。まさか偶然会えるとは思ってなかったよ。」

「ダウト」

いつの間にか近くに移動してきていた千種のつぶやきに反応したのは近くにはいた俺とこちらもいつの間にか移動してきていた川崎だけだった。三浦もいつの間にか前の方に移動していた。なんかみんな俺の知らない間に移動してんの多くな？なにみんな飛廉脚でも使えるの？じゃあ俺は瞬歩使いたい。まあそんなことはどうでもよくて、川崎が千種に今の言葉について聞く。

「どういう事？」

「葉山が偶然と言った時に心音に変化があった。絶対じゃないがたぶん葉山は嘘をついていると思う。」

「あいつらは狙ってここに来たということか？」

「偶然が嘘ならそうなるだろうな。」

問題は誰を狙って何のために来たかだな。少なくとも狙いは俺たち男子じゃないよな？…やべえ海老名さんの目が光った気がする。これ以上考えるとまずいな。狙いは女子の誰か。しかしこれは俺たちが考えてもどうしようもない気がする。

「川崎何の目的で来たかわからない以上警戒というか一応気にしておいてくれ。」

「わかってる。もし何かしてくるようならやつちやつてもいいよね？」

川崎がこぶしを握り締めている。

「ほごほごこな」

俺たちが相談を終えるとタイミングを見はかつらたかのように声がかかった

「おい沙希ちゃん、霞君、比企谷君。次はあそこに行こうだって！」  
海老名さんの指さす先には史上最怖のお化け屋敷なるものがあった。

「え？」

川崎の口から出た言葉と反応に俺たちは驚きを隠せなかった。

\*\*\*

映画村で三浦たちと別れた俺、戸塚、千種の三人は龍安寺に向かった。もちろんロックガーデンこと石庭を見るためだ。

枯山水。

つまりは水を使わず、石やなんかでそれを表現する庭園様式のことである。

三人でそれを座ってぼーっと眺める。しばらく眺めていると声をかけられた。

「あ、お兄。比企谷に戸塚も」

振り向くとそこには千種妹がいた

「おう明日葉」

「よう千種妹」

「こんにちは明日葉ちゃん」

三人がそれぞれ挨拶を返していく

「あれ？優美子たちは？一緒に回ってるんじゃないの？」

「最初の映画村までな。そこから別行動だ。」

「ふーん。じゃあさつき一緒に居たのは誰だったんだろ」

「さつき？三浦たちにあつたのか？」

「会ったというか一瞬見かけたんだけど。優美子と沙希に姫菜。あと胸の大きな子と男子が何人かいたからお兄たちかと思っただけど…」

葉山たちが一緒に行動してるってことか？

「明日葉ちゃんそろそろいいこ？」

「友達に呼ばれたしあたしはもう行くよ。じゃーねー」

「ああ。じゃあな」

「うん。じゃあね」

「おう。じゃあまた」

千種妹が来た時を同じように三人それぞれ千種妹に返事を返すと千種妹は同じグループの人といなくなつた

「俺たちもそろつと移動するか。次はどこだっけ？」

「金閣寺だよ。」

「うへえ。また歩くのか」

「まあまあ霞君。それじゃあいこっか」

俺たちは龍安寺を後にし金閣寺へと歩を進めた。

\*\*\*

修学旅行3日目。

この日は完全自由行動だ。誰と大阪に行こうとも奈良に行こうともいい日だ。

今日は千種は三浦たちと、戸塚はテニス部の人たちと行動するらしい。

そんなわけで俺は今日は一人で京都を見て回る：訳ではなかった

「パパまずはどこから行きましようか」

そうユイと一緒になのだ。宿で朝食を食べ自由行動の時間になつたらすぐに宿から出て人目のないところでユイを実体化させた。

「そうだな：伏見稲荷大社かな。」

「千本鳥居のところですね。」

「ああ。じゃ行くか」

「はい！」

伏見稲荷大社で千本鳥居の道をユイと歩いている

「昔の人は何でここに鳥居を千本も立てたんだろうな」

「ネットで調べて情報だところら辺は神の降臨地である山の入り口で現世から神様のいる幽界へと続く門として建てられたのが始まりらしいですよ。それに鳥居は実際は一万基くらいあるそうですよ」

一万：か。こう思うのは違うんだろうけど、信仰心がそこまでない

俺からしたらそれだけ立てれば労力もコストもかなりかかっただろう。うってやっぱり思うんだよな。

「パパそこにお茶屋さんがあることですし一回休憩しませんか？私はまだ京都に来て何も食べてないので何か食べてみたいですよ！」

「そうだな一回休憩するか」

ユイと近くの茶屋に入り注文をする。二人とも緑茶を頼みユイは追加で団子を頼んでいた。

「パパこれからの予定はどうしますか」

「うーんと北野天満宮で小町のお守りを買ってから嵐山でボーダー連中と合流かな。ユイはどこか行きたいところあるか？」

「嵐山のライトアップされた竹林が見たいです」

「ライトアップされた竹林か…」

ライトアップということは当然夜になるよな。どこかのタイミングで抜け出すか。

「わかった。じゃあさつき言った通りに行動して、夜になったらどこかのタイミングで抜け出すから見に行くか」

これからの予定が決まったところでちようどお茶と団子が運ばれてきた。

「うまい」

運ばれてきたお茶を一口飲みそう思った。

「確かにおいしいです。素材が違うところも違うものなんですな」

ほんとにユイの言った通りだと思った。素材の違いでこんなにも差が出るなんてな。

これ茶葉とか売ってたりしないだろうか。俺が入れたんじゃ味は落ちるだろうがみんなにもこれを飲んでもらいたい。

そう思って店内を見てみる。お、あった。

「ユイちよつと待っててくれ。茶葉を買ってくる。」

ユイを待たせて、家の分とうちの隊用に二袋茶葉を買った。あとは嵐山でお茶うけになりそうなるものを買ってあと個別のお土産と上層部へのお土産を買いまわすお土産はいいか。

「パパそろそろ行きましよう」

「よし行くか」

会計を済ませ俺たちは次の目的地である北野天満宮を目指した。

\*\*\*

北野天満宮で小町のお守りを買ひ、嵐山で上層部へのお土産を買うと自由行動終了の時間となっていた。

みんなで宿に戻り夕食を食べ、部屋に戻る。

本来ならこれから入浴時間なのだがユイと約束した竹林を見るために風呂は後回しにする。

「八幡これから入浴だけど準備しないの？」

入浴の時間なのに準備しない俺を疑問に思ったのか戸塚が訪ねてくる。

「ああ、ちよつとな」

「あーあれだろ。ユイとライトアップされた竹林を見に行くんだろ」

あ：千種がばらしやがった。千種をにらむがもう口から出てしまったものは戻せない

「え!?ユイちゃんがいるの!?!」

戸塚はユイという言葉にすごく反応した。：そっか。戸塚は千葉村以降ユイと会ってないのか

「ああ。ユイも親の仕事の都合でちようどこっちに来てて、ずっとホテルの中に居させるのもかわいそうだからって今日は自由行動だったから俺に預けててな。それでユイとライトアップされた竹林を見に行こうって約束しちまってこれから見に行くんだ」

見よこの口からあふれ出た出まかせを。戸塚にうそをつくのほうがいいがユイのことを教えるわけにはいかないしこうするしかないのだ

「あのさ八幡：もしよかったら僕も行っていいかな?久しぶりにユイちゃんに僕も会いたいし」

そこでスマホが震える。きつとこれはユイの合図だろう

「もちろんいいぞ。で、千種も来るよな?」

こうなったら千種も共犯にしないと。ぐっへっへ

「いや俺は



「来るよな?」

「…わかった」

よしこれで千種も共犯だ。それからユイを迎えに行くふりをして  
先行しユイを実体化させ、竹林を目指した

\*\*\*

ねえ何でこんなことになってんの?

俺たちの視線の先には海老名さんと今にも告白しそうな戸部。そ  
してさらにその奥には雪ノ下と由比ヶ浜、葉山の姿も見える。

2日目に偶然を装って会ったのはこのためだったのか

「ねえどうする?このまま見てるのも戸部君たちに悪いし」

「けど実際戻れないしなあ」

ここに来る途中で巡回をしている先生を見つかりそうになりとつ  
さに入ったこの通路でこの場面に出くわしたのだ。

「あのさ、俺さ…」

そうこうしている間に戸部が告白を始める。

「ボーダーのエンジニアになりたいんだけどどうしたらいいかな?」

「へ?」

海老名さんの口からそんな言葉が漏れた。もちろん俺たちも同じ  
気持ちだ。

「えーと何で私なの?優美子でも比企谷君でもいいと思うんだけど」

「いやー優美子はあるまじ知らなさそうだし比企谷君はいつも一人で  
いるから何か話しかけづらいべ」

「…プツ!」

こつちにいる千種、戸塚、ユイが三人そろってふきだした。え?こ  
れ怒っちゃっていいよね?そんなわけで千種の頭をつかみ握りつづ  
すがごとく力を入れる。

「いたあああああああ!比企谷!何で俺だけ!」

「あん?そんなもん戸塚やユイにアイアンクローなんてできるわけな  
いだろ」

「!おい比企谷。やばい先生が来る」

俺たちは再びアイコンタクトをし…

「ユイおぶされ。逃げるぞー！」

脱兎のごとく駆け出した。

「え！何で比企谷君に戸塚に千種君も!?」

いきなり走って出てきた俺たちに戸部が驚くがそれに反応している暇はない

「先生が来る。見つかりたくなきゃ逃げろ」

短くそう伝えると状況が分かったようだ

「逃げるべ。海老名さん手を」

戸部が海老名さんの手を取り逃げ出した。そのまま戸部達の後ろにいた葉山たちとも合流し、先生の目をかいくぐりつつ宿に向かう。「戸塚おれはユイをホテルまで送り届けなきゃだからこっちに行く。先生になんか言われたらうまくごまかしておいてくれ。」

「うん。気をつけてね八幡。じゃあねユイちゃん！」

「はい！サヨナラです戸塚さん！」

戸塚たちとは別の道に入りしばらく走ったところで足を止めた。

「ふう。ここなら大丈夫だろ。竹林どうだった？」

「とてもきれいでした！今度はねえや楓子さんたちとみんなで見に来たいです」

「そうだな。また今度、次は京都じゃなくても沖縄とかでもみんなで行くか」

「はい！じゃあパパおやすみなさい」

「おうおやすみ」

ユイがトリオンの粒子となって俺のスマホに戻っていった。

「さて俺も宿に戻りますか」

そうして俺の修学旅行は幕を閉じた。

あのあと海老名さんを通し正式に戸部がエンジニアになりたいと言ってきたので材木座を紹介しといた、

## 修学旅行3

修学旅行が終わり次の土曜日。この日は桐ヶ谷隊とのチーム戦をする日となっていた。

「特に警戒しなきゃならないのは桐ヶ谷と結城です。柔軟に行きましよう」

「はーん」

俺の作戦？の確認に返ってきた返事は三つ。楓子さん、謡、それからユイのものだ。陽乃さんは家の方で、めぐりさんは生徒会の仕事が急ぎよ入ってしまった欠席。ユイにはめぐりさんの代わりにオペレーターをしてもらおう。

『比企谷準備できたか？』

「ああ。こっちはオーケーだ」

『わかったじゃあ始めるぞ』

こうして俺たち比企谷隊対桐ヶ谷隊のチームランク戦が始まった。

\*\*\*

転送先は道路の上。マップは市街地Aか？

リーダーを確認すると楓子さんと相手のスナイパーの朝田だったか？の分が映らず5個の点がある。

「謡、バッグワームを着けて近くの高い建物に上がってくれ。タイミングを見てトーレンツを打ち込むぞ。タイミングは指示する。楓子さんは狙撃地点に。俺は相手が合流する前にちよつかいかけてきます。ユイ、楓子さんの狙撃地点の選定と相手の合流地点からスナイパーを居場所の絞り込み、できるか？」

『任せてくださいいパー！』

さてと俺も行きますか。

「お、いたいた。バイパー」

グラスホップパーで近づきすでに合流していた結城と桐ヶ谷妹を視界に収めるとバイパーを放つ。当たりそうだったバイパーはすべてシールドで防がる。

「アステロイド」

シールドで防ぐと結城はアステロイドを展開し反撃してくる。

「バイパー」

それを俺は威力を高めに設定したバイパーをぶつけて相殺すると弧月を展開し接近してきていた桐ヶ谷妹と打ち合わせる。桐ヶ谷妹の剣は俺たちボーダーに入ってから剣を握ってきたある意味なんちやって剣士と比べると太刀筋が違う。たぶんボーダーに入る前からずっと剣道をしてきたのだと思う。

しかし俺たちがしているのはルールに縛られた剣道の試合ではなくルールなしの殺しあいだ。桐ヶ谷妹が振り下ろす手の軌道上にグラスホッパーを設置。無理やり手を撥ね上げさせると空いた胴に向かつて弧月を一s

『パパー!』

桐ヶ谷妹への攻撃を取りやめ、桐ヶ谷妹の後ろから飛んできたバイパーをシールドで防ぎ後退する。その間に桐ヶ谷妹も結城のところまで後退する。

「直葉ちゃん大丈夫?」

「はい、なんとか」

「二人で協力してキリト君が来るまでの時間を稼ごう」

結城はそう言うのと弧月を手を持ち目の高さで水平に俺に向けて構える。彼我の距離は10メートルくらい。この距離で弧月の攻撃は旋空くらい: 違う! 確か修学旅行の少し前くらいに材木座が旋空と似た新しいオプショントリガーを開発したと言っていた。そのオプショントリガーの名は…

「閃光弧月」

そう閃光だ。簡単に言えば突きの旋空。しかしモーションに特徴がある。旋空とは違い刀を振る必要がなく、構えた刀を突き出して手元に戻すだけで打てる。つまりこいつの一番の利点は連射性能だ

「はあああああ!」

結城の閃光弧月による連撃が俺の身体を襲う。だが残念。俺には速さ系の遠距離攻撃はきかん!

「バーストリンク」

一つずつ的確に局所シールドを張り防いでいく。そして結城の閃光の影にかくれて近付いてきていた桐ヶ谷妹にバイパーで牽制をする。あと後のことを考えるとここら辺が限界か

「バーストアウト」

加速を解くとちようどユイから通信が入る。

『パパ、和人さんが後ろから来てます！』

「了解！」

俺がグラスホッパーで大きく移動するとさつきまで俺のいた場所には弧月を持った桐ヶ谷がいた。

「俺がいない間に俺の彼女と妹にちよっかいかけるのやめてもらおうか」

あ？なんつったこいつ。俺の彼女だと…リア充死すべし！

『謡！』

『はい！』

俺の後方から初めは一本の矢が幾本にも分裂し合流した三人に目掛けて飛ぶ。そしてその矢は着弾いや着矢と同時に爆発し周囲を煙で包み込む。俺はその煙に乗じて横なぎに一閃

「旋空弧月！」

俺の怒りを込めた一撃は煙を切り裂き、煙の中にいた一人をバイルアウトさせた。

煙が晴れてそこにいたのは腹から少しトリオンを漏らした桐ヶ谷と無傷な結城だった。

バイルアウトしたのは桐ヶ谷妹か。たぶん結城は射程範囲外だな

「アスナ謡ちゃんの方へ向かってくれ。あの爆撃が続くのはきつい」

「わかった！キリト君も気を付けてね」

いやいや二人とも内部通話にしようよ。俺に丸聞こえだよ？まあこの状況で結城がどっかに行けば謡のところに向かったってわかるけどさ

『謡、楓子さん、結城がそっちに向かいました。楓子さんは結城をお願いします。謡はすぐにバツグワームを付け直して楓子さんのフオロー。スナイパーの攻撃があったときはそっちの対応をしてくれ。』

『了解！』

さあてやろうか桐ヶ谷

\*\*\*

楓子は周りの警戒をしながら謡がさつきまでいた場所を目指している結城明日奈——アスナを近くにあるビルから見ている（さてどうしましょうか。まずはスナイパーの居場所を知りたいですね）

『ユイ、スナイパーの位置の絞り込みは終わってますか？』

『はい。現在戦闘中のパパと和人さん、ねえがさつきまでいたあたりで戦闘が起こった場合に最も狙撃しやすい位置を絞り込んであります。視界に表示させましょうか？』

『お願いします』

楓子の視界に位置が表示される。そして楓子は自身の勘とスナイパーとしての経験を総動員してそこからさらに自分なりの順位をつける

『謡、結城さんは私が止めますので、トーレンツで今から言う建物を破壊してください。まずは謡のいるところから左に300m先にあるお店。次は右前方160m先にあるビル。次は——。最後に200m前方の建物です』

『わかりました』

謡の返事を聞くと楓子はイーグレットを展開し移動し続けているアスナに照準を合わせた。

\*\*\*

朝田詩乃——シノンには焦っていた。先ほどから狙撃地点が悉く潰されていたことに。一度爆撃の主である謡を倒すことも考えた。しかし、謡が立っているのはここらへんで一番高い建物の屋上。他の建物の高さでは十分に謡の姿を捉えることはできない。そのため謡を倒すことは断念し、楓子に狙いを絞っている

（ここなら……大丈夫そうね）

先ほどから爆撃は止まっており、たぶんキリトたちの方へ移動したのだろうとシノンは考えていた。シノンは焦っていたがゆえにそれ

が毘であることに気付かなかった。

そしてそれに気づいたのは自分がベイルアウトさせられた後だった。

\*\*\*

(謡は作戦通りうまく仕留めたようですね。そろそろこちらでも終わらせましょうか)

楓子はアスナとの戦いではアスナの攻撃を避けてから攻撃することを主体として戦っていた。しかし楓子はここでその戦い方をやめた。避けるのではなく受け流す。俗に柔法と呼ばれる方法である。

アスナの弧月による刺突攻撃を掌で円軌道を描くように受け流しアスナの体勢が崩れたところでスコープIONを出し、アスナの首を斬った。

\*\*\*

俺は視界の端でベイルアウトの光が二つ上がったのを捉えた。たぶん楓子さんと謡が倒してくれたのだろう。お願いそうであって。こいつ倒した後さらにさらにほかの奴の相手なんて面倒で仕方ないからしかしちよつとやばいな。俺が左腕をくつついてはいるが使えるいのに対し、桐ヶ谷は身体のおちこちに傷はあるとはいええ部位欠損はなし。

あれさえ使えれば勝てるだろうけどそのためには桐ヶ谷の動きを一瞬止める必要がある。

さあどうやって桐ヶ谷の足を止めさせるか…とりまメテオラをばらまくか。うまく引つかかってくれよ

「メテオラー！」

桐ヶ谷の周りに煙を立ち込めさせこちらを見にくくする。ここで桐ヶ谷が旋空を使ってくれれば

「旋空弧月！」

来た！桐ヶ谷の旋空は狙い通り囷として置いてきた使えなかった左腕を切り裂く。

左腕を自分で切つてさらにトリオンは漏れたものの、たぶん俺の残りのトリオンは60パーくらい。これならいける！見せてやろう陽

乃さんでも突破することのできなかつた牢獄の威力を！

「バーストリンクー！」

加速した俺は残りのトリオンをすべて使いバイパーとメテオラを合成させトマホークを作る。(加速の状態でも合成弾をいつの間にか作れるようになっていた)それをほぼ止まっている桐ヶ谷に向けて何層にもわたる鳥籠を作るように弾道の設定をする。射程にはあまり割かず威力と弾速にトリオンのほとんどを振る。するとなんということでしょうか！自分に向かって狭まる触れると爆発する檻の出来上がり！

あの陽乃さんでさえもこの檻の攻略はできなかつたからな。さすがに攻略はできないだろう…フラグじゃないよね？

一応心配していたがそんなことは起こらずに桐ヶ谷はベイルアウトした。その瞬間俺たちの勝利を告げるアナウンスが入った

『模擬チームランク戦終了 勝者比企谷八幡 倉崎楓子 四埜宮謡』

\*\*\*

「あー疲れた。予想外に強かつたし」

模擬戦が終わり今は4人で作戦室に帰る途中である。

「そうですね。ハチさんは奥の手使いましたし」

「最初は使うつもりはなかつたんですけどね。桐ヶ谷が予想外に強くて」

「確かに皆さん強かつたのです」

「そうそう。あーマッ缶飲みみたい」

久しぶりにランク戦をしたせいか、すごいのだ乾いてんだよね。

「確か部屋のマッ缶切れてたのです」

「げっ。買いに行くしかないか」

「じゃあ俺はマッ缶買ってきます」

俺は来た道に戻り本部の中でも奥の誰も来ないようなところにある自販機に向かう。鬼怒田さんの血糖値のせいでマッ缶が本部の奥の方にしかなくなってしまったのだ。ああつらいつらい

自販機にたどり着きお金を入れる。そしてマッ缶のボタンを押そうとしたところで横から伸びてきた指が俺より早くマッ缶のボタン



を押した。

伸びてきた指を主を見るとそこには

「よう比企谷ぼんち揚げ食う？」

ぼんち揚げを片手に持った迅さんがいた

T o b e c o n t i n u e d

## BBF風プロフィール&次回予告

比企谷八幡

PROFILE

ポジション オールラウンダー

年齢 17歳

誕生日 8月8日

職業 高校生

好きなもの 妹 娘 チームメイト MAXコーヒー ボーダー  
の仲間

PARAMETER

トリオン 10

攻撃 9

防御・援護 10

機動 8

技術 8

射程 4

指揮 7

特殊戦術 7

TOTAL 63

雪ノ下陽乃

PROFILE

ポジション アタッカー

年齢 19歳

誕生日 7月7日

職業 大学生

好きなもの チームメイト 妹 小町 ユイ 気に入った人に  
ちよっかいをかけること

PARAMETER

トリオン 8

攻撃 15

防御・援護 8

機動 8

技術 9

射程 2

指揮 7

特殊戦術 2

TOTAL 59

倉崎楓子

PROFILE

ポジション パーフェクトオールラウンダー

年齢 18歳

誕生日 2月05日

職業 高校生

好きなもの チームメイト 小町 ユイ 自己鍛錬

PARAMETER

トリオン 11

攻撃 9

防御・援護 8

機動 8

技術 8

射程 7

指揮 8

特殊戦術 3

TOTAL 62

四埜宮謡

PROFILE

ポジション

年齢 10歳

誕生日 9月15日

職業 小学生

好きなもの チームメイト ユイ 小町 和文化

PARAMETER

トリオン 8

攻撃 8

防御・援護 14

機動 7

技術 7

射程 5

指揮 7

特殊戦術 7

TOTAL 63

城廻めぐり

PROFILE

ポジション オペレーター

年齢 17歳

誕生日 1月21日

職業 高校生

好きなもの チームメイト ユイ 小町 読書

PARAMETER

トリオン 2

機器操作 9

情報分析 8

並列処理 7

戦術 7

指揮 7

TOTAL 40

他作品キャラのトリガー構成

千種霞

メイン：ライトニング イーグレット アイビス シールド

サブ：バッグワーム シールド フリー フリー

千種明日葉

メイン：アステロイド(拳銃) ハウンド(拳銃) シールド バツ

グワーム

サブ：アステロイド（拳銃） ハウンド（拳銃） シールド フリー

三浦優美子

メイン：弧月 フリー フリー シールド

サブ：フリー フリー シールド バッグワーム

川崎沙希

メイン：弧月 フリー シールド バッグワーム

サブ：レイガスト スラスタール シールド フリー

桐ヶ谷和人

メイン：弧月 旋空 シールド バッグワーム

サブ：弧月 旋空 シールド グラスホッパー

結城明日奈

メイン：弧月 閃光 シールド フリー

サブ：アステロイド バイパー シールド バッグワーム

朝田詩乃

メイン：ライトニング イーグレット アイビス シールド

サブ：フリー フリー シールド バッグワーム

桐ヶ谷直葉

メイン：弧月 フリー フリー シールド

サブ：フリー フリー シールド バッグワーム

次回予告

「あれが…迅さんの言ってた…」 「人型ネイバー！」

く玄界に降り立つ一体の人型ネイバーく

『あれは…何でこっちに！』 「ユイなんなんだあれは！」

「ハチ兄来ます！」 「グルアアアアアア!!」

「早く…早く俺をバイルアウトさせろ！」 「どうしたんだし！ヒキ

オ！」

く比企谷八幡に迫る異変く

「絶対にやつを取り戻すのだ！行けドラーケ！」

　　↳攻め来るはネイバーフッド最大の鎖国国家↳

「お！新型か！おい出水あいつは俺にやらせてくれよ」 「だめっすよ太刀川さん。本部、こちら太刀川隊出水。新型トリオン兵と遭遇。これより処理を開始します」

　　↳迎え撃つはボーダーの戦士たち↳

「お前は一体…？」 「私の名は\*\*\*」

　　↳謎の人物との遭遇。そして↳

「我が力お前に託そう」

　　↳力の譲渡↳

「」「信じてるよ八幡／ハチさん／ハチ兄／八幡君／パパ！」「」「」

次回！新章開幕!!!

闇に包まれた因果が浄化され新たな未来に結び付いた

## 災禍の鎧編 災禍の鎧1

桐ヶ谷隊との模擬戦が終わり、マツ缶を求めてボーダー基地の奥の自販機で俺は迅さんと遭遇した

「よう比企谷。ぼんち揚げ食う?」

「いただきます。それでなんか用です?」

「それが…」

迅さんがいつものおちやらけた表情ではなく普段見せない真剣な表情になり言葉を紡ぐ。

「比企谷たちの次の防衛任務って今日だよな?」

「?ええ」

質問の意図が分からずにあいまいに返す

「たぶんその時に人型ネイバーが来る」

「っ!大規模侵攻ってことですか?」

「いや、少なくとも比企谷たちが戦ってたのは一人だけだった」

「そう…ですか。その未来はもう確定してるんですか?」

「ああ。この未来はもう確定してる」

「城戸さんたちには?」

「いやこれからだ。ただ気を付けてくれ比企谷。お前たちがその人型ネイバーを倒した後、比企谷隊、いや比企谷。お前を中心にたぶんこの問題が解決するまで未来が全く見えなかった。」

「…了解です。まあ精一杯頑張りますよ」

そこで俺は迅さんと別れ、比企谷隊の作戦室へと向かった。

しかし、迅さんのサイドエフェクトが使えないのか。それはやってくる人型ネイバーの影響なんだろうな。

それより単騎で攻めてくるってどういうことなんだろうな。まあ俺一人で考えてもしょうがないか

\*\*\*

作戦室に戻り、迅さんから聞いた話を楓子さんと謡、ユイに話し終

えると、ちょうど防衛任務の時間となったので防衛任務に向かう。  
陽乃さんは家の方の用事が終わり現地で合流することとなっている。

そして現在。

「暇ですね」

「暇だね」

「そうですね。今回はいつもよりゲートが開く回数も少なかったですし」

「けど迅さんの予知はもう確定してるのですよね？だとしたら」

諺の言葉を遮るようにしてユイからゲートが開いたことが伝えられる。

『皆さん！ゲート発生しました！誘導誤差は4・78です』

「OK。すぐに向かう」

ゲート発生地点が近づいてとところでその発生地点が確認できる建物に上がる。今回の防衛任務ではどんな人型が来るのかわからないのでこうして確認してから仕掛けるようにしていたのだが今回はあつたりのようだ。そこから見えたのはトリオン兵の白い巨体ではなく、銀灰色の全身鎧に包まれた一匹の獣だった。

「あれが迅君の言つてた人型ネイバーなのかな？」

「たぶんそうだと思いますけど、あれなら人というより獣じゃないですか？」

『最初はどう攻めますか？』

その時、獲物を探すようにあたりを見回していたその獣がこちらを向いた。そしてこちらに一直線に向かってくる。

「気づかれた！全員散開！敵の能力が分からないんでくらわないこと優先で！」

「了解！」

速い！見るからに重そうな鎧に1メートル以上ある大剣をもってこのスピードか！

向かってきた獣は初めに俺たち中央で進行方向にいた陽乃さんを



ターゲットにしたのか陽乃さんに向かって手に持っていた大剣を横なぎに振る。

「くっ！ああー！」

嘘だろ!?!陽乃さんがふっ飛ばされた!?

敵の攻撃を二本の弧月をクロスして防御した陽乃さんが吹き飛ばされ、何軒もの家を貫通した音がする。

『陽乃さん！生きてますか！』

『何とかね。けどすごいよあいつ。完全に防御したと思ったのにその上からふっ飛ばしてきたよ。直撃したら一発でベイルアウト確定だね』

『了解です。今度は俺たちが気を引くんで奴の死角からの旋空をお願いします』

『任せて』

相手は見た目よりの素早く、一発も重い。まともに打ち合えばこちららは分が悪いなんてもんじゃない。

「メテオラー！」

メテオラをばらまき煙幕を張る。

『謡、トーレンツを撃ちまくって煙幕を絶やさないようにしてくれ。楓子さんはチャンスならガンガン撃ってください。ユイあいつについて何か知ってることはないか?』

『ごめんなさいパパ。今のところ思い当たる情報はないです』

『そうか。引き続きオペレーション頼んだぞ』

ユイもこいつについて知ってる情報はないか…弱点とか分かればよかつたんだがわからないものは仕方がない

『バイパー+メテオラ トマホーク』

これで当たればそれでいいし、当たらなくても行動は絞られるだろう。行動さえ絞られれば…

『旋空弧月』

陽乃さんが普通の旋空ではなく生駒旋空を放つ。視覚外からの攻撃でこの視界も悪い中なら確実に当たるだろう。

しかし俺のその予想は簡単に裏切られた。獣はその巨体からは考

えられないほどの高い跳躍を見せたのだ。

「謡！後ろだ！」

そして空中で極微細な粒子になったかと思うと謡の後ろにいて、謡に鋭い牙の生えた口を向けていた。謡は俺の声で振り向くと同時に弓を弾き絞り、まさにかみつこうとしている獣目掛けて矢を射った。その矢は獣を右腕を穿ったが、謡は獣にかみつかれてベイルアウトした。

『ハチさんあれを』

「まさか：再生してるのか!？」

謡が命懸けで奪ったはずの右腕が再生される。そして獣の口の端からオレンジ色の光が漏れ出たかと思うと獣は俺に向かって口から炎を吐き出した。

「グラスホッパー」

グラスホッパーで緊急回避をしたが弧月の剣先が炎をかすめる。剣先をかすめた炎は弧月を伝って俺の手元まで這い上がるようにする。弧月を投げ捨てて新しい弧月を展開しているとユイの動揺した声が聞こえてきた

『シヨートワープ：再生能力、火炎放射：もしかして：：なんで玄界に！あれはもう10年も前に討伐されたはずなのに！』

『ユイ落ち着いて教えてくれ。ユイはあいつのことを知っているのか？』

『実際に見たことはなかったですけど情報として知っています。』

『ならユイちゃん弱点とかないの？』

陽乃さんの問いに弱弱しい声でユイが答える

『すみません。わからないです』

『そうか：確実に行くなら俺たちで足止めをして陽乃さんのソードスキルにつなげるしかないですかね』

それだめだったらもうどうしようもない

『けどできるの？』

『はっはっはー愚問ですね。できるかできないかじゃない、やるんですよ』

『お、八幡頼もしいね。じゃあお願いしようかな』

『任せておいてください』

と言ったもののどうすればいいだろうか。普段だったらグラスホッパーをわざと踏ませて空中に出せるが今回は敵がショートワープができるおかげでそれは使えない。煙幕張ってもそこに留まり続けるとは限らないし、さっきの煙幕張った状態で死角からの攻撃をよけてたからもしかしたら攻撃察知とか迅さんと同じ未来予知とかのサイドエフェクトを持つてるかもしれないし…なにこいつ。技のオンパレードじゃね？再生、ワープ、火炎放射にもしかしたら攻撃察知までなんでもござれ。他の能力使って来てももう驚かねえわ。

で、話を戻すとそんな技の宝箱に確実に当てるにはわかってても対処できないような素早い攻撃をするか、わかっていても防御できないようにしなきゃならない。

どちらの方が簡単か、できそうかと言われれば当然後者なわけで。でもどちらかで選んだだけでどちらも難しいことも変わらない。

後者の状況を作るには…周りの建物を崩して生き埋めにする？ショートワープで逃げられる。なまじ埋められたとしても陽乃さんのソードスキルが使いづらくなる。

となると…

『楓子さんと俺であいつに接近してなんとか抑え込みます。その間に陽乃さんは俺たちごとあいつを切ってください』

『オツケー！』

さあてまずはどうやってあいつの剣をよけながらあいつに近づくか…

「！」

なんだこれ。脇腹に衝撃…引っ張られる！

「誰か俺とあいつの間にあるワイヤーを！」

横から限界まで伸ばしたスコープオンの刃が伸びワイヤーを切断する。しかしワイヤーが切れても慣性の法則で俺はそのまま獣の下へ引っ張られ続ける。

「グラス…ホッパー！」

俺の進路上にグラスホッパーを配置し、無理やり俺の体を跳ね上げ、獣を上に行きもう一度使い獣の後ろに回り獣を羽交い絞めにする  
「陽乃さん！」

陽乃さんがこちら着いてソードスキルを使うまで大体あと5秒。

やばい！獣の力が強すぎる！このままじゃ

「あれ？」

なぜだか急に獣の抵抗する力が弱くなる。そして…

「ゼリャアアアアアアアアア!!」

陽乃さんのソードスキルが獣の鎧を切り裂き、その下にあるトリオ  
ン体も切り裂いた。

大きな音とともに敵のトリガーが解除され、敵が生身になる。陽乃さんのソードスキルに巻き込まれ、ベイルアウトはしなかったものの両腕が肘の先からなくなった俺はその敵を支えることができずにそのまま前に倒してしまった。しかしその敵は強い衝撃があつたにもかかわらず、前のめりに倒れたままピクリとも動かなかつた。

俺たちはそろって首をかしげると楓子さんが敵の首に手を当て脈を計る。

「これは…ユイちゃん！今すぐ救護班を呼んで！脈がないわ！」

「はあ?！」

\*\*\*

救護班が来るまでに心肺蘇生法を試してみたが効果はなく、敵であつた若い桜みたいな色をした髪の子は脈がないまま。そのまま救護班にそいつを預けた。

「ユイはあの敵のことを知ってるって言ってたよな？教えてくれないか?！」

『そのことなんです、さっきほど上層部の方から連絡があつて敵について報告をしてほしいとのことなのでその場でいいですか?パパ』  
「そういうことならわかつた。なら上層部のところに向かおうか…?そういうええまだ交代の時間になつてないんだけど…」

『次の柿崎隊の準備はもうできています。そうなので引き継ぎだけすればいいそうです』

「りよーかい」

それから柿崎隊に引き継ぎを行い、上層部のところを目指し本部の入り口をくぐった。

その時最後尾を歩く俺の耳にふと声ならざる声が聞こえた気がした

「……え？」

思わず振り向くがもちろんそこには誰もいない

「どうかしたの八幡？」

陽乃さんの声に慌てて前を向き首を振る

「いえ何でもありません」

陽乃さんと楓子さんに続いて本部に入る前に俺はもう一度だけ後ろを振り返った

(…気のせい、だよな)

胸の中でつぶやきすぐに前を向く。

しかし、本部のドアをくぐる瞬間、奇妙な声がもう一度聞こえた気がした。それはこんなふうに聞こえた。

―喰イタイ。

## 災禍の鎧2

獣みたいなネイバーを倒してすぐに俺たちは上層部に呼ばれて会議室に来ていた。

「じゃあユイちゃん。さっきのあの人型ネイバーについて教えてもらえるかな？」

忍田さんの言葉にユイはうなずくと静かに口を開いた。

「あのネイバーは向こうの世界ではデイザスター、災禍の鎧と呼ばれていました。」

ユイの語るストーリーはそんな言葉から始まった。

—デイザスターはまだ向こうの世界でもそこまで技術が発達しなかった頃に誕生したある一人のトリガー使いの名だ。

銀灰色の全身鎧に身を包み、一メートル以上ある大剣を持ち、数多のトリガー使いを地に這わせた。その戦い方は苛烈、あるいは残忍の一言で、降参しようとしていた者の首を刎ね、手足を挽ぎ、暴虐の限りを尽くしたという。

しかし、無数のトリガー使いを死に追いやった彼にも、最後の時はやってきた。その当時存在していた国が共同戦線を張り、幾本ものブラクトリガーやその国独自のトリガーをつぎ込み災禍の鎧の討伐を始めたのだ。

ついにその頑丈な鎧が砕かれその首が切り離される瞬間、彼は哄笑とともにこう叫んだという。『俺はこの世界を呪う。穢す。俺は何度でも甦る。』

その言葉は真実だった。デイザスターと呼ばれたトリガー使いはこの世を去ったが、デイザスターが使っていたブラクトリガーはこの世にとどまった。その討伐に加わった国の一つにそのブラクトリガーが渡り、適性検査が行われ、討伐に参加した一人のノーマルトリガー使いがそのブラクトリガーの所有者となった。そしてブラクトリガーを使った時、そのトリガー使いの精神を…乗っ取った。それまでは高潔なリーダーとして慕われていたのに一夜にして残虐な殺戮者へと変貌したのだ。その荒ぶる姿は《初代》と全く見

分けがつかなかったそうだ。

そこで一回言葉を止め、全員の顔を確認するように一瞥してから、ユイは続けた。

「同じことが実に三度繰り返されました。《鎧》の持ち主は大変な恐怖をばら撒いたのちに討伐され、しかし鎧は消えずに、主を討つたものへと次々に乗り移り人格を変容させました…そしてそのトリガー使いは本来の名ではなくデイズスターと呼ばれるようになります。」

「そこで、鬼怒田さんにお問い合わせがあります。私とそのモニターと繋いでいただけませんか？」

「ああ。わかった。ユイちゃん」

鬼怒田さんが立ち上がり、会議室にあるモニターとユイを接続させる。ユイと接続されたモニターは一つの荒野とそこで走る一人の人を映し出していた。

「ユイこれは？」

「…今から2年半ほど前に行われた4代目《デイズスター》の討伐の映像です」

ユイの言葉に会議室が騒然とした。それからいち早く再起動した城戸さんがユイに質問する

「なぜユイ君がこんなものを持っているのかね」

「私を生み出したトロポイと言う国は攻撃など軍事的な技術がそのままで発達していない代わりにこういった情報収集に長けているのです。様々な国にこちらの世界で言う蜂よりも小さいくらいのトリオン兵を飛ばしその蜂が集めた情報をまとめて本国へと持っていつています。」

「そのトリオン兵はこちらの世界にも来ているのかね」

「私がトロポイにいた時点ではこちらの世界には送っていないはずですよ」

「そうか…」

そこで映像に動きがあった。今までは走っていた人の足音しか聞こえなかったのだが映像からその音とは違う音が混ざり始めた。この音は…剣の音か！

その時一気に開けた場所を映し出した。そしてその中央部には銀灰色の全身鎧のトリガー使い、デイザスターと老人のトリガー使いが剣を打ち合っている。さっきまで走っていたトリガー使いは大きく踏み込むと、数十メートルあった距離を立った一歩で0にし、二人の戦闘に乱入した。

老人と走っていたトリガー使い：長いからAでいいや。Aは連携しながらデイザスターに攻撃を与えていく。

『ガッ!!』

肉食獣のような咆哮とともにデイザスターは大剣を猛烈なスピードで振り下ろす。二人のトリガー使いは避けたものの後ろに見えていた山はバターののように2つに割れた。それを見たからかどうかはわからないが二人のトリガー使いは一回距離を置く。しかしデイザスターはその場で口を膨らませ、俺たちにしたように炎を吐くモーションをする。

『ブレスだ!』

初めてデイザスター以外の人を声が聞こえた。二人のトリガー使いはその声を聞き、ばらばらに動き出して炎を回避する。デイザスターはそれを分かっていたのかすぐさま大剣を持って老人を方へ向かい、剣を振り上げる。しかし身の丈ほどのでかい盾を持った大男が間に入り老人をガード。その隙に老人は大きく下がった。デイザスターは盾に力任せに大剣を叩きつける。

耳をつんざくような衝撃音とともに、滝のように火花が飛び散る。大剣は跳ね返したが盾を持った人はがくつと膝をつく。

『ガッ、ガガッ!!』

怒りとも喜悦ともとれる叫びを漏らし、デイザスターは大剣を無茶苦茶な動きで何度も何度も振り下ろした。一撃でもヒットすれば体を断ち切られそうなその攻撃を、大男は的確に、愚直にガードし続ける。

ここで俺はデイザスターの鎧にいくつもの深い傷があることに気付いた。剣をふるうたびその傷からトリオンが洩れ、空中に消えていく。



「手負い……?」

無意識のうちにつぶやくとユイがささやきを返した。

「そうです。彼は、この直前に他のトリガー使いとも戦い、この場所に追い込まれました。残存トリオン量的にはもう瀕死のはずです。なにこれほど荒ぶります。私はこれを初めて見た時、心の底から恐ろしかったです。」

それはそうだろう。普段ほとんど表情を変えない城戸さんでさえ驚愕の表情をしているのだ。

内心でそうつぶやきながら俺はぞつと総毛立つのを感じていた。

と、そこでどれだけ大剣を叩きつけても崩れないことに苛立ったのか、ディザスターが低く唸った。攻撃を継続しながらも、その長い頭部を伸ばし、突如湿った音とともに口を開いた。

「あれは!」

さっきの戦いで謡にした攻撃と似ていた。というよりそっくりだった。

「あれはディザスターの能力の一つ《トリオン吸収》です。彼は口で相手を食べることによって相手のトリオンを奪うことができます。」

今まさに盾を持った男が食われようとしていた時、一回退いた老人とAが挟み込むように突進してくる。そしてそのまま老人の視認ができない速度での攻撃でディザスターの首を断ち切った。

そこで画面の右下にある再生時間を示すスライドバーが右端に到達した。

映像が終わると俺は掌がじとつと汗をかいていることに気が付いた。

「ユイちゃんに聞きたいんだがこの後ディザスターブラックトリガーはどここの国に渡ったのかな?」

「…私はこの後このブラックトリガーは壊されたと聞いています。」

確かに強力ではあるが制御できないのならガラクタもいいところ。さらに見境もなくトリガー使いを襲うともなればリターンよりもり

スクの方が大きい。壊した方が賢明だろう。けど……じゃあ俺たちがさつき戦ったのは何なんだ？ デイザスターと呼ばれたブラックトリガーは壊されたはずなのにそれと同じ能力を持ったトリガー使い。「なににせよ人型ネイバーは比企谷隊が倒したんですし、この話はどう終わりでいいのでは？」

根付さんの言葉に城戸さんは少し考えてから肯定した

「……緊急会議はこれで終わりとする。各自それぞれの仕事に戻ってくれ」

会議が終わるとみんなが扉から出て行く。そして俺も出ようとしたところで

「比企谷これから何か違和感を覚えたら報告しろ。比企谷隊のほかの隊員にも伝えておいてくれ」

「了解です」

俺は短くそう返すと今度こそ会議室から出た。

\*\*\*

あれから数日、特に俺にも俺の周りにも変わったところはなく、平穩そのものだった。

そんなわけで今俺は警戒区域に來ています。なぜかというところ

「ああ、緊張する」

「そうだね。あたしも緊張するよ」

「そんな緊張するようなことでもないでしょ。あ、そうだお兄。これ終わったたら焼き芋食べたい」

「いやいや明日葉ちゃん。お兄ちゃんはお財布じゃないのよ？ わかっている？」

「千種兄妹緊張感なさすぎだろ」

千種隊の初任務の付き添いである。新米部隊の最初の数回の防衛任務時にはすでにチームを組んでいる誰かしらが通常付き添うことになっている。その付き添う人は基本的にはその時に防衛任務がない人になるが例外として知り合いがやることもある。それで俺がやる羽目になってしまったのだ。

『みんなゲート発生したよ！ 誘導誤差4・22だよ』



鎧に覆われて行く

そしてさっきの音が聞こえてきた

—ソウダ、ソノママ我ニ身ヲ委ネロ。奴ヲ切リ裂キ、引キ千切り、喰イ尽クス。喰ラウ。喰ラウ。喰ラウ。

「ツ！誰か！早く俺をバイルアウトさせろ！俺が飲み込まれないうちに早く！」

「どうしたんだしヒキオ！それにその腕は」

「いいから早くしろ！う…お、おとおつ…！！！」

拳を砕けんばかりに握りしめ、俺は必死に抗う。俺を支配しようとする闇色の波動を全力で遠ざけるように。

「お兄！どうしよう!?!」

「どうするって言ったって比企谷が言うようにするしかねえだろ」

千種たちの話し声が聞こえるが聞こえているだけで頭に入っていない。頼むから早くバイルアウトさせてくれ

そして頭に衝撃。数秒後にバイルアウト用マットにたたきつけられそこで俺の意識は闇に包まれた。

### 災禍の鎧3

暗転。

スポットライト。

白い光の輪の中に、艶のない朱色に塗られた鳥居と石畳が出現する。そしてその石畳の上を走る小さな人影。

続けて弱い照明が周囲を照らす。夜。無数のかがり火が音もなく揺れる。鳥居は最初の一つだけではなく、同じものが幾本も連なっているようだ。石畳のわきには純白の玉砂利。少年の向かう先には小さな、しかし立派な屋敷があった。

少年―ファルはその屋敷の門番の人に挨拶すると玄関の扉を開け、中に入ると音を立てないように一直線にある部屋を指摘した。その部屋の前でファルは一呼吸置くとその部屋に向かって声をかけた

「フラン。入っていい?」

「いいけど…」

「おじやましまーす」

ファルはフランの部屋に入るとあることに気付いた。

「もしかして邪魔しちゃった?」

フランは家で集中したいときには部屋の明かりをすべて消し、一つのろうそくの光だけにするのだ。そして今フランの部屋はそれと同じ状況だったのだ。

「ううん、大丈夫だよ。そろそろ明日に備えて寝ようと思ってたところだし。」

「…とうとう明日だね」

明日はブラックトリガー《ザ・ディステイニー》の所有者決定戦があるのだ。先代の《ザ・ディステイニー》の所有者が死に、次の所有者候補のフランともう一人の候補が戦うのだ。

「うん。ファル君見ててね。明日絶対に勝ってみんなをもっと楽にさせてあげるから」

フランの家は現当主の意向で身寄りのいない子供を引き取っているのだ。

「うん。明日は絶対見に行くから。応援してるよ。それじゃあね」  
「…もしかしてそれを言うためだけにこんな時間にわざわざ来たの？」

現時刻、子の刻（今でいう午後11時ごろから午前1時ごろ）

「うん。そうだけど…」

ファルの言葉にフランはぷくつと頬を膨らます

「あー私の幼馴染君は寝る前の女の子の家を訪ねてきて一言言っただけで帰る薄情な人だとは思わなかったな〜これは明日、試合が終わってからえんじ屋の甘味おごってもらわなきゃかな〜」

そう言つてフランはちらちらとファルを見る。

「はいはいわかりましたよお嬢様。明日勝ったらいくらでもおごりますよ」

「よろしい！明日は何食べよつかなくファル君のおごりだし、お店のもの全部食べるのもいいかもね！」

「僕の財布がカラにならないように遠慮してくれよ？じゃあほんとに帰るよ。おやすみ」

「うんおやすみ！」

そうしてファルはフランの屋敷を出た

\*\*\*

「改めてフランの勝利を祝って乾杯！」

「乾杯！」

フランとファルはえんじ屋で向かい合つて座り乾杯をしていた。昼間に行われた所有者決定戦はフランの勝利で幕を閉じ二人は打ち上げと称し、えんじ屋に来ていた。

もうすでにフランは何品も頼んでおりファルの財布は軽くなっていた。

「なあフランそろそろ…」

「えー！ちよつと持ち合わせ少ないんじゃない？」

「あのね、フランと一緒にしないでよ。冴えない一般家庭のうちじやあこれが限度だつて。」

「しよーがないなー！またおごつてもらおつとー！ごちそうさままでし

た」

「さつき行つて待つて。会計したらすぐに行くから」

「うん。じゃあ待つてるね」

二人は席を立つと分かれてフランは出入り口に、ファルは会計をしながら向かった。

\*\*\*

暗転。

スポットライト。

(思ったよりも遅くなっちゃたな。フランが風邪ひかないといいけど…あれ?いない)

会計が混んでいて終わるまでに時間がかかってしまっていたファルがお店を出てるとそこには待つているはずのフランの姿がなかった

「フラン?どこ行っちゃたんだろ」

なんとなくファルはお店の裏にある林の中にフランがいるような気がして林の中に入っていく。そしてしばらく林を進んでみたものは…

開けたところに横たわる、探していたフランの姿とその周りに立っている5人の人だった

「フ、フラン!」

「ん〜思つてたより早かったな。ま、もう少し待つててくださいよファルさん」

フランに声をかけようとする後ろから急に押さえつけられる。

「僕たちとしては用があるのはフランさんだけなのでファルさんはここで待つててください」

そこでファルはこの声が聞こえることがあることを思い出す。

(この声は…確か!)

「お前は…バイスの部下の…テイカー!」

バイスとは今日フランが戦った所有者決定戦で戦った相手だ

「お、もう僕の正体がわかりましたか。意外と頭が切れるんですね。」

「何でフランを！」

「許せないですよ。たかがあの人ごときがああブラックトリガーを持つなんて。七星外装（セブンアークス）は我らが主が持つのがふさわしいのに……だから殺して奪うんですよ。」

その言葉が合言葉となったのかフランを囲んでいた連中が自身のトリガーを展開し、フランに攻撃をし始めた。

「やめろ……、やめろ、やめろ——！」

トリガーを起動させ、上に乗っかっていたテイカーを弾き飛ばし、正面で剣をふるっていたやつを突き飛ばし、素早くフランを抱えるとファルのトリガーの能力である瞬間移動を使い森の中に逃げ込む。

「フラン、フラン」

瞬間移動と言っても長い距離は移動できないため、まだ近くにはテイカー達がいる。なのでファルはテイカー達に気付かれないように小声でフランに声をかけた。

何度か声をかけているとフランは薄くだが目を開けた

「フラン……よかった。今すぐに医療所に連れて行くからもうちよつと我慢して。」

「ごめんね……ファル君。私の最後のお願い……あなたの手で私を殺して……」

「は？最後？……それに俺がフランを殺すなんて……なんで！」

「相手の中に毒使いがいたの……その毒に触れてしまったの……だからお願いファル君！大好きなあなたの手で終わることができればきつとこの旅は幸せだったと思えるから！」

「……………フラン」

胸にあふれた思いをすべて言葉にすることはできなかった。

だからファルは傷ついたフランの体を抱きしめ、一度体から離し、フランの顔を見てありつただけの感情を込めて囁いた

「ありがとう。俺も大好きだよ」

ファルはもう一度フランを強く抱きしめるとフランを離し、自分のトリガーからフランの剣型のトリガーに切り替える。

そして振りかぶり、ファルはフランの首を切——



「イツツシヨウタイム」

れなかった。横から現れたさつきフランの取り囲んでいたやつの一  
人に切られてしまった

「う……あ……あああ………」

「さて、兄弟（ブロ）を呼ぶ前に見つけちゃうか」

そしてその下手人―ヴァサゴはフランの体から何かを探し始める

「お、発見。」

下手人が見つけたのは《ザ・デイスティニー》と呼ばれるブラック  
トリガー。

「う……ああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ドクンと。」

《ザ・デイスティニー》はその雄たけびに反応するように淡く輝  
く。そしてひとりで動き出し、ヴァサゴの手からするりと抜け出す  
とファルの前で止まる。

ファルは選ばれなかった。だが今なら《ザ・デイスティニー》を使  
える気がしていた

「…着装 《ザ・デイスティニー》」

小型の恒星の如き強烈な光が生まれ、世界を銀色に染める。

ファルの手足と胴体を分厚い追加装甲が覆っていく。そのデザイ  
ンは先代の所有者が使っていた時とは大きく異なっていた。

さらに鎧の変化はデザインだけではなかった。

「お前たちのせいでフランが……あ……あ……あああああああああ  
！」

ファルの絶叫に呼応するように鎧から闇色のオーラがあふれ出し  
ていく。そしてそのオーラは通常では絶対にはありえないことを引き  
起こした

「スターキャスター」

ファルが握っていたフランのトリガーを起動させた。通常なら二  
つ同時にトリガーを起動させることはあり得ない。しかしファルは

《ザ・デイスティニー》と《スターキヤスター》二つのトリガーを起  
動させていた。

「オオオオオアアアアアアー!!」

無限に湧き上がる怒りそれ自体が媒質となり、トリガーに干渉して  
いく。

もともと別々のトリガーだった《ザ・デイスティニー》と《スター  
キヤスター》。

二つのトリガーが歪み、崩れ、溶け合う。そしてここに新たなトリ  
ガーが生まれる

最凶のブラックトリガー 《ザ・ディザスター》がここに誕生した

## 災禍の鎧4

その日、楓子はめぐりと一緒に八幡のベストプレイスで食事をとっていた。

「八幡君まだ起きてこないね」

「そうですね」

八幡は千種隊の防衛任務付き添いの後から三日間眠り続けていた。

「けどほんとに八幡君がデイズスターになっちゃったのかな…」

「千種さんのお話を聞いた限りでは、完全ではありませんがユイちゃんの影響で見たデイズスターの特徴とそっくりらしいですね…」

その時、二人同時にボーダーから支給されているスマホが鳴る

二人は八幡が起きたのかと思いきやさま電話に出る。しかし、電話から聞こえてきたのは八幡が起きたということではなかった

『全ボーダー隊員は今すぐに警戒区域に向かってください。繰り返しします。全ボーダー隊員は今すぐに警戒区域に向かってください』

「ふうちゃんこれから何にあるのかな」

「わかりませんが嫌な予感がします。急いで向かいましょう」

楓子は職員室に向かい、緊急の任務で総武高の全ボーダー隊員が出勤することを伝えると、めぐりとともにボーダー本部に向かった。

\*\*\*

「迅さんこれはどういうことなんですか」

楓子はめぐりを本部に送った後、謡・陽乃と合流し警戒区域に戻ろうとすると迅と会い、迅と警戒区域に向かう。迅ならば何か知っているであろうと思い、楓子は迅に尋ねる

「これから人型ネイバーが来る未来が見えた。それと一緒に見たこともないトリオン兵が警戒区域全域で戦っている未来が見えた。だからみんなを招集したんだ。」

「そうなんですか…！迅さんあれを！」

楓子の視線の先には一つのゲートがあり、そこから5人の人が出てくる。

「どうやらあいつらが今回の相手みたいだな」

5人の中心にいた錫杖を持った女性がこちらに気付いた

「聞け！玄界の兵よ！我らはレオニーズ！我らの要求はただ一つ。先日こちらに来たはずのディザスターの次の依り代の身柄を渡してもらおう！」

「悪いがそれはできないな。仲間をお前らに渡すわけにはいかない」「ふっ、いいだろう。お前らが渡さぬというならば力づくで奪うまでだ。絶対に次の依り代は手に入れる。行けドラーク！」

錫杖を持つ女性が投げた卵から生まれたのは龍型の新型のトリオン兵だ。

「私は船に戻り、適当なところにドラークをまく。お前らは好きに暴れている」

女性の指示を聞きレオニーズの兵が二人ずつ二手に分かれる。

「俺が金髪の少女と黒髪の少年の方へ行く。楓子さんは新型のドラゴンの方に、陽乃さんと謡ちゃんはもう一つの人型の方に向かってください」

迅の指示に三人は素直に了承する

「了解」

そうして彼女たちの戦いは始まった。

~~~~~

リーダーと思われる女性が持っていた卵から出てきたドラークと
言う名の新たな龍型のトリオン兵。

先ほどから楓子は距離を取って攻撃を仕掛けているが楓子の攻撃は龍のうろこを貫けないでいた。

（これは硬いというより攻撃そのものが弾かれているといった感じでしょうか）

楓子その予想は当たっていた。ドラークの鱗には不完全ではあるがトリオンリフレクターが備わっており、普通の遠距離攻撃ではトリオンリフレクターを破れるほどの威力を出せない

（これは時間かかりそうですね…）

~~~~~

「トリオンメイク槍騎兵（ランス）」

黒髪の少年―グレイはトリオンで作った槍を迅に向けて放つ。迅は余裕をもってそれをよけると風刃の斬撃をグレイに向かって飛ばす。グレイはそれを自分で作ったシールドでガード。その隙に金髪の女性―ルーシィは迅の横に回りその手に持っていて鍵を虚空に突き出しひねると同時に言葉を発する

「開け人馬宮の扉 サジタリウス！」

出てきたのは馬の帽子をかぶった弓を持った一人の男性。予知ですでにこういう未来があると分かっていたとはいえ、目にするときさすがに迅は驚きを隠せなかった。その隙にグレイは次の技を発動する

「トリオンメイク アイスフロア。ルーシィ！」

「うん！サジタリウスお願い！」

グレイがトリオンで氷の床を作って迅の足を止めるとルーシィはサジタリウスに命令を出す。サジタリウスはトリオン体の急所である脳とトリオン伝達器官を狙って弓を射る。

迅はそれを風刃ではじくと足の氷を破壊、それと同時に少し距離を取る。

「なあ、少し話をしないか？」

「話だと」

「ああ。君たちの目的を教えてくださいませんか」

唐突に迅は二人に話しかけ始める

「あ？ディザスターの次の依り代を手に入れるってあいつが言ったのだろうか」

「違う違う。あの女性たちの目的じゃなくて君たち二人の目的だよ。君たちだけはあの連中とこっちに来た目的が違うんだろう？」

「なんでそう思うの？」

「俺のサイドエフェクトがそう言ってる。」

「：グレイ。この人になら話してもいいんじゃない？」

「ルーシィはこいつが信じられるのかよ。こんな胡散臭いやつ」

「確かに胡散臭いけど：信じてもいいと思う。」

グレイはしばらく考えた後、自分たちの本当の目的を話し始めた  
「おい先代のディザスターの依り代だった男は今どうなってる」

「今は本部で安置されているはずだ。」

「俺とルーシイの目的はそいつの遺体を返してもらっただけだ」

「どういう関係だったか聞いてもいいか？」

「この質問に答えたのはルーシイだ。」

「あたしたちは家族だったんだ。親のいなかったあたしたちをマスタールが引き取ってくれてそれからあたしたちは血より濃い絆で結ばれた家族になった。けどあの日あなツはあたしたち家族を守るために禁断だった力に手を染めちゃったの」

「それが《ザ・ディザスター》だったってことか。事情は分かった。その件に関しては俺が本部に交渉してなんとかする。その代わりあの新型トリオン兵の弱点みたいなものがあれば教えてくれないか？」

「あいつの鱗にはトリオンリフレクターがあつて下手な威力の攻撃では通らないってことは分かっているな？」

「ああ。それをどうすればいいのか知りたい」

「奴の喉元に一点、少しだけ色の違う鱗がある。そこを攻撃すればトリオンリフレクターは消える。」

それを聞くと迅は警戒区域に展開している全ボーダー隊員に通信をつなぎ、弱点について伝える。

「これで良し。それでこれからどうする？本部との交渉はこれが全部終わってからにしてほしいんだが」

「わかってる。どうしようか、グレイ？」

「あーもしあれだったら協力してくれないか？」

「何に？」

迅はそこで少しためを作り、

「リーダーのあの女性を倒す」

\*\*\*

『新型トリオン兵、ドラークと言うらしいんだが、そいつの弱点は喉元にある色の違う鱗だ。そこを攻撃すれば攻撃が通るようになる。みんな頼んだぞ』

(そういうことでしたか)

楓子は迅からの通信でドラークの弱点を知るとバイパーで重点的

にそこを狙い始める。

尻尾での薙ぎ払いなどで体の向きを頻繁に変えていたのだが、ボウダーの中・遠距離トリガーの上位の使い手である楓子にはそれくらいなんてことはない。

楓子の方に頭が向いた瞬間に喉元にある鱗をピンポイントで打ち抜く。

(これで攻撃は通るはず)

バイパーを展開しドラーク目掛けて放つ。バイパーはドラークの体をいとも簡単に貫いた

(攻撃を反射させるのにトリオンをたくさん使って本体の防御力はなにも等しいですね。これなら……)

再びバイパーで攻撃しようとしてトリオンキューブを楓子は展開したが、そのトリオンキューブは発射されなかった。なぜなら

「やつほー楓子。元氣ー？」

「楓ねえお待たせしましたなのです」

二人の人型ネイバーの相手をしていたはずの陽乃と謡が先にドラークにとどめを刺してしまったからだ。

「二人の人型はどうしましたか？」

「ちゃんと倒して捕虜にして本部に引き渡してきたのです」

「それにしても楓子。あの新型を倒すのに時間がかかってたみたいだね」

「初めて見るタイプでしたのでモーションを把握するのに時間がかかりました。けど完璧に把握したのもう大丈夫ですよ」

「じゃあ楓子を頼りに他のところを救助に行こっか。めぐり、ここから一番近いところで助けが必要そうな部隊がいるところは？」

『えーとですね、今みんながいるところから……みんな近くにゲート発生だよ』

めぐりの新たなゲート発生との報告と同時にさつき聞いた声が聞こえてきた

「なぜこうもたやすくドラークがやられている……まあいい。所詮はただの兵器。やはり最後は我の手でやるしかないようだな。」

女性——コスモスは手に持っていた錫杖を二回鳴らす。

すると、コスモスの周りにゲートが開きそこから二体のドラークが姿を現す。

「また出てきたね。楓子二体だけど頼んだよ。」

「任せてください。」

「それでは行くのです！」

謡は先手必勝とばかりにコスモスに向かい矢を放つ。その矢はコスモスの周囲に当たりコスモスを煙で包み込む。そして陽乃が旋空を放つ。二人はこんな攻撃で倒せたとは思っていない。しかし当たった音はしたので何かしらのダメージは入っていると考え、すぐに追撃しようと陽乃は剣を、謡は弓を構えたが結局、追撃することはなかった

「陽姉、これは…」

「うーん敵のトリガーかな？けどこれは厄介だね。まさかデバフがかけられるなんて（……………）」

コスモスの持つブラックトリガー《ザ・テンペスト》。その能力を一言で言うなら——エンチャント。錫杖の音を聞いたものに様々な効果を付与する。

今使ったのはスロウ。簡単に言えば体の動きが遅くなるということだ。普段ならほとんど効果はないが、こと戦闘においてはすごい効果を発揮する。

\*\*\*

楓子が体の異常に気付いたのはドラークとの戦闘中だった。ドラークの攻撃のスピードは変わらないのにさっきまで余裕で受けきれたはずの攻撃が急に受けられなくなった。それだけで楓子が異常に気付くのは十分だった。それから致命傷となる攻撃は受けていないが細かな攻撃で大分削られ、あと一発でも攻撃を受けたら即ペイルアウトという状況。普段の楓子ならこの状況でも焦りはしなかった。しかし、八幡が三日も眠っていて起きる兆候もないという事態が楓子に焦りを生んだ。その結果——

転倒。



それをドラーク二体は見逃さなかった。楓子に近寄り、口を開ける。そして楓子にかみつこうとしたところで

獣の怒号によつて（・・・）動きを止めた。

二体のドラークの目線の先には銀灰色の全身鎧を身に纏った一匹の獣がいた

ここに災禍の力を

持った獣が再臨した。

## 災禍の鎧5

変な夢から目の覚めた俺を目に映ったのは、何回か見たことのあるボーダーの医務室の天井だった。

目が覚める前の記憶を探ってみると千種隊の防衛任務のときに倒れたのだと思いついた。

(それにしてもなんか騒がしい)

医務室のベッドの上からでもわかるほど慌ただしい気配が漂ってくる。なんかあったことを直感し、ベッドから出る。どれくらい寝ていたのかはわからないが固くなっていた体を軽く伸ばすと、医務室から出る。

さしあたって情報収集するにちょうどいい中央オペレーター室を目指す。近づくにつれ何が起きているのかわかってきた。

(要するにネイバーが攻めてきているってことか)

それが分かると俺はすぐに警戒区域を目指す。ネイバーが攻めてきているのなら迎え撃つのがボーダー隊員である俺の仕事だ

\*\*\*

俺が警戒区域に出て近くの戦場に着き俺の目に映ったのは、楓子さんが見たことのないトリオン兵にやられそうになっているところだった。

そしてそれを見た瞬間、俺の心にある一つの感情が爆発した。

それは憤怒。

怒り。圧倒的な怒りが俺の体を駆け巡る。それと同時にゆがんだ声が脳裏いつぱいに響く

—我ハ汝。汝ハ我。

—永遠ノ時ヲ経テ、今ツイニ蘇ラン。我ハ《災禍》。我ハ《終焉》。世界ニ終ワリノ鐘声ヲ響カセル者ナリ。

—我ガ名ハ—

「《ザ・ディザスター》!!」

俺の体がトリオン体に変わりどんどん鎧に包まれていくのが分かる。一時の激情に身を任せてしまった結果、もう取り返しのつかない

ところにたどり着いてしまったことが鎧に包まれていく体に伝わってきた。

全身が鎧に包まれると同時に手には一振りの長剣。はるか昔にスターキヤスターと呼ばれたトリガー。

その剣を手には俺は吠えた。

「グル：アアアアアアアッ！」

その雄たけびは無限の憤怒に満たされ、俺の体を勝手に動かしている。次第に意識が遠くなり、俺の意識は飛ばされた。

—素晴ラシイ。ココマデ適合シタノハ初メテダ

\*\*\*

目覚めると、俺はサイドエフェクトのハイレベルを使った時に来る空間にいた。普段であれば俺が何かを想像しないと何もなかった。真つ白な空間なのに今回は既に物があつた。

俺の手足を縛る鎖という形で。

俺の手足はその鎖に縛られて身動きが取れない。今動かせるのは首から先だけだ。その動かせる首で周りを見てみると俺の正面には大きなモニターがあつた。モニターって言うのは語弊があつた。本当は空間にただ映像が映し出されていた。その映像は…

見るからに重そうな鎧なのにそれを着たまま俊敏に動き二体のトリオン兵を手を持った長剣で簡単に一刀両断するデザスターとなつた俺の姿だつた。

そしてその映像の中で俺は二体のトリオン兵の近くにいた楓子さんの首を片手でつかみ持ち上げ、今にも絞め殺そうとしていた。

「おい待て！やめろ！」

俺の声は届かずになおも映像の俺は楓子さんの首を絞め続ける。

「やめろって言うってんだらうが！止まれよ俺の体！」

「無駄ですよ。あなたがここでいくら叫んだところで今の彼には届かないですし、今のあなたにあなたの体の制御権はありませんよ。だからここであなたがいくら抗おうと無駄ですよ」

俺だけだと思っていた空間に一人の女性が現れる。その女性は夢で見たフランと呼ばれていた女性とそっくりだつた。

それと同時に本来のあり方を思い出したように映像がゆっくり映しだされるようになった。

「うるせえ。そんなことは関係ない」

女性の言葉を無視し今度は両手両足を縛っている鎖を力の限り引つ張る。鎖はびくともしないがそれでもなお引つ張り続ける。

「なぜそんなに災禍に抗うんですか？」

俺の行動を見ていた女が不思議そうに尋ねてきた。

なぜ災禍に抗うのか：そんなものは決まってる。

「仲間のためだ。」

「仲間：ああ知っていますよ。仲間なんて自分の目的のためなら人を容赦なく襲う。そんな人たちのことですよね？そんな人たちのためになんでそんなに頑張るのやら。私には理解できませんね。」

「は？なに言ってるんだお前。」

女の言葉に俺は鎖を引つ張っていた力が抜けた。

「仲間はそんなもんじゃない。仲間は同じ目的に向かって進む同志だ。いや、目的なんて違っていい。一緒に笑って、支え合って、互いが互いを信じあえるようになる。それが本当の仲間だ。仲間の絆舐めるなよ！」

抜けた力を再び込める。するとさつきまでとは違い鎖は少しだが確実に鎖は動いた。

それを見て女は驚いた顔を浮かべた後、笑った。

「いいでしょう。私の力あなたに託します。信じていますよ。きっと彼に会わせてくれるって」

「何」

俺の言葉は最後まで続かなかった。なぜなら

(You got an enhanced armament《star caster》)

この言葉が頭の中に入り込んできたからだ。これが頭に入り込んでくると同時に俺の手足を縛っていた鎖が砕けた。

「さあ行ってきて。：信じていますから」

女の言葉に俺は

「任せろ」

自然とこの言葉が出てきていた

\*\*\*

俺の意識が現実に戻る。体はまだ鎧に包まれたまま。そしてまっすぐに突き出した左腕の先にはこれ以上ないほどに傷ついていき、意識を失っている楓子さんがいる。

すぐさま地面に下ろそうとするが左腕は動かない。

―ナゼ我ニ抗ウ！

―ソレハ《敵》ダ！

体全体がぎしっと震えたがそれ以上は動かない。獣が邪魔をして俺の意志で体が動かせないように、今は俺の意志で獣の行動の邪魔をする。

だが、いつまでもそれを続けてはいられない。いつまで邪魔を続けられるかわからない以上早々に行動を移さなければならぬ。

当たり前だがやったことはない。けど、やり方は知ってる。

俺は何とか右腕を動かし、近くに突き立てられていた禍々しいフォルムのスターキヤスターを掴む。この剣はもともとこんな禍々しいフォルムではない。遥かな過去、鎧が姿を変えた時に一緒に取り込まれてしまったフォルムが変わった。

姿かたちが変わろうとも、この剣の中には使い手であったフランの魂が残っている。それを獣―ファルに合わせる。そのためには…

手に持った剣を逆手に持ち替える。そして切っ先を自分へと向ける。

「…ハチ、さん？」

「すみません。つらいと思えますがもう少しだけ待っててください」

意識を取り戻した楓子さんにそう言うと、剣を自分に向かって突き刺した。

―我ヲ、裏切ルノカ！汝マデモガ我ヲ裏切り滅シヨウト言ウノカ！！

―違えよ。今のお前ならもうわかるだろ。

脳裏に響く獣の怒りの声。その声に返事をする俺の意識はまた飛ばされた。

\*\*\*

再び俺はハイレベルの加速をした時の空間に来ていた。この場には俺とフラン、それに獣がいた。

フランが怖れるふうもなくまっすぐに歩み寄りながら、獣に向かって右手を差し出した。

「ごめんね。長い間一人にして。寂しかったよね……。苦しかったよね。」

獣の巨大な口から、低い唸り声が漏れる。目の前にいる少女の存在が信じられないというように小刻みに首を振り尻尾を垂らして後ずさろうとする。

だがフランはスピードを緩めることなく獣の前まで達すると、広げた両手で躊躇いなく巨大な首を抱いた。それから獣の頭をなでながら囁く。

「これからはずっと一緒だよ。ずっと、ずっと一緒……」

ぼっ、と音を立てて獣から鎧が？がれていく。中から現れたのは夢でフランと一緒に居た少年。

「…フラン」

「…ファル君」

二人はお互いの名前を確かめるように呼ぶと、その場で手をつなぎ抱きしめ合った。しばらく抱きしめ合うと二人は離れたが、その手につながれたままだった。

ファルがこちらを向く。

「ありがとう。君のおかげでまたフランに会うことができた。……サラバダ、我が最強ノ共闘者ヨ。なんてね。」

「ああ。じゃあな。…幸せに、な。」

どちらからともなく笑うと、ファルの体が淡く光りだした。しかしフランの体は光りだしたりせずそのまま。

「ねえねえ、二人とも何言ってるの？」

「…え？」

俺とファルの言葉が被った。

「ファル君が鎧を歪めちゃったせいでハチ君の国は今大変なんだよ？

「だったら最後まで責任とらないと！」

「でもどうやって？僕たちはここから出られないよ？」

「ファル君が負の心意で鎧を歪めちゃったように今度は私たち二人で正の心意で鎧を変えるの！ほら想像してファル君。誰にも負けない絶対無敵のトリガーを！ハチ君が使いやすいように！」

二人の体からさつきファルから出ていた光とは違う光があふれ出し、繋いでいた手を前で収束していく。光が収まり出てきたのはブレスレット。

「はい、出来たよハチ君。これがハチ君のためのブラックトリガー。名前は《絶滅天使（メタトロン）》。大切に使ってね」

「けどいいのか？もともとはお前らの国のブラックトリガーなんだろう？」

「気にしないで。今の所有者はハチだから。それにたぶん敵のリーダーが持つてるトリガーはもともと僕たちの国が持つてた七星外装（セブンアークス）の一つだから。対抗するならなおさら持つてた方がいい。」

いつの間にかこの二人には俺の呼び方がハチで統一されているようだった。

そんなことは今はどうでもよくて。ファルの言葉から敵のリーダーが持つてるのは七星外装（セブンアークス）？と呼ばれるたぶんすげえブラックトリガーなんだろうと推測できる。それに対抗できるって言うならおとなしく貰っておくのが吉と見える。

「分かった。ありがたく使わせてもらう。」

「うん。私たちはここから見てるから頑張つてね」

「ああ。」

俺に向かって手を振っているフランとファルにうなずいてからいつものように加速を解除した。

\*\*\*

現実に戻るとすぐに楓子さんを地面に寝かせる。

「楓子さん大丈夫ですか」

「ええ。バイルアウト寸前つてところを除けばなんともないです。そ

れより鎧は…」

「鎧はこれになってもうなくなりました。」

俺は左腕についているブレスレットを見せる。

「それは…いいえ、今は敵を倒すことを優先しましょう。話はまた後で」

「はい。敵はどこですか？」

「向こうに。今は陽乃さんと謡が戦っているはずです。」

楓子さんの指さした方にかすかに爆発音が聞こえる。たぶんそこだろう。

「私はもうバイルアウトします。後は頼みました。」

「任せました。」

一回深呼吸をし、俺は彼らからもらった名前を口に出した。

「絶滅天使（メタトロン）、起動」



## 災禍の鎧6

「絶滅天使（メタトロン）、起動」

《ザ・ディザスター》からフランとファルが俺の使いやすいうように変化させた《絶滅天使（メタトロン）》を起動する。

起動と同時に絶滅天使（メタトロン）の使い方が頭に流れ込んでくる。

（…これ俺が使いやすいうようになってるか？）

頭の中に入ってきた情報を整理した結果がこれだ。

「ごちゃごちゃ考えている時間もないので最も早く楓子さんたちの下へたどり着くために俺は

翼を生やした（…）。

よくアニメとかで見えるような翼。それが俺の背中に生えている。これがブラックトリガー《絶滅天使（メタトロン）》の能力の一つ、飛行能力だ。

まず俺は確認するように翼で大きく空気を叩く。そして今度は鳥がはばたくように連続して翼を動かすと、体が少し浮き上がった。肩甲骨のあたりから伸びている骨を動かすイメージを作るのに少し手間取ったが、一度イメージして慣れてしまえばあとはもう楽々飛べるようになっていた。

ひとまず高度を10メートルくらいに保ち、その場でホバリングする。時間がないのは分かっているが自分の攻撃の性能などをぶっつけ本番で試してみたくはない。なので一回そこから辺のトリオン兵が試してみたいが…

「見つけた」

上空から少し離れたところに一体のトリオン兵と、そのトリオン兵と対峙している三人の人影が見えた。その三人には悪いがそのトリオン兵で性能実験をするために横取りをさせてもらおうか。

その場所まで一瞬で飛ぶと俺は翼から一枚の羽を分離させる。そしてその羽の先端をトリオン兵に向けるとその先端からレーザーを撃った。

これがメタトロンの二つ目の能力、レーザー攻撃だ。その名の通りレーザーでの攻撃なんだが、その威力がすごい。相手がシールドを張っていようと、間に建物があるうと超高密度のレーザーでトリオンでできているものすべてを蒸発させる、という代物だ。

まずはただ撃つだけで、二発目はレーザーを曲げてみる。バイパーをリアルタイムで弾道を引くときと同じような感じでイメージするとその通りになることが分かると、すぐに止めを刺し、また翼を広げる。そして飛び立とうとしたところで声をかけられた。

「ヒキオ?」

「比企谷?」

そこにいたのは千種隊の三人だった。ここにはいないがたぶん千種もどこか狙撃できる位置にいるだろう。

「ヒキオ、あんた大丈夫なの?」

「ああ。心配かけて悪かった」

俺が倒れたのは千種隊の防衛任務の引率の時。ただでさえ初めての防衛任務で緊張してたつて言うのに引率者が急に苦しみだして殺してくれ(やることとしては同じ)なんて言われたときの気持ちを考えると非常に申し訳なく思う。

「アンタその恰好…」

「ああこれか?これはだな、あん時の原因となったものが変化したものだな」

「それ着けてて大丈夫なの比企谷。また暴走とかしないの?」

「千種妹の懸念ももつともだがその心配はもうないぞ」

「そ、ならいいんだけど。あ、お兄」

背後に人が降りた音がする。俺は振り向きつつそいつに向かって声をかける。

「久しぶりだな千種」

「おう久しぶり。それで早速だが比企谷、城戸司令からの伝言だ。『終わったらすべて説明してもらおう。早くケリをつけろ』だってさ。」

きつと俺には通信できないから千種を通じて伝えてきたのだろう。

「了解。そういうことだからもう行くわ。お前らもやられないように」

気をつけるよ」

さつき飛ぼうとした時と同じように翼を広げ、空気を叩くように数度震わせ一気に空に上がる。

「おーいヒキオー！今度あーしも飛んでみたい！」

「あ、あたしも！」

「そういうことなら俺も。」

「……………」

「ん？サキサキは？」

「無理無理無理！高いところとかほんと無理だから！」

千種隊の頼みに手を挙げて答えると、翼を震わせ、飛んでいく。目指すは陽乃さんと謡が戦っている戦場だ。俺は今出せる全力でそこへと向かった。

\*\*\*

全力で飛ぶとすぐに陽乃さんたちのいる戦場の上空にたどりついた。まだ気づかれてはいない今のうちに上空から一発でかいのを打ち込んでおきたいが、それをするには陽乃さんの位置が近すぎる。何とか離れてくれるといいが…

ん、なんか陽乃さんの動きがおかしい。動きにキレがないというか、いつもより動きが遅い。よく見てみると、援護をしようとしている謡の動きも遅い。もしかしてこれは敵のトリガーの効果か？

《正解だよハチ君。》

「っー」

何か急にフランの声が聞こえてきたんだけど。なにこれ怖い

《怖いなんて心外だな》

《フラン、ハチが困ってるから。ハチ君の仲間の運動能力が下がってるのは相手が持つてるブラックトリガー《ザ・テンペスト》の能力だよ。能力は任意で相手に様々の効果を付与すること。今回はハチ君の仲間に運動能力低下の効果が与えられてるんじゃないかな？》

《おいちよつと待ってくれ。なぜこうして会話できているんだ？

》

《そんなこと今はいいんじゃない？ほらあのお姉さんピンチだよ

》

陽乃さんが相手の錫杖を受けきれずに先の尖がった錫杖が陽乃さんの太ももに突き刺さる。すぐに抜かれるがそこから漏れ出るトリオンの量が尋常でない。

《あーたぶんあれトリオン漏出増大もかかっているね》

《なあ、あれって無条件にかけられるわけじゃないよな？その条件って何だ？》

《音だよ。所有者によって形は変わっているけど、音が条件だよ。たぶん彼女の場合は錫杖の音かな》

《それって近接戦闘してたら確実にだめだよな》

《うん、だめだね。けど遠距離攻撃ならけっこう余裕だし、ハチのブラックトリガーがあれば負けることなんてほぼないと思うよ。》

なんか相手が持つてるのってすごいブラックトリガーなんだよな？そんな簡単に倒せるもんなのか？

《あつたりまえじゃん！私とファルがハチ君専用に作り上げたブラックトリガーだよ。《ザ・テンペスト》の本当の使い方もできてないのに負けるわけないじゃん》

《本当の使い方ってどういうことだ？》

《ハチもさつき能力を聞いたときに思ったと思うけど、あれって援護が基本でしょ。それで彼女は相手の能力を下げることに使ってるけど、本当は味方の能力をあげる方が何倍も効果が強いんだ。》

《心が通った相手なら効果はさらに大きくなるよ。確かブラックトリガーがテンペストだけの一個小隊が一国をほぼ壊滅させたなんて話もあつたよね》

《まじか、何そのチート》

俺のブラックトリガーも十分ぶっ壊れだがあれもやべえな。確かファルは俺の変化前のブラックトリガーもあいつのテンペストも七星外装（セブンアークス）って言ってたから、名称から察するにこんなぶっ壊れブラックトリガーがあと5本も残ってるのかよ。これ以上はぜってー相手にしたくねえわ。

《さてそろそろ倒しに行こうか》

《ちよつと待つてくれ。陽乃さんが近くにすぎで、今攻撃すると陽乃さんにも当たっちゃう》

《いやその心配はないよ。ハチのレーザーは意識すれば対象だけを消失させることも可能だよ。ほら想像して。君の仲間は絶対に消失させない。ゆつくりでいい。確実にイメージして作るんだ》

ファルが言ったことを何度も頭に反芻させつつ、レーザーをゆつくりと作る。ひたすらに敵だけを消失させるイメージを。

《そうそうその調子。確実なイメージができたところで放て！》

俺は絶対に逃がさないように直径をでかくしたレーザーを放つ。そのレーザーは陽乃さんごと敵を包む。陽乃さんは驚いて空を見上げ、こちらに気付き、笑顔を見せる。

そして、レーザーの光が収まった後には、こちらを見上げ笑顔の陽乃さんと、気を失ったように倒れている女性がいた。

\*\*\*

後日談、と言うか今回のオチ。

「ブラックトリガー《ザ・テンペスト》の所有者は四埜宮謡とする。本来であれば今回の襲撃でブラックトリガー使いとなった比企谷、四埜宮の両名はS級となるはずだが雪ノ下陽乃の強い希望で両名はA級のまま、非常時のみブラックトリガーの使用を許可することとなった。以上をもって解散をする。」

デイズスターの襲来から約1週間。俺と謡、ボーダー上層部、各隊の隊長が揃った今回の襲撃の事後報告会と題した会議が終わった。この会議の主な議題は三つ。論功行賞の発表と捕虜となった三人のこと、そしてブラックトリガー使いとなった俺と謡についてだ。

まずは論功行賞から。特級戦功にはうちの隊それぞれと迅さんが。一級戦功には太刀川隊や風間隊などA級上位部隊が入った。

捕虜三人については一応一通りの尋問は行いがあまり無茶なことはいらない。何でも迅さんが敵だった二人と交渉し、向こうの要求を呑む代わりに情報提供をもらうらしい。

最後に俺と謡について。本来ならS級となることを陽乃さんが最大のスポンサーと言うコネを生かして、脅はk：脅s：お話してと

りあえずはA級のまま、非常時にはブラックトリガーを使用する  
なつた。

…  
これで会議は終わり。俺と謡は本部内の廊下を歩いているのだが

《いや〜キドシレイだっけ？あの人顔が怖かつたな〜》

《フラン失礼だつて》

さつきからこの二人が、特にフランがうるさい。

この二人はこのまま俺の頭の中に居座り続けるらしい。理由を聞  
いたところ、『玄界を見てみたい』との簡潔な答えが返ってきた。まあ  
俺から追い出す気もないし、そもそも追い出し方もわからないから結  
局はこのままなのだが。

こうして1週間に渡る《ザ・デイスティニー》を巡る一連の騒動は  
終わり、舞台は激動の冬へと移った。

## 原作突入編 原作突入1

《ザ・デイザスター》の一連の騒動が終わった後すぐに総武高では生徒会の選挙が行われた。普通の高校生だと選挙に関わるのが投票の時など少ない機会しかないのでへえーあるんだ的な反応だけでそこまで印象に残らないが、俺の場合は違った。去年は既に部隊を組んでいためぐりさんの当選を確実にするためにいろいろ奔走した。今年こそ何もしないでいいと思ってたのに、めぐりさんが面倒な依頼を持ってきた。今年の総武高の選挙管理委員会は現役生徒会が行っているが何でもめぐりさんが防衛任務でいないときに一年の一色という人物から届け出があつたらしいんだが、その投票は本人が望んだものではなく、その一色はクラスの中でもめぐりさん曰く悪目立ちしているらしく、周りの人間が勝手に届け出たらしい。選挙規約に記載されていないから立候補の取りやめもできずに、じゃあ投票で落ちればいいと言ってみたところ、立候補が一人しかないので信任投票で分けるのはカツコ悪いと言われ、どうやって一色に引き受けさせるのか（もうすでに選挙で負けることは考えないことにしたらしい）を一緒に考えた。結局、舐められたままでもいいのかと煽ること、そして好きな人がいるならその人に手伝ってもらえば合法的に二人つきりになれる等のメリットを提示することに決まった。今考えてみればけっこう穴だらけの作戦だったが何とか一色に会長を引き受けさせることができた。それが3週間くらい前。それから期末テストがあつて、やっとゆつくりできた今日この頃。俺は謡と作戦室のコタツでぬくぬくしていた。

\*\*\*

今作戦室には俺と謡しかいなかった。陽乃さんの持ってきたコタツを囲んでみかんを食べつつ本を読む。これぞ冬って感じがするな。ちなみに俺が読んでいる本は「ロクでなし魔術講師と禁忌教典（アカシツクレコード）」通称「ロクアカ」だ。アニメを見て面白くて一気に

大人買いをしてしまった代物だ。ただ、今俺が読んでいるのは「ロクアカ」だが俺の正面のコタツの上にはまだ読んでいない「ロクアカ」のほかにも、「エロマンガ先生」と「週末何してますか？忙しいですか？救ってもらっていいですか？」通称「すかすか」が積みあがっている。この二つも「ロクアカ」と一緒に大人買いをしてしまったのだが、一時に買いすぎてしまった。テストが終わってからコツコツを読み進めているのだが、いっこうに減らない。それでも今日、なんとか読み進めて積み本の5分の1は減らした。今日はもう少し時間があるからもう1、2冊は読み終えたい。でもその前に

「謡、なんか飲むか？いるようならついでに買ってくるが」

謡に声をかけておく。トイレに行くついでに何かしらの飲み物を買おうと思うが謡は何かいるだろうか。

「それなら緑茶をお願いするのです。」

「緑茶な。了解」

トイレを済ませ、謡の緑茶と自分のMAXコーヒーを持って戻る。

「謡ここに置いてくぞ」

「ありがとうございます」

そして、また読書を再開しようとしたところで慌ただしく作戦室の扉が開かれた。

「八幡君、ういちゃん！ゲームしようぜ！」

「いきなりどうしたんすかめぐりさん…」

\*\*\*

話を聞いてみると、まあ予想通りではあったが国近先輩のせいらしい。ひたすらにコンボつなげられてこちらが動く間もなく殺された。国近先輩容赦なさすぎだろ。それで国近先輩でネイバーフッド遠征に行ってる隙にうまくなって驚かせてやろうと思ってるようだ。そんなわけでゲームの準備をしているのだが…

「これ4人用のゲームじゃないですか？あと一人どうするんですか」

「それはもう大丈夫！ユイちゃんに頼んであるから！だから八幡君、ユイちゃんをお願い」

「わかりました。」



自分のスマホに触れ、トリオンを込める。スマホからあふれ出てきた光が少女の形を作り、それがユイへと変わる。

「よろしくお願いします！パパ、ねえ、めぐりさん！」

「よろしくね！ユイちゃん。よしじゃあ、『さあゲームを始めよう』」  
アンタはどここの引き籠り人類最強ゲーマーだと心の中をツツコミを入れつつゲームを始めようとする。

《ねえハチ君！あの女の子は誰!?それにハチ君のことをパパって！それよりハチ君のスマホ？から出てこなかった!?!》

《そんないっぺんに質問すんな。答えられないだろうが。で、ユイは娘。どっかの国のトリオン兵だったけどいろいろあって今は俺のスマホに住んでいる。以上だ。》

《ひどく簡潔だね。どういう原理なの?》

《悪いが俺もよくわかってない。林藤さん、ボードーの上層部の一人な。その人が個人的にネイバーフッドから持ち帰ったトリガーをエンジニアが使ってこの仕組みを作ってくれたんだよ。》

「あ」

「パパ！油断怠慢すなわち怠惰！です！」

フランとファルと会話をしていたせいで手元がおろそかになっていたみたいだ。そんなことより

「ユイ。パパと約束だ。もう二度とペテルギウスのマネしちやいけないのデスよ」

……

この後二時間くらいゲームしたら解散となりました。

\*\*\*

「——て！」

「——君——きて！」

「——君！起きな——キスし——よ？」

「ちよっ！——ラン！」

なんか耳元でうるさいな。こっちは気持ちよく寝てるって言うのに。どうせ小町だろ。

「あと10分寝かせてくれ小町」

瞬間、部屋の温度が下がり、今まで不鮮明だった声がクリアに聞こえる。

「…やっちやおうかファル君」

「そうだねフラン」

ん？今フランとファルって…すぐに目を開けるとそこにはベッドの片側を持ち上げようとしている二人の姿が…

「さっさと起きろー!!」

その声とともにベッドが持ち上げられ、俺は抵抗することもできずに床にたたきつけられた。

## 原作突入2

「それでお兄ちゃん。小町が知らない間に知らない人を二人も家に泊めといてその二人に朝起こしてもらったことに何か言いたいことはあるかな？」

フランとファルに乱暴に起こされた後、うちで寝ていた小町がフランの声に気付かないわけもなく、たたきつけられた後すぐに小町が俺の部屋に来て、説教モードに移行した。

理由を問いただされるも、俺もなぜこいつらがここにいるのかわかるわけもなく、必死にアイコンタクトでファルに助けを求める

《ごめんねハチ》

《いつもみたいに会話できんのかよ！俺が必死にアイコンタクトした意味は!?おかげさまで目がいてえよコンチクショー！》

《まあまあそんなに怒らない♪》

《誰のせいだと思ってるんだ誰の！それより早く助けて！小町ちゃんの視線がやばい》

下を向ている俺の頭に刺さる視線の温度がやばい。視線で人が殺せるならもうすでに俺は何度も死にまくっているだろう。そんな中でやっと助けが入った

「えっと、小町ちゃんでもいいんだよね？そんなにハチを怒らないであげて。ハチが疲れてるの分かってて無理を言ったのは僕たちだし、その恩を忘れて起こしちゃったのはこの子だからさ」

ファルの説得に小町も何とか怒りの矛先を収めてくれた。

「この人に免じてだからねお兄ちゃん。次からは誰かを呼ぶようならちゃんと一言言ってね」

「おう分かった。でだ、小町。こいつらの分の朝食も作ってやってくれないか。簡単なものでいいからさ。」

「最初からそのつもりだよお兄ちゃん」

「さんきゆうな小町。俺たちは部屋に行ってるからできたら呼んでくれ」

「了解であります！」

俺はフランとファルを連れ、部屋に戻る。それから適当に雑談をするふりをしながら、いつものようにテレパシーを送る

《一応まだユイには秘密にしておくためにこつちで話すぞ。さてまずはどうやって実体化したのか聞こうか》

《ユイちゃんの実体化を見て私たちもしたいな〜って思って、心意使って一晩かけてやっと完成したんだ！》

《心意って万能だな！》

いやほんとにそう思うわ。トリガーを姿を変えるわ、さらに機能を追加するわ、何でもありだな。

《本来の心意とは少し違うんだけどね》

《どういうことだ？》

《心意の基本技術は射程距離拡張・移動能力拡張・攻撃威力拡張・装甲強度拡張の4つで、これらを単品だったり組み合わせたりするんだけど、僕たちのは全く違うでしょ？一応心意ではあるんだけど、本来の心意とは違うってこと。》

《そういうことか：なあ俺でも心意って使えるのか？》

《使えるよ。心意は心よりいずる力。強い思いやイメージがあれば誰にでも使えるよ》

誰でも使えるって割には今まで、見たことも聞いたこともなかったな。

《なあ俺は今まで聞いたこともなかったんだがなんでだ？》

《たぶん誰も習得してないってことだよ》

《さつきは誰でも使えるって言ったけど、それは可能性の話。誰でも習得できる可能性はあるけど、実際に身に着けるのは難しい。身に着けるにはよほどの強いイメージか、気の遠くなるほどの時間が必要なんだよ。》

一通り説明を聞くと、ちようど小町から朝食ができたと呼ばれ、フランとファルとともに食卓に着き、食事を始める。

「そういえばお二人の名前ってなんていうんですか？」

食事が始まってすぐに小町がこれを言った。そういえばまだ言っ

てなかったような気もする。

「私はサフラン。サフラン・ツベルクだよ！気軽にフランって呼んでね！」

「僕はファルコン。ただのファルコンだよ。ファルって呼んでね」

ふむ。最初からフランとファルって呼んでたから知らなかったが、フランはサフラン・ツベルク、ファルはファルコンと言うのか。フランに家名があつて、ファルに家名がないのは家の階級みたいなものの違いなんだろう。ディザスターが生まれた夢を見た時にも、フランが他とは違ういい家に住んでいたしな。

「比企谷小町です！よろしくお願いしますねフランさん！ファルさん！」

「よろしくね！小町ちゃん！」

「よろしく小町ちゃん」

「よろしくお願いします。お二人とも日本人じゃないようですが、どこでお兄ちゃんと知り合ったんですか？」

……なにもかんがえてなかった。

《やっぱいよ！ハチ君どうすんの!?!》

《……俺がなんとかする。そっちも何とか話を合わせてくれ》

《うん。了解。任せたよハチ》

「あーえっと、この二人はだな、海外の新しいボーダースポンサー候補の子供でな。親が商談している間に俺がこっちを案内することになって今に至る」

「うん、そうなんだ！お父さんたちが商談している間に、ハチにこの街を案内してもらおうと思つて！」

「そうなの小町ちゃん！そうだ！小町ちゃんはこの街でいい服屋さん知ってる？できたら案内してほしいんだけど！」

よし！ナイスだフラン！うまいこと話をそらせた！

「わかりました！お兄ちゃんじゃそういうことは分かりませんもんね！小町におつまかせーです！」

《でかしたフラン！》

《でしよ！だから服のお金頂戴！》

そりやあこいつらがこつちのお金を持つてるわけがないか…

《あんまり高い金額は渡せないからな》

《やったー！愛してるぜハチ君！》

「なっ！」

ファルが声を漏らす。それに小町が反応した

「どうかしましたか？ファルさん」

「いや、何でもないよ」

「そうですか…あ、ファルさんもどこか行きたいところはありますか？」

「そうだな…特にないけど、強いて言うならおいしいものが食べたいかな」

「わかりました。それじゃあもう少しゆっくりしたら出発しましょう！」

こうして今日は小町、フラン、ファルの三人と出かけることと相成った。

\*\*\*

「待て。ほんとに待って！それ以上は…それ以上は！」

「そうだよフラン。それ以上はハチが！」

「二俺（ハチ）の財布が持たない！」

みんな大好き千葉県民御用達のララポでフランの頼みの服を見たり小物を見たりしていると、いい時間になったので近くの飲食店に入る。そこまではよかったのだ。そうそこまでは。フランたちがいたところとは全く違うこつちの味付けに感動したのか、さつきからフランの注文が止まらない。それこそフードファイターのごとく、注文した料理を腹に収めてはメニューを開き、また新たに追加注文をする。その無限ループ。エンドレスリピート。軽く計算してみたところ、もうすでに持ってきたお金の6割以上になっている。

「えー私まだ入るよ？」

「フランのおなかの心配はしてないの！ぼくたちが心配してるのはハチの財布！」

「そうですよフランさん！さすがに食べすぎです！太っちゃいますよ

!？」

小町から飛んできたのは実に女の子らしいセリフだった。

「そのことは大丈夫!だって私はトリって痛ったあく!なにをするのファル君!」

「いや、ごめん。足がすべちゃって」

危うくトリオンでできていることを口走りそうになったフランの足を対面に座っていたファルが足をけって黙らせる。

「トリ?トリってどういうことですか」

「トリじゃなくて特じゃないのか?俺にはそう聞こえたぞ。ほらいくら食べても太らない特殊な体質とかそういうことが言いたかったんだろ」

「何でお兄ちゃんが答えるのさ。けどいいですね〜いくら食べても太らない体質って!」

「食べた分は頭にでも…それはねえな。普段から何も考えてなさそうだし、おつむも弱そうだし」

「何おう!普段からしつかり頭も使ってるよ!」

「ないな」

「ないね」

「ないと思います」

上から俺、ファル、小町だ。会って半日の小町にまで言われるとは…あの夢で見た時にはもっとしつかりしてる印象だったのにな。

「そろそろ出るか。次どこか行きたいところはあるか?」

「僕は本屋に行きたい」

「本屋か。ちょうど俺も続きが出てるか確認したかったし行くか。小町とフランもそれでいいよな?」

「異議なし!」

こうして俺たちは本屋に向かった。

\*\*\*

「ファルさんすごいテンション上がってるね」

「そうだな。俺もあんなファルは初めて見たわ」

俺と小町の前にはさつき本屋で買ったばかりの本を手に持ち、その

本のことを熱心に語るファルとそれを聞いてうんざりしている顔のフランがいる。

なんでもファル曰く「この本がこっちの歴史を物語っている。こっちの世界って面白い！」だそうだ。

「ねえお兄ちゃん。ボーダーの関係者で空閑って人いる？」

「急にどうしたんだ。」

「この前うちのクラスに転校生が来たんだけどこの時期の転校生、それに三門市だからボーダーの関係者なんじゃないかって。本人は否定してただけど、フランさんたちと同じで親がボーダーの関係者とかじゃないかって思って」

「そうか。少なくとも俺は知らないな。もう少し古くからいる人ならなんか知ってるかもしれないから念のため聞いておこうか？」

「いやいいよ。別に知ったからなんだって話だしね。…そうだ！お兄ちゃん。小町そろそろB級に上がれそうなんだけどトリガーセツトってどうすればいいかな」

お、とうとう小町もB級か。勉強をがつつりとさせたから上がるまでに時間がかかってしまったが、無事上がれそうで何より。

「基本はメイントリガーや戦術に合わせるが、詳しいことは家でな。」

「はい。そうだ、帰る前にスーパー寄らないと。冷蔵庫の中結構からになってきたよ」

「まじか。おいフラン、ファル！帰る前にスーパーに寄るぞ！そこ右な」

「はいー！」

フランの元気な返事が返ってきた。今日の晩飯は何にするかな。

その前に空閑、空閑な。なんとなくだが、これからそいつを中心になんか起こりそうな気がする。名前、覚えておくか…



## 原作突入4

ある日それは唐突に起きた。

『緊急警報 緊急警報 門が市街地に発生します。市民の皆様は直ちに避難してください。繰り返します。市民の皆様は直ちに避難してください。』

突如として学校に響いたサイレン。とある少女は手に持っていたロッカーから取り出したばかりの次の教科の教科書をその場に投げ捨て、二つ隣の教室に向かう。

「スグちゃん!」

「小町ちゃん!」

二つ隣の教室にいるのは小町と前は同じクラスだった直葉。この学校の二人しかいないB級隊員の一人だ。そしてもう一人は…

「B級に上がったって聞いたけど本当なの小町ちゃん!」

そう小町だ。と言っても二日前に上がったばかりで実戦経験など彼女にはない。

「うん。けど数日前に上がったばかりで実戦経験がないよ」

「そっか。なら小町ちゃんは先生たちと協力して生徒の避難誘導をお願い。」

「うん。」

「それじゃあ行こう!トリガーオン」

直葉の体がトリオン体に切り替わる。

「トリガーオン」

小町もトリオン体になり、直葉とは別れて行動する。直葉は校舎内に侵入してきたトリオン兵の排除を、小町は校庭に出て先生の手伝いを。学校に出てきたトリオン兵は三体。その三体とも避難が進んでいない南館の方に足を向けていた。しかしそのうちの一匹が避難している生徒の方に向かってくる。

「えっとこれは小町が対応するパターン?」

誰にも聞こえないように小町がそうつぶやく。小町は校舎の方に目を向け、直葉が二匹を相手に戦っているのを確認する。それを見て

小町も覚悟を決める。

「この一体は小町が倒す。」

覚悟を言葉にして口にする。そして八幡からフランたちと買い物に行った後、家に帰ってからトリガーセット以外に言われたことを思い出す。

『トリオン兵の動きは不規則のようだが、実際はただプログラムに沿って動いているだけだ。』

『射手の仕事は味方に取らせることだ。仲間が取りやすいように常に考えて、相手を動かせ。』

それを頭で反芻しながら考える。小町の今のトリガーセットはC級からいつも使っていたハウンドにアステロイド、シールドだけだ。

(この手持ちで時間を稼ぐ！)

小町のこの考えは正しい。まだ実戦を経験したこともない少女がベテランのバックアップなしで一人でネイバーと戦うことは難しい。こんなイレギュラーな状況なのだ。彼女が一人でネイバーを倒せる実力があつてもイレギュラーな状況、初の実戦の緊張で本来の実力は出せないだろう。

だからこそベテランである直葉の到着まで時間を稼ぐというのは正しい選択なのだ。さつきつぶやきは一人で戦う覚悟を決めるため。

そうして彼女の戦いが始まる。

\*\*\*

ある程度経験を積んだ射手であれば本職のアタッカーには負けるもののそれなりの近接戦闘ができるが、B級上がりたての射手である小町には近接戦闘の技術はない。

したがってモールモッドに対して接近をさせずに遠距離から時間を稼ぐ。まずはハウンドを目の周りに撃ちかく乱をする。

そしてターゲットが自身に移ったことを確認すると、逃走を開始する。少しずつ移動しながらハウンドを放つ。速度重視にしてあるためダメージはほぼ通っていないが、タゲをとり続けることには成功している。

そして彼女の耳に待ち望んでいた通信が入った。

『小町ちゃんこっちは終わったよ！すぐに救援に行くね』

その言葉を聞いた瞬間小町の緊張の糸は切れた。切れてしまった。初めての实战を一人で戦う。そのプレッシャーの中で救援が来る。誰だって安心するだろう。しかしまだ安心してはいけなかった。

「え？」

小町は緊張の糸が切れたせいで足元の確認を怠った。

足元には小さなへこみが。小町とモールモツドの戦闘でできた小さなへこみだった。小町はそこに躓いた。

そして顔前には鎌を振り上げ小町の命を絶とうとするモールモツドがいる。

(あちやーこれはもうダメかな)

小町は目を閉じて襲ってくるはずの衝撃に身をゆだねようとした。が、少年の叫び声によつて小町は目を閉じることをしなかった。

「うわああああああ!!」

その少年は振り下ろされている鎌と小町の間に入ると、小町を守るように手に持っていたもの縦のように振り下ろされている鎌にかまえた。

(あれは三雲君？それにあの恰好…三雲君ってC級隊員だったんだ)

場違いにも小町はそんなことを考えた。間に入った少年―三雲

修は手に持っていた武器―レイガストをモールモツドにかまえたが、三雲の弱いトリオン、しかも訓練用のトリガーでモールモツドの鎌を防げるわけもなく、三雲は片腕を切り落とされた。(運よくトリオン体は破壊されなかった。)

モールモツドがまた鎌を振り上げる。三雲は片手がなくて戦えない。小町はまだ体勢が整えきれなくて戦えない。しかし、今度こそ小町は安心していた。

「ゼエアアアアアア！」

直葉が弧月を一閃。まずは鎌を切り落とすと返す刀で目を切り裂いた。

「大丈夫？小町ちゃん。あと、えつと…」

「三雲、三雲修だ。よろしく桐ヶ谷さん」

「あたしのことは知ってるんだ」

「そりゃあそうだよスグちゃん。ボーダー隊員で剣道部のエースだよ？知らない方がおかしいって」

直葉はボーダー隊員にしては珍しく部活をしている。ボーダーの活動で出れることは普通よりも少ないがそれでも参加できるときは参加し、この前の大会ではベスト8まで進んでいた。

「それよりもその恰好。三雲君ってC級だよ？基地の外でトリガー使ったら隊務規定違反になっちゃうよ！」

「そうだよ！それにB級以上のトリガーにはベイルアウトの機能がついているからあそこで三雲君が間に入らなくても本部に飛ばされるだけだったんだよ！それなのに無茶して！」

二人に詰め寄られタジタジになる三雲。

「それでも、それでも僕がそうするべきだって思ったから」

「……なんか主人公みたい」

原作主人公に向けてそんな言葉を放つ小町。と、そこにもう一人の原作主人公が来た。

「お、いたいた。ヒキガヤとキリガヤ、先生が呼んでいたぞ。一段落したら知らせてほしいって」

「ありがとう空閑君。行こスグちゃん」

そう言つて小町と直葉は去つていった。そしてその場に残った原作主人公たち。

「だから言っただろオサム。近くにキリガヤが来てたんだからお前が行く必要はないって。」

「それでも僕はそうするべきだと思つたんだ。それに僕が行かなきゃ比企谷さんはトリオン兵に殺されていたかもしれないだろ」

「いやそれはないだろう」

「……!？」

唐突に発された知らない声に三雲は驚いた

「しゃ……しゃべった!?なんだそいつは!!」

「珍しいなレプリカ。おれ以外としゃべるとか」

「うむ。初めましてオサム。私の名前はレプリカ。ユーマのお目付け

役だ。」

「お目付け役……!?!」

「以後よろしく。それでさっきの話なのだが、玄界には緊急脱出のトリガーがあると聞く。オサムは知らなかったから一部の隊員だけかもしれないが、それを使えばヒキガヤは無傷だったはずだ。」

「緊急脱出……」

何度か復唱して心当たりがあったのかはつとなる三雲。

「ユーマ、オサムそろそろ戻った方がいいのではないか?あまり遅いようだと心配されるだろう」

「そうだな。いこーぜオサム」

そう言い、空閑はさつきと歩いて行く。三雲が空閑に追いつき、二人で校庭に行くところにはおそろいの赤いユニフォームの部隊、嵐山隊がいた。

「ん?小町ちゃん、彼は?」

「あちゃー」

嵐山の視線の先には片腕を失ったままのいまだにトリオン体(.....)の三雲がいる。

小町も直葉も当然三雲がトリオン体から生身に戻ってからくると思っていた。

「えっと、C級隊員の三雲修です。この格好の方が避難誘導をさせやすいと思ったのでトリガーを使いました」

事実、三雲はトリオン体で避難活動を手伝っており、ボーダー隊員とすることで生徒も安心してスムーズに避難できたいた。

「そうだったのか!よくやってくれた!!」

怒られると思っていた三雲は嵐山に褒められて驚く。

「小町ちゃんや直葉ちゃん、君がいなかったら犠牲者が出ていたかも知れない。それに撃ちの弟と妹もこの学校の生徒なんだ!」

そういうと嵐山は避難した生徒の中から自分の弟と妹を見つけると素早く近づき頬ずりをしていた。

しばらくすると満足したのか三雲たちの方に戻る。

「嵐山先輩。彼がしたことは隊務規定違反です。違反者をほめるよう

なことはしないでください」

嵐山兄妹の団欒？に水をさしたくなかったのかずつと待っていた木虎が戻ってきたばかりの嵐山に言う。

「しかし、三雲君が動かなければ負傷者が出てきたかもしれないのは事実なわけだし」

「それは評価に値しますが、ここで彼を許せば他のC級隊員でも同じことをする人が現れます。今回はB級隊員もいて避難誘導だけでしたが、C級隊員だけだった場合、実力不足から深刻なトラブルを引き起こすことは目に見えています。」

他のC級隊員に示しをつけるため、ボーダーの規律を守るため、彼は処罰されるべきです」

木虎の発言に周りほどよよする

「…なあ何で遅れて来たのにえらそうなの？」

「…だれ？あなた」

「オサムの友達だよ。日本だと誰かを助けるのにも許可がいるのか？」

「…それは個人の自由よ。ただしトリガーを使わないならね。トリガーはボーダーのものなんだから使うにはボーダーの許可が必要。当然でしょ？」

「何言ってるんだ？トリガーはもともとネイバーのもんだろ。お前らはいちいちネイバーに許可取って使ってるのか？」

「あ……あなたボーダーの活動を否定する気!？」

そこに現場調査を終えた時枝が帰ってくる。

「はいはいそこまで。現場調査は終わったから回収班呼んで撤収するよ」

「時枝先輩……でも」

「木虎の言い分もわかるけど三雲君の処罰を決めるのは上の人だよ。ですよね嵐山さん」

「そうだな充の言うとおりだ。今回のことはうちの隊から報告しておく。三雲君は今日中に本部に出頭するように。処罰が重くならないように力を尽くすよ。」

さっきのシスコンプラコンの姿とは打って変わってしつかりとした姿で指示を出す嵐山。

「あとは、小町ちゃん、直葉ちゃん。今まで同じ場所で複数回ゲートが開いたって言う報告はないけど警戒はしといてくれ」

「わかりました！」

「よし、木虎、充撤収するぞ」

嵐山隊の三人が帰っていくと、避難していた生徒たちも教室に戻され、否定の声は上がったものの最後まで授業をし、その日は放課後を迎えた。

## 原作突入4

放課後を迎えるとすぐに俺は学校を飛び出し、小町の学校へ向かう。昼間は三浦たちに「小町ちゃんなら大丈夫だ。」と止められたが放課後なら俺がどこに行こうと関係ない。俺は全力で小町の中学に向かう。

で、学校に着いたがいいんだけど、

「何やってんのお前」

校門前ではなぜか木虎の写真撮影会をやっていた。

「比企谷先輩!?これは違うんです!これは……その……仕方なく」

「あーみなまで言うな。あれだろ?アイドルにあこがれたとかそういうあれだろ?大丈夫だ。俺は分かっているから」

「違います!そういうえば比企谷先輩は何を……ああ小町さんが心配だったんですね」

「おう。そういうお前は何でここに」

「違反者の見張りです」

「違反者?なんの?」

木虎が答える前に我が愛しい妹の声があった

「あ、お兄ちゃん。」

「おう小町。怪我無いか?」

「お兄ちゃん、心配しすぎだよ!トリオン体だったんだから怪我するわけないじゃん!」

「それもそうだな。ところで小町、隣にいる虫はなんだ?今ならお兄ちゃんが駆除してやるぞ」

川崎弟には強力な護衛がいたがこいつらにはいない!勝ったな!がはは!

「もうお兄ちゃん!三雲君たちはそんなんじゃないって!ただのお友達だよ。大志君と同じ霊長類ヒト科のお友達。」

やだ小町ちゃん辛辣!これは同じ男として同情を禁じ得ない。現にメガネは冷や汗が流れている。もう片方の白髪は何のことだがわからないって顔だ。それよりなんだこいつ。髪が白い。もしかして



アルビノって言われるやつか？

『ハチ君あの白い髪の子。戦えば強いよ。常の周りの警戒を怠ってない。』

『そっちの世界の住人か？』

『わからない。けどこっちの人だったらあれほどの警戒心は身に着かないと思う。だからたぶん彼はこっちで言うネイバーだ』

俺がフランたちと脳内で会話している間に木虎がメガネに向かって言う。

「やつと来たわね。確か……三雲君だったわね。私はボーダー本部所属嵐山隊、木虎藍。本部基地まで同行するわ」

……

「小町どういう事？」

「うーんとね、三雲君ってC級なんだけど、トリガー使って避難誘導のお手伝いや小町を助けてもらったんだよね。それで処分とか決めるために呼び出されてこれから向かう予定だったんだけど……藍さんが迎えに来るなんて思わなかった」

「そうか」

小町を助けてくれたことは感謝するがこいつ相当アホだろ。C級が無断でトリガーを使ったとなればたぶんクビになる。確かそれは入隊したときに言われているはずだ。

「比企谷先輩、小町さん。私はそろそろ三雲君を本部まで連行しますが、お二人は？」

「俺は特に本部に行く用事はないが……小町は？」

「お兄ちゃん、もしよかったら稽古つけてくれない？小町強くなりたいいい」

今日のことと悔しいことがあったのか表情はいつになく真剣だ。本部から一つ頼まれごとをされていて、それをしながら放課後を過ごすつもりだったが小町がこんな真剣なんだ。

「もちろんいいぞ。と言うことで俺たちも一緒に行くぞ」

「わかりました。では行きましょう」

こうして木虎を先頭に俺、小町、三雲、そして最初から三雲、小町

と一緒に居た白髪頭の空閑と五人で本部に向かい始めた

\*\*\*

……犬猿の仲ってこういうのを言うんだろうな

「精……鋭……?」

「何よその疑いの目は!?!」

さつきから木虎と空閑がけんかしまくってる。木虎が三雲に抱いてる対抗心をことを空閑が指摘し、さつきからこの調子だ。

「そういえば比企谷先輩聞きたいことがあるんですけど」

「なんだ?」

二人のけんかに関わりたくないのか三雲が俺たちの方に来る。

「今日の警戒区域のネイバー……あれは何だったんですか?なんで警戒区域の外にネイバーが出てきたんですか?」

「あーまだ確認が取れたわけじゃないんだが、なんでもボーダー基地の誘導装置に引っかからないようにゲート発生装置を取り付けた小型の改造されたトリオン兵がいるらしい」

ユイの話ではその可能性があると。まだそいつを発見できていないから絶対とは言い切れないらしいが十中八九そいつと言うことらしい。

「と言うことはこの街はいつどこにネイバーが出現してもおかしくないってことですか!?!」

「そういうことだな」

「なら早く対処しないと」

「そうだな」

そうそう簡単に見つかるもんじゃないと思っていたがやっぱり全然見つかんねえな。

その小型トリオン兵を見つuckerるために、何人かには街を歩くときに注意して見ろ、と言われている。俺もその一人のだが、それを頼まれてから意識していろいろ歩いたりしているがそれらしいものは全然見つからない。一匹さえ見つければあとはそいつを解析してリーダーを映るようになるからいいんだけど、その一匹を見つけれんのがつらい。

『ハチ君!』

「ああ。なんとなくわかった」

今歩いている土手から川の方を見るとそこにゲートが開いた。

『緊急警報 緊急警報 門が市街地に発生します。市民の皆様は直ちに避難してください。繰り返します。市民の皆様は直ちに避難してください。』

ゲートから出てきたのは初めて見る空中を飛ぶ魚みみたいなトリオン兵。

「ユイあれは?」

電話をするふりをしてユイに聞く。

「まずいですパパー!あれはイルガー、爆撃用のトリオン兵です!」

見るとそのイルガーとやらは街の上まで行くと爆弾みたいなものを落としていく。

「小町、木虎。奴は見ての通り爆撃型のトリオン兵だ。」

それからユイから情報を受け取りつつそれを二人に伝える

「奴は周回軌道で移動しつつ、爆撃する。さらにめんどいことにダメージを与えすぎると勝手に自爆モードに移行して、付近で最も巻き込める人間が多い場所に落下して自爆するらしい」

なぜか空閑が驚いた表情でこちらを見ている。なんに対しての驚きなんだ? まあいいや。

「これを踏まえてだ……小町、木虎二人は住民の避難救助に当たれ。奴は俺が担当する。いいか?」

「比企谷先輩、あのトリオン兵は私にやらせてくれませんか?お願いします」

木虎が俺に頭を下げて頼んでくる。頭を下げる前に見た木虎の目には俺が許可するまで絶対に引かないという意味が見えた。

「だが断る」

「な……なぜですか!」

「もし木虎が何の力も持たない一般人だった場合、あの魚が空飛んでるの見てどうだ?不安に思うだろうが。それに木虎じゃ決め手に欠ける」

木虎のトリガーセットとトリオン量では徐々に削っていかないのとどめはさせないだろう。ダメージを与えすぎると自爆すると分かっているにしてもその自爆するラインが分かっている以上、一撃で確実に屠ることのできる俺のメタトロンの方が絶対に良い。

木虎はしぶしぶ頷いてくれた。

「あ、あのーぼくはどうすれば」

「……お前は避難している、って言いたいが状況が状況だ。責任は俺が取るからお前もトリガー使って避難を手伝え。」

「はい！」

「比企谷先輩、いいんですか？」

「今は猫の手も借りたい状況だし、それに一回も二回も変わらんだろ」  
隊務規定違反を一回した時点でもう鬼怒田さんとかはクビだなんだと言い出すだろうからな。

「質問なけりやあそろそろやるぞ。空閑はしっかりと避難しておけよ」

空閑は三雲と一言二言言葉を交わすと、黒い豆粒みたいなものを渡してその場を離れていった。

「メタトロンの起動」

さて俺も行きますか

\*\*\*

「ここからならよく見えるな」

さっきの場所から離れた土手に立った空閑は今川の上を飛んでいくイルガーを見ながら言った。

なぜ空閑が避難せずに土手にいるのか、その理由は三雲に言われたからだ。

~~~~~

『空閑は比企谷先輩についてくれないか？先輩たちの会話を聞くにたぶん先輩たちも初めて見るトリオン兵だ。比企谷先輩は何か策があるみたいだったけど手に負えないかもしれない。その時はばれないように手を貸してほしい』

『えくくオサムは分かってないかもしれないけどヒキガヤ先輩はす

「ごい強いよ」

『それでもだ。頼む』

『やれやれ。オサムは自分はむってぼうに突撃する癖に面倒見の鬼だな。レプリカ』

『心得た』

レプリカから小型のレプリカが分裂する。

『持っていていけオサム。私の分身だ。私を介してユーマとやり取りできる』

『困ったときはすぐ呼べよ』

『ありがとう空閑、レプリカ』

~~~~~

「レプリカ。ヒキガヤ先輩は自爆モードになる前に倒せると思うか？」

「玄界のトリガーはヒキガヤやキリガヤが使ったものしか見ていないが、あれだけならば難しいだろうな」

「俺もそう思う。となると、本当に俺たちの出番があるかもな」

「ユーマ。あれを」

「ヒキガヤ先輩？空……飛んでる」

八幡はイルガーと同じ高さまで飛ぶと手を振り上げ水平に手を振った。

「嘘だろ」

自爆モードほどじゃないにせよ分厚い装甲があるおかげでそこそこ硬いイルガーがいつも簡単に一瞬で消えていなくなった。

その光景に空閑もレプリカも驚きを隠せない。

「レプリカ、あれがどんな攻撃だったか分かるか？」

「すまないユーマ。レーザーみたいな攻撃だとは思いますがそれ以上は分からない」

「いや、気にするな。それより俺たちも街の方に行こう。ヒキガヤ先輩に見つかるよめんどくさそうだからな」

「そうだな」

そうして空閑とレプリカは街の方へと向かった。

\*\*\*

「ハチ君！ビルを曲がったところに閉じ込められている人がいるよ！」

「ハチこっちにもー！」

イルガーを倒した俺はすぐに住民の救助に向かった。

一般人の前だと三雲がやったようにボーダーの服の方がいいので、メタトロンを解除してボーダーのトリガーを起動すると、それと同時にフランとファルが実体化し、救助を手伝ってもらうことになった。

「わかったすぐに行くー！すいません。敵は倒しましたが念のため避難所に避難をお願いします」

いま助けた人にそう言うのと急いでファルの方に向かう。ここら辺の人はもうほぼ助けたし、フランとファルのところで最後のはずだ。

先に近いファルのところにたどり着くと状況を確認。

「ファル、そっち持ってくれ。一気に行くぞ！せーの！」

ファルに協力してもらいながら脱出するのに邪魔ながれきなどをどかす。

「敵は倒しましたが一応避難所に避難をお願いします。」

さつきと同じく助けた人にそう言うと、今度はファルと一緒にビルの角を曲がった先にいるフランの下を指す。

「フラン！こっちの状況は？」

角を曲がりながらフランに尋ねる。

「あ、ハチ君。こっちはもう大丈夫だよ。小町ちゃんたちが来てくれたからね」

フランの場所までたどり着くと、すでに小町に三雲、木虎に避難しているはずの空閑も到着していて救助が終わっていた。

「お兄ちゃん！フランさんたちがいるなんて聞いてないよ！」

「俺も救助してる時に知ったんだよ。なんかちようどここら辺にいたらしいな」

「うん驚いたよ。フランとここらへんで買い物してたら急にゲートが開いたからね。」

なんか最近こうやって平然と嘘つくことが増えてきたな。……今

俺に嘘に空閑がなんか反応した？そんな気がする。

「あの比企谷先輩、この人たちは？」

「ああ、俺のちよつとした知り合いだよ。それより救助終わったし本部行こうぜ。この件に関しての報告書書かないとだし」

「……そうですね。行きましようか」

たくさん嘘ついてそのどこからぼろが出るのかわからないし、あまりフランとファルについて詮索されないように話を変える。

「フラン、ファル気を付けて帰れよ」

「じゃねハチ君、小町ちゃん」

「また今度ハチ、小町ちゃん」

「おう」

「サヨナラです！フランさんファルさん！」

一回フランとファルとは別れるが誰もいなくなったところで二人は実体化を解き、メタトロンの中に帰ってくる事になっている。

そういえば空閑はいつまでついてくる気なんだ？

結局。一般人がギリギリ行ける本部に行くための連絡通路までついてきましたとき。

## 原作突入5

イルガーとかいう新型のトリオン兵を倒した次の日、C級まで動員した大規模な小型トリオン兵の駆除作戦が行われた。やはりイレギュラーゲートが開いた原因は、ユイがいらんだ通りラッドという小型のトリオン兵だった。迅さんが捕まえてきたそいつをエンジンアの人たちが解析をし、レーダーに映るようにしてから駆除作戦が行われている。で、俺がいるのは本部に頼んで結構反応が多い住宅街に一人で来ている。なぜ住宅街なのかというと俺があることを試すためになるべく人がいないところがよかったのだ。住宅街なら日中は基本的に主婦の人しかいないので避難してもらおう人数が少なく簡単だ。「いつも以上に深く集中して。そうもつと深く」

「自分の体の中にトリオンが血液みたいに流れることをイメージして」

フランとファルの指示の下、座禅を組み集中し、体中を巡るトリオンの流れをイメージする。

「そのまま体を流れるトリオンを手に集中させて」

膝の上で三角形を作るようにしていた手を胸の前まで持ち上げる。そこにトリオンを集中させる。今まで閉じていた眼を開けると、俺の手の間には一つの光の球体ができていた。

「それが、この技の核となるものだよ。ただこれより大きいものを作っちゃだめだよ。これ以上だと命を削る。」

「ああ。わかってる。」

「ならいいよ。じゃあその技を完成させようか!」

「球体を解放して、一気に光を広げるイメージだよ」

「ああ。……天使の法律（エンジェルロウ）、発動」

はじけた球体を中心に辺りに光が広がっていく。少しの間光り続けると光は解けるように消えていった。さて、成果は……

「ユイここら一体の反応はどうだ?」

「すごいですパパ! パパを中心に半径250メートル圏内のラッドの反応がすべて消えました!」



よし！実験は成功だ！

近くにいるフランとファルとハイタッチを交わす。

天使の法律はメタトロンの大技だ。俺が敵と認識したものを消失させるレーザーを広範囲に光として放つことができる。ただし広範囲な分威力は落ちる。範囲を大きくしたまま威力を出そうとすると、さつきフランが言っただように命を削る。と、まあなんだ、便利ではあるが代償もそこそこあるという基本に忠実な仕様となっている。

「パパ人払いしたはずなのに近くに誰かいるんですか？」

「ああ、いや、これはだな……」

答えようとしてしどろもどろになっているとテレパスが通じる。

《ねえハチ君そろそろ誰かに伝えてもいいんじゃないかな？ 私たちのこと。》

《……いいのか？》

なんとなくいいきっかけがなくまだフランたちのことは誰にも話していない。それに……

《大丈夫だよ。ハチの周りにはあの騒動の大本だって聞いて今さら騒ぎ立てるような人はいないでしょ？》

《それにそっちの方が今よりも自由に動けるしね！》

《お前はそっちの方が目的か！》

フランのおかげでユイに伝える決心がついた。

「ユイ、今からちよつと出てきてくれないか？」

「いいですけど、どうかしたんですか？ パパ」

「ちよつとな」

スマホにトリオンを込め、ユイを実体化させる。

「なんですか？ パパ。あ、お久しぶりですフランさんファルさん！」

「久しぶりユイちゃん」

「あれでもなんでお二人がここに？ パパは人払いしたんですよね？」

「ああ。でも人払いした原因の一端がこいつらにもあるっていうかな。とりあえず百聞は一見に如かずってことで見てくれ。フラン、ファル」

「ほいほい」

フランとファルが一瞬でこの場からいなくなる。

「え……」

「フラン、ファル」

もう一度二人に呼びかける。

「ほいほい」

今度は一瞬で二人が姿を現す。

「ええええええええええええー！ー！」

ユイの絶叫があたりに響き渡った。

「あー見てもらって分かったと思うがネイバーなんだわ。この二人」

「正確には元ネイバーね。」

「で、現幽霊、かな？」

「……」

ユイが驚いた表情のまま固まっていた。驚きすぎて思考回路が停止してしまったのか？

「……はっ！どういうことですかパパ！フランさんとファルさんが元ネイバーの現幽霊って！」

「いやー実はな。かくかくしかじかで」

それからユイに今までのことを説明する。

「つまりお二人は大昔に亡くなった方で今はメタトロンの中に住んでいる。ということですか？」

「意識しかないから住んでいるってわけじゃないけどそう言うことだね」

「そうですか。……パパのことはねえたちにはもう言ったんですか？」

「いやまだだけど」

「だったらねえたちに言うときに質問させてください。パパ今はラツドに」

「そうだな」

「ここら一体のラツドはいなくなったとはいえ三門市全体にはまだまだたくさんラツドが潜んでいる。話の続きはユイが言った通り」

ラッドを全部倒して、みんなが揃った時の方がいいだろうな。

\*\*\*

ラッドの殲滅が終わり、フランとファルのことをみんなは話してから1週間後、期末テストも終わりなんとなく学校中がだらだらとした雰囲気になっている中俺は駅の近くにあるコミュニティセンターへと向かっていた。

ことの発端は数日前、謡とルミルミが俺のところまで来たのが始まりだ。(ほぼ毎日謡とは会ってるんだけどね)

なんでも小学校の方で海浜総合高校と総武高校が主催するクリスマスパーティーの手伝いとして参加することになり、その会議に参加したのだが最悪だったらしい。いつまでも何も決めようとしないう進めが行役がいたり、海浜総合のメンツが濃かったりとかなんとか。総武高の生徒会も参加していたんだが、会長と生徒会メンバーのコミュニケーションも取れてなく、散々だったらしい。何してんだ本牧よ。(旧生徒会でめぐりさんの手伝いをしているときに知り合った)そんなわけで総武高生徒会の手伝いとして俺に白羽の矢が立ったわけだ。謡とルミルミの頼みだし、知らない顔がないわけでもないから引き受けた。本牧にはすでに言っているかこの案自体本牧の発案らしい。おい本牧よ。

謡とルミルミとはコミュニティセンター近くのコンビニで待ち合わせとなっている。

コンビニで謡たちと合流するとコミュニティセンターの中に入り、ひとまず本牧に挨拶する。

「よう本牧」

「久しぶり比企谷。今日は来てくれて助かったよ」

「よくも巻き込んでくれやがったなこの野郎。聞けばお前発案らしいじゃねえか」

「それに関しては本当にすまないと思う!」

「お前はどこのバウアーさんだよ」

「けっこう似てんじゃないか」

「で、どこまで決まってるんだ?」

「何も」

「え？」

「だから何も決まってるないよ。議事録に見るか？」

「ああ」

議事録を受け取り中を見る。

「オーケーオーケー把握した。……帰っていい？」

「「だめ（だ／です）」」

本牧だけでなく謡やルミルミにまで却下された。なんだこの議事録は。中身スツカスカだろ。

「ついてきて比企谷。一色さんと向こうの会長に挨拶するから」

そう言っただけで連れてこられたのが亜麻色の髪をしたあざとそうな女子と意識高そうな男子のところだ。あ、一色ってあれか。生徒会長になったやつか。

「一色さん、玉縄君。こちらは比企谷。助っ人として来て貰ったんだ」

「比企谷だ。よろしく頼む」

一色も玉縄も最初は怪訝そうな顔をしていたがスケツトと紹介されてからは納得したような顔になっていた

「よろしくお願ひしますせんばい」

うんあざとい

「僕は玉縄で海浜総合で生徒会長をしているんだ。総武高校と一緒に企画できてよかったよー。お互いにリスペクトできるパートナーシップを築いてシナジー効果を生んでいけないかなと思ってるさー。」

……のっけからいいパンチ打ってくんないこいつ。半分以上何言ってるのか分かんなかったし。

それから近くにいる人間がわらわらやってきて自己紹介をしている。類は友を呼ぶって言うか、あの意識高い玉縄の下に集まったのは同じく意識の高い連中だった。

その中で一人、俺を見て驚いているのかぱちぱち目をしばたかせている奴と目が合った。

「ってひきぎぢやや」

「俺の名前は比企谷だ」

「失礼噛みました」

「違うわざとだ」

「かみまみた☆」

「高校生がそれいって恥ずかしくない？」

「付き合ってあげたんだから最後まで付き合ってよ」

「俺はお前がこのネタを知ってることに驚きだわ」

俺と軽快？なやり取りをしたのは折本かおり。中学の同級生だ。

「比企谷って生徒会なの？」

「いやただの助っ人だよ」

「そっかー。あたしの同じ、なのかな？あたしは友達に誘われてきたんだけど」

「似たようなもんだろ」

「そうだねー」

そこで本牧が驚いた表情でいることに気付いた。

「比企谷って知り合いとかいたんだね」

「おいその言い方だと知り合いとか存在したのかに聞こえるぞ」

「そのつもりで言ったんだけど」

「確かにねー。比企谷って教室でもずっと本読んでんだもん。あたしが話しかけてなかったら一日誰とも話してなかったんじゃない？」

「ふっ。何を当たり前なことを」

「あたりまえだって。マジウケる。そろそろ始まりそうだから戻るね」

折本はたぶん所定の位置なのであろう席に向かう。コの字型にセツトされた机と椅子に皆が座っていく。さて俺は、と端っこの席に座ろうとすると肩を掴まれる。

「比企谷はこっち」

そういつて本牧に連れてこられたのは本牧の隣、席順で言えばコのつながってる部分から一色、本牧、俺、残りの生徒会、謡、ルミルミの順だ。

「いやいや俺端っこがいいんだけど」

「まあまあほら座って」

無理やり本牧に座らされ、渋々ながら折れる。

コの字型の真ん中、いつも城戸さんが座っている席には玉縄が座っている。ちなみに俺たちはコの下の部分だ。

改めてみると向こうの方が数が多い。俺たちは謡たちを加えても7人に対し向こうは倍近い。しかし、実質的にその差よりも人数差は大きく感じられた。その最たる理由は騒がしさだろう。海浜総合の方は男女入り乱れてにぎやかだが俺たちは静かだ。向こうが言い出しつぺらしいし、気合の入れ方が違うのは仕方ない。

状況から察するにメインは海浜総合で俺たち総武高はサポートだろう。

皆が座ったことを確認すると、向こうの生徒会長、玉縄は手を叩き注目を集める。

「えー、じゃあ会議を始めます、よろしくおねがいします」

手慣れた感じで言うと、皆も軽く頭を下げる。

ついに会議が始まった

\*\*\*

コミュニティセンター内の自販機でコーヒーを買い、近くのベンチでそれを飲みながら息を吐く。

なんなのあいつら。カタカナばっか使いやがって。あれが会議してるつもりなのかよ。

「比企谷どんな感じか分かったか？」

本牧が謡とルミルミを連れてこっちに来る。やべえあいつ。小学生を侍らせてやがる……あ、ブーメランだ。俺もコンビニから一緒に来てたわ

「いやまったく。」

「だよね。私も何言ってるのかわからなかったし」

高校生の俺たちでも理解できてないんだ。小学生のルミルミが理解できないのも当然だろう。

「とりあえずどうしましょう。このままだと開催できないか、できても薄い内容のものしかできないのです」

「まずあの空気をぶっ壊さなきゃダメだろうな。あいつらはこの会議のまねごとを楽しんでいる。そこからまずは主導権を奪わないと何を言っても流されて終わりだ。」

実際さっきの会議でも本牧や謡は出し物を決定させるためにいろいろと発言していた。が、玉繩はうまいことその提案を躲し、ブレストを続けた。

現状、出てきた意見はオーケストラやバンド、ジャズコンサートなどがあるが、何やるにせよオフアールや練習などのことも考えるとそろそろ決めないと本気でまずい。

「一番いいのは会長がガツンと言ってくればいいんだけど」

そう言うのと本牧は玉繩と楽しそうに談笑している一色の方を見る。

こういう複数の組織が混ざる場合は得てしてトップの意見がその組織の意見となる。一色は会議の最中は理解できなかつたというのもあるんだろうが発言がなく、ただうなずいているだけだった。

「現状じゃそれも厳しいな」

この現状を打開するには一色に意識を変えてもらうしかないだろう。

「本牧、一色を何とかしろ」

これについては俺がでしゃべるべきではない。もともと俺は助っ人でメインは生徒会だ。新生徒会の初めての仕事で関係ないやつを頼りにしすぎるのもよくないだろう。それに一色と他の生徒会の連中とのコミュニケーションがそこまで取れてないことも問題がある。

「ああ、わかってるよ」

「これでこの企画が成功するかしないかは本牧にかかっているわけだ。頑張れよ副会長。んじゃ帰るわ。こいつら送らんとだし」

「うんおつかれ」

二人を送り家に帰る。

ほんとに準備とかを考えると明日には具体的なことを決定しないともう間に合わない。本牧超頑張れ

\*\*\*

いや、昨日一晩で何したのさ本牧。

「考え方としてはありだと思っただけど二校合同でやることに意義があると思っただ。別のことをやるとシナジー効果も薄れると思うし、ダブルリスクなんじゃないかなあ」

「そうかもですけどー、わたし的にはこっちもやりたいなーって思うんですよね。両方見れるとかお得じゃないですかー?」

一色が昨日までとは打って変わり鋭い舌戦を繰り広げる。本牧には何とかしろって言ったけどさ、一晩でこんなに変わるとはだれも思っただいって。

今日の会議が始まると、一色は演劇案を提案した。しかし敵も幕間に演劇をはさむ折衷案を提示し、一色は金銭的な面から二部構成を提案した。

ここまでは非常にいい流れだったのだがここで会議が停滞した。そしてさっきのような一色と玉繩の会話が繰り返されている。

俺は邪魔にならないように小声で本牧に話しかける。

「一色、大丈夫か? さっき舌打ちみたいなものも聞こえたけど」

「どうだろう。結構イライラしてるみたいだし」

「気持ちはわかる」

「僕もだ。だからそろそろなんとかしないとね」

本牧が手を挙げて立ち上がる。

「二部構成に反対な理由って何?」

「んー、反対ってわけじゃなくてさ。ビジョンを共有すればもっとう体感が出せると思うんだ。イメージ戦略の点でも合同イベントの大枠を外さない方がいいんじゃないかな?」

「なあ、合同でやる必要ってあるか?」

「ここが勝負とみて、俺も加勢に入る。」

「それは合同でやることでグループシナジーを生んで、大きなイベントを」

「シナジーなんてどこにもないし、このままじゃ大きなイベントなんてできないってことに気付いてないのか? それにだ、会議って言うのは会議に参加してる人全員が内容を理解できて共有できて会議なんだ。なあ謡、留美。これまでの会議は内容をしっかり把握しながら進



んでいたか？」

「いえ。会議が終わってから総武高校の人に聞いてやつと内容が把握できていました」

「それに難しい英語なんて使われてもわからないし」

謡とルミルミが正直に答える。

「聞こえたか？今までやってきた会議はただの偽物。そんな無駄なものに俺たちはもう時間を費やしたくない」

会議室は音を忘れたかのように静かになった。その隙を縫うようにいまだに呆然としてる出席者たちに本牧が話しかける。

「無理に一緒にやるより、二回に分けたほうがお客さんにも楽しんでもらえると思うし、それぞれの学校の個性とか出せていいと思うんだけどどうかな？」

「え、あ、うん。いいんじゃないかな」

不意な問いかけに反射的に答えてしまったのか折本は肯定する。その答えに自信がないのか隣の人と顔を合わせた。すると顔を合わせた人もうなずく。こうして雪崩式に二部構成になり、会議は幕を閉じた

## 原作突入6

コミュニテイセンターの講堂の壁にもたれかかり、演劇の練習を見る。頼んだ翌日ということもあり、まだ小学校の低学年の子供たちの動きはばらばらだ。

一昨日の会議の翌日に謡たちを通じて、低学年の子供たちに演劇のオフアーを出し、今日から練習が始まっている。

しばらくそれを見ていたが、扉から本牧が入ってきたので、そちらの方に意識を向ける。すると本牧は俺に用事があったのか、こちらの方に向かってきた。

「比企谷、ちよつと来てくれないか」

講堂から出て本牧は会議室の方に向かう。そしてたどり着いた先には、会議室の端の方で頭を抱えている書記ちゃんがいた。

「二人で物語の終わりを考えていたんだけど、いいのが思いつかなくてさ。比企谷も協力してくれないか」

「まあいいぞ」

「ありがとう。それで比企谷はどこまでストーリー知ってる？」

「今小学生が練習していることまでだな。さつき謡に見せてもらった」

「オーケー。藤沢さん今できてるどこ見せてもらえる？」

書記ちゃんから渡された紙を黙読する。ストーリーは『賢者の贈り物』でちよこちよこアレンジを加えていくらしい。まだ決まっていなかったところには、いくつかの案が書かれている。そこまで黙読し、少し考える。

「ペン、貸してくれ。あと、空いてるところに書いていいか？」

「はいどうぞ」

ペンを受け取り、空いているところに書き込みを入れていく。

「とりあえず読んでみて、何個か考えたものを書いてみた」

それから書いた案について説明を始める

「……と、こんなところだ。どうだ？」

今回の相手は老人が多いから老人が好きそうなものをいくつか考えてみたがどうだろうか。

本牧と書記ちゃんは目を合わせるとうなずく

「ありがとう比企谷。三つ目の案で行きたいと思う。もう少し細部を詰めた方がいいから手伝ってくれるか？」

「ああ」

それから三人で演劇の内容を詰めることとなった。

\*\*\*

演劇の内容を最後まで決めた頃には外は真っ暗になっており、小学生たちは外が暗くなり始めた時にすでに帰らせていた。いつもなら謡とルミルミも俺と同じ時間まで残り、家に送るなり、本部まで一緒に行くなりしていたが、今日は二人は本部に行くが俺は特に本部に用事がなかったため、別々に帰っている。さらに小町も今日は本部にいるため、今日の晩飯は自分で何とかしてくれとのことなので適当にラーメン屋を探して歩く、歩く、歩く。さらにペースを上げて歩く、歩く、歩く。背後から迫る死神から逃げるように歩く、歩く、歩く

「比企谷いい加減止まれって」

チツ、捕まってしまったようだ。

「さつきから何なんですか迅さん。ついにセクハラ大魔迅（注・誤字にあらず）からストーカーにジョブチェンジしたんですか？よかったですね！これでムシヨまであと一歩ですよ！」

「何、比企谷はそんなに俺を刑務所に入りたいの？そんなことより話がある。晩飯まだだろ？ラーメンおごるよ」

「すいません。俺、男は守備範囲じゃないんで」

「小町ちゃんのことだ」

「行きます。」

即答だった。

\*\*\*

迅さんに連れてこられたのは、たぶん迅さんのなじみのラーメン屋だ。

「おやっさん、ラーメン二つ」

「あ、一つは大盛りで。あと餃子もお願いします」

「はいよー」

「こちらを見てくる迅さんを無視しつつ、空いてるところに座る。

「それで迅さん、小町のこと話して何ですか」

「怒らずに冷静に聞いてくれよ」

「そこで一呼吸置いた迅さんは静かにこう切りだした

「……小町ちゃんが見えなかった」

「……は？どういうことですか！迅さん!!」

「順を追って話すから落ち着け。ほら水飲め」

「迅さんに手渡された水を一口飲む。確かに頭に血が上りすぎてる。

「迅さんのことだ。きつとそれを回避する未来も見えてる。」

「すいません落ち着きました。それでどういうことなんですか」

「これはまだ上層部にしか伝えてないことなんだが近々大規模侵攻が

起る。」

「…その時に小町が死ぬ未来が見えたってことなんですか？」

「ああ」

「もちろんそれを回避する未来も見えてるんですよ？」

「ああ。だから今日話をしに来たんだ。…ところで遠征部隊がもう

帰ってきたことは知ってるか？」

「知ってます。めぐりさんが国近先輩にゲーム勝負をしに行きました

から」

「迅さんが少し引いた顔を見せる。いやほんとに。遠征から帰って

きたばかりなのにすぐゲームとか。」

「それでその遠征部隊が帰ってきたことと今までの話となんか関係が

あるんですか？」

「ああ。その遠征部隊なんだが、玉狛を、というか玉狛支部にいるやつ

を襲撃しようとしている」

「なに!?……もしかしてネイバー、それもブラックトリガーですか？」

「ボーダー隊員が一般人を襲撃しようとするはずもないし、遠征部隊

まで引張ってくるはずもなければそれしか選択肢がない。」

「そう、正解。ついでに言うなら遠征部隊十三輪隊だな。で、比企谷に

は俺と協力してその遠征部隊と三輪隊を撤退させてほしいんだ」

「撃退ではなく、撤退ですか。そこに何か意味が？」

「撃退はプランBだな。なるべく本部との摩擦は小さくしたい。」

「話は分かりました。協力します。けど、これが小町が死ぬ未来を回避するための手段なんですよね?」

「そうだ。ここであいつを守れるかで未来が変わる。さすがのあいつもボーダーの精鋭部隊が相手だと負けるかもしれないからな」

遠征部隊はブラックトリガーにも対抗できるチームが選ばれる。俺たちが守るやつはブラックトリガーがよほどのバケモノみたいなトリガーじゃない限り負けるだろう。

「あ、そういえば一つ聞きたいことがあるんだが比企谷は金髪の女の子と亜麻色の髪の男の子を知ってるか?俺が見た未来で俺と比企谷と一緒に戦っている未来があった」

思い浮かぶのはフランとファルの二人。もしかして…

《お前ら一緒に戦おうとか思っていないよな?》

《《……》》

《《なんか言えよ!》》

なぜか二人とも一緒に戦おうとしているようで……急に黙った俺を迅さんが訝しげに見てくる。

「えーと一応心当たりがあります」

俺がそう言うのと呆れたような表情に。

「なんか比企谷も大変そうだな。……とりあえずラーメン来たし、この話はここまでにしよう」

「そうですね…あ、最後に質問が」

「ん?なに?」

「その襲撃っていつあるんですか?」

「これからすぐ」

持っていたコップを落としそうになった

\*\*\*

「こんばんわー!初めまして迅さん!メタトロンの中の人一号ことサフラン・ツェベルクです!フランって呼んでください!よろしくー!」

「メタトロンの中の人二号ことファルコン、ただのファルコンです。」

「ファルと呼んでください」

「おうよろしくな」

ラーメン屋を出て、待機場所に着いたとたんフランとファルはメタトロンの中から飛び出してきた。それから軽く事情を説明（心意のことはぼかしてほぼ全部。）してからいま自己紹介が終わった。

そこで少し気になったことを聞いてみる

「フラン何でお前そんなにテンションが高いんだよ」

「だって久しぶりに戦闘ができるんだよ!? 相手も強いって聞くしテンションが上がらないわけないじゃん!」

「うわー戦闘狂の発言だ。ってか、なに戦う気になってんだよ。お前たちに戦わせる気なんてないぞ」

「はっはー! いくらハチ君でも私のはやる気持ちを抑えることはできないぜー!」

「何こいつめんどくせえ」

視線でファルに助けを求めるも静かに首を横に振られる。

「ごめんハチ。フランがこうなったら僕じゃ止めることなんてできないよ。それに…」

それに…?

「僕も戦いたいしね」

「お前もかよ!」

大声で突っ込んだ俺は悪くないと思うんだ。あと、迅さんには同情したような目で見られてました……悲しくなんてないやい!

\*\*\*

メタトロンの能力を応用してファルが擬似カメレオン状態（なんかレーザーで光を屈折させて見えなくさせてるらしい。詳しいことは八幡文系だからわかんない!）で迅さんと襲撃部隊の会話を見守る。（ちなみに俺たち三人は全員がメタトロンの能力を使える）自己紹介が終わってから「かつこいい登場がしたい!」というフランのわがままから何も無いところから現れるということが決まってからこの透明な状態になって少し、なんだかこの透明な状態が気に入ってきていた。（ファルがやっているのはこういうのはファルが一番得意だから

だ)

『ハチ君あの中で一番強いのは誰?』

『それは太刀川さん、先頭のひげの人だな。ソロランキング二位だし』  
『へえー!じゃああの人と戦いたい!』

『それはたぶん無理だな。太刀川さんはたぶん迅さんと戦うから』

『じゃあ僕たちと戦いそうな人って誰なの?』

『うーん…』

太刀川さんは迅さんの方に行くだろうし、風間隊も迅さんの方に行くさそうだから

『…でかい方の目つきの悪いやつとかキューシャ、ひげじゃない方の黒のロングコート、あとはスナイパーとか、もしかしたらめんどくさいトラッパーの人もいるかもしれん』

さつき当真さんが冬島さんはいないって言ってたがその発言自体がブラフって可能性も捨てきれないからな。一応警戒はしておいた方がいいだろう。

『それぞれの戦い方とかトリガーの特徴とかは?』

『スナイパー、トラッパーは省略するぞ。目つきの悪いやつは「レッドバレット」という重くなる弾を使う。これは射程とかが短い代わりにシールドに干渉しない。カチューシャは穂先の変形する槍を使う。ギリギリで受けすぎると、斬れてることがあるのと、飛ぶ斬撃も使えるから注意な。黒のロングコートの方は前の二人と違って完全な中距離型だ。注意するのは合成弾。こんなところだ。他の人が来たらまた説明する』

『うんおーけー!早く早く戦いたいな』

『もうすぐ、いや行くぞ』

メタトロンの能力を解除させ姿を現す。突然現れた俺たちに襲撃部隊は驚いた表情を浮かべたがすぐに真剣な顔になる。

『おい比企谷。隣にいるやつらは誰だ』

「まあ俺のちよつとした知り合いですよ。そんなわけで俺たちは迅さんに加勢するんでどうぞよろしく」

「比企谷たちがいればはつきり言っただけで俺たちが勝つよ。俺のサイドエ

フェクトがそう言ってる。俺だって別に本部とけんかしたいわけじゃない。ここは引いてくれると嬉しいな」

「何言ってるの迅さん！それじゃ私が戦えn」

「お前こそ何言ってるんだバカ！皆さんすいませんうちのバカが。このバカは俺たちがなんとかしますのでどうぞお話続けちゃってください」

「…迅が何と言おうと俺たちは任務を遂行する。」

襲撃部隊は戦闘態勢に入る。俺たちもそれぞれ武器を抜く

「それに迅、お前の予知を覆したくなった」

その言葉が合図となり戦闘が始まった。



## 原作突入7

玉狛襲撃部隊との戦闘が始まる。

まずは俺が武器を構えこちらに向かってくる風間隊にバイパーを放つ。風間さんと菊地原はシールドで防ぎ足を止めたが歌川は躲して迅さんに斬りかかる。迅さんは弧月で歌川のスコーピオンを受け、カウンターで上段から斬り下ろす。歌川はスコーピオンで止めようとしたがスコーピオンの低い耐久力では受けきることができずに斬られ少しトリオンが漏れだし、後ろに下がる。それと同時に今度は太刀川さんが迅さんに斬りかかる。迅さんは歌川の時と同じように弧月で受け止めようとしたが、今度はそれをする事なく歌川と同じように一歩下がる。そして空いたスペースには、フランが入り込み、太刀川さんの剣を手を持つ黄金色の剣で受け流し、体制の崩れた太刀川さんに追撃を加える。

「…ぐっ！」

太刀川さんは無理な体勢でガードしたが、続くフランの体術を織り交ぜた攻撃を受けきることができずに、太刀川さんは身体のいたるところからトリオンを漏れ出させる。

「フランちゃん」

迅さんがフランに声をかけ、フランがこっちに戻ってくる。俺もファルもけん制していた手を止める。

「どお、太刀川さん。今戦ってたフランちゃんははつきり言って太刀川さん以上の腕を持つてるし、ファル君もフランちゃんと同等くらい強い。改めて言うけどここで退いてくれないかな」

『まあ退かないでしょうね。それで迅さん向こうの次の行動ってやっぱり分断ですかね』

『そうだな。何人かそっちで担当してもらっただけで楽になるしよろしく頼む』

『オーケーです』

「比企谷が連れてきた二人がどれだけ強かろうとも俺たちは任務を遂行するだけだ」

そう言いつつ太刀川さんは鞘に収めていた弧月に手をかける。そして旋空を放つ。

「コール メタリック エレメント」

ことができなかつた。抜こうとした弧月の柄の先に金属の円盤みたいなものが見える。あれがあつたせいで弧月が抜けなかつたみたいだ。

「コール アクワイアス エレメント、サンダー エレメント」

さつきと同じような呪文？を唱えた途端、俺たちと太刀川さんたちの間に水の塊が出現し、そこに電気みたいなものが流れて水が消滅する。

「ハチ君迅さん退くよ。ファル君！」

「コール サーマル エレメント」

サーマル？熱？考えてるうちに強引にフランに引つ張られその場を離脱させられる。太刀川さんたちの方では何かに気付いたような風間隊の三人と三輪がすぐにその場を離れる。その場に残る太刀川さん、出水、米屋の三人と今度はファルの呪文で出てきた炎のやり。その炎のやりはさつきまで水の塊があつた場所まで進むと、爆発が起こつた

「…なにあれ」

「水を電気で分解して発生した水素に火をつけてどーん！だよ」

「…いやそつちじゃなくてあの水とか作ったやつ」

「あれは神聖術って言って僕たちの国ではみんな使えるよ。まあ得意不得意はあるけどね」

「…ファル君たちの国ってすごいんだな」

迅さんがしみじみとつぶやく。ほんとそれな。神聖術に心意、七本の神器とまで言われるほどのブラックトリガー。改めて思ったけどやばい

「さてそろそろ俺たちも別れましょうか。俺たちは向こうの公園辺りで戦います」

「わかつた。まだ作戦はAのままだぞ」

「わかつてます。気を付けてください」

「そつちもな」

迅さんと別れて公園に行く。目的は何人か引き付けることなので公園の中央。見つかりやすいところで待機する。……………

「いや、そこブランコで遊ぶなよ」

「だってなかなか来ないんだもん」『その木の後ろにいるね』

「確かに。そろそろ来てもいいはずなのにね。もしかしてこつちに来てないとか?」『姿は見えないし、透明にでもなってるのかな』

「後ろから挟撃されるリスクを考えたらそれはないんじゃないか?」『なんでそんなことわかんだよ』

てかこれつらい。口で別なこと言いつつ、頭の中で別なこと考えるのまじつらい。

「けどこれだけ来ないとね」『知覚を極限まで拡大し、相手の動きなどはもちろん、音や空気、ありとあらゆるその場の情報を俯瞰的に把握する。識の境地って言うんだけどそれを使ってるんだ。で、せつかく困らなつて一人でのこのこ出てきたのに来ないし、待ってないでこつちから行く?』

「もう少し待ってみて来なかったら迅さんの方に行こうぜ」『そうだな。透明になつてるとしたら風間隊だ。警戒するところは、厳しい訓練で得た連携力と菊地原っていう毒キノコが強化聴覚のサイドエフェクトを持つてて、それを全員が共有できるところだな』

『はーい!じゃあ一発大きいのかますからあとは臨機応変に行こう!』

『なにその雑な作戦』

『じゃあ行くよ。金木犀の剣!リリースリコレクション!!』

フランの持つている剣——金木犀の剣の刀身が無数の花卉になる。…いやどこの六番隊長の千本桜だよ!フランの千本桜(仮)はさつき二人が言っていた木の陰を中心にその周辺まで飛んでいく。さて、風間隊は…

ガキガキツとフランの放った花卉が撃ち落されていく。風間隊の三人がカメレオンを解除し、スコープイオンを手に持ち姿を現す。

「その二人を連れて引け比企谷。俺たちは城戸司令の勅命で動いて

る。」

「残念ですがそれはできません。こつちにも事情というものがあるんで。風間さん」

「これ以上邪魔するようならお前のトリガーは没収され、その二人は討伐対象になるぞ」

『模擬戦を除くボーダー隊員同士の戦闘を固く禁ずる』俺のトリガーが没収なら風間さんたちのトリガーも没収ですよ。それならいいらしいですよ。それにこの二人なら大丈夫ですよ。この二人が負ける姿なんて全く想像できませんから」

「さっすがー！ハチ分かつてる！そうそう私たちは誰にも負けないよ。誰にも、ね！」

落ちたはずの花弁が宙を舞う。

「撃ち落しただけで止まると思った？残念！そんなんじゃ止まらないよ」

フランは花卉でドームみたいなものを作り風間隊の三人を閉じ込める。たまに一部分だけドームが厚くなつてるところを見ると、きつと出ようと風間隊の三人が抵抗しようとしているのだと分かる。

「じゃあ後はよろしく。ファル君」

「うん。青薔薇の剣！リリースリコレクション!!」

ファルが持つっている青色の剣——青薔薇の剣を地面に突き刺すとそこから地面が凍っていき、氷がドームまで伸びていく。そしてドームが開いた時、風間隊の三人の氷像が完成していた。

「これって中生きてるの？」

「生きてるよ。ただまったく身体は動かさないけどね」

「さて後は迅さんたちの方だな」

迅さんたちが戦闘している方を向くと、ちょうど一条の光の柱が上がる。

「っとプランBだな。えーっとあのまま碎けばいいのか？」

風間さんたちの氷像を見ながら尋ねる

「いやそんなことしなくても大丈夫。咲け！青薔薇!!」

ファルの突き刺した剣から出た茨が凍った地面をたどり、風間さん

たち三人に巻き付いていく。その巻き付いた茨は風間さんたちの体に何輪もの青い薔薇の花を咲かせる。そして風間さんたちはベイルアウトした。

ファルは地面に突き刺していた剣を抜くと、風間さんたちを凍らせていた場所まで行き、地面に落ちた薔薇の花を拾い上げていた。それをしばらく回して観察したかと思うとファルはその薔薇の花を一口口に含んでいた。

「うまい！ファンもハチも食べてみなよ！」

「ファル君が絶賛するなんて久しぶりだね。なら久しぶりに食べよつと…ん！おいしい！」

ファルに薔薇を手渡され、ファルの評価を聞いたファンがためらいもなく口に入れる。

「ほらハチも食べてみなよ。おいしいから」

「いや俺いいから」

「まあそんな遠慮せずに」

「ほんといいから」

「あーもう！じれったいなー！」

ファンは持っていた薔薇の花を無理やり俺の口に突っ込んできた。

「…なにこれ、ほんとうまいな。」

千葉のソウルドリンクであるマツ缶にも勝るとも劣らない味。それに…

「トリオンが回復してる」

さつき使ったトリオンが回復している。

「青薔薇の剣は、相手を凍らせることで動きを止め、相手のトリオンを吸収して薔薇の花を咲かせるんだ。」

「そして薔薇の花を食べるとトリオンを回復できる。味の方ははつきりとした基準はないんだけど強いとおいしいみたい。よし、トリオンも回復できたことだし、迅さんの方に行こうよ！あの髭の人とまた戦えるかもしれないし」

「お前はそればっかだな！」

文句は言いつつも、フランの意見には賛成なわけで俺たちは迅さんの方へと向かった

\*\*\*

「正式入隊日まであと二週間弱…それまでに必ず、お前を倒してブラックトリガーを回収する。」

「残念だけどそりゃ無理だ」

迅さんは風刃を振り、最後まで残っていた太刀川さんと、三輪をベイルアウトさせた。

「お疲れさまでした迅さん」

「そっちもお疲れ。まあまだ終わってないんだけど。そういうことで本部分行くぞ本部！」

え、ちよ、どういうこと？

\*\*\*

「失礼します。どうも皆さんお揃いで。会議中にすみませんね」

「失礼します」

「失礼しまーす！」

「な…!？」

「迅、比企谷」

会議中にいきなり入ってきた俺らに上層部の方々は驚いた顔をす  
る。

「きつさまらあく！よくものうのと顔を出せたな！」

「まあそう怒らないください鬼怒田さん。血圧上がっちゃうよ」

「何の要件だ迅、比企谷。宣戦布告でもしに来たか」

「違うよ城戸さん。取引しに来たんだ。こっちの要求は二つ。うちの後輩空閑遊真のボーダー入隊を認めてきたこと、それとここにいる二人、ファルコンとサフランを今後一切襲わないことを約束していただきたい」

「なにい？どういうことだ?!?そもそもその二人はどこ誰だ!？」

迅さんが俺に目配せをする。なんとなく意図は察せた

「この二人のことは俺から。まずは見てもらった方が早いと思います。フラン、ファル」

フランたちが一回メタトロンの中に戻り、再度現れる。

「こうゆうことです」

「…えっと、比企谷君。その二人はユイちゃんと同じ自立型のトリオン兵なのかい？」

「それとは違ってですね、この二人は…幽霊みたいな感じですよ」

「比企谷もつとわかりやすく説明しろ」

「あーとこの二人は一番最初、災禍の鎧ができた時の依り代となったというか、そんな感じの奴らで詳しいことは長くなるんで省きますが、いまは表現するならメタトロンというか俺に憑りついてるって感じですよ」

「サフラン・ツベルクですよ！」

「ファルコンです。どうぞよろしく」

フランとファルの自己紹介が終わる。

「迅君、君は取引に来たと言ったね？だったら君は何を差し出してくれるんだい？」

「風刃を出す。さっきの二つの要求と引き換えにこっちは風刃を本部に渡すよ。さあどうする城戸さん」

きつと上層部の頭の中ではリスクリターンの計算が行われているだろう。

「…いいだろう。空閑遊真のボーダー入隊を認め、サフランとファルの二人を今後襲わないことを約束する」

「ありがとうございます。用件は済んだので俺たちは失礼します」

そう言っただけで俺たちは会議室を出た

\*\*\*

会議室を出て迅さんたちと廊下を歩く。今日はもう遅い時間だし、作戦室に泊まるのかな、などを考えていると、廊下の両側には太刀川さんと風間さんがいる。

「ちよっとツラ貸してもらおうか」

…ヤンキーか何か？

\*\*\*

「おい迅、俺たちを利用してまでネイバーをボーダーに入れる目的は

なんだ？なにを企んでる？それに勝ち逃げする気か？今すぐ風刃取り返して、もう一回勝負しろ」

「無茶言わないでよ。それに俺はあいつに「楽しい時間」を作ってやりたいだけだよ」

「楽しい時間？それとボーダー入隊にどうつながる。何か関係あるのか？」

「もちろんあるさ。俺は太刀川さんたちとバチバチしてる時が最高に楽しかった。今のボーダーにはいくらでも遊び相手が居る。あいつもきつと毎日が楽しくなる。あいつは昔の俺に似てるからな。それに今なら太刀川さんたちだって勝てない遊び相手もいるからな」

や、そこでニヤリとしてこつちを見ないでくださいよ

「そうそう。髭の人は迅さんより先に私にリベンジマッチしなくないの？それにちっちゃい人は二対三で私たちに完封されて修行が足りないんじゃないの？」

うわこいつ、太刀川さんはいいとして風間さんまで煽ったよ。ほら見ろ迅さんまでに引いてるぞ

「いいだろう。じゃあ相手になってもらおうか」

「あ、待って風間さん！女の方が俺がもらう。あの時は後ろに迅が控えていてまだ全力じゃなかったからな」

「じゃあそう言うことでハチ君、ちよつといってくるね」

「あんまり遅くならないように帰って来いよ」

「わかってるよ」

そして残ったのは俺と迅さん。

「元気ですね、彼らは」

「そうだな」

最後に残ったのは乾いた笑いでした

結局、フランとファルが帰ってきたのは日付が変わり、さらに長針が二周ほどしたころでした



## 原作突入 8

ブラックトリガー争奪戦からはや数日。年が明けました。

ブラックトリガー争奪戦の次の日には総武高では終業式が行われた。その日にもらった冬季休業中の課題を終わらせつつ、家の掃除をしているとすぐに年が明けた。長期休業中でないと大規模の掃除ができないとはいえ、なかなかやばい状況だった。台所の換気扇なんかは油污れがひどくて一日中洗剤につけておかなきゃいけないほどだったし、そのほかにも、指でなぞればくつきりと指でなぞった跡が付くほどほこりがたまっていた場所を掃除したり、ずっとタイミンクがなくて積みあがっていた縛ってなかったジャンプを縛ったりと、なんとも大変だった。けど、頑張った甲斐があつて、まあそこそこきれいになったんじゃないかと思う。

ただこれからは小町も正隊員になり、家にいる時間も少なくなると思うので家にいるときにはこまめに掃除をしようとして二人で決めた。

大掃除の話はこのくらいにしておいて、俺たちは今初日の出を見に来ています。

もともと比企谷隊プラス小町、ユイ、フラン、ファルの計九人の大所帯で初詣には行くつもりであったが、ユイとフランの初日の出が見てみたいとの言葉から初日の出まで見に来ることとなった。(フランは見たことがあるんじゃないかと思ってファルに聞くと、ファルたちの国では太陽的なものが二つあり、新年にちょうど初日の出が見られるのは20年に一度くらいらしい。：ナメック星かよ)

初日の出は陽乃さんのおすすめの場所で見ているがすごい。俺たちの前には池とか湖みたいなものがあり、そこで太陽の光を反射していても幻想的である。

初日の出を見てから一度家に帰り、初詣に行くですでにけっこうな長蛇の列ができていた。

「ハチ君暇。なんか面白い話して。それにこの振袖？ってなんか動きづらい」

そう、女性陣は一度家に帰ったタイミンクで全員振袖に着替えてい

るのだ。

「普段気ないものなんだから仕方ねえだろ。それに俺が面白い話なんてできると思ってたのか」

「ううん。思ってたないよ」

「じゃあなんで俺に振ったんだよ」

「…それでしたらみんなでもウミガメでもやりませんか」

楓子さんの提案にみんなが首をかしげるなか、俺とファルはその正体を知っていた

「ああ、『妹さえいればいい』のやつですか」

「それです」

あの1話目アバンは衝撃的だった。ファルと一緒に録画したのを見ていたが一回再生を止めて確認したからな（筆者談）。それより楓子さんも見てたのかあの1話

「楓子そのウミガメって?」

へえ、陽乃さんは知らないのか

「正式名称はウミガメのスープ。水平思考パズルです。出題者がある奇妙な事件を言い、回答者は出題者にYESかNOで答えられることを質問していきその事件の真相を暴くというものです。実際に私とハチさんで一回試してやってみましょうか。…とある男が海の見えるレストランでウミガメのスープを注文しました。それを一口飲んだところで男はシェフを呼び、「これは本当にウミガメのスープですか」と質問しました。シェフは「間違いない」と答えました。男は勘定をし帰宅した後、自殺しました。なぜでしょう」

これはウミガメのスープってググると一番最初に出てくる問題だ。目的はやり方を見せることだから少し考えて質問するか

「男がスープを飲んだことと自殺したことに関係ありますか」

「YES、すごく重要です」

これはYESの質問。

「男は借金がありましたか」

「NO」

これはNOの質問。

「男はシェフでしたか」

「わかりません。わからないって言うのは関係がないってことです。こんな感じで質問していき真相を見つけていきます」

「だいたいこんな感じだ。もしわからなくて知りたかったらググってくれ。」

「ふうちゃんやり方は分かったけどその事件の真相って?」

「いろいろバリエーションがありますが、一番オーソドックスなものは男は船で遭難したことがありその時に食料がなくなり仲間たちは死体の肉を食べたが男は食べなかった。男が死にそうになった時に仲間が死体の肉をウミガメのスープと偽り、飲ませた。助かり、レストランでウミガメのスープを飲んだ時に味の違いから、真実に気が付き自殺したというものです。改めて、ルールは大丈夫ですよね」

みんながうなづく。

「では問題です。ある作家が締め切りを破ると編集部の人に感謝されました。なぜでしょう」

こっちは『妹さえいればいい』の1話で出された問題だ。読者の中には知っている人もいると思うが、読者だけにヒントを言うと、締め切りの意味を考えることだな。

「うーん、まずは…それは現代日本の話ですか」

「YES、ですけどあまり関係はないです」

「じゃあ今の日本でその状況は起こりえますか」

「…YES、ですかね。絶対には言い切れないです」

こんな感じで質問していき、正解が出るころには列はかなり進んでいた。

「正解です。もうすぐ私たちの番になりますし、ここまでですね」

楓子さんの言葉で前を見るとあと、五組かそこらしかいない。

「ユイ、フラン、ファルお賽銭渡しておくぞ」

「ハチ君お賽銭って何?」

お賽銭を知らないのか。やっぱ文化の違いってあるもんだな。

「神様に渡すお金みたいなもんだ。詳しいあれは知らん。昔からこんなもんだって思ってたやってるからな」

「そうなんだ。それでお賽銭ってどうすればいいの」

「正しいのはお賽銭を前の方にある賽銭箱に投げ入れて二礼二拍手一礼なんだが混雑してるし二拍手してから一礼しつつ願い事を心の中で念ずるくらいだな。ほら今やってる人の参考にしろ」

ちようど今やってる人がいたので参考にさせてもらおう。ごめん、そしてありがとう。

「へえうんわかった！願い事って何でもいいの？」

「本来なら抱負がいいんだろうが、何でもいいと思うぞ。」

「ちなみにパパは何にするのですか」

「俺は特にないから小町の受験祈願にするし。ところでフランたちの国では新年にどこかに行くとかそういうのはしなかったのか」

「特にしないよ？ただこっちのおせち？みたいに食事が豪華になるだけ」

「ほー…順番だな」

さすがに九人が一気に横に並べるスペースはないので四、五に分かれる。ちなみに先発は陽乃さん、楓子さん、めぐりさん、小町で後発は俺、フラン、ファル、謡、ユイだ。

ユイはもともと結構ネットに潜ってるから知ってるみたいだし、フランとファルもさつき教えたことをしつかりとできていた。

全員のお参りが終わり、集まる

「色々出店が出てますけどどうします。というかこいつがもう我慢できそうにないんですけど」

抑えているフランを見る。出店で売っているものが見たことのないのか目を輝かせている

「出店見てみるのはいいけど先に絵馬をみんなで書こ」

「そうですね」

「ハチ絵馬って？」

「絵馬っていう木の板があつてだなそこに願い事を書いてつるすんだよ。そういえばおみくじもありましたね」

「やっぱり初詣に来たならこの二つもやっておきたいよな  
「だってきフラン。もう少しお預けだね」

いや俺をにらむなよ。

その後は絵馬を書き、おみくじを引く。

「みなさんどうでしたか。私は吉なのです」

「小吉です」「大吉だね」「末吉だよ」「吉です」「小吉です」「どこ見るの?」「ここ」「じゃあ大吉」「中吉だね」

順番に謡、楓子さん、陽乃さん、めぐりさん、小町、ユイ、フラン、ファルの順だ。そして最後に残った俺は

「凶」

ねえ何でおれだけ悪いの?…べ、別にいいしー!ほ、ほ、ほらあと  
は上がるだけっていうか!もう下がることはないし。ただ気になる  
のは争事(あらそい)、これからの大規模侵攻に関してそうでなんかや  
なんだよな

「ちよつと結んできます」

凶のおみくじをもって境内のところにある結ぶやつに向かう。と  
そこで知ってるやつらの声があった。

「あれ?比企谷じゃん。こんなところで、つておみくじ凶出たんでマジ  
ウケる」

「あ、ヒキオじゃん」

「ん」

「はろはろ」

「よお」

いや、川崎さんや。「ん」の一文字って何なん?俺でももつとまとも  
に…できないな

「お前らも、つて聞くまでもないか」

「今日ここに来るとしたらそれ以外にないっしょ。ヒキオは一人なん  
?」

「いや向こうにみんないるぞ」

俺がみんながいる方を向くとこつちに気付いていたのか手を振つ  
ていた。三浦たちは会釈で返している

「俺はそろそろ戻るわ。じゃあな」

「じゃあね」

三浦たちと別れ、陽乃さんたちの方に戻る。俺が戻るとすでにフランクの口からはよだれが垂れていた

「ハチ君戻ってきたしもう行っていいよね！」

「渡した金をオーバーしても追加で貸さないからな」

「わかってる！行ってきます!!」

「ちよつと待ってよフラン！」

まずはリング飴の屋台に突撃していくフランにそれを追いかけるフアル。

ユイも夏祭りの時は屋台の方に行くことはできなかったので興奮した感じで謡と小町とわたあめの屋台の方に向かっていった。

陽乃さん、楓子さん、めぐりさんの年上三人組は射的の方に向かっている。

周りを見てみると幸せそうな家族連れやカップル（滅べ）がいる。こいつらだけじゃなく三門氏の幸せを守るために今年も一年がんばるぞい

~~~~~

「この力でヒキタニに復讐してやる！」

「まさか本当にアレ（・・・）が使えるとは思いませんでしたね、隊長」

「ああ。ミラ、こいつが次の遠征で使い物になるようにしっかりと訓練させておけ」

「はい、ハイレイン隊長」

原作突入9

1月8日。今日はボーダー入隊式の日だ。俺たち比企谷隊はいつも通り嵐山隊の手伝いをしている。今は嵐山さんが入隊者に向けて説明を行っていて、これからアタッカー・ガンナー組とスナイパー組に分かれるが、俺たちは既に分かれている。楓子さんはスナイパーの方に、めぐりさんはオペレーターの方に、俺と謡はアタッカー・ガンナーの方に分かれている。ちなみに陽乃さんは用事があるそうなので欠席だ。

「ん？あれは三雲か？」

体育館の端の方に三雲を見つけた。あいつは既に入隊しているはずだが何でいるんだろうか

「誰かお知り合いでしたのですか」

「ああ。あ、そういうことか」

三雲の近くには特徴的な白髪頭の空閑がいることから察するに、空閑の付き添いとかそこらだろう。

そうこうしてる間に入隊者たちは二手に分かれ、まずはスナイパー組が移動を始める。アタッカー・ガンナー組は正隊員への上がり方を説明され、とある三バカが目立っている。まああいつらは仮入隊期間にそれなりの実績を残して、ポイントが上乘せされているからな。目立って当然だろう。

一通りの説明が終わり、アタッカー・ガンナー組も移動を始め、俺と謡も最後尾をついていく。

「あ、比企谷先輩！それと…」

最後尾にいと少し前を歩いていた三雲と空閑がこっちに気付いた

「初めまして三雲さんと空閑さんですね。私は比企谷隊に所属している四埜宮謡と申します。」

「これは、丁寧にも。空閑遊真です。背は低いけど15歳です」「えつと僕は三雲修です。よろしくお願いします」

おい三雲よ。なぜそんなに冷や汗をかいている。あれか？謡が明

らかに自分よりも年下なのに言葉遣いがしつかりとしているところにか。俺も始めて謡と会った時はビビったわ。

「三雲さんは恰好から察するにB級なのですよね。今日はなぜここに？」

「あ、僕は空閑の付き添いと転属の手続きをしに来ました」

「転属？もしかして玉狛にでも行くのか？」

「あ、はい！」

「迅さんはまた何か企んでいるのか？」

「なあヒキガヤ先輩。俺なるべく早くB級に上がりたいんだけど何かいい方法ある？」

「ふむ。早くBに上がる方法か。」

「それは——」簡単よ。訓練で全部満点を取って、ランク戦で勝ち続ければいいわ——木虎エ」

俺のセリフを木虎に取りられてしまった。これが一番簡単なんだけどさ、脳筋すぎない？けどその脳筋に空閑は惹かれたようで

「なるほど。わかりやすくていいね」

「ネイバーは脳筋が多い（錯乱）」

まず初めに到着したのは訓練室。ここでは対ネイバー戦闘訓練が行われる。仮想戦闘モードの部屋の中でボードアの蓄積データから再現したネイバーと戦うというものがこの訓練の内容である。

「私の時もこれだったわ」

「僕も」

「私もなのです」

昔から一番最初の訓練はこれのようだ。部屋の中に通常より少し大きな出現する。これは仕様で攻撃力がない分耐久力を高めに設定しているのだ。

「さあ訓練を始めてくれ！」

嵐山さんの号令で順番に訓練室に入っていく。……うーん。しばらく見てるが三バカの中の一分切ったやつが空閑を除けば最速かな。そしてとうとう空閑の番になった。空閑が訓練室に入り訓練を始め

る

「んー圧倒的だな」

『記録0・6秒』

開始を同時に目まで飛んで一発か。正隊員でも訓練用トリガーだとあの記録が出せるかわからんな。三バカがいちやもんをつけたようで空閑がもう一回訓練をするが今度の記録は0・4秒。さっきよりも縮んでいる。それから三バカは空閑をチームに誘うが空閑は三雲のチームに入ると言い、これをスルーした。その時新たなアナウンズが入る

『記録0・4秒』

は？空閑以外にこんな記録出せるやつがいんのかよ。そう思ってみてみると

「フラン？」

「フランさんなのです」

え？なんで？そういうえば今日静かだったのはこうやって外で何かしてたからなの？

急いでフランのところに行くが、先に三バカが近づき空閑の時みたいにいちやもんをつけたのか、フランは訓練室に入っていき間に合わなかった

『記録0・3秒』

フランが一秒縮めて出てきたがどうでもいい。捕まえた。

「おいフラン」

「あ、ハチ君！見てみて！この記…録!?!ちよ痛い痛い！」

フランの頭をアイアンクローしながら嵐山さんのところに向かう。
「嵐山さん、ちよっとこいつ連れて行きますね」

「あ、おう。ほどほどにな」

嵐山さんの許可をもらいフランを廊下まで引きずって行く。

「何でお前がここにいる」

「えっと、サプライズ？」

「ギルティ」

「あゝあゝあゝあゝ!!」

頭を強くつかむ。到底女の子が出せないような声が出てきたが無視だ。

「その訓練用トリガーはどうやって入手した」

「忍田さんだよ。この前会った時にダメもとで頼んでみたら快く貸してくれた!」

忍田さん何してんすか…

「もしかしてファルはスナイパー組の方に行ってないよな?」

「…」

「ないよな!」

「大丈夫だよハチ君。ファル君はたぬきのおじさんのところに行ってるから」

「たぬき?…あ、鬼怒田さんか。紛らわしい事すんな!」

フランの頭に軽くチョップする。

「確認なんだが本当にその訓練用トリガーは忍田さんから許可を得ているんだよな」

「うん」

「ならいい。戻るぞ」

「はい」

戻ると訓練生はいなくなり、訓練室では三雲と風間さんが戦っていた。…Why?

「謡これどういう状況?」

「おかえりなさいなのですハチ兄フランさん。これは風間さんが三雲さんの実力を知るためにしてる模擬戦なのです」

「もつと詳しく頼む」

「風間さんは『迅の後輩の実力を確かめたい』って言ってましたよ、比企谷先輩」

「お、とりまるか、久しぶりだな」

「お久しぶりです」

風間さんは迅さんが風刃を手放してまで空閑を入隊させたことを言っているのか?だとしても何で三雲に?

「比企谷先輩も止めてください。もう18回も負け続けてるんです。」

もう見るに堪えません」

「オサムだつてまけることはわかつてる。オサムは先のことを考えて経験を積んでんだよ。」

『ダメで元々』『負けも経験』いかにも三流が考えそうなことね。勝つつもりでやらなきや勝つための経験は積めないわ」

「おお〜」

「さすが木虎さんなのです」

「まあいつ終わるかは始めた二人次第だからな」

「ちようど終わったみたいですね」

風間さんは武器をしまい、三雲に背を向けていた。最後の何本かしか見てなかったが三雲の奴手も足も出てなかったな

「あれ？まだやるみたいだぞ？」

「何で…？もう十分負けただでしょ？」

「さあ？なんか話してたみたいだけど」

「あの子、ちよつと変わったね」

フランの言葉に俺もうなずく。三雲の表情がさつきまでとは打つて変わっている。

『ラスト一戦開始！』

さつきまでと同じように風間さんはカメレオンで透明になる。

「考えたな三雲は」

訓練室に漂うのは三雲の撒いた超スローの散弾。透明なままじゃ風間さんはこれに対処できない。必然的に風間さんは風間さんはカメレオンを解除し、スコープピオンを出す。

「ただカメレオンがなくても風間さんは強いぞ修」

風間さんはスコープピオンで自分に当たりそうな散弾は斬っていく。三雲は左手にレイガストを構え、右手にはアステロイドを用意する。

「散弾で壁を作りアステロイドを当てるつもりでしょうか」

「たぶんな。ただ風間さんも狙いには気づいてると思うぞ」

たぶん、いや確実に風間さんは三雲の狙いに気付いている。そして多分三雲も気づかれてることは分かっていると思う。そのうえで三雲はどうするのか。

「スラストーオン！」

「ハチ君今のは？」

「レイガストのオプショントリガースラストーだ」

三雲は近づいてきた風間さんにシールドチャージを放つ。風間さんも予想してなかったのかそのまま三雲に押され壁まで追いつめられる。壁まで押し付けられた風間さんはスコープピオンを振るうも、三雲はレイガストのシールドを広げ風間さんを閉じ込める。そしてシールドの一部に穴をあけ、分割なし、たぶん射程弾速なし威力最大のアステロイドを叩きこんだ。

「まさか…勝ったの？」

「いや見てみる」

『伝達系切断、三雲ダウン』

三雲の首にはスコープピオンが刺さっていた。

「惜しかったわね」

「何言ってるの？相討ちだよ」

「二は？」

フランの言葉にはほぼ全員が疑問符を浮かべる。そしてアステロイドを叩きつけた時の煙が晴れていくと、そこには体の半分くらいを失っている風間さんがいた。

『トリオン漏出過多、風間ダウン』

「まさか風間さんと引き分けるなんて」

「勝ってないけど大金星だな」

きつと大相撲であればたくさん座布団が舞っていることだろう。

「どうでした？うちの三雲は」

戻ってきた風間さんにとりまると話しかける。とりまると師匠らしいしげひとも弟子の評価を聞いておきたいんだろう

「はつきり言って弱いな。トリオンも身体能力もギリギリのレベル。迅が押すほどの才能は感じない…だが自身の弱さを自覚しそれゆえの発想と相手を読む頭がある。知恵と工夫を使う戦い方は嫌いじゃない。」

それだけ言うと風間さんは上の方から見ていた風間隊の二人と合

流して帰っていった。

俺たちも先にラウンジで休憩してるやつらと合流するために向かうとする。嵐山さんが慌てて三雲たちと呼び止めている。

「三雲君大変だ。君たちのチームメイトが」

「え？」

詳しいことは聞いてないがスナイパー組の方にいる三雲たちのチームメイトが何かあったらしい。

「謠、俺は念のため三雲たちの方に着いていくが謠はどうする？」

「私は残るのです。」

「わかった」

三雲たちと走ってスナイパー組の方へ向かう。スナイパー組の訓練場に着くとそこには

「そうかそうか千佳ちゃんというのか」

太陽のような笑顔で少女の頭をなでている鬼怒田さんがいる。その後ろにはどうしていいのかわからないような感じで頬をかいているファルもいた。

とりあえずこの一連の騒動を知っていなそうな人、楓子さんのところに行く。

「楓子さん今つてどういう状況なんです？」

「あの子があそこの壁の穴をあけたんですよ。アイビスで」

「まじっすか！」

見ると壁には穴が開いており、その穴の先に外の景色が広がっていた。

「ボーダーでもトップクラスのトリオン量ですね」

「そうですね。…そういうえばそっちの方はもう終わったのですか」

「もうほとんど終わりました。あとは次の訓練の日付とかを確認するだけだったと思います」

「そうなんですね」

アタッカー・ガンナー組がもう終わりかけなことを聞いた楓子さんが東さんに合図を送ると、東さんは訓練の続きを説明する。そして終わり次第そのままスナイパー組も解散となった。

少女の方のエンブレム、そして三雲たちのチームメイトという発言から少女は玉狛の人間。後で確認を取るとトリオンの測定記録もないと言ってたし、きっと迅さんや林道さんはこいつらをど派手にデビューさせたかったのだろう。そこにどんな目的があったかは知らないがああ二人、特に迅さんは意味のないことはしない。きっとこれにも何かしらの意味があり、よりよい未来がこの先にあるのであればこの前みたいに暗躍するのもやぶさかではない。そう思った。

大規模侵攻編1

1月の正式入隊日の三日後、今日は戦闘訓練以外の地形踏破訓練などの訓練がある日だ。しかし俺はそっちの手伝いには参加せずに本部の会議室に来ていた。今日はここでこれからあると予想される大規模侵攻についての会議が行われる。まあ会議といっても、参加者は上層部の一部の人と、俺、ユイ、風間さん、迅さんくらいの小さな会議だ。三輪も来る予定だったが体調不良で欠席とのことだ。

今は迅さんがまだ来ていないため、皆でモニターの個人ランク戦ブースの様子を見ながら待っている。そしてそのモニターでは今、空閑が三バカ相手に無双していた。

「あれが空閑の息子か……風間、お前の目から見て奴はどうだ？」

「まだC級なので確実なことは言えませんが、明らかに戦いなれた動きです。戦闘用のトリガーを使えば、マスタークラス、8000ポイントくらいの実力はあるでしょう」

俺もそう思う。戦闘の経験値だけで言えば会議室の中ではだれよりも、フランやファルと同じくらいの実験値はあるだろう。

「ならば一般の隊員と同じスタートにしたのはまずかったかもしれんな。初めからポイントを高めにして早くB級にあげるべきだった」

「そうしたかったけどなー城戸さんに文句を言われそうだったし」

「……やつはなぜブラックトリガーを使わない。昇格するにはS級になるのが一番早いだろう」

「そうしたら城戸さんトリガー没収してたでしょ。『入隊は認めただけどブラックトリガーの使用は認めてない』とか言ってる」

林藤さんの城戸さんのものまねけっこう似てたな

「……雨取千佳。先日基地の壁に穴をあけたのも玉狛の人間だったな」

「あーあの子はトリオンが多すぎてね。いずれ戦力になるから大目に見てやってよ」

「ブラックトリガーのネイバーとトリオンモンスター、そいつらを組ませてどうするつもりだ」

「もしかして城戸さんって俺や迅がいつも何かを企んでると思ってな

いか？チーム組むのもあの子たちが自分たちで決めたことだよ。千佳は攫われた兄と友達を助けるため、遊真ともう一つの隊員はそれに力を貸しているんだ」

へえ、そんな目的があったのか。けどそれは現実的に厳しくねえか？ネイバーフッドのどの国に攫われたのかわからないし、攫われたのがいつの話か分からないが生存さえしていない可能性もある

「ばかげた話だ。ネイバーに攫われた人間をネイバーが奪還するな」
「ど」

「だからやめろと？」

「まあまあ目的があつてそれに向かつて努力するのは悪いことじゃないでしょ。それが救出であれ、復讐であれ。なあ比企谷、蒼也？」

林藤さんは俺と風間さんに話を振ってくる

「俺は別に両親の復讐をしようとは思っていませんよ。妹やユイもいますし、みんなでワイワイやってるのが楽しいんで。それを壊そうとするなら容赦はしませんけど」

「蒼也はどうだ？」

「三輪辺りはそうでしょうが、自分は比企谷と同じく復讐をしようとは思っていません。ボーダーの命令に従って任務を遂行するだけです。三輪は先日の小競り合い以降何やら悩んでいるようですが」

「ありやまどしたの？」

「詳しくは分かりませんが、迅と太刀川に何か言われたようです」

噂をすればなんとやら、ちょうど迅さんがやってきた

「全員そろつたな。それでは会議を始める。今回の議題は近くあると予想される大規模侵攻についてだ」

忍田さんの号令で会議が始まった

ユイの情報をもとに会議を進めているが一つ思ったことがあるんだだけど：

「あの、空閑も参加させた方がいいんじゃないですか？ユイの情報で侵攻してくるかもしれない四国、リーベリー、キオン、レオフオリオ、アフトラトルでしたっけ？そこに空閑がいたことがあったらもっ

と詳しい情報が得られるんじゃないですか?」

「それもそうだな。城戸さんよろしいでしょうか」

「ああ、かまわん」

「迅悪いが遊真君を呼んできてくれないか」

「わかりました。さてと…」

「空閑ならランク戦ブースで緑川を圧倒してるようですよ」

「へ?なんでそんなことわかんのか?」

「うちのバカも一緒に居るみたいなんだ」

「ああ、そういうことか」

自分で言つといてあれだが、うちのバカで伝わるあの子は何なんだろうね

「では行ってきます」

迅さんが空閑を連れて売るために会議室から出て行った

「比企谷一つ聞きたいことがあるんだがいいか」

「なんでしよう忍田さん」

「君は今生身だよな? トリオン体なら通信すればランク戦ブースの情報が得られるかもしれないが、君は生身でどうやって情報を得ただ」

「俺とフランとファルは生身で通信できるんです。災禍の鎧の中から俺に乗り移ってから通信というか、テレパシーって言った方が妥当かもしれないっすけど、できるようになって、実体化しできるようになってからもうこうしてテレパシーできるとは思ってもいませんでしたけど」

「比企谷、災禍の鎧から乗り移るとか、実体化とか何を言っているんだ?」

あれ?もしかしてまだフランたちの詳しい説明してなかったっけ?

「たぶん言い忘れてたと思うので言いますけど、あの二人、フランとファルは幽霊?なんです。普段はたぶんメタトロンの中にいるはずなんですけど、最近は勝手にどっかいつてることが多いです、特にフランは。…ファル出てきてくれ」

きつとメタトロンの中から見てるであろうファルに呼びかける

「皆さんこんにちわ。呼ばれたんで出てきました」

ユイ以外の会議に参加した人が唾然とした顔になる。

「比企谷どういうことだ。説明してもらおうか」

それから迅さんが空閑を連れてくるまでの時間つぶしとしてこれまでのことについて話した。もちろん心意のことは伏せてだ。俺もフランとファルの監視の下心意の修行をしているからわかる。心意は強い反面、心の闇が襲い掛かってくる。心の闇に飲まれれば自分が自分じゃなくなる。だから俺たちは知らないのならだれにも話さないと決めたのだ。

「そうかそんなことが…」

「迅さんたちが来たみたいですし、聞きたいことがまだあるようでしたらあとでにしましょう」

心意の修行と並行して進めている識のおかげで到着した迅さんたちの様子が扉の外からでもわかった。

「失礼します」

迅さんが空閑と三雲と陽太郎を連れてきた：なんで陽太郎？

「我々の調査で近々ネイバーの大規模な侵攻があることが分かった。先日の爆撃型のネイバーの攻撃、比企谷がいなければ多数の犠牲者が出たと予想される。我々は万全の備えで被害を最小限にしたい。平たく言えば、君にネイバーとしての意見を聞きたいということだ」

陽太郎の存在は無視され、会議は進められる

「なるほど。それなら俺の相棒に聞いた方が早いな。よろしく」

『心得た』

空閑の指輪から黒い炊飯器が出てきた

『初めまして私の名前はレプリカ。ユーマの父ユーゴに作られた自立型トリオン兵でユーマのお目付け役だ』

黒い空飛ぶ炊飯器——レプリカは自分のことを自立型のトリオン兵だと言った。ユイは次世代型自立トリオン兵の試作機だと言っていたので、レプリカはユイの先輩（まだユイみたいな次世代型が完成しているかわからないが）ということになる

『私の中にはユーゴが遺したネイバーフッドの国の記録がある。おそらくそちらの望む情報を提供することができよう。だがその前にボーダーにはネイバーに無差別に敵意を抱くものがあると聞く。私自身まだボーダー本部を信用しきれていない。ボーダー最高責任者殿には私の持つ情報と引き換えにユーマの身を安全を保障していただく』

レプリカはああ言ってるが、実際、口約束などどうとでもできるだろう

「よからう。ボーダーの隊務規定に従っている限りは隊員空閑遊真の安全と権利を保障しよう」

三雲がちらつと空閑を見る。俺も前に嘘に反応されてことがあったし、もしかして空閑は嘘を見抜くことができる系統のサイドエフェクトを持っていたり？

『確かに承った。それではネイバーについて教えよう。すでに知っていると思うがネイバーフッドを構成しているものほとんどは果てのない夜の暗黒であり、その中でネイバーの国が星のように浮かんでおり、決まった軌道で回っている。この在り方をユーゴは『惑星国家』と呼んだ』

惑星国家、か。空閑の父親はもともとこっちの世界の人なのか

『太陽を回る恒星の動きとは異なるがほとんどの国はこちらの世界をかすめ遠く近くを周回しており、こちらの世界に近づいた時に門を開き、侵攻することができ。そして攻めてくる国を知るには今どの国がこちらの世界に近づいているのか知る必要がある。林藤支部長、ネイバーフッドの配置図があるなら見せていただけだろうか。もし不十分であれば私の持つデータを追加しよう』

「はいよレプリカ先生。けど、それは必要ないと思うぜ？ ユイちゃん」

「はいー！」

ユイが用意されていたプロジェクトに接続されていたパソコンを操作し、配置図を映し出す

「おおー！もしかして俺たちが持つてる配置図よりでかいんじゃないか？」

『そうだな。差し支えなければこれほど大きな配置図をどうやって作ったのかご教授願いたい』

林藤さんが城戸さんに許可を求める。

「実はな、このユイちゃんはレプリカ先生と同じトリオン兵なんだ」

「次世代型の人型自立トリオン兵の試作機、それが私です。つまりレプリカさんは私の先輩ということになりますね」

「我々はこの配置図からリーベリー、キオン、レオフォリオ、アフトラトルの四国が近づいておることが分かっている。」

「さらに、ユイの話では先日の爆撃型と偵察小型。その二種類から可能性が高いのはキオンとアフトラトルって聞いたがお前たちはどう思う」

「うん。俺たちもそう思う。イルガー使う国ってあんまりないし」

空閑たちもアフトラトルとキオンだと思うらしく、この二国が相手と仮定した話を進めてもよさそうだ。

「ひとまず、その二国が相手だとして話を進める。次に知りたいのは敵の戦力、特にブラックトリガーがいるかどうかだ」

「私のデータではアフトラトルには十三本、キオンには六本のブラックトリガーがあることになっています。空閑さんたちの方はどうでしょう」

『私たちがその二国に滞在したのは五年以上前だが同じだ』

「そういえばレプリカ。俺たちが滞在してた時にある噂がなかったか？」

「ある噂？」

俺は空閑の言う噂というのが気になった

「うーんと…セブンアークスっていう超強い七本のブラックトリガーがあつて、そのうちの一本をアフトラトルが持つてるって言う噂。もしあつたとしても話を全く聞かないから使い手は見つかつていないと思うけど。そういえば噂といえばもう一つ。災禍の鎧がこつちの世界に向かつたって言う噂を聞いたんだけど」

災禍の鎧は向こうでもやっぱり有名なのな

「災禍の鎧なら討伐したぞ。セブンアークスが一つ、開陽《ザ・デイス

「ティニー」。それが変化した姿が災禍の鎧、《ザ・ディザスター》で、今は俺のブラックトリガー《メタトロン》だ」

「幻覚か？レプリカから冷や汗が出るぞ」

「どうやって討伐したの？あれ倒した人に憑りついて永遠になくならないって聞いたんだけど」

「まあ色々あったんだよ。それより話を進めようぜ。遠征にブラックトリガーの複数投入はされないんだよな？」

『ブラックトリガーはどの国でも貴重なためその可能性が高い。また、船はサイズが大きいにしたがつてトリオンの消費も大きい。したがって攻撃には卵にできるトリオン兵を使うのが基本だ』

「つまり敵の主力はトリオン兵で、人型は少数ということだな」

『現在の情報ではそうなる』

「では、人型の参戦も考慮に入れつつトリオン兵団の対策を中心に考えていこう。さあネイバーを迎え撃つぞ」

忍田さんの号令の下、俺たちはさらに話し合いを積み重ねた。

大規模侵攻2

その日は朝から大変だった。朝食時には箸がぼきんと折れ、登校するときには家を出て一歩目で靴ひもがきれた。さらには上から鳥の糞が落ちてきた（避けたけど）。授業では事前予告なしの英単語のテストがあつた（もちろん合格したけど）そして昼食のためにベストプレイスに行くと、いつも座っている場所には鳥の糞が。

もうね、ここまでくると分かつたわ

『門発生、門発生。大規模な門の発生が確認されました。警戒区域付近の皆様は直ちに避難してください』

遠くで避難を促すアナウンスが聞こえる。とうとう大規模侵攻が始まるようだ。

俺はトリガーを起動し、グラスホッパーで屋上まで跳ぶ。そこにはオペレーターも含めた総武高のボーダー隊員が集まっていた。各校にはこういう非常時の時にボーダー隊員が集まる場所が定められており、そこで本部にオペレーターを送り届けるものや学校側に避難誘導するものなどを決める。

でだ、だいたいこういうのは暗黙の了解として一番年上の人からランクが高い人が仕切るようになっており、なぜかみんな俺を見ていた。もたもたしている暇もないわけで俺は溜息を一つ吐き、指示を出した。「楓子さんは謡を拾いつつオペレーターを本部まで送り届けてください。学校の避難誘導は俺と…奈良坂で行います。他の人たちは本部の指示に従いつつ警戒区域からトリオン兵出さないように倒していつてください。後千種隊は少し残ってくれ」

「了解ー」

各人が俺の指示を聞き屋上から飛び出していく。

「千種隊、お前らはまだ経験が足りない。だから絶対に単独で行動はしようとするな。これは戦争だ。何が起るかわからない。一人で対処できないことは必ず起こる。だからチームで対処しろ。いいな？」

俺の言葉にうなずいたのは三浦と川崎の二人だけだった…え？俺

けっこういいこと言ったやん

「え、なに。比企谷はわざわざそんなこと言うためにあたしたち残したの？マジウケる。そんなこと私たちが一番わかってるよ」

「そうそう。それに俺たちで対処できなかつたら、他の人になすりつゝ協力してもらえばいいだろ」

おい千種兄。お前協力の前になんて言った

「早くいかないと撃破数稼げないしあたしたちはもう行くよ」

そう言つて勝手に千種達も警戒区域の方に向かつていった。

「じつくりと話したことはなかつたんだが…すごいな」

「ああ。まあわかつてるようだし俺たちもさっさと避難誘導終わらせて向かうか」

「だな」

屋上から飛び降り、総武高の生徒が集まっているグラウンドに行く。

「校長先生、ボーダー隊員比企谷と奈良坂です」

「これはどういうことなのかね」

「ネイバーの大規模侵攻です。ひとまず今集まっている人をシェルターに避難させます。奈良坂ついて行ってくれ。俺は学校に逃げ遅れた人がいないか確認する」

校長先生がアナウンスをかけ、総武高の生徒は近くにあるシェルター目指して避難していく。それを確認しつつ上から順に声を出して逃げ遅れがないか確認していく。

四階は、いない。三階は、いない。二階は

「あれ？比企谷君？」

「鶴見先生何してんすか」

遭遇したのは鶴見留美の母親で総武高の保険医の鶴見先生

「逃げ遅れがないかの確認をね。比企谷君も？」

「ええ。先生は下から来たんですよね？下の確認は終わりましたか？」

「うん。上は比企谷君が確認してくれたのよね」

「はい。ならあとはこの階だけです。この階は俺が見るんで先生は

先に避難してください」

生身の人間とトリオン体の人間。見て回るのなら確実にトリオン体の人間の方が早い。それを分かっている鶴見先生は任せてくれた「ねえ比企谷君。留美は…ううん。何でもない。確認お願いね」

鶴見先生はそれだけ言うとは昇ってきたばかりの階段を下りていく。

「先生、留美ならきつと大丈夫ですよ」

鶴見先生は振り返らずにうなずいて、すぐに姿が見えなくなった。そして俺もさっさと二階の確認を終わらせる。幸い、鶴見先生が確認してくれた一階も含めて逃げ遅れた人はいないようなので良かった。『奈良坂こっちの確認は終わった。逃げ遅れた人はなし。そっちの手伝いは必要か』

『こっちももうすぐ終わるから必要ない』

『わかった。なら俺は先に警戒区域に向かう』

避難の方も手伝いが必要ないことが分かり、グラスホッパーを用いて全力で警戒区域を目指す。本部と連絡を取りつつ向かった先はまだ誰も到着していないところでトリオン兵が大量にいた。メタロクンを使えばどれだけ大量にしようとも一瞬で殲滅することは可能だ。出し惜しみはしたくないが、いざというときにトリオン切れにはなりたくない。なのでまだ俺はノーマルトリガーで戦っている。

トリオン兵の数は多いが冷静に処理していく。なるべくトリオンを消費しないように一太刀、一発で仕留める。

識を使いながらの戦闘は何度かこなしてきたが、まだ慣れてはいない。しかし今回はしつかりと反応できた。

しゃがみ、急いでその場から距離を取る。俺の頭があった場所には白くて太い腕があり、その腕の持ち主は今までに見たことのないトリオン兵だった。

『ユイあれは』

『あれはアフトクラトルで開発されたトリオン兵ラービットだと思われれます。ラービットはトリガー使いを捕獲することを目的に開発されたので、とても強いです！』

『オーケー』

ユイに言われるまでもなく識を使い始めてから感じる圧力？みたいなものがほかのトリオン兵とは段違いだ。それだけでもう強いことが分かる。

それが二体。新しくもう一体が俺が倒したバムスターの腹の中から出てきた。しかも色違い。きつと捕まえれば3V以上だと信じてる。

まあそんなことは置いておいて、だ。色違いの方（先に遭遇したのが白だったから白を通常種と仮定）は何かしら通常種とは違う能力みたいなものを持っているのが定番だ。だからやつも何かしらの能力を持っていると考えられる。そうでもなきや色を変える必要はないしな。そう考えさせるためのブラフって可能性もあるが、なんにせよ警戒するに越したことはないだろう。まあほんとにブラフでしたってパターンが個人的にはうれしい。だからお願いします！ブラフであれ！

「ハチ君下！」

と思っていた時期が俺にもありました。色違いが地面を殴ると俺の足元からとげみたいのが生えてくる。フランの言葉で先に離脱していた俺にはダメージはない。しかし今のが色違いの能力か？

「フラン、ファル。色違いは地面を殴ることで任意の位置にとげを発生させる能力だと推測するがどう思う？」

いつの間にか出てきていたフランとファルに問う

「そうだね。私もそう思う。ファル君は？」

「情報は少ないけど今の情報で考えるなら僕も同じ」

『ユイ今の情報を本部に伝えて他に情報がないか聞いてきてくれ。』

『了解しました！パパ！』

「俺たちはさつきとこいつらを倒すぞ！」

「うん！」

俺より強い二人が前衛となり、俺が後衛、二人のサポートだ。

さつき仕切った手前、この編成に少し思うところもないことはないが、それを飲み込み二人のサポートに回る。

ただこの二人は俺のサポートが必要ないくらい強いわけでももの

三分もしないうちに倒してしまった。

「うーん意外と弱かったね」

「いやお前らが強すぎんだよ。A級部隊が1チームで倒すところを一人で倒しやがって」

戦闘中に風間隊がラービットを倒したとの通信が入ったのだ。

「まあまあきつと陽乃さんとか太刀川さんとかも一人で倒せると思うし…あれ?この歌…」

ファルは聞こえてくる歌に気付いたようだ。この歌は警戒区域に設置されているスピーカーからフランとファルが戦い始めた時から流れ始めた。

この歌の正体は謡のブラックトリガー、セブンアークスの一つ天璇《ザ・ニンペスト》だ。その能力は簡単に言えば、バフデバフスキル。例えばバフならば術者が味方と認識した人すべてにその恩恵を等しく授ける、というものだ。

前所有者はデバフしか使っていないようだったが本来効果が高いのはこっちのバフスキルの方だ。

「だから今日は調子が良かったのか」

「ファルの謎も解けたことだし、第二ラウンドと行こうぜ」

新たに開く大量の門とそこから出てくるたくさんさんのトリオン兵。

ボーダーA級部隊隊長とゆかいな仲間たちvsトリオン兵団。その火蓋は切って落とされた

時は少しさかのぼり、アフトラトル遠征艇内

「比企谷あー!殺してやる!絶対に殺してやる!!」

「どうやらあそこに映っているのがミナミの因縁の相手のようですね」

「ああ…ウイザ何を見ている」

「いえ…懐かしい友がいたもので」

ハイレインの問いかけにウイザは答えた。ハイレインはウイザの見ていたモニターを見るがウイザと同じくらいの歳の兵は見あたらない

「まあいい。ウイザとヒュースは予定を変更し先ほど確認された金のひな鳥を捕獲してこい。ランバネイン、エネドラ、ミナミは予定通り玄界の兵を散らしてこい」

「ちよつと待ってよハイレイン！ウチは比企谷を殺すのよ！」

「ミナミ口の利き方に気をつけなさい。それにミナミが玄界の兵をたくさん殺せばきつと彼は来るわよ」

ミラはミナミを諭し、いくつかの門を作る。そこを通りアフトクラトルの兵士たちは玄界の戦場に降り立っていく。そして誰も通らなかつた門にたくさんのトリオン兵の卵を投げた。

今、玄界の戦場に角の生えた鬼が解き放たれた

大規模侵攻3

大量のトリオン兵たちの相手を数十分。やっと終わりが見えた

「これでラスト！」

旋空弧月でモールモッドの目を切り裂く。この一体でやっと俺たちの前に現れたトリオン兵団の殲滅が終わった。

「つつかれた〜！ やつと休める。いくら雑魚でも、あ、雑魚だからこそたくさん来られると疲れるんだよね〜強い人がたくさん来てくれればいいのに」

フランの戦闘狂発言は置いといて

「休んでる暇はないぞ。いろんなところで人型が暴れてる。お前たちはそっちの相手に行ってくれ」

トリオン兵団との戦闘中に通信があった。今わかっていることは人型は六人ということ。うち一人は米屋、出水、緑川と東さんなどの近くにいたB級連合で倒したらしい。が、他はまだ倒れておらず。風間さんとレイジさんがそれぞれ別の人型に倒されていて、レイジさんを倒した方は「星の杖（オルガノン）」というアフトラトルの国宝級のブラックトリガーの使い手にやられたらしい。

「お前たちはってハチはどうするの」

「俺はメタトロンでトリオン兵の方を対処する。人型と新型の影響でトリオン兵の相手が足りないらしい。今はまだ何とかなっているが、すぐにトリオン兵が警戒区域外に出てもおかしくないからな。だから俺はそっちに行く」

基地の南・南西部は戦場の匠、天羽の手によってトリオン兵は住宅とともに潰され更地が広がっているが、他の方面、特に北東方面には人を操るトリガーを持つ人型がおり、その相手で人手が足りず、トリオン兵の対処が疎かになっているとのことだ。そこ以外にも大量のもあるらしく俺はそっちに行けとの指示が出た。

「おっけー。もちろんその人型のところまでは送っていつてくれるんだよね？」

「そんならいならな。…つかまれ」

ノーマルトリガーを解除し、メタトロンを起動。翼を広げ少しだけ浮上する。フランが右腕に、ファルが左腕にぶら下がり飛び立つ。

「フラン、ファルお前らの相手はオルガノンって言うブラックトリガーだ。能力は玉狛のレイジさんが解析してくれているが…：…もしかして知ってたりするか？」

「オルガノンでしょ？知ってるよ。昔。オルガノンの使い手を友達だったからね。能力は…：…なんだっけ？」

「…：…はあ。自分を中心に同心円状に複数の円を作り出し、その軌道上を刃が走る。そんな感じの能力だよ」

「そうそうそれぞれ！ウイザ君元気かなく？」

「そのウイザってのがお前たちの時のオルガノンの使い手か？」

「うんそうだよ！」

フランたちが生きてたのが約50年くらい前。もしそのウイザがずっとオルガノンを使い続けてたらすごい強くなってるんだろうな

「まあそのオルガノンってのがお前らの相手だ。わかってると思うが能力知ってても油断するなよ」

「うん」

しばらく飛んでると遠くからでもビルを含め大量の建物が倒壊しているところが見えた。聞いていた座標とも一致するし、あそこだと判断する。

「フラン、ファルあの場所だ。今は空閑が戦っているからそれと交代で相手をしてくれ」

「オツケー！あ、ハチ君。ちよつと上空でホバリングお願い」

疑問を覚えながらも指示通り、戦っている場所の上空でホバリングする。

「ありがとハチ君。ファル君」

「コール メタリック エレメント シェイプ ニードル」

二人の神聖術で周りにたくさんのお鋼のとげができる

「準備オツケー！ハチ君手離して！」

「おう」

…何も考えずに手を離れたけどあいっ着地どうすんの？

「ヒーローはー遅れて！空からやってくる!!」

フランはどこぞの不良蝶々のようなセリフを吐きながら落ちていく。あのバカせつかく上空から奇襲かけてんに声出して教えてどうすんの？それともまだ聞こえてないか？

「ハチぼくも降りよう」

ファルは飛び降りることはしなかった。頼まれて俺はゆっくり高度を下げる

「コール エアリアル エレメント」

フランは風を発生させ。空閑と空閑と戦っていた老人の間に立つように静かに着地。俺もファルもその近くに着地する。フランたちが放った鋼のとげは老人の周りに刺さっていた。

「久しぶり。ウイザ君…で合ってるよね？」

「ええ。合っていますよ。久しぶりですねフラン、ファル。確か私と同じ年だったと記憶しておるのですがどうして若い、というかあのころの姿のままなんでしょうか」

「まあいろいろあったからねー。そういうウイザ君は年とったね！」

「ほっほっほ。もう50年経っていますからね。…旧交を深めたいところではありますが私には任務がございます。そこにいるということとは玄界の兵として私の前に立ちふさがるということですね」

「！空閑伏せろ!!」

俺も伏せながら空閑に叫ぶ。直後ウイザという老兵の攻撃が俺の頭上を走ったのが分かった。メタトロンの攻撃予測がなければ、確実に殺されていたであろう攻撃だ

『ハチ君。空閑君連れてすぐ逃げて』

翼を広げ空閑に向かって飛ぶ。敵の攻撃は攻撃予測で見えるしフランたちが止めてくれる。そう思うと安心して飛ぶことができる。

空閑を拾い一気に上空へ。

「空閑もう聞いていると思うがお前はチームメイトの手助けをしろ。そこまでは俺が送る」

「ありがとうヒキガヤ先輩。これが先輩のブラックトリガーの能力

「？」

「正しく言えばその一つだな」

下にC級隊員の制服が見えた。少し離れた場所で三雲が何かを手
に持ち人型から逃がっている。

「先輩ここで降ろして」

「飛び降りるか？」

「うん」

「行ってこい」

抱えていた空閑を離す。空閑に無事に着地し三雲の助けに向かう。

俺は空閑を離すとすぐにボードー本部の屋上まで飛ぶ。屋上に降
り意識を集中する。イメージするのは光の球

「…できた」

完成したのはこの前と同じくらいの大きさだ。ここまでは前の時
と同じなので割とすんなりとできた。

「あとはこれを大きく」

再び意識を集中。さっきまでの大きさでは警戒区域全域をカバー
するためには全然足りない。核をもっと大きくするために俺はさつ
きよりも深く意識を集中していった。

その日、ミナミ／相模南は久しぶりに玄界／地球に地に立った。

「あーもう！イライラするー！」

その理由は単純。目的である比企谷八幡にすぐに会うことができ
ないからだ。

彼女の目的は彼女を陥れた（と思っている）比企谷八幡の殺害だ。
そのために彼女は力をもらい、その力を使えるようにした。彼女がも
らった力の名は

セブンアークス 天権《ザ・ルミナリー》

その能力は操作。トリオンを持つものを強制的に操作する悪魔の
力。アフトクラトルで使い手が存在せず、ずっと眠っていた力。その
力をもって相模南は久しぶりに地球に帰ってきた。

相模は艇を出る直前に同じ艇に乗りきたアフトクラトルの兵、ミラ

が言っていたことを思い出し、少し離れたところでトリオン兵と戦っている二人のボーダー隊員に目をつける。

アフトクラトルの兵、ランバネインとの戦いで何とか生き延びトリオン兵と戦っていた茶野隊の二人は大量のトリオン兵に気を取られ、相模にまだ気づいていない

「ターゲット、ロック」

つぶやきつつ、相模は腕を振りかぶる。相模が狙いをつけたのは茶野だ。

「ショット」

相模が放ったのは目を凝らして見なければ気づけぬほどの小さな針。相模の放ったその針は追尾をし、しっかりと茶野の腹に刺さった。そしてその針は腹から茶野のトリオン体の中に入り込み茶野の体の中に根を伸ばす。そのことに茶野は気づいていない（……）。茶野は自身の腹に何かがぶつかったかもしれない程度にしか思っていなかった。その後茶野は腹を見ても何の異常も見つからなかったことも気づかなかった原因かもしれない。しかし、茶野の体の中には徐々に根が広がっていく。

相模は茶野のほかはこの周辺にいるトリオン兵にも、もう根を張りめぐらせておりいつでも好きなように動かせるようになっていた。

そして茶野の体に根が完全に張りめぐらされたとき、相模は邪悪に嗤った

*

「真、なにす

茶野隊の藤沢はバイルアウトした。そして彼をバイルアウトさせたのは同隊隊長の茶野だ。

しかし手を下した彼自身にも自分が何をしたのか理解できていなかった。それもそのはず今のは相模に操られての行動だ。

「何が…どうなって」

ランク戦でもないこの戦争時に仲間を自分の手でバイルアウトさせた。そのことに茶野はひどく動揺する。

その茶野を相模はさらに操作し、一番近くにいるボーダー隊員のと

ころに向かうようにする。茶野は操作に抗えぬまま一番近くの千種隊の下へと向かった。

.....

茶野は千種隊を見つけるとすぐに発砲する。

「お前ら！早く俺をバイルアウトさせろ！」

「はあ？どういう意味だし！」

突然発砲された三浦はシールドで防ぎつつ攻撃して来た茶野に詰問する。

「敵のトリガーで操られてる！だから俺をバイルアウトさせろ！」

それを聞き、千種明日葉は構えていた銃の引き金をためらいなく引き、茶野をバイルアウトさせる

「ちよつと明日葉！」

「本人がそう言ってたし優美子を攻撃したのは事実じゃん」

そこでその場に不釣り合いな明るい声で乱入してくるものがいた

「あつれ〜！三浦さんに川：川崎さんだ〜！うわ〜ちよ〜懐かし！」

「あ、あんた：相模！何でここにいんだし！」

「決まってるじゃん。ウチを陥れたヒキタニに復讐するためよ！そのためにも貰ったのよ！」

「何言ってるんだし！文化祭のことはあんたの自業自得だし！」

「うるさいうるさい！ターゲット ロック ショット！」

「シールド」

相模の攻撃に対し三浦、川崎、明日葉はシールドを張る。しかし相模の放った針はシールドをすり抜ける。そのことに三人は気づかなかった。唯一気づいたのは

『…ふう』

千種隊隊長のスナイパー千種霞だ。彼は自身のサイドエフェクトで投擲された針、三本（・・・）に気づき、ライトニングで撃ち落とすた。

『今の攻撃、シールドすり抜けたから気をつけろよ。今みたいなまぐれはそうそうないから次からは自分で対処な』

『ん、あんがと霞』

『たぶんさっきの人操ってたのはこの人だよな？だったら敵だよ。元クラスメートでもね』

『…うん。わかった。相模はあたしたちで倒す！』

『『うん！』』

こうして三浦は元クラスメートと戦う覚悟を決めた。

それぞれの場所でそれぞれの思いを抱え、少年少女は衝突す。運命の時まであと少し。

『…隊長は俺なんだよなあ…』

『お兄うっさい』

大規模侵攻4

千種隊対相模の戦いが始まる。

『たぶん相模はまだ戦闘経験が少ないと思う』

『そうだね。現に今だってあたしたちがいるのにあたしたちから目を離してるしね』

実際相模の戦闘経験は三浦たちのそれと比べて圧倒的に少ない。ほぼないと言ってもいいくらいだ。

その証拠に少しでも戦闘経験があるのだったら戦闘中に敵から目を離したりはしない。その隙に何が起こるかわからないからだ。

しかし相模は三浦たちから目を離し、さっきの狙撃の犯人、霞を探している。このことが相模が戦闘経験が少ないということの証明となっていた

『だから霞は相模をイラつかせるようお願い』

『うーい』

『まずあーしが突っ込むから沙希、明日葉フォローよろしく』

『了解』

三浦が指示を出し、それぞれがそれぞれの武器を構える

千種隊の戦闘スタイルは、川崎が防御、霞が支援に回り、明日葉と三浦が点を取るというスタイルだ。

三浦のアタッカーとしての腕はボーダーに入ってから半年という期間にしては高い方である。もともとテニスをしてきたからか、反応速度がよく、相手の攻撃を見切り攻撃することに長けている。そういう点から普段は三浦が前に出て戦うことが多い。

今回もその例にもれず三浦が走って相模に近づく。さらには走っている三浦に隠れて明日葉が放った弾丸が追隨する。三浦が少し横にずればその弾丸が敵に当たるという寸法だ。

しかし、今回は通用しなかった

「三浦さ〜んそんな簡単に敵に近づいちゃだめだよ？こんな風になっちゃうからね」

三浦と追隨していた弾丸の動きが止まる。

「あ、後ろに弾丸なんてあつたんだく残念、意味なかつたねくそれじゃあ三浦さんお願いねく」

「あんななにを…ってなんで!」

三浦の意志に関係なく三浦の体は勝手に動き、来た道を戻る

「沙希、明日葉逃げて!」

自分がどういう状況にあるのか察した三浦は川崎と明日葉に逃げるように言う。しかし逃げることは間に合わずに三浦と川崎は剣を撃ち合わせる事になった

三浦と川崎のつばぜり合いが続く。

「あーもう時間切れか」

「時間切れって何が…体が…動かせる。沙希、明日葉一回逃げるよ。霞時間稼いで」

三人は物陰に隠れ、円になり顔を合わせる。

「もしかして操るのに時間制限があるとか?」

「優美子は一分くらいだったけどさっきの茶野はどうだったんだろ」

「姫奈確認してもらっていい?」

『うん!任せて!それとトリオン兵が集まってきてるよ。近くにいるほかの隊員も対応してくれてるけど、このままじゃ囲まれちゃうよ』
「優美子どうする?」

明日葉は三浦に聞く。千種隊にはまだブラックトリガー使いとしては未熟とはいえブラックトリガーを相手にしつつトリオン兵を相手にする力はない。それができるのはボーダーの中でも最精鋭、比企谷隊くらいなものだが。

「一回撤退するよ。そのあと、援軍と一緒にまた来よう」

戦闘が始まる前に本部にブラックトリガーを戦闘になったこと、そして援軍の要請をしていた三浦。

その判断は正しく、その援軍はちょうど到着した。

「撤退の必要はないよ」

「陽乃さんに楓子さん、謡ちゃんも」

本部が千種隊の援軍として向かわせたのは、比企谷隊の女性三人だ。

「今わかっている情報を教えてください」

「わかっているのは相手のトリガーは人を操ることができることです」

「それは人だけなのですか？」

楓子が問いかけ、川崎が答えると謡からさらに質問が飛ぶ。

「いや、優美子と一緒にあたしが撃った弾丸も操られたから人だけじゃない」

「三浦ちゃんも操られたんだ。敵の攻撃手段は？」

「小さい針と飛ばす攻撃があつてこれはシールドじゃ防げませんでしたが、シールド以外なら撃ち落すことが可能です。それとあーしは近づいたら操られました。一分くらいで自分で動けるようになりましたけどあーしの前に操られてた茶野はベイルアウトさせるまでずっと操られてました。」

「三浦ちゃんと茶野君にした攻撃は違うってことだね。…もしかして針での攻撃って言うのが茶野君がされた攻撃なのかな？茶野君がされた攻撃って何かわかる？」

「それは今姫奈に確認してもらってます。それと…敵は相模です」

三浦の言葉に比企谷隊の三人は驚いた表情を浮かべる

「相模って文化祭の後に行方不明になった相模ちゃん何だよね？」

もう一度確認するようにされた問いに三浦はうなずく

「そっか。…八幡に復讐するとか言ってるさう」

「それさつき言っていましたよ」

「あ、もう言っちゃってたかー」

そこで茶野に情報収集を頼んでいた海老名から連絡が入る

『みんな分かったよ！茶野君は身体に何か刺さったような感じがした後、操られたらしいよ』

「ありがと姫奈。茶野は何か刺さったとに操られたらしいです。」

「優美子、やっぱりそれって」

川崎、明日葉は霞が撃ち落してくれた攻撃がそれだったのではと推測する

「たぶん霞さんが撃ち落したやつがそれだと思っただけです。それで聞き

たいのですが、操る以外に直接的な攻撃はありましたか？」

「少なくともあたしたちにはなかったよ」

「うくん…三浦ちゃんと川崎ちゃん中は、遠距離の攻撃手段ってある？」

「あたしも優美子もありません」

「そっかなら二人は周囲の警戒をお願いしようかな。明日葉ちゃんは手伝ってもらおうよ」

「なにを？」

「ちよつと情報収集を兼ねてドンパチをね」

*

開幕は陽乃の旋空弧月。それから相模を中心に円状に展開した楓子、謡、明日葉、それから少し離れたビルにいる霞の攻撃が相模に向けられる。

もちろん相模はそれらすべての攻撃を操り、来た方向に反射するが一発も当たったものはない。それが霞が稼いだヘイト値をさらに増大させる。相模のあたまには血が上り冷静な判断が徐々にできなくなっている。

「実験その一！」

相模に攻撃がヒットし、相模の体勢が崩れる。そこに襲来する数多の攻撃。しかしそれは反射され、あらゆる方向に飛んで行った。

『やっぱトリオン以外の攻撃は有効ですね。けど反射は本人の意思はあまり関係ないみたいですね』

相模にヒットした攻撃の正体はがれき。陽乃は近くにあつたがれきを相模に飛ばし、トリオン以外の攻撃が有効なのか確認した

「そうだね。じゃ！実験その二！」

開幕は旋空弧月の後はほぼ同時攻撃だったのに対し、今度の実験では時間差で攻撃を仕掛けた。その中の一つが相模のトリオン体を削った。

「ビンゴ」

『やっぱり永続じゃなくて一回使うごとにインターバルが必要みたいなのです』

『あとは一回の発動時間とインターバルの時間の確認ですね』

「ふっぎけるなああああああ！」

突如相模の慟哭。

無敵だと思っていた自身のブラックトリガーがダメージを受けたこと、それが引き金だった。さつきまでのヘイト稼ぎが仇となり、一気に相模の怒りが爆発。相模に禁断の技を使わせた。

「魔王徵発令（デモニックコマンドイア）!!」

それは使用者の一定期間の昏倒と以後の能力の使用の制限と引き換えに使用者が敵だと認識したものを強制的に操る絶対の力。

通常、ネイバーフッドに数多ある精神干渉系のトリガーは自分と同等かそれより力のある者には効かない。しかし相模の使った魔王徵発令は違う。それは例え同等のセブナークスを持っていたとしても一切の抵抗をさせずに操る。

「はっ…さいつこーに気持ちいいわ!たしか千種さん?だっけ?ヒキタニの居場所教えて?」

「わかりません」

「ちっ。使えないわね。じゃあもう行っていいよ。できるだけたくさん殺してね」

先ほど三浦の体が勝手に動き出した時のように明日葉の体も勝手に動き出す。

「えくと雪ノ下さんでしたっけ?あなたならヒキタニの居場所知ってるよね?」

「それは…」（言いたくないのに口が勝手に!?!…このままじゃ八幡が殺されちゃう。…誰か、誰か助けて!!）

陽乃の心の叫びに答えるようにボーダー本部の屋上から光の塊が解き放たれた。その光はみるみるうちに広がっていき、やがて警戒区域を満たす。

（あつたかい光…もしかして八幡?）

しばらくすると光が消える。そして光が消えた後の警戒区域にはトリオン兵は一体もいなくなっていた。そしてその光は陽乃たちの体にも変化をもたらした。

(体が動く！ありがとね八幡)

「やあああああ！」

「なんで!?!なんで動けるのよ!！」

不意を突かれた相模に陽乃は刀を振りかぶる。陽乃は直感的に相模がもう操ることができないことを分かっていたのだろう。

陽乃の斬撃が相模を襲い、相模のトリオン体を破壊した。派手な煙が立ち、それが晴れると生身の相模が地面に仰向けになっていた。

「なんでなんでなんで!?!どうして負けたのよ!！」

「うるさいわよミナミ。回収に来てあげたわ」

空間に穴が開きそこから顔を出すのはミラだ

「ミラー・あんたが手伝ってくれたらー!」

ぶつくさ文句を言いながらミラが伸ばした手を掴もうとする相模。しかし相模は何者かにタツクルをされ、ミラの手を掴むことができなかった。

その直後、一つの光がボーダー本部に向けて飛んで行った。

相模を突き飛ばしたのは三浦。そしてそのあとに上がった光の正体はベイルアウトの光だ。

そして突き飛ばされるまで相模がいた場所には、近くの空間に開いた穴からとげが突き刺さっていた。

三浦は相模をかばいベイルアウトしたのだ。

そして突き飛ばされた相模をミラから守るように楓子と謡、川崎、明日葉が立つ。

「楓子、腕についてる発信機を壊して。そうすればこの女はピンポイントでワープできないから」

「はい」

楓子が相模の腕についてる発信機を壊してミラのピンポイントワープを封じる。

「どうするの鬼女さん。まだ続ける?」

ミラは無言でゲートを閉じかけた。

「これだけはもらっていくわ」

そう言い、相模が胸につけているネックレスの鎖をとげを出して破

壊。回収しようとしたところで

「させない！」

ミラがネックレスを掴む前に川崎が弧月を投げる。それに反応した一瞬の隙を突き、謡がネックレスを奪取。陽乃、楓子、明日葉はミラ目掛けてバイパーとアステロイドと放つ。ミラは空間に穴をあけることでそれに対処しようとしたが、陽乃と楓子が放ったバイパーはそれを読んでいるかのように穴を避け、ミラにダメージを与えた。

「謡そのトリガーを持って本部に！」

「はいなのです！」

謡はすぐさま自分が奪取したトリガーを持って本部に向かう。

「もう一回聞くよ？目的のトリガーは奪えなかったけど、まだ続ける？」

「チツ」

今度は無言ではなく舌打ちをし、今度こそ完全にミラはゲートを閉じた。

「川崎ちゃん、明日葉ちゃん。もう一回相模ちゃんの体調べて発信機があつたら壊して。それが終わったら気絶してる相模ちゃんを本部に連れて行って」

「了解」

相模は三浦に突き飛ばされた後から気絶していた。

「楓子、私たちは他の場所に行くよ」

「了解」

これで一つの戦いの幕が閉じた

場所は変わり時は少しさかのぼり、舞台はフラン&ファル対ウィザに移る

フランとファルは苦戦していた。部位がないなどの大きな負傷はないが体のいたるところからはトリオンが漏れていた。

フランたちが使うトリガーはブラックトリガーではないが、フランとファルのためだけに作られた一点物のトリガーであるためトリガーとしての差はそこまでない。それにプラスして二人はメタトロ

ンの力も使うことができる。運動能力などの基礎スペックを除いた点だけで見れば二人はウイザよりもはるかに有利なのだ。それでも二人がかりでも埋まらないウイザとの差。

(やっぱり私たちが死んでからの約50年。その経験の差が出てるな)

フランたちが死んだときフランとファル、ウイザの間に実力の差はなかった。100戦戦えばそれぞれが毎回50勝ずつになるほど実力は均衡したものだ。

しかし今模擬戦をしたならば、フランとファルの二人がかりでも10勝できるかどうかだろう。

差をつけた原因、それは経験だ。フランたちが死んだとき一回二人の時間は止まった。動き出したのは八幡が災禍の鎧《ザ・デイザスター》の中にいたフランに気づき、解放した時だ。しかしウイザの間はフランたちが死んでも動き続けていた。その動き続けた時間の中でウイザは様々な敵と戦い、たくさん経験値を積み、その経験値のため続けた。

その差が明確に実力の差となって表れた。

今二人に部位欠損などの大きな負傷がないのはひとえにメタトロンの攻撃予測のおかげだ。

「少し、話をしませんか」

「話? どういうこと?」

「仲間から通信がありました。私たちの隊長が出撃したそうです。彼が出てくれば私たちの目的は達成されたも同然です。そうすると私が玄界にいられる時間も少ない。ですので残された時間をあなたたちを話すことに使いたい。どうでしょう。付き合っていましたか?」

『どうするファル君。私たちがウイザ君をここに足止めするとかかされているこの状況にも意味があると思うんだけど』

『そうだね。ウイザの隊長は向こうの人たちに任せるとしても、ここでウイザが自由に動けるとなると状況は悪化するし』

『だね。ここはウイザ君の提案に乗ろうか』

フランとファルはウイザの提案に乗ると決め、武器を下ろす。

今さらお互いの発言を信じられないような関係ではないが、乗ると決めたからには自分たちから武器を下ろした

「そうだね。久しぶりに会えたんだから少し話そっか。あとひとつ言っておくけどあまり玄界舐めない方がいいよ。あの災禍の鎧をノーマルトリガーだけの4人部隊で討伐したんだから」

「ほうそれは興味深いですね。やはり玄界の進歩は目覚ましいということですね。そのあたりことも含めて聞いてもよろしいでしょうか」「言えることならね。その代わりそっちのことも教えてよ?」

「もちろんです。まずはさつきファルと一緒に空から降りてきた人は一体誰なのでしょうか」

「ハチのこと? ハチは恩人だよ。僕たちを再び会わせてくれた、ね。ハチがいなかったらこうしてウイザとまた会うこともなかったし」

「今度はこっちの番だね。ウイザ君たちが玄界に来た理由って何なの?」

ウイザは少し迷うそぶりを見せつつ答える

「それは私たちの新しい神を探すことです」

『もしかしてマザートリガーの生贄の人の寿命がもうなくなるのかな』

マザートリガーとはネイバーフッドの国がある星を作っているものだ。つまりはネイバーフッドの国そのものがバカでかいひとつのトリガーなのだ。

今回アフトクラトルが来た理由はそのトリガーの生贄を探しに来た。そういうことなのだ。

『たぶんね。そうでもなきや国宝を持ち出す理由もないし』

『となると雨取ちゃんを狙われてる?』

『きつとね』

ウイザから聞いた情報から二人は推察していく。

「次の質問ですが、二人は今玄界に住んでいるのですよね? 玄界での生活は楽しいですか?」

「うんとっても楽しいよ。ここは他のネイバーフッドの国と違う技術

の発展をしてるからね。ウイザ君知ってる？玄界にはね、ソフトクリームって言う冷たくて甘くてとつてもおいしい食べ物があるんだよ！それにケーキにドーナツ、パフェにパイ。玄界にはおいしいものがたくさんあるんだよ！」

「フラン落ち着いて。食べ物の話しかしてないよ。ウイザ玄界にはスマホって言ってこのくらいのサイズの板があつて、それを使えばトリガーを持っていなくてもどんな距離からでも通信ができるようになって、こつちの世界じゃほとんどみんなが持つてるんだよ」

フランをなだめたファル自身も少し興奮した様子で玄界で体験したことを語った。

「二人とも玄界で素敵な体験をしたようですね。そこでお二人、特にフランに提案なのですが玄界を捨て、アフトクラトルに来ませんか？」

ウイザの発した言葉に周囲の温度が氷点下以下まで下がる

「ウイザ君どういふことかな？」

「言葉通りに受け取っていただいて構いません。フラン。私と一緒にアフトクラトルまで来てください。アフトクラトルと一緒に暮らしましょう」

「いやだ。私はこつちでファル君やハチ君、小町やみんなと一緒に過ごす」

「どうしてもですか」

「どうしてもだ」

「ならば無理やり連れて行きます」

「そんなことぼくがさせない！」

フランを守るようにフランの前に立つファル。

「フラン僕が前に出るからフランは援護よろしく」

「いいでしょうファル。あなたを倒してフランを連れて行く」

「そんなことさせないって言ってるだろ！っ！さっきよりもブレードが多い」

さっきウイザが出していたブレードは六本。その六本を二人はギリギリでしのいでいたのだ。しかし今出されているブレードは八本

だ。

星の杖は円の軌道上をブレードが通るといふ仕組みなので仕組みが分かっていたら避けられるのはたやすい。しかしウィザは相手の挙動を見てから円の軌道を変える。そのため攻撃予測があっても避けるのがギリギリになってしまう。

六本でギリギリならば八本になってしまえばもうアウトだ

「ファル君一回隠れるよ！金木犀の剣リリースリコレクション!!」

フランはファルとウィザの間に刀身でできた花卉を操り壁を作る。それを利用し二人は隠れる。

「僕に策がある。だからまた援護を頼みたいんだけどいい？」

「いいけどどんな作戦？」

「……って作戦なんだけど」

「なんかいつもの作戦らしくないね」

フランは作戦を聞き顔をしかめる

「これが唯一ウィザに勝っているからね。使わない手はないって言うか使わないと勝てない」

「まあそうだね。！ファル君この光って！」

フランがボーダー本部がある方向から球速に広がる光に気付く

「たぶんハチだ。フラン急ごう」

二人は恩人を助けるために敵となった昔馴染を倒すため駆け出した。

……………

「コール アンブラ エレメント バースト！」

発生させて闇素を爆発させ、ウィザの周りを煙幕で満たす。

「おややっとなってきましたか。しかしこの程度の煙幕では目隠しにもなりませんよ」

ウィザは自身の周りでブレードを高速回転させることによって煙を払っていく。

「コール アンブラ エレメント バースト！」

フランとファルは再び闇素を発生、爆発させ辺りを煙幕で満たす。

「またですか……これは」

ウイザもまたブレードを高速回転させることで煙を払おうとするがブレードが動かずに煙が払われない

「ファル君なるべく早く！抑えるの結構キツイ」

「もう届いた！」

煙幕の中からファルが飛び出し、ウイザの腰に飛びつく。

「仕留めそこないましたか」

飛びついたファルには膝から下が無い。ウイザが見えないように視界の外に設置していたブレードに斬られていたからだ。

「男に抱き着かれる趣味はありませんファル離しなさい」

「そんな趣味ぼくにもないけど、離せない。青薔薇の剣リリースリコレクシヨン！咲け！青薔薇!!」

「自分の体ごと！ですがトリオンが足らなかったようですね。これで私の勝ちです」

ファルは自分ごとウイザを凍らせようとするがトリオンが足らずに右半身しか凍らせることができてない。

絶体絶命のはずなのにファルの口からは笑みがこぼれている

「いいや僕たちの勝ちだ！フラン！」

「トリシアギオン!!」

メタトロンの光線技であるトリシアギオンを使いファルごとウイザにレーザーを当てる。

そしてウイザのトリオン体が破壊された

「フランここは僕に任せてフランはハチのところに行つて」

「よろしくね。ファルはしっかりウイザ君を見ててよ？」

「もちろん。いつてらっしゃい」

「いつてきます！」

ファルは離れていくフランを見送る

「：私への当てつけのつもりですか？」

「あつごつめーん！そんなふうに見えちゃった？いつものやり取りだったから無意識だったよ！」

わざとらしく明るい声でファルはウイザを煽る。そんな煽りにウイザは乗ることはない

「…私は焦りすぎていたのでしょうか」

「そうじゃないかな？まあ焦ろうが焦らまいが結果は変わらなかったけどね」

「…また会えてよかったですよ」

「僕もそう思うよ」

そういつて昔なじみの二人は笑った。

二つの戦いは終了し残るは一つの戦いのみ。物語は終わりへと向かう

大規模侵攻編5

小町はこのボーダー対アフトラトルの戦争が始まってからずっと三雲と行動を共にしてきた。それは目の前に現れた人型ネイバーによって友達の好きな子？がキューブにされたこの状況でも変わらない

「まだ終わってないよ三雲君！本部まで行けばまだ助けられる！」

「小町ちゃんの言うとおりだ修。お前がやるべきことをやれ！」

三雲は小町と師匠である烏丸の言葉を聞き覚悟を決める。

「本部へ向かいます！サポートお願いします！」

「おー行け行け。こいつには一発やり返さねえと気が済まねーぜ」

出水がハイレインと対峙しながら言う

「小町はついていくよ！」

走りだした三雲と小町を二体のラービットが追う

「三雲君後ろから空飛ぶタイプと磁力のタイプの二体の新型が来てる！」

「わかった。磁力の方は磁力が届く前に止める！シールド!!」

三雲はシールドを展開し、自身たちに磁力の影響が及ぶ前にシールドで磁力型の攻撃を止める。

「三雲君！手を！」

三雲が伸ばした手を小町がつかみ引つ張る

「やりやああああああ!!」

直前まで三雲がいた場所に砲撃が飛ぶ。もし小町が三雲を引つ張っていなかったらその直撃を食らってしまったであろう。

「ありがとう比企谷さん。…しまった！」

磁力型の攻撃に気付かず二人とも磁力にとらわれてしまう。その二人に迫る砲撃。

「シールド!!」

二人はシールドを張るがたった二人分のシールドだけでは防ぎきれない。絶体絶命だと思われるその時、二人のシールドの上に新たに黒いシールドが現れた。

『待たせたなオサム、コマチ。ユーマの指示で護衛しに来た』

「レプリカ（さん）！」

『門印』

レプリカの開いたゲートから出てきたのは黒いラービット。その黒いラービットは先ほど砲撃を放ったラービットのパンチを受け止めると空いている手でパンチをする。それは敵ラービットを破壊するまでには至らなかったが、片腕を破壊した。

『立て二人とも。私の内蔵トリオンでは二体目のラービットは作れない。もし敵に増援が来れば分が悪くなる。：解析完了。磁力を中和した。今のうちに離れろ。』

二人は磁力が消えたことを確認するとレプリカの指示通り、二体の敵ラービットを味方の黒いラービットに任せ、その場を離れる。

「レプリカの本体が来て空閑は大丈夫なのか!？」

『問題ない。救援を優先するとユーマ自身が決めたことだ。それに急ごう。ジンの予知によればオサムとチカ、コマチが基地に入れるかどうか未来の分かれ目になる』

「：わかった。急ごう！」

二人は速度を上げ走り始めた

『二人とも、とりまろがベイルアウトした』

三雲はレプリカからその報告を聞き驚いた

「烏丸先輩が……」

『基地（ゴール）までおよそ120メートル。最後の壁だ』

足を止め見上げた先にはハイレインがいる。二人と一体は一度建物の陰に隠れ、最終確認をする。

『基地まではおおよそ120メートルだ。基地の入り口が閉まっていたら私が開ける。ただこちらの技術が使われていた場合は少し時間がかかる。こちらの機械は複雑だからな』

「あ、それなら大丈夫です。ユイちゃん聞こえる?」

『はい聞こえていますよ小町さん』

「いつでも基地の扉を開けられるようにしてもらいたんだけどでき

る?」

『もちろんです! 任せてください小町さん!』

『ありがとユイちゃん…これで入口は開くようになりました』

『ならばあとは我々がたどり着くだけだ』

そこにはイレインのトリガーで作られた鳥が飛んでくる。レプリカがシールドでガードするが鳥と当たった部分のシールドがキュウブになる

「キューブ化のトリガー…!」

『とりまるの情報ではあの弾丸はトリガーにしか作用しない』

「なら建物をカベにして」

「だったらこうしようよ。アステロイド!」

小町がアステロイドで民家の玄関を壊す。

「こっちの方が早いよ」

『そうだな。このまま建物を突っ切ろう。上からも死角になる。閉じ込められないように注意しろ』

「了解」

突然の小町の行動に三雲は驚きながらもレプリカも賛同したので家の中を突っ切る

二軒、三軒と家を通り抜けるが敵の攻撃がない

「なんだか静かすぎるね」

「そうだね…! こっちはだめだ! 別の部屋から」

三雲が入ろうとした部屋に敵の攻撃があったのか道を変更しようとする、足元からバチツという音がした。

二人が足元を見るとそこにいたのはクラゲだ

「クラゲ…! こいつも弾なのか!?!」

『建物を出るぞ』

今度はレプリカが壁を破壊し、二人と一体は道路へと出る。そして出た先にいたのはイレイン。

三雲も小町も自身が目の前にいる敵には絶対になわなないことはわかった。

『どうする。まともに戦って勝ち目はないぞ』

「…よし！三雲君。小町が時間は稼ぐから入口に向かって」

「だったら僕が残って時間を稼ぐ」

「その足じゃ大した時間稼ぎはできないだろうしそれに小町は三雲君より強いから」

小町は三雲たちの前に出る。

「なんだ？玄界ではこういう時に女が出てくるのか？」

「こつちでは男女こようきかい？均等法がつていう法律があるんですよ？だから男とか女とか関係ないです。わくわく動物さん」

「だが女を前に出すのは格好悪いと思うがな」

「だったら俺が変わる」

「空閑（君）！！」

突然の衝撃音とともにやってきたのは老人と戦っているはずだった空閑だった

「空閑！お前は老人の相手をしていたはずじゃ」

「ヒキガヤ先輩が連れてきた入隊日に大暴れしてた人になってもらった」

「お兄ちゃんが!?そのお兄ちゃんはどこに？」

「なんかやることあるって言ってたけど。それよりここは俺に任せて早く行け」

「うん…ほら三雲君行くよ！」

小町は三雲の手を取ると立ち上がらせ、そのまま手を掴んで走っていく。

「ちよつとストップ！基地の入り口の前に穴が開いてる！」

『小町さん、それは敵のワープ使いのトリガーです』

「そうなの!?ありがとユイちゃん。二人ともあれは敵のワープ使いのトリガーなんだって」

「その能力でピンポイントに襲ってきたのか！けど誰もいない。これなら！」

後ろからブワンという音がした

「三雲君！」

小町がとつさに三雲の体を押す。後ろでした音の正体のワープ使

い、ミラのとげが三雲の足に刺さる

「目標補足」

すぐさま小町とレプリカはミラに攻撃をする。ミラはその攻撃をワープゲートを発生させそこに攻撃を入れるもう一つのワープゲートから出すことで反撃に利用した

三雲と小町は横跳びでそれを躲すとそのまま逃げるように走り出す

『開けた場所に出るな。さっきのとげで狙い撃ちにされる』

建物を陰に逃げたはずなのに二人の先にはミラ。

「あきらめなさい。悪あがきは好きじゃないの」

『発信機か』

レプリカは三雲の腕のとげをを見ながら言う。

「気づくのが遅かったようね」

『……いやそうでもないようだ』

ドオンという音とともに二体の敵ラービットの相手をしていた黒いラービットが来る。

そのラービットは腕を大きく振りミラに攻撃を仕掛ける

ミラはジャンプしてそれを回避した

『ラービットから離れすぎるな。ワープで先回りされる』

レプリカがそう指示をした瞬間だった。

ミラの攻撃によりレプリカが両断された

「レプリカ（さん）!!」

レプリカに攻撃したミラはラービットの攻撃により再び離れる。

二人もその隙に二つに分かれたレプリカをもって物陰に隠れる。

『…落ち着けオサム。ワープ使いのマークを外した』

「レプリカ！大丈夫なのか!？」

『予備のシステムに切り替えた。ほとんどの機能は停止したがまだ大丈夫だ』

「ならこのまま入口を目指そう」

『…オサム、コマチ一つ提案がある。敵の遠征艇を狙おう』

「遠征艇を!?!レプリカどういふことだ」

『一度退けたとしても国が近くにあるならば国に帰らずにまだ攻めてくることもある。しかし、一度国に帰ることになればまた攻めてくるだけの時間はもうない。』

遠征艇に帰還の命令を出しそのままロツクすれば確実にやつらを国に返すことができる、ということだ。』

二人はレプリカの策を聞き、検討する。レプリカの作戦にいくつかの案を付け足し、作戦を決めた

『ユーマが相手をしているが相性がいいわけではない。作戦を実行に移すなら今しかないだろう』

「わかってる。比企谷さんも大丈夫？」

「うん大丈夫。覚悟は決まってる」

その時、すぐ近くボーダー本部の屋上から大きく光が放たれた。

その光はトリオン兵に当たるとトリオン兵を音もなく消失させた

(…このあつたかい感じ。もしかしてお兄ちゃん？つてうそ!」

「今だ!」

トリオン兵を音もなく…それはレプリカの出した黒いラービットも例外ではなかった。

しかし一度飛び出してしまっはもうやり直すことはできない。

二人は壁がない中で作戦をスタートさせた

先行した三雲を追うように小町も物陰から飛び出す。そんな二人を狙ってミラがとげを出す。ふたりは急いでいたためか避けることをせずに何本もの刺さったとげにより身動きができなくなってしまう。そこにハイレインの鳥型の弾が迫る

「トリガーオフ!」

二人はトリガーを解除することによりトリオンにしか効かないハイレインの弾を無効化。

さらにボーダーのトリガーの基本機能の、物理的に動けない時にトリガーを解除した場合に周囲のものと干渉しない場所に転送される仕組みの利用し、ミラの串刺しからも脱出する。

そして生身のまま入口を目指す。

小町がちらつと人型の方を見るとちやうど空閑がワープさせられ、

姿が見えなくなったところだった。そしてそのまま人型がこっちの方に走って向かってくるのが分かった。

(人型が来てる！だが／＼だけど…行ける！)

二人がそう思った時だった。二人の下にとげが発生し二人を改めて串刺しにした。

三雲は左足の太ももとわき腹に、小町は右胸とわき腹に突き刺さる。

『オサム投げろ！』

三雲はレプリカの指示に従い、懸命に体を振りかぶり左手に持つてレプリカを投げ

れなかった。三雲の意識はあと1秒耐えることができず、三雲は意識を失った。後方では小町も意識を失い胸から大量の血を流していた。

ハイレインは意識を失った三雲が落としたキューブを拾う。

「これは…違う。ただのトリオンキューブだ。ミラー！すぐに本物の『金の雛鳥』を探すぞ!!」

その時、背後から声をした

「これをしたのはお前からか」

ハイレインが振り返るとそこには倒れていた小町を抱き、表情の消え去った顔をした八幡がいた

目を開き手元にあるはずの光の核を見る。

「うおっ！」

思わず声が出てしまうほど大きかった。

俺が今いるのはボーダー本部屋上の給水タンクの上だ。ここで俺は天使の法律（エンジェルロウ）の核を大きくしていた。

「…天使の法律発動」

光の核を解き放つ。解き放たれた光は一気に警戒区域全域まで広がっていく。

そして解き放った俺は地面にうずくまっていた

「やばい。これはまじで死ぬ」

以前フランたちに大きいのを作るのは命を削ると言われていた。それは自分でも十分理解していたつもりだった。

しかし全然理解できてなかった。これがこんなにもしんどいなんて思ってたなかった

「比企谷か？大丈夫か」

「…おう奈良坂。古寺もか。一応大丈夫だ。けど、ちょっと手伝って」

二人に手を貸してもらい体を起こす。少しはこのしんどさにも慣れてきたか？

「いつから屋上にいたんだ？」

「集中していたから時間は分からんが、俺が屋上に来たときは誰もいなかった」

「全然気づかなかった」

こんな時でも俺のステルスヒツキーは健在ですか。ああそうですか。

「それよりさっきの光はお前だろう。あれはなんだ」

「奥の手だよ。警戒区域内の全トリオン兵を消滅させられたと思うんだが、確認してくれるか？」

「ああ…確認した。警戒区域内のトリオン兵はさっきの光で全部消えたらしい」

「そうか。…つとと」

「大丈夫ですか。まだ休んでた方が」

「平気だ。それに何かいやな予感がする」

まだ少しふらつくが立ち上がる。さっきから何かいやな予感がある。今ここで動かないと一生後悔しそうな予感が。

「ごつちか？」

いやな予感のする方に進む。屋上の端に着き、下を見る。そこから見たのは地面に倒れている小町とその下の赤い水たまりだった

「小町!!」

すぐさま翼を開き下に降りる。小町を抱き、目の前にいる鬼男に尋ねる

「これをしたのはお前らか」

尋ねた。しかし答えは聞かなくてもわかりきっていた。

「うるさい。邪魔だ」

鬼男が自分の周りを泳いでいた魚をこっちに飛ばす。俺はレーザーでその魚を消滅させた

「なに!？」

鬼男が驚く。続けてレーザーを鬼男に受けて放つ。が、急に鬼男が消え、鬼男は少し離れたところにいる鬼女のところまで移動していた。

そんなことはもうどうでもよかった。腕の中の小町の命が急速に失われていくのが分かる。

俺はメタトロンを解除し、メタトロンのトリガーを小町の血が付かないところに置く。

そしてフランとファルに呼びかける

『フラン、ファル聞こえるか?』

『聞こえてるよ。』

『うんこつつちも。それよりさっきの光ってハチ君でしょ。だめって言ったよね。あれ以上は命を削るって』

『フラン、ファル。元気だな。みんなによろしく言っておいてくれ』

『え、ちよ、どういふ』

まだフランの声かしていたが無視をする。

フランとファルに伝言は伝えたし、もう思い残すことはない。

俺はノーマルトリガーを取り出し俺のすべてを注ぎ込み、

俺は小町を助けるためにブラックトリガーとなった。

(…死んだと思ってたけどなんでまだ生きてるの?)

そんな疑問を抱きつつ小町は目を開いた。小町の目に一番最初に入ってきたのは、真っ白な灰になった兄である、否、兄であった比企谷八幡の姿だった。

小町は兄を姿を確認したと同時に背中を地面に打ち付けた。

小町が上体を乗せていた兄の足であった部分が風にさらわれたのだ。さらにその風は足だけでなく腹も胸も全身をさらう

「うそーなんでーなんでお兄ちゃん!!」

小町は必死に灰をなつた兄を集めようとするが、灰のほとんどは風に乗せられ高く高く舞い上がっていく。

「お兄ちゃんーお兄ちゃん!!」

小町は泣きながら大声で兄を呼ぶが返事はない。あるわけがない。…はずだった

『小町。泣くのはいつだってできる。今は他にやらなきゃいけないことがある。そうだろう?』

小町の声に声に答えるように八幡の音が響く。

「ないよーお兄ちゃんを差し置いて他にやることなんてないよー!」

『小町ー!』

それは小町が初めて聞いた兄の自分に対しての怒鳴り声。

『あの連中は誰だ』

「それは…」

『ボーダーの敵、すなわち俺たちの敵だ。小町がここで動かなきゃ、あそこで倒れている三雲が死ぬ。それに陽乃さんや楓子さん、謡、ユイも死ぬかもしれない』

「そんなの…そんなのやだよ!お兄ちゃんだけじゃなくてみんなもいなくなるなんて!!」

『じゃあやらなきゃいけないことは分かるな?そのための力を小町はもう持つてる』

「…うん。けど上手に使えるかな」

『大丈夫だろ。小町が一番俺を扱うのがうまかっただろ』

「なにそれ。けどありがとうお兄ちゃん。頑張るから見ててね」

『おう』

小町はしっかりと敵を見据える。

これから小町が使うのは今まで一回も使ったことのない力。それを扱うのに小町の心に不安はなかった。

小町は足元をならすように二度地面を踏み、一瞬で姿を消した。次に現れたのは数秒後、突然ハイレインたちの後ろに現れた。

「まず一人」

小町は黒く巨大な爪でミラを切り裂くと次の瞬間にはまた姿が消えており、数秒後にまた姿を現す

「申し訳ありません隊長」

「手筈ではもうすぐに艇にいる誰かが回収することになっている。それを待つて撤退するぞ」

ハイレインたちはミラが戦場に出て負けた時に備え、あらかじめ船の中に門が開けるラッドを何体か用意していた

「撤退ということはまさか…」

「ああ。『金の雛鳥』はあきらめる」

「いいこと聞いたけど撤退なんかさせないよ」

突然背後に現れた小町に驚きつつもハイレインはその小町に向けて周りを泳いでいる魚を飛ばす。

小町は避けることをせず魚に当たった。しかしなぜかキューブ化はされない。

「影竜の斬撃」

小町はさっきの爪と同じものを今度は腕全体に纏いそれを大きく振りはらうと、腕から斬撃が飛ぶ。

その斬撃をハイレインは魚を盾にしてガード。今回はしっかりとキューブ化されていた。

「およう？ちよつと失敗しちやった。外側のがしつかりと機能しなかったか。ま、いいや。目的は達成できたし」

ハイレインは聞こえてきた言葉に心の中で首をかしげる。自分は何かされただろうか

その疑問を解消したのは隣から聞こえてきた悲鳴だった

「た、隊長！助けて」

その悲鳴に反応し隣を見ると隣にいたミラの体の下半身が徐々に影に飲み込まれていた。

ハイレインが助けようと手を伸ばすが間に合わず、ミラは完全に影

に飲み込まれた。

そのタイミングでハイレインの後ろに門が開く。

「隊長！無事か」

「俺は無事だがミラがやられた。ウイザを回収してすぐに撤退するぞ」

「ヒュースはどうする」

『金の雛鳥』が回収できなかつた以上、ヒュースは置いていく」

「了解した。すぐにウイザのところまで門を回す。隊長もすぐに乗り込んでくれ」

艇を操っていたランバネインと言葉を交わしながら撤退の準備をするハイレイン。しかしそう簡単には小町がさせない

「撤退なんかさせない！影竜の咆哮!!」

小町が口をぷくつと膨らませすぐに何かを吐き出す。吐き出されたものは威力を増しながらハイレインたちの下まで飛ぶが、あと一歩のところまで届かずに門は閉じてしまった。

その直後、空を黒く覆っていた雲が消え、空には青空が広がっていた。

近くに誰かが来た音がした。小町が振り返ってみるとそこにいたのは陽乃達比企谷隊のメンバーとフランで

「小町ちゃん。八幡は」

「お兄ちゃんは小町を助けてブラックトリガーになりました」
「そう…」

小町がそう答えるとみんなが顔を伏せる。

「みなさん！なに下を向いてるんですか！お兄ちゃんは小町のブラックトリガーになってまだいますし。それにこの戦争が始まる前にお兄ちゃんがおすすめてきた本にこんな言葉があつたんです。『思い出はここにある』って」

小町はグーを作り自分の胸を叩きながら言う

「お兄ちゃんがいなくなったからって今までお兄ちゃんと過ごしてきた思い出は消えることはないんです。ずっと小町の、皆の胸の中にあつてその中でずっとお兄ちゃんは生きてるんです」

小町は笑顔でみんなに向かってそう言った。

「そっか、そうだね。八幡は私たちの心の中でしっかりと生きてる」

「そうです！だから今は笑顔でいきましょう！」

「うん（はい）！」

小町が空を見上げる

（…これでいいんだよねお兄ちゃん）

空に浮かぶ雲の一つが誰かのアホ毛のように見え、そのアホ毛がびよこびよこ揺れ、それでいいと言ってるように小町には見えた。

彼女たちの上には今日も青空が広がってる